
才色兼備な変態さんと俺

矢枝真稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

才色兼備な変態さんと俺

【Nコード】

N4172S

【作者名】

矢枝真稀

【あらすじ】

嶺桜高校に通う2年生の相澤由希と、そんな由希ラヴ！！な、変態先輩の、しょーもないラブ・コメ(?)。これは短編の《才色兼備な変態さんは好きですか?》の続編らしきものです。

10月24日、完結を迎えました！読者の皆様、本当にありがとうございました！！

01：そんな日常（前書き）

本編は中途半端に始まります。短編《才色兼備な変態さんは好きですか？》を読まれた事のない方は、そちらから読む事をオススメします。

01：そんな日常

さて、236回目の愛の告白も玉砕に終わった先輩という立場の《変態》は、「次こそはああああ！！」という雄叫びと共に去って言った。

そしてここから学校までの道程が、俺にとっては“つかの間の平和”である。

平和という時間は、実家から徒歩10分で終わりを迎える。そう、学校に着いたのだ。

辺りを見渡す……………変態はいない。だが、油断は禁物である。

校舎内に入り、自分の下駄箱から学校指定のスリッパを取り出し…

……

パサッ……………

スリッパの上に置いてあったのだろう、かわいらしいピンクの便箋が床に落ちた。さて、ここで一つだけ確認しておこう。

俺、相澤由希は世間一般でいうところの《イケメン》でもなければ、学校で嫌われている《ブサイク》でも《キモヲタ》と呼ばれる人種でもない。

《普通》なのだ。

多少（？）目つきが悪い程度で、顔も普通であれば外見も、他の同級生となんら変わりない。まして成績も中の上から前後と、所詮褒められる事もなければ怒られる事もないという中途半端。ただ、ま

あ……褒められる事ではないのだが、そこそ腕っ節には自信がある。

その理由は、まあいつか話すとして、今問題なのは、手にしているこのピンク色のかわいらしい《便箋》である。

さて、もう一度念を押しておくが、俺は女の子から好感を持てるような人物でもなければ、イケメンでもない。

それを踏まえたうえで、この便箋。とりあえず教室で読む事にしよう。

……え？今読まないのかって？

これには理由があるんだよ、理由が。

教室である。俺の席は真ん中の列の中盤という、これまた中途半端な席である。で、便箋だ。

俺が堂々と便箋を見せびらかそうが、たとえ大声で手紙の内容を口にしても、我がクラスメイトの反応が冷ややかだという事を、俺は知っている。

「うおう！ラブ・レターじゃねえか！！」

若干一名を除いて。

「おはよう健一。そして近寄るな暑苦しい」

「ひどい!!」

俺に密着せんばかりに体を寄せて、便箋を奪うこのバカ。一人前に
おおかわ・けんいち
大川健一という名前がある。そうだな、特徴と呼べる特徴は……
誰しもクラスの中に一人くらいはいたであろうお調子者を想像して、
それに当て嵌まるのが、こいつだと思っていだろう。

「なんか俺の説明がおおざっぱ過ぎないか？」

「……気のせいだろ」

人の心を読むな。そして手紙を返せ。

「さてさて、バカは放っておいて……」

「ちょ、ひどくない？俺の扱いひどくない!？」

さて、健一をバカとはつきり言うこのお方。名前は如月舞きつひき・まいという、
名前も容姿も綺麗な女の子である。

ただし……

「うるせえ！バカにバカつつって何が悪いんだ？テメエに優しい言
葉をかけるような人間なんざ、このクラスにやいねえんだよ!!」

「う、うわあああん!!」

うん。お分かりいただけただろう。如月はとにかく口が悪い。そり
やもつそこら辺男より悪い。

哀れ健一バカ。泣きながら教室を出て行った。

如月、お前が何を言いたいのかはだいたい想像できる。できるから、そんな可哀相な物を見る目で俺を見るな！！

ちなみに宛て名だが

“ 恥ずかしくて名前が書けない内気な弓道部の主将兼生徒会副会長より ”

長えよ！そしてバレバレだ！！

01：そんな日常（後書き）

続編です。完全に見切り発車しました。しかもヒロイン的な変態先輩の出番が少ない！しかもまだ名前がない！！ちなみに次の更新予定！！！！……ま、なんとかなるだろ。的な考えの私。地道に頑張ります！

02：午前中～昼休み（前書き）

早めの更新。次話更新はまだ未定です。

02：午前中〜昼休み

さて、朝のストーリー的内容のラヴ・レター（？）のおかげで、ずいぶん心がえぐられた俺。朝のHRを終わらせた中年の担任は、さつさと教室を出る。そして俺は席を立ち、早朝に受け取った手紙を一字すら見えないように細かくちぎり、ゴミ箱へ。

「……チッ」

この際、廊下の方から聞こえた舌打ちは気にしない。世の中、気にしたら負けだという事もあるのだ。

キンコンカンコン……

「くっ、次こそは……」

気にしない気にしない。

さて、1時限は国語である。俺にとつちや当たり障りのない教科だ。

「はよ〜！授業始めるね〜」

国語を担当するのは、赴任してまだ一ヶ月も経たない新任の沢木真穂先生。独特の明るい口調と、24歳という若さ。俺らと歳変わらないんじゃないかねえの？的な童顔という事もあってか、生徒から“真穂ちゃん”とか呼ばれ、人気がある。

しかも、若いだけじゃなくて教え方も上手いから、そりゃ人気だといつのも頷けるってもんだ。

「はいはい、んじゃ授業を始めるね〜」

2時限、化学。

ま、授業風景つつーのは、どこも大体同じだろうから省略しておこう。

3時限、倫理ときたから昼寝。授業？んなもん後で友達からノートを写せば済む。で、昼休み前の4時限が数学。俺のいっちゃん嫌いな教科だが、さすがに赤点で落とすのはマズイから、授業は真剣に聞く。

とまあ、これが午前中の授業風景である。

さて、こっからがようやく昼食となる。この嶺桜高校には、学食を始めとして、軽食、バーガーショップ、麵屋菊一（うどん屋）、更にはスイーツショップKarenというケーキ屋まである。その理由は何故かつちゅうと、まあ簡単な話が土地の利用である。

この嶺桜高校は私立学校だ。れいおう土地の所有者は、この学校の理事長である。先々代から土地を譲渡された先代の理事長が、現在の嶺桜高校の前進である桜花女子高校を設立した。その後、更に大学を開設して、学校は機動に乗ったのだが、いかんせん、譲渡された土地が広がった。

そこで、土地を分譲し、更には余った土地を安く貸して、現在の食事処が出来たというわけである。

さて、無駄話もそこそこに本道に入ろう。現在昼休み、俺は学食でも他の食事処でも甘味処でもない、教室にいる。早い話が弁当なの

だ。

ちなみに飯を食う時のメンバーはだいたい決まっていて、俺・健一・如月と、あと3人。

「臯月、寝ながら食うな。どっかかにしろ」

「んみゅ……」

「……………（もぐもぐ）」

上から順に説明しよう。まず、箸で卵焼きを掴んだまま眠りかけた女の子に声を掛けている男。こいつは河南秋斗^{かわなみ・あきと}。学年一の秀才で、学校……いや、下手すりゃ県内一の情報通だ。細面の顔立ちで目つきが鋭く、そこら辺の不良以上に腕っ節が強い。一見すれば近寄りがたい人も多いだろうし、俺だってそう思っていたのだが、話してみれば意外と気さくで、中々良い奴だ。

んで、とりあえずその卵焼き片手に居眠り中の女の子。名前は結城^{ゆづき}臯月^{・さつき}。授業中はほとんど寝ているというのに、テストの点は常に上位という、一生懸命勉強してる生徒を馬鹿にしたような奴だが、本人いわく「どんな問題でもコツさえ掴めれば簡単だよ」らしい。

まあ寝てるばつかだが、意外と可愛い。ちなみに河南と結城は、二人で一セットだ。

んで、普段から寡黙。現在も無言でお食事中のクールビューティが、^{みなと・かなで}湊奏。真っ白な肌は日焼け知らず、くわえて反対色の艶めく黒い長髪がよく似合っている。

このクールビューティ、俺と同じく帰宅部だが、スポーツも勉強もそつなくこなす万能タイプである。

「つーかユキ！あの手紙の内容どんなだった！？」

「口に物を入れながら喋るな！唾が飛ぶだろ！！」

健一（以下バカと呼ぶ）、食事のマナーを守れ。そして思い出させ

るな。

「……毎度の事だ。というか、最近は内容が怖い」

「全くだ。私ですら身震いした」

「相変わらずか…… 皐月、寝るなら箸を置け」

「いいなあ、ユキは愛されてんなあ……」

「そうだぞ！愛があの手紙を書かせたのだ……！そんな相手の想いを汲めないユキがおかしいと私は思う……！」

「いやいや、あれは度が過ぎているだ………あれ？」

おつかしいなあ………どうも聞きたくなくても聞き覚えのある声がする。

「だいたいこんなにも美人な私を拒むとは、ユキの感性が理解できない……！」

「いつから居たこの変態野郎……！」

「ユキ、それは違うぞ！私は変態野郎じゃない……！変態女だ……！！！」

気配無く隣に来るな！否定する箇所が違う……！そして俺の特製だし巻きを食べな……！！！！

「うん、ユキの愛情たっぷり味のする……！」

コメントが気持ち悪い……！つか自分で作った弁当に愛情を込めるようなナルシストじゃねえよ俺は……！！！！！！

03：昼休み〜神出鬼没の変態さん（前書き）

なんというか更新できました。次の更新未定。ぼちぼち頑張ります

03：昼休み／神出鬼没の変態さん

「いつからそこに居たんだこの変態！！！！」

「む？いつからって、4時限が終わってからずっと後ろに居たじゃないか！」

「じゃあ何だ？俺らが席をくつつけて談笑混じりに飯食ってた時、既に後ろで傍観してやがったのか！？」

「だいたい、私という婚約者がいながら、他の女子生徒と仲良く昼食など……不純極まりない！！！」

「誰が婚約者だ！！！」

友達という関係なら考えなくもないが、いつから恋人関係すつ飛ばして婚約者になった！？これだから変態は……

「いいなあ……俺もこんなに美人な彼女が欲しいいつ！！！！！」

「黙れバカ！！！」

「ユキの友人はなんて素直なんだ！私はこういう反応が欲しいのだ。少しはユキも見習ったらどうだ！！！」

変態はバカと意気投合してるし……類友ってやつか。……つか、このクラスの冷ややかな反応。これだけギャーギャー騒いでんのに見向きもしねえ。

そもそも河南も如月も湊もなんとか言え！結城は………うん。期待はしてねえよ。

「先輩！こんな愛想の悪い奴なんかホツと置いて俺と付き合って下さい！！！」

「全力で断る!!」

全力で断るんだ。あ、なんかこれ使えそうだ。

あーあ、バカ泣いて教室飛び出していきやがった。

「……つか、何しに来たんですか？」

さてと本題に入ろう。この変態は、一応《先輩》である。理由無く教室に来るなんて事は……

「決まっているだろう！我が愛する夫と食事を共にするために……」
「帰れ!!!!!!」

既に入籍済みの関係になつてんじゃねえかつ!!!!!!

「まったく……私は罵られるのは苦手なんだ……だが、これも愛の障害と思えば、なんの苦にもならないがなつ!!!!!!」

「威張るな大声だすなそしてまた俺の弁当のおかずを取るな!!」

「安心しろユキ！おかずならきちんとあるじゃないか……わ・た
「全力で断る!!!!!!」

言わせねえ……断固として言わせねえ!!

「くっ！全力で断るだ!?……仕方ない、ここは一度引こう！
さらばだ!!」

二度と来んな！

まあ昼休みはこんな感じだった。二日に一度のペースでこんな感じだから、クラスメイトの反応が薄く（というか無視）なるのは当然か……

で、午後は物理の授業。数学に続き、嫌いだ。だが、まあ……俺の好き嫌いは別にして、テストじゃ割と良い点が取れる。

なら、好きじゃないのか？ いやいや、数式的な問題ばっかの教科が嫌いというわけで、嫌いだから勉強しないというわけじゃない。

と、今日はここまで。帰宅部である俺にとっちゃ、5時限授業はありがたい！

……なぜかって？ 家に両親がいないから、スーパーで買い物をするくちやいけないからだ。

だけど勘違いしないでほしい。死んじやいない。お袋はそここの化粧品会社の社長で、今は海外に新店舗を出すために出張中。

親父はお役所勤務の公務員だから、現在は単身赴任で家にいない。

まあ生活費さえ振り込んでくれりゃ、文句はないのだ。

ただ、まあ……俺一人だけの生活というわけでもない。俺には一つ年下の妹がいる。名前は凜^{りん}、相澤凜である。こいつは小柄でTHE・妹！ って見た目だが、兄を兄とも思わない失礼な奴だ。ギャルゲとかならブラコンで「お兄ちゃん大好きっ！」 って感じの兄ラブ！ 的なんだろぅが（やった事がないので知らん）、俺の事を「ユキ」とか「オイ」と呼ぶ。

見た目が可愛い妹に対し、俺がシスコンにならないのは、そういった理由だからかもしれない。

無駄話が過ぎたようだから、本道に戻ろう。俺は今、徒歩で帰宅中である。幸いにも《変態さん》はいない。あれは部活やら生徒会とかで忙しいようだ。

先輩に対して（あれ）というのも失礼かもしれない。けど、実際に俺と同じ立場になってみれば、俺の気持ちもわかるってものだ。第一、あの《変態さん》以外の先輩には、それ相応の態度で接している。

で、家に到着。

「ただいま！」

「お帰りユキ！」

どうしてあんたが居るんだああああつつつ！……！！！！！！

04：不法侵入変態さん

「なんであんたがいるんだあああつつつ！！！！！」

叫んだね、近所迷惑顧みず。だって家は鍵が閉まってたし、妹学校だし、変態いるし。

「なんでって、ユキに会いたいからに決まっているじゃないか！！」
「不法侵入だろ！警察呼ぶぞ！！」

「まあ落ち着け、私は不法侵入などではない。2階の窓が、偶然にも開いていたから、堂々と入ったのだ！！」

「世間じゃそれを不法侵入って言うんだ！！！！！」

ダメだ、常識が通じねえ…………

「まあ立ち話もなんだし、上がりたまえ！」

「俺ん家だバカやろう！！！！！！！！」

本気で警察呼ばうと考えたのだが、これ以上の近所迷惑はゴメンだ。

とりあえず俺が変態の犠牲になれば済むはず……めっちゃ嫌だけ
ど。

「つか、マジで何しに来たんすか？」

「何ってナニしに来「帰れ！！！！」」

下ネタ言っな！

「そう邪険にしなくてもいいじゃないか。一割冗談だ」

「九割本気じゃねえかつ！！！！」

「まあまあ、とりあえずユキの住んでいる所を見たかったというのが、三割ある。残りの七割がナニし「言わせねえよっ！！！！」」

某お笑い芸人並に突っ込んだ！結局下ネタ関係じゃねえか！！

「それはさておき、ユキに会いたかったというのは本当の事だ」

ふふつと小さく笑った先輩がとても綺麗で、思わずドキツとした俺。

「とりあえずユキの顔を見て、改めて私はユキに惚れていると実感したよ。さて、残す課題はあと一つ！ユキ、私にお前の子供を産m
「やっぱり目的はそれかよ！！さりげなく服を脱ごうとするな！！
！！」

一瞬でもドキツとした胸の高鳴りを返せ！！！！

「今時出来婚など珍しくもない！既成事実さえ作ればこっちの「させねえ！全力でさせねえ！！！！」」

「ただいま……」

……あ……

服を脱ごうとしている変態を阻止すべく、俺は変態の腕を掴んで
いるわけで……そんな時、タイミング悪く我がマイシスター（妹）
が帰ってきたわけで……

「ち、違うんだ凜！俺は服を脱ごうとしてる先輩を止めているだ
け……」

「地獄に堕ちろバカ兄貴があああっっ！……！」

「ぶっふおおあっ！……！」

相澤凜、空手部期待のエースである……

「事情はよくわかった。つまり、この女性はユキの学校の先輩であ
り、婚約者という関係なのね」

「実に理解力のある義妹さんだな！」

「全然わかってねえ！！“義妹”言っなっ！……！」

相澤凜、武・知は良くても理解力に乏しいマイシスター。

さて、なんとか事情は理解（出来たのか？）したマイシスター凜の一言で、俺は帰って早々に家を追い出された。

「お腹が空いた。ユキ、今日はオムライスとポテトサラダ、デザー
トにはプリンが食べたいわ……………ああ、もちろん手作りのね」

相澤凜、有無を言わせぬ口調と含みの笑みを浮かべる、我が家の女
帝……………。

で、今はご近所のスーパーマーケットにいる。

「ほう！ここがスーパーマーケットというのか！」

「騒がないで下さいそして何故居る？」

店内である。さも当然とばかりに俺の隣にいる自称“婚約者”にツ
ッコむ俺の声のボリュームも低い。

つか、スーパー初体験ってどんだけ金持ちなんだよ。あゝやだやだ、
金持ちの言葉って嫌味にしか聞こえねえ。

「えゝと、卵とネギと牛乳と……………」

メモ紙片手に材料吟味。卵はこっち、ネギは……………つかキヨロキヨ
ロするなキヨロキヨロ。

「ユキ、蟹がいるぞ！お、こっちは海老だ！！」

「まあ鮮魚コーナーっすから」

「ふむ、スーパーとはすごいな！一カ所で肉・野菜・魚介、なんでも揃っている！！」

むしろ普通じゃねえか？

「先輩って、料理とかしないんすか？」

「ふむ……あいにくだが、家庭科の調理実習でしか料理をした事がない。家でもメイドに任せきりだ。というか、普通は家にメイドがいるだろう？ユキの家にいないのが不思議なくらいだぞ！」

普通はいねえよっ！！！！ほんとと腹立つなコイツ。

「な、なんだ？なぜ睨むんだ！？」

「べえつつにい……金持ちはいいなあって思っただけっすよ」

「まあたしかに、私の家は金持ちだが」

嫌味が通じねえ……つか、うちだってそこその収入があるし、それなりの生活だろうが、メイドなんて必要ない。そもそもお金は親が働いて稼いだ金だから、お小遣や生活費に、あまり無駄をかけたくはない。

家事だって、やがて一人で生活するうえで必要な事、今じゃそれなりに主夫である。

「普通の家では、メイドはいないのか？」

「いねえよ」

「そ、そうなのか……」

「けど、俺がそう言ったからって、今、先輩の家で働いてるメイドをクビにするなんて事はしないで下さい。メイドだって、その仕事

でお金を貰ってるんだろうし、いきなりクビじゃ、その人も路頭に迷う事になるんすから」

あえて釘を刺しておく。他人の言葉を真に受けるような人じゃないとは思うが、まあ、ねえ……他人の言葉を信じやすい人なんだよ、この人は。

「ああ、しかと承知した！」

なんで言葉遣いが武士っぽいんだよ。

05：本職ですか？変態さん

「出来た」

さてと、家である。買ってきた材料を冷蔵庫にしまいつつの、傍らで料理を作りつつの「ユキ、お前のデザートはこのわた「いらん！」などとはざく変態をあしらいつつ……

で、出来た料理をテーブルへ。

やっぱりというか、先輩もいる。家まで付いてきた時から、何となくそんな気もしたわけで。

「帰れ！」という前に、我が女帝たるマイシスターの「早く作れ」発言。

本気で喧嘩すりやりわりかし楽に勝てはするが、いかんせん妹である女の子である。手を上げるのは、男としてどうかと思っている。……早い話が、俺は妹には甘いのである。

ま、そんな与太話は置いとくとして、テーブルにはリ（ケチャップライス）クエストされたオムライスとポテトサラダ、それに人参と卵のスープ。冷蔵庫には自家製プリンを冷やしてある。

「……いただきます！……」

では、メインのオムライスを一口……うん、まあ及第だな。

「うむ、ユキの料理は美味いな！」

「どうも」

「ケチャップの酸味が弱い、卵に火を通し過ぎ、スープは少し塩辛いし、ポテトサラダは……まあ美味しい。でも、次は頑張ってほしいわ」

「…………精進します」

堪える俺！！我が妹ながら、本気でム力つく！

食後のプリンも俺としてはよく出来たほうだと思ったが、我が妹君から「バニラの香りが強すぎる、もう少し甘味を抑えたほうがいい」と、キツーい評価を頂いた。

「じゃあお前が作れよ！！」と言いたいのだが、妹君は家事全般に《壊滅的な才能》である。洗濯をすれば、真っ白なシャツと派手な赤いワンピースと一緒に洗って、シャツをピンク色に染めあげたという過去を持つし、掃除すれば、BeforeのほうがAfterよりもキレイだと思えるほどだ。

料理に至っては……………察してほしい。こいつ（妹）は甘味が強いなら塩を入れればよい！と、本気で思っている残念な家事下手女なのだ。

だから俺も、心の中では心底腹が立つても、口には出さない。結局、被害は俺に降り懸かってくるのだから……。

「ごちそうさま、実に堪能出来た！」
「どうも」

この時ばかりは素直に美味しいと言ってくれた先輩の言葉が嬉しかった。

「さて、図々しくも夕食までご馳走になったが、いい加減、そろそろおいとましよう」

ああ、帰れ帰れ。

「ユキ、仮にも女性を夜道にひとりで歩かせる……なんて事はしないよね？」

黙れ家事壊滅女！！

「……先輩、送ります」

「おお！そうかそうか！！では帰ろう！」

「あ、帰りにポテチ買ってきて」

「……はい」

今更ながら、俺に兄としての威厳は無い。ただ、断れないつつうのは情けねえな俺。

さて、無事に先輩を家に送り届けた俺だが……

「……でけえ……」

威厳のある門構えに、広い日本庭園、てか建物がまんま城じゃねえか！！

先輩の家は隣町だというのは知ってたが、まさかのこれかよ！

「お帰りなさいませ！」

「うん、出迎えありがとう！」

いたよ。たしかにいたよメイドさん……………つか、純日本家屋（城？）に、黒地に白フリのメイド衣装がアンバランス！！

メイドさんって初めて見たんだけど、やっぱり美人だなあ…。髪とか銀色だし、肌白いし、眼とか蒼いし。外国の人か？

「こちらは？」

「うむ、私の恋人（予定）で、相澤由希くんだ！！」

「はじめまして、いつも先輩にお世話しづかになってる友人の相澤です」

いろいろと愚痴を零したくはあるが、流石に初対面の人（しかも先輩の家で働いてるメイドさん）には言えねえ。ここは丁寧に挨拶のみで対応。

「相澤由希様……………ああ！ユキ様ですね！！お話はいつもお嬢様から伺っております！」

「こ、こらりリナ！余計な事を言うなっ！！」

「あら、これは失礼致しました」

慌てる先輩っていうのも珍しいが、メイドさんの先輩に対する接し方も、まるで姉妹のような感覚として、俺の目に映っている。

つまりとところ、このメイドさんって、メイドという位の中でも上の方に位置してるんじゃない……………

「さて、挨拶が遅れました。私わたくし、当《綾館家あやたけ》にて侍従長を務めるリリナ・F・ナイトロードと申します。歳もお嬢様やユキ様と、さほど変わりはありませんので、気軽にリリナとでもお呼び下さい」

名前カッケー！！やっぱ外国の人だ。日本語上手いな！！ってか初対面からユキって呼ぶんだ！？

「は、はあ……じゃあ、俺はそろそろ帰ります！」

「では、お車を用意致し「あ、歩いて帰りますから！」

俺はリリナさんの言葉を遮った。そりやもう全力で！だってさ、さつきから俺の視界の片隅の方でスタンバってる車とドライバーさんらしき黒服の人を見りゃ、ねえ……。

車種にはあんまし詳しくない俺だが、俺でもわかる黒ベ○ツ。しかもマイシスターからポテチ頼まれてっし。

「ですが……」

「お、お気持ちだけで！それじゃ！！」

踵を返し、少し速めに歩きだした俺に、「ユキ！また明日っ！！」

って先輩の言葉。一度振り返って手を上げて、再び我が家の方へと体を向け、最初の曲がり角を曲がってすぐに、猛ダツシュ！！

なぜ？城てきな日本家屋に、金持ちらしいお仕えメイド、車種は黒ベ○ツ……これはあくまで、あくまで俺の推測だが、先輩

ん家ってヤ○ザじゃね！？落とし前とかで指を切り落とすアレじゃね！？！？

俺だって多少の不良にゃ動じねえけど、本職の方を相手とか無理だし！！！！！！

恐怖が芽生えて、ポテチ買っの忘れて家に帰り着いて、マイシスターにはばろくそ文句言われ……

俺が何したってんだあああっ!?!?!?!?

06:今日は二人で変態さん

am5:00

起床。俺、相澤由希の朝は早い。とはいえ、何時もは朝6時に起きて、洗濯・朝食・弁当の《必要家事》を済ませるのだが、今日は1時間早めに目覚めた。

なんというか、こう……第6感的なものが、俺の意識をDream・World（夢の世界）から現実に戻したのだ。

「……な、なん!？」

「「……あ……」」

うおいっ!!窓から侵入者キターーっ!!!!

なんだその手に持つてる“昨日今日じゃ扱えそうにないツール”はっ!?

窓の施錠周りのガラスが斬られてるし!なにげに今日二人だし!!つか止めるよメイド!!なんで一緒に侵入しようとしてんだあああっ!!!!!

「おはようユキ!!」

「おはようございます（未来の）旦那様!」

「ソッコー出てけええっ!!!!!」

「改めて、おはようユキ！！今日もどんより清々しい曇り空だな！
……あ、そうそう！私と一緒に婚姻届けを役所に出しに行かない
か？」

「……………」

ビリビリビリ……………（差し出された婚姻届けを破る音）

「ぬああ！？」

「これがツンデレというもののですね！」

「違うわっ！！！」

メイド……………俺は変態にはデレねえよ。

俺の第6感というのは、中々冴えているようだ。つか、とうとう朝
っぱらから部屋に侵入するようになりやがった……。しかも変態先
輩だけでも大変だったのに、メイドまで加わりやがった。

「では、今日は私が朝食をご用意しましょう！」

「い、いや、さすがにお客に料理を作らせるのは……………」

「何を言ってるんです、私は綾館家に仕える侍従長です。料理も洗
濯も掃除もユキ様には負けませんよ」

いや、違えよ。勝負とかじゃねえし。片手間で家事やってる俺が家
事職メインのメイドに勝てるわけがねえし。

「まあまあ、たまには誰かに作ってもらっていつものもいいものですよ?」

「……………ん、じゃあ、お言葉に甘えて」

「かしこまりました!」

につこりスマイルのメイドって、けっこう破壊力あるな。

んじゃ、俺は洗濯でも……………って、あ、あれ? 服が物干しにきちんと干されてるし、なんか床がピツピツに磨かれてるし……

「ああ、この程度の家事であれば、5分と必要ありませんよ。お料理の許可を頂く間に、リビングの掃除と洗濯は済ませておきました!」

メイドスゲー!! つか、いくらメイドでもここまでは早く出来かね!?! リリアさんの姿が二人、三人に見えてね!? 残像か? 残像なのか?!?!?!?

「できましたよ!」

早っ!! 一分も経ってねえ!! ガスコンロの火力とか無視じゃね!?

「事前に調理を済ましておいたので、温めただけですよ」

じゃあ動きが無駄だろ。

「……………はよ……………」

匂いにつられて起きてきたな、我がシスターよ。

「おはよう我が義妹（未来の）凜ちゃん!!」

「おはようございます凜様！」

「おはようございますお義姉（ほぼ確定）様！こちらは？」

おい、なんだよほぼ確定って。ってかいつ仲良くなった？妹と変態よ……。

「申し遅れました、私、綾館家にて侍従長を務めるリリナ・F・ナイトロードと申します。リリナとお呼び下さい」

「お義姉さんのメイドさんかぁ。てっきり、ユキにそんな趣味があるんだと思ってたわ」

ねえよ！むしろ俺が変態扱い！？つかお義姉さんってなんだ？

「なにぃ！？ユキはリリナのような女がタイプなのかつ！？！？」

「言ってねえ！！！！！」

07：宣戦布告！変態さん

リリア（メイド）さんの特製朝食（金華豚のベーコンと烏骨鶏卵の目玉焼き・完全無農薬栽培で育てたトウモロコシのコーンスープ・高級ホテル食パンのトーストなど）は、ひっじょーに！美味かった！……！

あの辛口批評でマイハートをズタズタに引き裂く我が妹君でさえ、黙して語らず。減らず口はなりを潜める程だ。

満足な朝食で心と腹を満たし、変態先輩からの執拗な下ネタ告白で神経を擦り減らす。もちろん丁寧にお断りしたので、告白が238回玉砕した事になる先輩は「な、なぜなんだあああ！……！」と、朝もはやから大絶叫。しかし、今日は先回りしてラブレターという脅迫状をセットするわけでもなく、俺と妹と一緒に、のんびり茶を啜っている。

やれ、ぼちぼち学校へ行くとするか……。

「じゃ、俺らはそろそろ行くから。凜、戸締まりよろしくな」

「わかった。いつてらっしやい」

「では、私も行く」

「では私も」

へえ………先輩が学校に行くのはわかるが、なぜメイドが？

あえて口には出しゃしないが、なんだろうな……この不安は？

意外ってわけでもないが、登校中はリリアさんがいなかった。いや、まあ当たり前か。きっと先輩の家にも戻ったんだろ。

ただねえ……

「なあユキ、やっぱりリリアのような格好が男としては“萌え”なのか？」

「少なくとも、俺は“萌え”ねえ。人の好みはそれぞれあると思うし」

「べ、別にユキのためにメイドさんの格好をしようと考えたわけじゃないんだからねっ!!」

「俺はツンデレにも“萌え”ねえ」

ギャップ萌えとかあるらしいが、少なくとも俺にツンデレ萌えは無い。ってかリアでツンデレとかいないだろ。

「じゃあユキの理想の女性って、どんな感じなんだ？」

理想ねえ……

「まず、可愛いというよりも綺麗な印象で……」

「当て嵌まるな」

「次に、年上で……」

「きたコレ！」

「意思が強くて、堂々としていて……」

「……まさに私じゃないか!!」

「最後に、下ネタを言わない人ですね」

「……………」

あ、黙った。

「私は思っんだ。女とて下ネタを言っても良いんじゃないかと！」

「まあ少しくらいなら。毎日毎日言われたら、男としては、その人の事を異性としては意識しなくなるんじゃないのかと。俺はそう思います」

「…………でも…………」

うわぁ先輩泣きそう。

「もちろん、自分の性格なんて簡単に変わるもんじゃないし、上っ面だけを見せて相手と付き合うというのは、詐欺です」

「…………うむ、ユキの言う通りだ」

「ですから、結論。諦めたら？」

俺はあくまで、自分の理想に妥協するつもりは無い。つまり、この“見た目完璧性格残念”な先輩と付き合うつもりは毛頭ないのだ。俺が先輩の告白を断り続ける理由は、それである。

先輩の性格を知った以上、先輩に無理しておしとやかなイメージを押し付けるつもりはないし、かといって自分を妥協させたくもない。先輩が俺の事を諦めて、早く自分を好きでいてくれる人を見つける事こそが、俺の願いであり、先輩にとっての幸せだと思うから…………

「あいにくだが、私は絶対に諦めない！！私の願いは、ユキと二人で幸せを築いてゆく事だ！私は私の理想に妥協はしない！！」

「俺の気持ちは無視ですか？」

「要はユキが私を好きになつてくれれば済む事。ユキに私を想って

くれる気持ちがあっても、いつか必ずユキを惚れさせる！そのために私は自分を磨く！！そこにも妥協は無いっ！！」

なるほど……嬉しい言葉だ。けど、俺も妥協するつもりは無い。先輩が折れるか、俺が折れない限り、どちらか一生報われないんだ。難儀だな……

「ユキ、これは私からの宣戦布告だ！私は必ずユキの心を掴む！！」
宣戦布告か。高らかと宣言しやがった。だが……

「俺も妥協はしない。先輩が俺を諦めるか、俺が先輩に惚れるか……まあ先はわかりませんが」

そう、誰にも見えない未来……
けど、これだけはわかる……俺と先輩の迎える未来に、引き分けなど無い。

「俺も負けません」

あるのは、どちらかの勝利。どちらかの敗北なのだ……

過去の番外：変態！？私は思った事を口に出しているだけだっ！！（前書き）

変態さんの視点です。ようやく名前が出ます。

過去の番外：変態！？私は思った事を口に出しているだけだっ！！

出会いは、一年前の春……………。

真新しい制服が初々しい新入生が、続々と体育館の中へと入ってくる。

そんな光景を体育館ステージの袖から眺めていた私、綾館美雪あやたち・みゆきの視界に、我が愛しき人の姿は映っていた。

当時、その人は短髪で目つきが鋭く、周りの新入生も緊張気味に、彼の様子を窺っていた。

見た目は、完全に不良である。警戒しないはずはなかった。

だが、私には彼が不良だとか、素行の悪い生徒には見えなかった。

……なぜ？理由は簡単。

私は過去に、彼に出会っていたからだ。

そんな過去の出会いの話は後からでも話すとして、今は入学式の時
の話に焦点を置こう。

たった一度だけ顔を合わせた事はあっても、名前も、住んでる所も、
まして彼女の有無なんて知らなかった。

だから、知りたい。

そんな気持ちもあって、私は入学式の間中、彼を視界にずっと映し
ていた。

式は滞りなく終わった。新入生以下、他の生徒も後は翌日からの授業予定や日程についての連絡を担当から聞くだけである。

つまり、今日は半日。午後からは休み。チャンスはあるのだ。

そして幸運にも、私のだクラスの担任の話はすぐに終わった。後は学生玄関の前で、彼を待つ……だけ。

「あの！」

「はい？」

その時は来た。続々と帰路に着くべく学生玄関に集まって来た新入生や他の生徒の中に、私は彼を見つけ、声をかけた。

「……私を覚えていないだろうか？」

「……………いや……………」

残念。彼は私を覚えていないようだった。

「そうか……………いや、すまない。私は、キミに一度会った事がある」

前置きを踏み、私は過去に彼と出会った日の出来事を話す。

すると、彼も当時の事を思い出したようで、苦笑いで「ああ、あの時の！」と言った。

彼が苦笑いになったのには理由があつて、当時の事を思えば、申し訳ない気持ちになった私……。

「あの時は、本当にすまなかつた！今更の謝罪を不快に思うかもし

れないが……………」

「ははっ！ 気にしてませんよ。誰だって間違いはありますから！！」
文句や皮肉の言葉が返ってくると思っていた私を待っていたのは、
あっさりとした嫌味の無い言葉と、ちよっぴり恐持てな彼からは想
像出来ない、とても魅力的な笑顔だった。

「そ、そう言ってもらえて、私も嬉しい！！」

思わず言葉が詰まったのは、そのあっさりとした性格と、魅力的な
笑顔のせいだと思う。

よく、普段はとっつきにくい人の意外な一面を見た時に、ドキッ！
とする……………なんて話を耳にするが、今、私はそんな立場にある。

……………惚れたのだ。

自慢になるかもしれないが、私はそれなりにモテる。現に、告白も
何度もされた。ただ、本気で好きに思えた人がいなくて、全て断つ
たのだが。

その私が惚れた。一目惚れとは違うのだろうし、錯覚かもしれない。

しかし、その後の彼の言葉が、私の気持ちに錯覚ではないと気付か
せた。

「すみません、俺、すぐに帰んなきゃいけないから！ 失礼します！
」

ハッとした彼は、慌てて下駄箱から靴を取り出し、帰り支度に急い

でいる。

（もう、終わりなのか？もう少し話したい……）

言いようのない寂しさが、込み上げた。同性の友人ならまだしも、異性に対してそんな感情を覚えたのは初めてだった。

けど、帰り支度を急ぐ彼を止める理由など、私には無い。けど、何かを言葉にしなければ、せっかく出来たきっかけを不意にしてしまう。だから……

「私は綾館！綾館美雪だっ！！」

「あ、俺は相澤由希です。“由緒”の“由”に“希望”の“希”で由希です。それじゃ！」

靴を履き替えた彼が、颯爽と駆けて行く。再び見せた、笑顔を残して……

この日、私の記憶の中に、しっかりと彼の名前が刻み込まれた。

「如何なされました？」

「ん？少しな……」

迎えに来た車の中で、隣に座る侍従長のリリナは私に問う。私が小学生の低学年だった頃、リリナは我が家に来た。もう10年来の付き合い、私の些細な変化も気付いていたようだ。

「……どうやら私は、恋をしたようだ」

「あら、とても良い事ではないですか！」

目を細め、口元を緩ませながら、リリナは言う。

昔から、私はリリナを実の姉のように思い、今でも慕っている。だから、包み隠さず何でも話せるのだ。

「告白とは、どのように伝えたら良いのだろうか？どのような言葉を伝えたら良いのだろうか？」

「やはり大切なのは、相手に対して自分はどのくらい好きなのか、という事です」

どのくらい……か。

「それに、告白とはインパクトのある方が良いと聞いた事があります」

インパクト……。

う~~~~む……

偶然とは、予測せぬ事があって、初めて偶然といえる。予測できるのであれば、それは必然と言えよう。

だからこの場合、私と相澤由希が出会ったのは、偶然である。

「あれ、綾館先輩？」

「え……ぬおあつ！?!？」

彼、相澤と再会した翌日。私は気分的に歩いて登校していた。徒歩では学校まで30分近く掛かる通学路だが、本当にその日は何となく歩いて登校しようと思ったのだ。

そこで、学校まであと10分ほど……という所で、私の名を口にした声が聞こえた。そこは住宅街で、声の方向には、他の住宅とはさほど変わらぬ一軒家と……

想い人、相澤由希がいた――

「おはようございます」

「お、おお、おおおはよう……!」

出はなから動揺。無理もない、私は昨晚遅くまで、インパクトを織り交ぜた告白を考えていた。目の前にいる後輩の男子生徒に対して……。

「どうかしたんですか?」「あ、いや、あの……」

不意だから、返す言葉が見つからない。怪訝そうな顔の相澤に、私は焦るばかり!どうしよう、どうしよう、どうしよう!?!?!?

「あ、相澤!」

「な、なんですか?」

よほど私の形相はすごい事になっていたのだろう。相澤は若干気圧されていた。幸い、辺りには誰もいない。これは、私にとって千載一遇のチャンスだった。

「相澤、私はキミに惚れた!私はキミに○○○○で××××して□□□□されたい!どうだ、私の一生の伴侶にならないかっ!?」

今考えただけでも恥ずかしい告白だった。伏せ字にしたのは、この内容がR-18にならないように……だ。だが、当時の私はこの告白で、完全に

(決まった!)

と、思っていた。若気の至りというヤツだろう。

「ぜつつつたい嫌です!……!」

だから、返ってきた言葉に愕然とした。

「な、何故だ！！？！」

「俺にそんな趣味は無いです！！」

「そうか、だが、私はキミが好きだ！！将来と言わず、今、キミと一つになりたい！！！！」

自分の素直な気持ちを叫んだのだが、それがかえって逆効果だった。

「嫌だあああつ！！！！」

住宅街で叫んだせいか、他の住民が何事かと顔を覗かせ、相澤は恥ずかしさと気まずさと、おそらく私に対する恐怖心（？）から、全速力で走り去って行った。これが、私の第一回目の告白であった。

それから幾日かは、遠くから相澤の姿を見続けるばかりで、言葉を交わす事もなければ、顔を合わせる事もなかった。

しかし、彼が親しい友人の間では《ユキ》と呼ばれている事や、見た目とは違うギャップで、次第に他の学生とも仲良くなる姿を見えます。彼に対する想いは強くなっていった。

彼が入学して一ヶ月が過ぎた頃である。以前、彼に好意を寄せていた私の耳に、衝撃的な噂が飛び込んできた。

“ 3―Eの松井が1年の相澤って奴と付き合っているらしい ”

松井というのは、私の中学時代の先輩。だけど、あまり良い噂は聞かないし、複数の男と付き合っているという話も聞く。直接話した事もないし、面識という面識も無いのだが、あまり好意的にはなれない女性。

不安になったのは、いうまでもない。

噂を確かめるために、私は中学が同じだったという共通点を利用して、さりげなく先輩に話しかけてみた。するとやはり、先輩は相澤と付き合っているという。不安は的中である。

しかし、他人の恋愛に口を挟むつもりは無いし、相澤が幸せであれば、私は潔く身を引こうと思っていたのだが、先輩の言葉の端々から、相澤に対する感情の薄さに気付いた。

「つーか、ぶっちゃけあいつとかどーでもいいし」

「へえ………」

思わぬ言葉に、冷静な口調で返したものの、心の中は先輩に対する憤慨で一杯であった。

「さっきから相澤の事ばっかだけど、ひょっとしてあいつの事好き

なん？」

「ええ、好きですよ」

先輩の問いに、私は素直に返す。

「ふうん」

「ねえ先輩、私に相澤をくれませんか？」

興味なさそうな先輩の言葉に返したのは、我ながら最低の言葉。

「タダじゃ……ねえ？」

「……いかほどでしょうか？」

「2万でどう？」

最低だ……金で相澤を売ると、先輩は言ってるのだ。こんな女を彼女にした相澤を情けなく思うが、もっと最低なのは、財布に入っていたお札全てを、彼女に渡した私。

「あら、こんなに？なら、私も当たり障りの無いようにあいつと別れてあげるわ！」

ヒラヒラと手を振り去っていく先輩を見つめながら、私が犯した罪悪感と、彼をお金で売った先輩に、苛立ちはいっぱいだった。

翌日、気落ちした彼の姿があった。

慰めるフリをして、私は徐々に相澤との距離を縮めていった。そして再び、告白。

しかし、二度目の玉砕。

だが、私という人間は、執着心というものが強いらしい。いつか必ず彼を私の恋人にする！その想いは、今なお続いている。

あれから丸一年。未だ初恋は報われない。しかも、彼は私がどういった人間かを知っているし、私も自分のスタイルを変えるつもりは毛頭ない。

彼は私を下ネタばかりの変態だと言う。だが、私は私が思っている事を口に出しているだけだ！変態などとは失礼なっ！！気持ちを素直に言っているだけで、未だ行動には移していない。

私は今朝、相澤由希に宣戦布告した！終わりのない告白を！妥協の無い信念を！！全力をもって彼にぶつけ、私は必ず、ユキの恋人になると！！！！

不安はある。だけどそれ以上に、私の心は期待とドキドキでいっぱいだ。

過去の番外：変態！？私は思った事を口に出しているだけだっ！！（後書き）

ねえ……………なんかコメディ要素減ってるし。今回、ようやく変態先輩の名前が出て来ましたね。むしろ遅くなっ！？って、私自身が思ってます。

まだユキと先輩の出会い編は出て来ませんが、そのうち投稿します！……………って宣言しとかないと、本気で忘れてしまいそう……

08：編入ですか！？メイドさん（前書き）

後半はちょい真面目です。

08：編入ですか！？メイドさん

「おい！とびつきり美人な転校生が来るらしいぜっ！！」

教室に入って早々、大川健一という一人前に名前を持つバカが、意味不明な噂を男子連中に振り撒いていた。なんでも留学生らしき外国人の生徒が、職員室に入って行く所を目撃したらしい。

「なあユキ！美人だぜっ！！女だったぜっ！！！！」

「その美人の留学生が、このクラスに来るとも限らんだろ。大体、同学年とも限らんし」

「ユキは夢が無いっ！あゝあ、綾館先輩から激ラブでモテモテな奴は言う事が違うなあゝ！！」

ドフッ！！！！

「ぐわああっ！？！！！！」

「どうした？腹が痛いのか？」

「ユキが殴ったんだあああっっ！！！！！！」

ち、バレてたか。ま、いいや、バカだし。

「ひどくなっ！？俺の扱いひどぎやああああ！？！？」

「あ、なんか踏んだ」

「おはよう如月」

鳩尾に一撃を受け（というか俺が殴った）、床に突っ伏したバカだが、哀れ……………我が隣席に陣取る如月から踏まれている。進行系で

「ねえ、この床ぐにやぐにやしない？」

「気のせいじゃね？」

「もはや物体扱い！？つか痛い痛い痛い！！！！！！！！！！」

「あ、なんだ大川だったの。床と一体化してたからわかんなかった」

「わかるわかる」

「わからないでえ！！！！！！！！！！」

バカ弄りも飽きた。

「さてとバカはほつという……」

「急に冷めた！？」

バカがうざつたい。

「この学校に転入生が来るのは間違いないみたい。さっき奏が見たつて！」

「ほお、湊が言ったのなら間違いないな」

「俺ってそんなに信用ない??」

「「ない」わ」

ちつくしよおお！！！！って捨て台詞を吐きながら教室を出て行ったバカ。もう少しで先生来るのに……………ま、いつか。

それにしても、湊から聞いたのか。湊の声って綺麗だもんなあ……………

…普段は黙ったままだけど。

「席着け」

ってけだるい感じで、担任が教室に入ってきた。さて、今日も学校が始まる！って感じだな。

英・数・体・情（情報処理）の4限を終え、昼休みである。転校生は、やはりこのクラスではなかったので、クラスの雰囲気になじめない。だが、妙に廊下の方が騒々しく、その喧騒が、徐々に近づいてきてるような……。

「あ、ユキ様発見！」

うおいい！？！？まさかのメイドじゃねえか！！！！つかユキ様言うな！教室が凍りついてる！！

「どうだ！リリナの制服姿は！！悔しいが私以上に似合っているだろうマイダーリン（予約）！！！」

「やっぱりアンタか！つかマイダーリン言うな！！！」

教室の扉バーン！的な豪快な登場で、颯爽とこっちに来る先輩。あと（予約）ってなんだ！？

ざわつく教室の内、外なんてお構いなしに、メイド（制服Ver.）を引き連れた先輩は、学食に飯を食べに行ったクラスメイトの空いた席を、俺のグループに引っ付けて腰かける。メイドも同様に、だ。

「やはりメイドたる者、つねに主の傍にてお仕えするのが使命であり、こうして編入という形で、お嬢様のお世話を務めているのです」
「メイドなど侍従など、堅苦しい事など関係無いと言ってはいるのだが。第一、私とリリナは書類上、姉妹という関係だ。まして私はリリナを実の姉のように思っているのだが……」

「……は？」

「こら、臯月。寝るな」

「むにゃ（寝言）……」

「……（もぐもぐ）」

俺・如月・大川は揃ってキョトン。結城は河南から軽く肩を揺すられてるが起きる気配が無く、湊は無言で弁当に集中。緊張感はあまりない。

「リリナは養子縁組をしているから、私の姉なのだ。だが、頑として侍従を辞めんのだ」

「人には分相応な立場というものがあります。私など、侍従を務めさせて戴くだけでも身に余る事。まして姉と呼ばれるなど……」

「いつもこうだ。ユキからも何か言ってくれないか？」

うっっん…… あんまし人のプライベートに口を挟むのはなあ。

「ってことは、俺がリリナさんの彼氏になれば、先輩は……」

あ、バカがバカな事考えてる。

「リリナさん！俺のスウィートハニーになって下さいっ!!」

「全力でお断りします」

「バババカ」

「バカだな」

「身の程知らずってやつか……」

「うみゅ……」

「……………（コクリ）」

「こんな義弟いらん！」

「ちつくしよおおお！！！！！！」

グッバイ大川。やつぱりバカはバカだな。っと、それより先輩とメイドの話だったつけ。

「……まあ、俺が先輩とリリナさんの事をとやかく言うつもりはないんですが、お互いに折り合いをつけたらどうですか？」

「「折り合い」ですか？」？」

「リリナさんは、自分の意思を貫いてるのは立派ですが、少しくらい先輩の言葉にも甘えたらどうでしょうか？先輩は一人娘みたいだし、自分の事を妹として見てほしいんでしょう」

ま、あくまで俺の考えではあるから、真意なんてわからないが。

「先輩も同じく、リリナさんの意思を第一に考えるべきですね。書類上では姉妹でも、いきなり妹として接してほしいというのは無理でしょうし、リリナさんが侍従として働いているのも、立場というより、案外好きだからかもしれません」

これもあくまで俺の思った事。そう感じたのは、俺ん家で朝食を作っていた（温めていただけだが）時や、その飯を食べた俺や妹の反応を見て、本当に、本当に嬉しそうな顔をしてたからだ。

「だからどちらも、その考えを尊重したうえで、どこかに折り合いをつけたらどうでしょうか？」

他者からの言葉っていうのは、当人達からみれば薄っぺらい言葉にしか聞こえないのかもしれない。もちろん、俺の言った言葉は二人の立場になったとして考えて口にしたんだし、他人のプライベートに口を挟む以上、生半可な気持ちで言っただけでもない。

真意なんて定かじゃないし、知りうるのは、当人だけなんだから……。

「……たしかに」

「そうですね……」

でも……

「ユキの言う通りだ。リリナの気持ちを尊重する事が、今の私に出来る一番の事なのだな」

「私も、自分で勝手に作った《立場》という言葉に、少し囚われ過ぎていたのかもしれない。ユキ様の言葉は、とても心に染みみました……」

薄っぺらな言葉でも、それで誰かが救われるのであれば、それもまた、良いものかもしれない。

「へえ、相澤もたまにはいいこと言っじゃん」

「だな」

「……………（コクリ）」

なんだよ、別にいいじゃねえか。

「やはり私の目に狂いはなかったな！それでこそ私の夫（2年後）だー！」

「言葉が深いです。さすがはご主人様（今から）ですー！」

ただねえ……あんなにも真面目に考えて口にした言葉なのに、相手
がこの二人っていうのがねえ。2年後って……今からって……

09：喧嘩ですか？いいえ、決闘です（前書き）

新キャラですか？いいえ、あんまり関係ありません。

09：喧嘩ですか？いいえ、決闘です

今日はわりかし大人しい先輩は、やはり先輩だったというわけで。午後の授業も終えて、いざ帰ろうと下駄箱に手をかけよう……。いや、目に見えてわかりやすい白い便箋が、下駄箱の扉の隙間からはみ出ていた。

「……またか……」

てつきり先輩からのストーカー・レター（ラブレターらしい）かと思ったが、差出人の名らしきものは無く、“果たし状”と殴り書かれていた。

ほお、果たし状……。

「えっと何々……」

“放課後、校舎屋上にて待つ”

一言だけである。せつかく妨害の少なかった日だというのに……。あまり喧嘩とかは好きではないのだが、便箋の裏にはバッチリと“相澤由希へ”と書いてある。無視してもいいのだが、流石に名指しで、しかもご丁寧に果たし状での呼び出しだ。気乗りしないが、まあ行かないわけにもいかないだろう。

我が自己中なるマイシスターが帰るまでに済ませるか……。

「遅い！遅いぞ相澤由希！！」

「はぁ、すみません」

とりあえず指定された屋上へ行き、その先には屋上です的な扉を開けると、待っていたのはいかにも“番長”風な男と、その一派。見た目は完全にオッサンで、まだ四月だというのに、学ラン（改造）の中にはサラシ。寒くないんだろつか？

「さて、理由は分かっているな？」

「まあ」

番長風（以下番長）は、理由を聞く。わからないというのは嘘になるから、とりあえず軽く返す。

「ならば話は早い！野郎ども、手え出すなよ。いくぞ相澤あ！！」
「では……」

一直線に突っ込んで来る番長は巨体とスピードを活かし、重みのありそうな拳を俺に向けて振り抜いた……………

「ぐう……」

「……気が済んだっすか？」

10分後、床に倒れた番長は俺に睨みを利かせながら呻いた。顔も体もボロボロ。いや、俺がボッコボコにしたんだけど。

俺も所々は殴られはしたが、これといってたいした事はない。

「ああ……また、俺は負けたんだな……」

「中々動きは良かったっすよ。パンチに重みはあるし、一撃一撃が結構デカイし。ただ、まあ大振りだから、当たらなきゃ意味がないっすけど」

この番長、月に一度は俺に決闘を挑んでくる。ことの始まりは先輩目当てで、先輩が俺に一目惚れ（今でも）してるのが気に喰わないといった理由だった。

要は嫉妬からのとばっちりである。

むろん、当ても返り討ちである。ボッコボコである。前にも言ったが、俺はそこらの不良よりは腕っ節が強い。理由？俺の親戚に古武術の道場やってる叔父がいて、小さい頃に無理矢理稽古をつけら

れた。なんでも筋が良いらしく、家を空けがちな両親に変わり、俺の（妹も）親代わりで、一緒に暮らしていた。んで、「心身を鍛える事が、人間を鍛える！」という叔父の格言のもと、小3から中3までの6年間、みっちり鍛えられた。おかげで不良に喧嘩を吹っかけられても負けなくらいには強くなったのだ。あんま嬉しい事ではないが……。だから先輩から告白を受けた当時は、殺気立った同学年やら年上からの嫉みややつかみからの喧嘩が多く、その度に相手をフルボッコ。この番長もそんな相手の一人である。であるが、今も決闘を申し込んで来るのはこの人くらいなもので、他は大人しい。もつとも、この番長も、今では別の理由で喧嘩を吹っかけてくるのだが。

「……勝てねえ……」

今はただ、俺に勝ちたいという理由だけだと、番長の仲間内から聞いた事がある。でも、不意打ちは絶対にしないし、月に一度しか決闘を申し込んで来ない。それに、普段は気の良い人で、廊下ですれ違えば挨拶もするし会話もする。

良い意味で一本気な人である。だから決闘の際に手加減はしない。常に全力。

「次は負けねえ」

「望むところです」

ニヤツと笑う。お互いに……。グイツと番長を引っ張り、立ち上がらせる。

「んじゃ、今日はここまで……」

「すまん、俺の意地につき合わせちゃって」

やっぱり、良い人だ。

「ねえユキ、今日は早く帰って来るって言うてたわよね？帰りに Alice（ケーキ屋）で苺のロールケーキ買って来るって、私に約束したわよ……ね？」

「申し訳ありませんでした！」

家に帰って早々に、玄関先で仁王立ちする我が妹君は、般若のごとき笑みと、女性らしからぬドスの利いた声で俺を出迎え、俺は自分の記憶力の悪さと理不尽さに不愉快感を覚えつつ、全力で土下座させて頂きました。

「逝ってらっしゃい……」

ぎゃあああああ……！！！！！！

10：休日ですよ！変態さん

土曜日である。学校はない。こんな時はゆとり教育バンザイ！！って思う。

だが、主夫たる俺に休みなんてない。規則正しい生活を送る俺に二度寝なんて習慣はなく、起きて着替えて即洗濯。現時刻は午前7時、洗濯機を稼働させている間に、自室・居間・台所・廊下・風呂場の順に、掃除。毎日ではないものの、二日に一度のペースで掃除はしている（風呂・トイレは毎日だが）から、そこまで汚くはない。全部の掃除行程を済ませるのにたいした時間はかからず、ピーツピーツ！って洗濯が終了した音で、今度は洗濯物を干す。

この間に占める時間は、開始から1時間ちよつと。未だ起きない妹にやや呆れつつも、今度は朝食作りに手を伸ばす……………。

ピンポン！

「はいはい！つと……………」

来客を告げるインターホンが鳴る。まだ朝の8時過ぎ、宅配便にしては早過ぎるだろうし、バカ（健一）や如月、まして河南と遊ぶ約束をした覚えもない。

ピンポン！

宅配便です！！

なんと、こんなに朝早くから宅配便だ。だが、なんとなーく声に聞き覚えが……………

「すみません、お待たせしました」

「いえいえ、こちら相澤由希様宛てのお荷物を持って参りました！」

まだ若い女性の声。見た目は完全にクロココマートの服装だが、帽子を目深に被っている辺り、みようにおかしい。

しかも荷物が……デカイ！！大人が一人くらいは収まりそうな段ボールである。差出人不明というのが非常に気になる所だが、それ以上に気になるのが、伝票に書かれた「生物」の文字である。

「こちらにサインと捺印をお願いします！」

「はいはいと……あれ？」

ちよい待て。普通はサインもしくはハンコのどちらかだよな？両方って………あ、ああっ！！

「これは婚姻届の紙じゃねーかつ！！まさかつ！？」

「チッ！」

舌打ちすんな！ってかメイドじゃねーか！！するとこの箱の中身はっ！？！！

バリッ！？ピリッ！！ボコッ！バリバリバリッ！！！！

「グッモーニン、マイスイートダーリン！！」

「やっぱりあんたか変態女あっ！！」

段ボールを突き破ったのご登場。言わずもがな、変態先輩である。

「ふっふっふ！今日は宅配便の荷物と見せかけての婚姻届にサイン作戦！これで既成事実はできたも同然だっ！！」

タイトルがまんまな作戦だなオイ。

「流石のユキとて、既成事実が成立した以上、もはやあがく術も……」

「美雪様、美雪様……！」

「どうしたリリナ？」

「……サインも捺印も戴いておりません」

「……
何いつつ……！！！！」

ざまみろ変態。

「くっ！寝ずに考えた作戦が……」

寝ずに考えたのか……。

「仕方がない、今はユキの恋人という関係に甘んじ「恋人違う！」

ったく。つと、あれ？メイドがいねえ……

「美雪様、ユキ様、朝食の準備が整いました！」

あ、いつの間にか家ん中に入り込んでやがる！俺ん家なのに。でも、まあメイドの飯は美味いかなあ。

それにしても……

「呼び方、少し変わったっすね」

「うむ。未だに様を付けるが、名前を呼んでくれるだけ、前に進めたと思う。ありがとうな、ユキ……！」

「……礼を言われるほどの事はしてませんよ」

少しづつ、少しづつ……先輩とリリナさんの間に変化が訪れている。今は些細な事かもしれないが、きっと二人は、互いを姉と慕い、妹と慕うのだろう……。

「ユキ、何をボーッとしてるんだ？早く来い！」

「はいはい。つか、俺ん家なんすけどね」

こうやって、俺を手招きする先輩の姿は、綺麗で、魅力的で、美しい……。だからかつて、俺はこの先輩に惹かれ、恋をした。

「もちろん、デザートはこのわ・た・し・よ（ハート）」

こんな事を言わなけりやなあ……………

11:デートをしましょ!マイ・ダーリン[♪]前[♪](前書き)

PV5000を超えました。読者の皆様、ありがとうございます[♪]

11:デートをしましょ！マイ・ダーリン♪前♪

「ご馳走様でした！」

「うむ、美味かった！」

「堪能しました」

「お粗末様です」

どうして我が家の食材を、こんなにも上手に、かつ最大限の美味に仕上げるのだろう。

我が妹ですら「堪能しました」と、俺には絶対言わない称賛の言葉を口にするほど、リリナさんの作った朝食は美味でした。

「さて、ユキには特別デザ「いらん!!」」

「では美雪様の代わりに私がデザ「もつといらん!!!!」」

やべえ…………リリナさんまで変態化してきてる。

「朝からお盛んね、変態ユキ」

「俺は何もしてねええええ!!!!」

チキショー!!この家には俺の味方がいねえ!!!!!!

「…………で、なんでスーパーマーケットなんだ!!」

「知るか! つかなんて居る!? 頼んだ覚えはねえ!!」

スーパーである。我がシスター様が成長期であるかどうかは知らんが、我が家の最近の食材消費がはんばなく早い。なので買い物に来ているのだが、先輩までいる。全く必要ないのに…………。

「普通デートといえば遊園地とか水族館とかだろう!!」

「デートしてるつもりはねえよ!!……!!」

「何い!? 普通、赤の他人……まして年頃の男女が二人つきりならデートしないだろう!!……!!」

「勝手に付いて来たくせにデートなわけねえだろうがあ!!……!!」

もうやだ……誰かこの勘違い・妄想・変態と三拍子揃った女をどうにかしてくれええええ!!……!!……!!……!!……!!

「…………ん? 待てよ…………この所帯じみた感じは、もはや恋人を超えて夫婦じゃないか!!」

もうツツコミが追い付かねえ…………

「ふんふーん♪ふふーんふん♪」
「……………」

特売日だったというのに、コイツのせいであんまし戦果を挙げられなかった。

人の波には飲まれるし、わけのわからん食材をカゴにぶち込むし、ちよつと離れりやすぐ騒ぐし……………。ほつときゃいいんだろぅが、いかんせん顔見知りという立場である。

あれこれと世話を焼いてしまうのは、我ながら苦笑の一語に尽きる。

「ふふん♪ふーん♪ふふーん♪」
「…………ご機嫌っすね」

こつちは目当ての牛ロース切り落とし（グラム80円）が買えなかったつっのに……

「当たり前だ！ユキと二人つきりなら、たとえスーパーでも式場と同等！！」

式場って…………

「結局、デートというのは好きな相手と時間を共にする事だった。場所なんて関係ないんだとな！それに…………」

「それに…………」

「なんだかんだといっても、ユキは私の傍にいてくれる。たとえそこに恋愛感情はなくても…………だ。小さな事だと思うだろぅが、私

にはそれが嬉しいんだ」

照れは無い。だが、真つすぐに俺を見つめる先輩の言葉は、俺の心臓を高鳴らせるには充分だった。もちろん、そんな事なんて絶対口にはしないけど……

「ただいま」

「お帰りなさいませ、美雪様、ユキ様！」
「なんでまだ居る！？」

帰宅早々に出迎えてくれたメイド（リリナ）。俺の言葉に「何言つてんの？」的な顔すんな！！

「侍従たる者として、姉として、主を、妹を出迎えるのは当然じゃないですか！！」

「……だつてよ先輩」

「……うん。ただいま、姉さん！！」

仲睦まじい光景である。実にほえましいのだが、せめて自分ん家でやれよ。

さて、帰宅したんだが、昼までにはまだ時間がある。何すっかなあ……

「ユキ、せっかくの二人つきりだ！ナニしよう！！」

「ナニって言うなそして脱ぐな密着するな！！」

この色魔め！

「つか二人つきりじゃねーし！下の部屋に妹とメイド居るし！！」

「むう……ヒマだヒマだヒマだ！！！！」

「うっさい！！」

ヒマなら帰れ！さっき高鳴った胸のトキメキ返せ！！

コンコン！

「どぞ」

「失礼します。ユキ様、お昼は私にお任せいただけないでしょうか？」

「昼飯？いいいいいよ、さすがに朝飯作ってもらったうえに、昼飯まで作ってもらうのは……」

一応先輩とメイドは客人だしな。

「ああ、いえいえ。ユキ様と美雪様の昼食を作る気など毛頭ござい
ません」

「「は？」」

さすがに先輩とハモったな。つか毛頭無いってなんだ。

「ですから、凜様はご自宅で昼食を食べたいそうですので、私が作ります。お二方はせっかくの休日ですので、デートでもしてきたら如何でしょう？」

「「デート？」」

「ええ」

デート………つってもなあ、付き合ってもいないし、別に行く気も………

「これからデート………これからデート………デート………」

あ、嫌な予感。ここは一先ず退さ………ガシッ！！

「さあ行こうマイ・ダーリンっ」

やっぱこうなるかああああっ！！！！！！！！

12:デートをしましょ!マイ・ダーリン^り後^り(前書き)

前話よりちょい長めです

12:デートをしましょ!マイ・ダーリン♪後

「デート!デート!!ユーキとデートっ」

遡ること……………というほどでもない10分前。

「お二方に昼食を作る気など毛頭ございません!」というリリナさん(メイド)の言葉で家を追い出された俺と先輩。メイドは気の利いた事をしたつもりで俺に紙を二枚手渡した。それは、地元でもわりと大きな遊園地のチケットで、なんとお得な一日フリーパス!!施設内の飲食店ならば、このチケットさえあれば全店タダ!ただ!無料っ!!

とまあ、そんなチケットを受け取り、プラス先輩が“あつちの世界”にトリップしている以上、俺に拒否権という退路は絶たれた。

で、電車で最寄り駅まで行き、そこから遊園地から出向している周回バスに乗って5分。目的地である紫桜城(しおうさぎ)ワンダーランドに到着である。

「おお!遊園地だ遊園地だ遊園地だーっ!!!!!!」

テンション高えな。つか見りゃわかるだろ。

「早く入ろう!なっ?入ろう!!」

「ああわかった、わかったから手を離してくれ!!」

暑苦しい鬱陶しいベタベタすんな!!

遊園地なんて来たのは久しぶりだ。
小さい頃は、家族四人でよく来てたのを覚えてる。あれから、結構経ったんだな……。

「ユキ、どうした？」

「あ、いや……」

「行こう！ほら、早くっ！！」

回想に耽る俺の手を引く先輩。……そうだな、今日くらいは家事を忘れて楽しもうか………って、

「いきなり絶叫系かよっ！？！？」

手を引かれ、連れて行かれたのは、ジェットコースターである。

「ほお……ユキはこういうのは苦手とみえる」

「そ、そんなわけねえだろ！い、行くぞっ！！」

強がってはみたが、足が動かねえ……。こ、怖くなんてないもん！

「ユ、ユキ!?大丈夫かつ!？」

「へっ?だ、大丈夫つすよ!ハ、ハハ……」

全然大丈夫じゃねえ……………てか、ここのジェットコースターは“乗る”というより“吊される”。足は宙ぶらりん!な体勢になり、スピードこそあまり速くない(と思う)が、地面に足が付いてないという不安が、より一層の恐怖感を煽るのだ。しかも吊されるという体勢だから、レールは頭上。徐々に高くなる恐怖感で、冷や汗ダラダラ……………

カンカンカンと響く音が、一度止まる。つまり……

ダアアアアーーーーッ!!!!!!

「ぎゃあああああああつっ!?!?!?!?」

「お、おお!おおおお!?!?!?!」

絶叫である。身体が左右に、上下に、揺れ揺すられて、大回転!!

「……………うう」

「ユ、ユキ、大丈夫か?しっかりしろ!!死ぬなっ!?!?!」

「…し、死なねえ……………」

ジェットコースターに揺すられたぐらいで死んでたまるか!!……
…めっちゃめっちゃ気持ち悪いけど……

ぐったり気分で、しばらくはベンチを温める。あれこれと心配する先輩の気持ちはありがたいんだが、そんなにチラチラ他のアトラクションに目を配らないでほしい。結局、無理して先輩の我が儘に付き合う事になっちまった。

ジェットコースターから始まり、バイキング、ウォータースプラッシュ、ちよつと変わってお化け屋敷……とまあ、中々に堪能した。

「ユキ、ご飯を食べよう!」
「そうっすね」

嬉々として俺の手を引っ張る先輩。休日という事もあって、家族連れや友達同士、カップルなんかが多い。端から見れば、他人の目に俺達は恋人のように映っているのかもしれない。

別に先輩は嫌いじゃない。むしろ好きな部類に入るんだろう……だが、俺にはまだ、友情以上の感情は無い。

そんな風に考えながら、ファミレス的な建物へと足を向けた。

で、店内に入った俺達は窓際の席に腰かけた。
メニューに目配せ、注文を決める。つか、チケットがすげえ！呼び出しベルを押し、注文前に店員にチケットを見せると、

「かしこまりました！」

と、一礼。

すかさず注文をして、料理が来るまでの間、何となく先輩に話し掛ける。主に学校での事だが、他愛のない話でもわりと盛り上がるもの。話し込んでいる最中に、料理がテーブルに並べられた。その際に、テーブルに置かれた伝票に目を通せば“支払い済み”と書かれてある。

つまり、店を出る際にこの伝票をレジに提示すれば、もうお金は受け取りました！という事になるのだ。

「さあ食べよう！いただきます」

「いただきます」

先輩が頼んだのは、ミックスランチ。エビフライやらハンバーグやらチキンカツやらと、一皿になかなか豪華な品揃え（？）。俺はWステーキランチ（ビーフステーキとチキンソテー）。ファミレスみたいな店っていうのは、味が似たり寄ったりというイメージだったんだが、この店は美味い！材料自体も良い物だろうが、付け合わせのサラダやスープも申し分ない。

「ユキ！」

「ん？」

「あ〜ん」

…… オイ！

「あゝん」

「……………」

「あゝん」

「……………」

「あゝん」

どんだけの羞恥プレイ！？あんたのせいで周りの視線が一点集中だ
バカヤロー！！

「早く食べてやれよ！」「いいなゝあんな美人からアーンされてえ
ー！」「ユキめ……………」とかの小言がうぜえ。つか、明らかに俺の知
り合い混じってる！？

「あゝん」

「……………」

「あゝん」

「……………」

「あゝん」

「……………」

パクッ。もぐもぐ……

「いやゝん！ユキと間接キッス」

「つぐ！？……………」ツホ、ケホッ！？

変な事言っなあ……………マジむせしただろがっ！！

「いやゝん、ユキの照れ屋さん」そんな所も大好きっ……………」

気色悪い言葉遣うなあっ！！！！しかもキャラ変わり過ぎてんぞ！
?!? ?

周りから向けられた好奇の視線のせいで、味わう事なんて出来なかったぞバカヤロー！！

ソッコーで飯食って、ソッコーで店から離れた俺と変態。つか、変態は食うスピードが早かった。そして、小言の中に俺の知り合いらしき人間がいたようだが、残念ながら見つけ出せなかった……フルボッコで口封じしようと思ったのに。

その後、再び園内を散策し、あれこれ騒いで（またジェットコースターに乗せられた）、現在5時前。

「ユキ、最後にこれに乗ろうっ!!」

「ま、定番っすね……」

先輩が指差す先には、定番の観覧車である。
混み具合もさほどなく、列んで5分もしないうちに、赤い色のゴンドラへと乗り込んだ。

「ユキ！あれは学校だ！！あ、あつちが海だ！！……おお！街が一望だ！！」

無邪気な子供のようにはしゃぐ先輩は、普段の大人びた（俺の前では変態だが）姿とは全く無縁の印象である。

昇りゆくゴンドラとは対称的に、はしゃぐ先輩の声のトーンが、段々と小さくなっていく。

「……遊園地とは、すごく楽しいな。初めて来たが、実に楽しかった」

「へ？初めてなんですか？」

「ああ。家は父と侍従のみだから……母は私が生まれてすぐに死んだ。父は、毎日が忙しいから、家には滅多に帰らない。こうして誰かと遊びに行く事なんて、ただの一度も無かった……」

淋しげに小さな笑みを浮かべる先輩。対する俺は、黙って先輩の言葉に耳を傾けた。

「……私ばかりがはしゃいでばかりで、ユキには迷惑をかけたな」「いや、そんな事ないですよ。俺も久しぶりの遊園地だったし、充分楽しめました」

「そう言ってもらえて、私も嬉しい……なあユキ、今はまだ、私とユキの関係は、先輩と後輩の間柄だ。だが、もしユキに迷惑でなければ、この関係を一段上にあげてもいいだろうか？」

「つまりは……」

「“友達”という関係になりたい……」

真剣な表情には、少し不安げな感情も見え隠れしている。だが、俺にしてみれば……

「今更ですね」

「や、やっぱりダメ……か？」

「先輩後輩の関係だけじゃ、普通は一緒に遊園地なんて行きませんよ。俺と先輩は、とくに“友達”です」

今、俺に言えるのはそれくらいだ。でも、建前とか気遣うつもりで言っただんじゃない、俺の本心である。

「そ、そうか！そうかあ！！ありがとうユキ、やっぱりユキは優しいな！！」

へへっと笑う先輩。さっき見え隠れしていた不安げな表情は、もう無い。今は純粹に、嬉しそうな笑顔のみである。

頂上を過ぎ、ゆっくりと降下していくゴンドラから外の景色を眺めれば、西側に広がる海の向こうへと沈む夕日が、先輩と俺をオレンジ色に染め上げていた。

13：帰宅しました（前書き）

今度は短めです

13：帰宅しました

遊園地を出て、再び周回バスで最寄り駅へ。すっかり日は傾いて、闇が空を支配しつつある。そんな中、俺と先輩はこれといった会話も無く、電車を待つ。

「……………」
「……………」

黙っている俺と先輩だが、ぎこちないという事も気まずいという雰囲気も無い。あるのは、心地良い疲れと先輩の嬉しそうな笑みから感じる安堵感。

『友達になつてくれないか？』

そんな事を口にした先輩は、おそらく不安だったんだろうが、俺にしてみれば『何を今更』という感じであった。

改札を抜け、やってきた電車に乗り込む。休日の、しかも夜前という事もあって人も多く、必然的に俺と先輩の座る席は無かった。

吊り革に揺られながら、5駅先の最寄り駅までおよそ15分くらいだが、俺達が乗った駅の次、そこで多くの人が乗り込んで来た為に電車内はぎゅうぎゅう。何とか人込みに潰されまいと踏ん張りながら先輩を見れば、俺の腕と座席の間にできた隙間にスッポリと入っている。

「大丈夫か？」
「………… 大丈夫ですよ」

背後からの圧迫に耐えながら、何とか先輩が安心出来るくらいの隙間をキープする。

この場合、たとえ先輩でなくても女の子であれば、俺はそうしている。

また、もう一つ理由があった。

俺が腕の力を緩めれば、必然的に先輩と密着するだろう。となれば、先輩はこれ幸いとばかりに、この事を誇大して、メイドや我が妹、はては学校中に言い触らし、既成事実とやらを作るであろう……。

今、俺の周りに味方は皆無。ならばなんとしても、それだけは阻止せねばいけない。

俺の意地である……。

「……チッ」

「いきなり舌打ち!？」

案の定だった。結局、俺はなんとか踏ん張って、背後からの圧迫と先輩からのプレッシャーに勝った。

しかし、先輩は先輩だったわけで………礼を言うどころか舌打ちしやがった。

「ユキのせいで“ドキドキ密着作戦！”これで既成事実もらったわ！」計画が台なしじゃないかつ！……！」

「やっぱそんな事を考えてたんだな！」

観覧車での“先輩”で意外と可愛いつて感じだなあ”と思った俺のトキメキ返せつ！……！」

その後、終始不機嫌な先輩は頬を膨らまし、抗議の視線で何か訴えているようだが無視！して、妹が待つ（待ってるのか？）家へと辿り着いた。

「ただいま」

「ん」

「おかえりなさいませユキ様、美雪様……些かお早くありませんか？」

「ん」な妹に、半ば驚いたようなりりナ（メイド）。つか、早いってなんだよ……」

「普通デートの後というのは、この後どうする？帰る？それともホテ「行かねえし！つか付き合ってねえし恋人じゃないし！」」

ダメイドが。主人の影響受けすぎだ！

「そうか！その手があったのか……」

「関心すんな！！」

ほら見ろ！変輩（編隊先輩）が要らん知恵付けたじゃねえかつ！！

14：明日？予定があります

変態姉妹はさておけ……………ない。

「ドキドキ密着作戦が失敗した!!」

「まあ！ならば新しく対策を立てねばいけませんね……………」

おい。だだ漏れだ。

「あ、ユキ様。夕食の方は勝手ながら準備出来ております」

「え？何から何まですみません！」

「…………美味しかった」

もう食ったのかマイ・シスター！あれほど俺には「ご飯というのはみんなで食べた方が美味しい」とか言ってたくせに。

「さて……………では美雪様、私達もそろそろ帰りましょうか」

「ええ〜!？」

お、今日はリリナ（メイド）さんが俺の味方に!？

「さすがに使用人達を家に待たせてばかりではいけませんよ……………それに、当人の前で明日以降の作戦を練るのは上策ではございませんん」

余計な一言さえ無けりやなあ……………

「む、確かに。仕方ない、ではユキ！また明日!!」

「いや、明日は……………」

予定が………という前に、さっさと帰りやがった。つかいつ居ただ白ベンツっ！！

疲れを湯舟で霧散させ、部屋着に着替えてリリナさんの作った夕食を食う（カキフライ・エビフライ・シーザーサラダ・コンソメスープ）。美味い！実に美味い！！が、こんな材料を勝った覚えも無い……。

後から聞いた話だが、わざわざ白ベンツの運転手に運ばせたらしい。へッ……金持ちはやる事が違うな（厭味）。

さて、飯を食い終わるまでの間、我がシスター様はテレビをご観賞なさっていたが、おもむろに立ち上がり、俺の対面に座り直す。この場合、あんまり良い報告ではないのだが、今回ばかりはどうも違うようだ。

「ねえユキ、リリナさんって良い人よね……」
「なんだ突然？」

「……ユキと美雪お姉様をデートへ連れ出したのは、リリナさんの計画よ。それに、私と二人つきりになって色々と相談されたわ」

リリナさんの計画というのは、わからなくもない。あの人は先輩の軍師だからな。……ただ、凜と二人つきりで相談というのが、どうも引つ掛かる……。

「私はユキの妹としての立場……リリナさんだつて、お姉様と血は繋がっていなくても“姉妹”なんだもの。妹である美雪お姉様との接し方とか、呼び方とか、色々と相談されたの」

「……成る程。で、何て答えたんだ？」

「な～んにも」

は？

「………しいて言うなら、練習した」

「何を？」

「呼び方。やっぱり姉妹なら“様”を付けるのはどうかと思つたし」

まあ、それは同感だが。

「で、私をお姉様に見立てて、呼び捨ての練習をしたくらい。まず、それだけを改善すれば言葉遣いも接し方も、自然と変化するだろうと思つたし……」

一理ある。呼び捨ての後に敬語を使つてというのは、見た事も聞いた事も無いしな……。

「あれだけ妹想いなんだから、応援したくなつたの……」
「そつだな」

「あ、ちなみに相談に乗ったんだから、見返りとして昼食と夕食は最上級の食材を取り寄せて、作ってもらったの。……お昼の伊勢海老のグリルはとっても美味しかったわ。私は冗談のつもりで言ったんだけど……………ねえ？」

我が家に鬼が居た。可愛い容姿で近付き、容赦ない見返りを求める鬼が……。

この時ばかりは、本当に妹に恐怖したね、マジで。

飯食って、食器を洗って、自室に籠る……………というより、寝る準備だ。明日は妹も友人達（部活仲間）と一緒に空手の稽古があるし、俺も先輩より優先すべき用事がある。

そんなわけで、多少の時間を潰した後、俺はベッドに潜り込んだ……。

15：帰って来ました。付いて来てました。

滅多に無い事だが、今日は半年ぶりに親が帰ってくる。しかも、父・母の両方が揃ってだ。

「「ただいまー」」

午前8時。チャイム・ノック無しに両親は帰って来た。

「おかえり」

「おお、ちよつと見ない間にでかくなつたな！」

「あら、目付きはますます鋭くなつたわねえ……」

お袋、目付きはほつとけ！どちらかといえは、あんたに似たんだよ。

「「ところで凜は？」」

「寝てる」

我が妹様は、マイペースな人。両親が帰ってこようと、自分のペー・スを変えるつもりは無い。

毎度の事だから両親も理解して……

「私、そんなに嫌われてるのかしら……」

「う、うむ……やはり仕事ばかりで家にいないから、私らなんて他人としか……」

いなかった。

「ま、まあ凜は後で起きてくるだろう……ところで、なあ母さん」
「ええ。私もさっきから気になっていたわ。ねえ由希、お台所の方からチラチラとこつちを見てるあの女の子達はどちら様？」

母さん？何を言ってるの！？この家には俺と凜しかないよ……いな……い……

……まさか……

ギリギリギリと、油の切れたブリキ人形みたいに、台所へと顔を向けたら――

「え、エヘッ！」

「あら、オホホホホ！」

な、なんつで……

「なんでいるんだああああああ……！！！！！！！！！！」

大・絶・叫・♪

「……で、このお二方は由希の“先輩”だと？」

「いえ、私はユキ……コホンッ、由希くんとお付「違っよ！ホントにただの友達だから！！」」

あぶねえ！恋人的な関係^{デマ}を口走ろうとしやがった！！

「私は美雪の姉でして、将来は由希様の専属メ「ち、違っんだ母さん！この人は虚言癖があるんだよ！！」」

更にあぶねえ事口走ろうとしやがったメイドオオオオッ！！！！

「んもう、照れなくても良いわよ！美雪さんは、将来私の娘になるのよね！！」

全然分かってねえええええっ！！！！！！

「で、こちらの方が、由希の世話係か」

バカ親父い！！なんで二人とも理解力に乏しいんだドチクシヨオオオッ！！！！！！！！

きつと、凜（妹）の理解力の乏しさはこの両親から色濃く受け継がれたんだろうと納得したところで、俺も1時間をかけて（姉妹からの妨害有り）ようやく両親を説き伏せた。

「……つか先輩、どうやって家に入り込んだ？」

「ん？ユキのお義父様とお義母様の後ろに隠れて、玄関の戸の鍵が開いた所で入ってきたぞ。ちなみにユキの死角から台所に侵にゅ……」

「……入った！」

「お義父様かぁ」

「どうやら私達にも、美しい娘が出来たようだわぁ。ねえ、アナタ」

今、確実に“侵入”って言ったよな、なっ！てかバカ親ぁ！！1時間もかけて説明した意味が無え！！！！

「ユキ、うるさいわ。あら、帰ってたんだ？」

我が家の女帝（妹様）、起床。

あーあ、自分の親を他人扱いですか。見事に二人とも固まってるし……。

「美雪姉様、リリナお姉様、おはようございます」

「おはよう凜（義妹）ちゃん！」

「おはようございます凜様！」

「ついでにお父さんとお母さんもおかえり。あとユキおはよう」

俺は慣れてる。だが、親は……。

「ついでなんだ……」

「なんだが、娘が遠くに行ってしまった……」

せつねえ……。

ま、まあそんなこんなで、両親が帰ってきた。

けど、綾館姉妹もいる……正直、今日という日が不安で不安で仕方ねえ！！！！

16:ある意味最悪なケミカル(化学反応)(前書き)

サブタイはあんまり(というか全然)関係ありません!

16：ある意味最悪なケミカル（化学反応）

起きてきた凜を含め、俺・両親・綾館姉妹の6人がリビング（居間）に揃った。で、待ってました的な綾館姉（職業メイド）が、手にいつぱいの食材を取り出した。

「リリナさん、その食材はどこから……………」

「勝手ながら、使用人に揃わせました。で、勝手口から運ばせました！勝手だけに！！」

全然上手くねえ…………。勝手口（裏口）って、勝手知ったる勝手口…………。ダジャレ失礼！

「実は、私とユキがラブラブデートをしている時に、リリナ姉様が凜ちゃんから聞いていたのだ」

ラブラブは余計だ。

「…………私も、せつかくの家族水いらずの時にお邪魔するのは失礼だと思ったのですが、凜様が「むしろ来てくれてたほうが楽だ」と言われまして、お言葉に甘えさせていただく代わりに、お食事のご用意をさせていただいた次第です」

はあ、成る程。ま、たしかに一理ある。うちの両親ってのは――

「由希！こ、この二人が将来家族になるのかっ！？」

「私に！私に！！こんな可愛い娘が出来るのね！？で、お義母様とか言われたり一緒にお買い物したり洋服の取り替えっこしたり…………ああ、いいっ！！」

帰ってきて早々にテンションが高い。マイペースな凜にとっちゃペー
スを崩されかねないし、俺にとっても毎回こんなテンションの両
親は、どちらかといえば苦手である。

今回ばかりは綾館姉妹が居てくれるのはありがたいかも――

「末永くよろしく願いしますお義父様、お義母様!!」

「お、お義父様だって!か、母さん!!」

「アナタ!私、お義母様って!お義母様って!!」

うわぁ……………收拾つかねえ。つか、綾館妹と一緒に頑張ってパワーア
ップしてるし。リリナさんは――

「えっと、オーストラリアイセエビは軽くソテーにして……………」

自分の世界（仕事）に没頭してる。ってか食材パネエ!!

「できましたー!!」

朝もはよから豪華な食事である。イセエビ（高い!!）のソテー・バ

ジルソースかけに、燕の巣（めっちゃ高い！！）のスープ、完全無農薬栽培小麦のパン（そりやもう高い！！）に、白トリュフ（ハンパなく高い！！！！）のサラダ。

我が家の二人（俺と凜）が一ヶ月に占める食費を、一回の食事ですべていそつな雰囲気か否めない！！

ま、まあ美味しく頂いたから文句は言わない。べ、別にお金持ちが羨ましいとか思っていないんだからね！！

男の俺がツンデレってキモいから、これ以上は何も言わねえ。

さて、朝食は美味しく頂いた。が、この後は何をするわけでもなくダラダラタイム。その間に、綾館姉は洗濯。何度もしなくていいって言っただが、頑として首を振らないリリナ（職業メイド）は、妥協した俺を横目に、嬉々として働いている。

一方で、綾館妹（美雪先輩）は――

「お義母様は化粧品メーカーの社長なのですか！？しかも“Clear”といえば、前年度のコスメ部門で売り上げ一位を獲得した、人気メーカーじゃないですか！」

「あら、美雪さんよく知ってるのね！お義母さん嬉しいわぁ！！」

女同士、話に花を咲かせている。

凜は――

「……じゃあ行ってきます」

「えっ？せつかく父さんも母さんも帰ってきたのに、どこか行くのか！？」

「友達の方がお父さんより大事だわ」

「……………」

哀れ親父。

俺もこの場から逃げたかったんだが、綾館姉妹をほとくのも危険。んなわけで親父と男二人で暮並べ。地味な図だが、中々白熱している。ま、そんなのも最初のうちで、1時間もすりゃお互い飽きた。

「ユキ様、お洗濯とお掃除終わりました！」

「何から何まですみません。あとユキ様言わないで下さい」

メイド、任務（お仕事）完遂。

そんなわけでこっちに來たりリリナさん。いい加減、呼び方を変えてほしい。

「では、なんとお呼びすれば？」

「んゝ…… “ユキ” とか “由希” とか。 “様” 付けは勘弁してほしい」

「では “由希くん” で、よろしいでしょうか？」

17：折れたら負け

「ぜってーヤダッ!!」

「むう……だいたいユキが悪い！なぜ姉様には自由に呼ばせて私は制限がかかるのだ！？納得出来ん!!」

「リリナさんの俺に対する呼び名は正当だけど、先輩の強要する呼び名は間違ってるからだ!!」

ギャーギャー!!と、俺の呼び名について言い争う俺と先輩。両親は全く干渉せず、リリナさんの淹れた紅茶（リリナが持って来た）を飲み、まったりとしてやがる……。

うちの両親は、余程の事がない限りは加勢しない。

一方に加勢すれば、一方から角が立つ（字あってる？）って感じだ。リリナさんの場合は、単なるじゃれあい程度としか感じてないんだろ。

だが、俺にとっちゃ大問題である！“ダーリン”やら“旦那様”なんて他人の前で平気で呼ばれでもすれば、俺は恥ずかしさで人前には出ていけねえ……。

「ぬう……まだ折れんか!？」

「折れてたまるかあああつ!!!!」

「ならば妥協して“ハニー”と呼べ!」

「なおさら悪いわっ!!」

「ならば!今すぐ私を彼女にしろっ!!」

「ならばじゃねえ!!なんで妥協して彼女になんなきゃいけねんだ!?!しかも妥協どころかハードル高くなってる!!」

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

何とか妥協と呼べるレベルまで下げ、今は……………

「なあユキ！」

「…………なんすか“美雪”先輩？」

「……っ！？い、いかん！興奮して鼻血垂れてきた」

「……………」

名前を呼んだだけで鼻血垂らすって……………もし、俺が先輩を“八二

ー”とか呼んだら——

うわー……………背筋がゾツとした！！

んで、その後は「ユキー？」「なんすか美雪先輩？」なんてやり取りを散々やらされ、俺が飽きたにも拘わらず、「ユキー？」と、今も理由無く俺を呼ぶ変態先輩。

時計の針が正午に差し掛かりつつあるって事は、かれこれ1時間近く、このやり取りをやった事になる。

「そろそろ飯か……………」

「では私が「リリナさんはお客さんですから！」

「なら、久々に私「やめて母さん！全員病院送りになる！！」

母の料理は壊滅的である。軽いバイオテロ並の破壊力を持っている（経験済み）から、綾館姉妹に食わせるわけにはいかない。

……妹は、この才能を母から受け継いだらしい。将来の彼氏が可哀相だ。

「俺が作るよ」

「ユキの手料理か！ゆくゆくは私をりよ」「下ネタNG！反対！！」

やっぱり先輩は変態だったわけで……。

そんな光景を両親は

「青春だねえ……」

「私がお祖母ちゃんになる日も、そう遠くなさそうだわぁ」

こんな青春やダツ！！そしてものすごくリアルな目で俺を見るな母！！

↓↓↓↓↓

いつも通りの料理（ご飯・みそ汁・ほうれん草のお浸し・鯖の干物）を作った俺に、両親は「リリナちゃんのお料理のほうがいい！」と

か「有り難みを感じない」と、非難轟々。

高級食材をふんだんに使ったプロ（メイド）の料理に勝てるわきやねえだろが！と、めっちゃめっちゃイラッときたが――

「私は、ユキの料理は好きだ。もちろん姉様の料理も好きだが、ユキの料理は心をほんわかと温かくさせてくれる」

「私も、ユキのお料理は好きです。一見、みすばらしいかもしれませんが、その味は本物です。本物でなければ味わえない美味しさを感ずります」

綾館姉妹からの好評価が、何とか苛立ちを抑えてくれた。

18:服を買いましょ！(前書き)

短めです。

18：服を買いましょ！

午後2時。突然お袋様が

「あなた、久々にデートしましょう！」

と、親父を連れて出て行った。

我が両親は結婚17年目でありながら、いまだにラブラブである。仲が良いのはわかるが、それを見せつけられる俺にとっちゃ、胸やけものである。

「ユキのご両親は仲が良いな」

「……帰ってくるたびに見せつけられるんすよ」

「とても良い事ですよ、羨ましいくらいです」

ま、他人はそう言うわな。俺はおろか、凜ですらたまにイラッとするけど。

「私とユキも、きっとあんな感じ……」

あー聞こえない聞こえない！

日曜だから、家に籠ってるのはいかん！どこか行くぞっ！！

てな具合の先輩に連れ出され、俺と美雪先輩とリリナ（メイド）の3人は、電車を使って市街地中央部のセンター街に来た。

「……で、何するんすか？」

「うむ、よくぞ聞いてくれたユキ！」

いや、聞かなきゃ話にならんし！

「実は姉様の事でな」

「私？」

「うむ。姉様は侍従服と制服しか持ってないからな。この際、色々と服を買い揃えたい！」

あゝ……ま、まあわからなくもない。実際、今もメイド服（黒地に白フリ）姿だから、人目を引く引く！！絶賛注目の的だ。

「え？でも、私はこの方が落ち着くのですが……」

「姉様、その姿で街を歩いているのは、メイド喫茶の従業員とコスプレ好きな人くらいですよ」

あ、美雪先輩がまともな事言ってる！

「ね、姉様はきつと色んな格好をしても似合うはずだし、それに、お、お揃いの服とかを来て、一緒に遊んだりし、したい……！」

「……美雪……」

端から見れば、なんと美しい姉妹愛………なんだろうが、俺が来た（連れて来られた）意味なくね！？完全に蚊帳の外っぽくね！？

「わかった！美雪の言う通りね。私も、二人でお買い物したり、遊んだりしたい……」

「姉様……」

「美雪……」

帰ろっかな………

「んじゃ、俺はそろそろ」そこでユキの出番だ！！」

どうやら、帰らせてはくれないらしい……。

「ユキ、私と姉様の服を見立ててくれないか？」

「……はあ！？」

「見ての通り、私も普段から着るような服はコレくらいものだ。そこで、ユキの好きそうな服とか、私達に似合いそうな服を選んでほしい！」

遅ればせな説明だが、美雪先輩の格好は制服姿だ。紺地に白線の、苓桜高校女子指定制服。

もともと、美雪先輩の私服姿とか見た事はないが。だからといって、俺が女の子の服を選ぶというのは、どうかと思う。

「なに、ユキが似合うと思った服で良いんだ！深く考える必要なんてない」

「私も、ユキに選んでほしいです」

そこまで言われたら……ねえ。断る理由も無い。
なら、精一杯選んでみますか……。

「あり？相澤じゃん！何やってんの？」

「うおっ！？なんでお前がここにいんだよー！」

再会っつーのは、突然にやって来るもんだ。けど、今回ばかりは……この再会を嬉しくは思えなかった——

19：元恋人にからかわれ……

綾館姉妹は、普段あまり服屋に行かないらしく、その事もあって、俺が普段行く服飾屋の“E.L.I.C.E.”にやって来た。

市街地のセンター街じゃ割と有名な店で、メンズ・レディスと区画に分かれてはいるが、品揃えは豊富で人気がある。

そんな所に案内した俺だが、普段は絶対に寄り付かないレディスコーナーに足を踏み入れた途端、聞き覚えのある声と見覚えのある人物に、我が目を疑った。

「さ、沙織じゃねえか！何だってここにいんだよっ!？」

「いや、むしろレディスコーナーに美人を二人もはべらせて入って来た相澤の方が不思議じゃない？」

ツリ目に栗色セミロング、160にちょっと届かない程度の身長 of 女は、やや呆れ気味に言い返す。

この女とは幼稚園・小・中学時代を一緒に過ごした“元腐れ縁”であり、名前は旗沙織^{はた・さおり}という。

「どっちかは彼女？」

「違う違う。こっちは俺の先バ「婚約者の綾館美雪だ!」

「盛大なデマはやめてくれ美雪先輩!」たく……で、こちらが――

――

「専属メイドのリリナ・F・ナイトロードです」

二人ともやめて!!他のお客さんがザワザワしてるっ!!!!!!

「相澤も隅におけないなあっハハ!!ま、元カノとしちゃ、ちょっと複雑だなあ……………」

「「も、元カノオオオオツツツ！！؟؟？」」

ああ、もう！！話がややこしくなるっ！！！！！！

旗沙織……………こいつが余計な一言を口走ったが故に、服選びどころじゃない。

「ユ〜〜キ〜〜……………本妻である私がいながら、他の女に手を出すとはあ〜〜」

「本妻違っ！しかも中学時代の話だし！！元だし！！つか、先輩と俺は付き合ってねえしっ！！！！」

「ユキ……………私の可愛い妹を泣かせるなんて……………」

「泣かせてないし！泣きてえのはこっちだし！！」

「へえ……………ってことは、私が再度、相澤の恋人に立候補してもいいってことだ！？」

「こんな状況で悪い冗談はよせってば！！！！」

ツッコミが追いつかねえ。沙織はいつもこんなだった。昔も散々振り回されたあげく「ごめん、好きな人出来た！そんなわけで別れて！！」と、一気にまくし立てられて別れる事になったっけ……………。

「み、美雪先輩！服っ！服選びに来たんでしょ！？」

「服より先に狩らねばならん獲物が出来た！」

「ちよつ！？り、リリナさん！とめて！！」

「美雪、私も加勢するわ！」

「なんで参加！？」

「ふうん？黒月流古武術のあたしの相手してくれるんだ？」

なんでバトる雰囲気！？誰かとめて！俺じゃこの中に割り込めねえ！！！！！！

なんで綾館姉まで参加してんのっ！？ここ街中だよ？服屋だよっ！
？なんでバトる雰囲気出てんのおおお？？？？？？

バトるわきゃねえとはわかつちやいたけど、騒動をとめてくれたのは、この店の店長さんだった。

「じゃ沙織ー！」

ゴンッ!!

「ったあ!?!」

「お客様相手に何を喧嘩吹っかけてんだいまったく!」

「えゝゝ喧嘩売って来たのは向こうだし!」

ゴンッ!!

「むぎやつ!?!?!」

「ここじゃ、お客様は神様なんだよ!それに、口答えしない!」

「……はあい……」

頬を膨らませ、ブータレ気味の沙織をよそに、店長である恰幅の良
いおばちゃんは、丁寧に頭を下げた。

「ごめんなさいねえ。うちの娘、喧嘩っ早くて」

「ああ、いえ。私の方こそ、ご迷惑をおかけしまして……」

「申し訳ございません」

遅ればせな説明だが、店長は沙織の母親である。当然、俺も面識が
あるわけ——

「相澤くん、久々だねえ!」

「ご無沙汰してます!」

「ハッハッハ! 畏まらなくていいって!」

豪快に笑い、俺の肩をバシバシ叩くおばちゃん。ってか、痛い!

「ま、こんな美人さんも一緒じゃ、うちの娘も焦るのはよくわかる

けど………ねえ？」

「お、お母さんっ！！」

「さあて、あたしゃ奥で荷物整理でもしてくるかねえ………」

おばちゃん、退場。やっぱ母親だけあって、娘の扱い方は慣れてんなあ。

………ところで、なんで沙織はそんなに慌ててんだ？

大人しくなつた沙織は置いて、とりあえず当初の目的は遂行せねば。

の、前に――

「美雪先輩、暑苦しい………」

「私は暑くないが？」

「ええい！俺が暑い！！引っ付くな！腕を絡めんな！！む、胸が当たって………」

「心配するな！当ててるんだ！！どうだ、ムラムラするだろう？」

「離れる変態！！！」

一連の出来事のせいか、美雪変態（先輩）の密着度が増えた。男と

しちゃ嬉しいかもだが、出来ればそういう事は俺ではなく、将来の彼氏にでもやってくれ。俺の選肢肢に変態は入ってねえ！

「っと……………それより沙織。なんで店嫌いなお前がここで働いてんだ？」

沙織は昔っから、服飾関係に毛嫌いしていた。実家が服屋をやったから、その反動だと思うが。

「……………嫌いつていうより、苦手だったのよ。家庭科も工作も成績悪かったし、やっぱ親がそういう仕事してるから尚更……………ね。でもさ、嫌いじゃなかった。手伝い程度から始めたんだけど、今はこの仕事が好きだから、ここでバイトしてんの」

成る程ね。

「……………と、ところで、さ、さっきの話なんだけどさ……………」

「あん？」

服を畳んでいた沙織は手を止め、こっちに振り返った。

「こ、恋人いないんならさ、もう一度……………立候補しても、いい？」

「……………へ？」

「そ、それが嫌なら、また、友達からでもいいから……………さ」

思ってもみなかった言葉に面喰らったのは俺だけじゃなく――

「ユ、ユキは渡さん！―」

「い、妹にライバルが……………」

綾館姉妹もまた、驚きと焦りを見せていた。

「……なぐんてね！びっくりした？」

「は？え、え？」

「相つ変わらずからかい甲斐があるわ。あっははは！！」

なんてこった、不覚にもドキツとしたじゃねえか！！

「沙織さん、ユキは私の彼氏だ！からかうのは勘弁願えないか？」
「彼氏じゃねえし！！！！」

番外編：素直になれない私の本音（前書き）

旗沙織の視点です。

番外編：素直になれない私の本音

今日、相澤由希が店に来た。二人の美人を連れて――

「やれやれ、押しが弱いねえ、我が娘ながら……」
「もうっ！見てないで仕事してよ！！」

母親は、呆れながら私を見る。

そう――冗談じゃない。私が由希に伝えたのは、私の本音。
けど、自らの言葉で冗談に変えたのだ。

我ながら、素直になれない自分に嫌気がさす。

あの日、あの時、あんな言葉を口にしなければ、私は今でも由希の
“恋人”だったんだろうか……？

あれは私が中学2年の夏休みだった。幼稚園から中学までを共に過ごしていく中で、私には由希よりも先に“恋人”が出来た。
容姿は学校一で、告白も引く手数多な先輩だった。

性格よりも容姿を第一に考えていた当時の私も、例外に漏れず先

輩に惚れていて、勇気を出して告白。玉砕覚悟だった私に返ってきた言葉は――

「いいよ、僕もキミの事が気になってた」

OKの返事。

勿論、私は浮かれ調子になって、周りの友人から「遊ばれてんのよ」って言葉も、ひがみにしか聞こえなかった。
けど――

付き合っていくうちに、彼氏の周りから感じる、女の影……。ある日のデートをすっぱかされた私が、暇を潰す為に出掛けた街。偶然にも、彼氏が居た。私とは違う“女の子”と、楽しそうに――

問い詰めた結果、私の他にも彼女がいる事が発覚。しかも、5人も！悲しみよりも怒りが強くなっていく私を知ってか知らずか、そいつは「お前も遊びだと割り切れよ」って言いやがった！

沸点到達。「テメエのだらし無さを棚に上げてんじゃねえっ！！！」
！」って言葉と共に、鳩尾に三行半のアップパーカッツをお見舞いして、私は先輩と別れた。

その後、苛立ちも依然治まらない私を心配してくれたのが、相澤由希だった。

時間の長さってのは不思議なもので、私が悲しい時、辛い時には、決まって隣に由希が居た。
ぱつと見は目付きが悪い不良みたいなのに、根は優しくて、温かい。そんな由希の優しさに甘え、私は口にした。

「ねえ由希……いつも、私の傍に居てくれるのは………」

「……………フラれた女の子は、俺の大切な人だから——」

照れ臭そうに、由希は言った。

だから甘えた、幼馴染から恋人の関係へと。

けど……………

立場は変わっても、変わらない毎日。ただ、平凡に刺激も無く過ぎてゆく時間……………。

だから、望んだ。変わらない毎日よりも、刺激のある日々を。そして出会った、新しい恋に……………。

「ごめん好きな人が出来た！だから別れてっ！！」

極力、有無を言わせない勢いだけの別れ話。由希は何も言わず、ただ頭を縦に一度だけ振った。

新しく出来た恋人は、不良っぽい感じの人で、喧嘩っ早い性格も災いしてか、よく衝突する事も。

それでも、今までになかった刺激的な日々は、退屈・平凡が嫌いな私にはとても新鮮で、楽しかった。

けど、互いの進路の方向の違いから、遠距離恋愛に。中学を卒業し、高校に進学してすぐの頃までは互いに連絡を取り合っていたけど、いつからか疎遠に。

暇になったある日、私は彼氏に会いに行っただけど、彼氏に出会った途端、ドキドキも、嬉しさも込み上げてはこなかった。

彼氏もそんな感じ。だから別れた。

帰路の途中で浮かんだのは、いつも傍に居てくれた由希の事。平凡

で変わらない付き合いだったのに、無性に由希に会いたくなった。
会いたい――

けど、会えない――

一方的に別れを告げた私が、どの面下げて会おうというのだ……。きつと、由希だって私を見たら不快に思うんじゃないだろうか？

自分勝手な都合で、相手を振り回しちゃいけない。

だから、会えなかった。ごめんなさいと、言えなかった。素直にならない性格は、今も昔も変わらないまま……

中学卒業から2年経った。そして今日、私の両親が経営する服屋“E L I C E”に、懐かしい幼馴染が来た。相澤由希……かつての恋人が――

切れ長の鋭い目付きは変わらないが、豊かな表情には優しさが滲み出ている。顔立ちも大人びて、背も幾分か高くなったその姿は、凛々しく、かっこいい。

ただ――

由希に寄り添うように、仲よさ気に歩いて来た女性。そして、二人を見守るように後ろに続くもう一人の女性が、私を一気に不安にさせた。

（誰……………？）

一人は由希ほどではないが、存在感のある目付きにまっすぐな黒髪
の和風美人。もう一人は、艶めく銀髪が美しく、優しげな瞳が落ち
着いた雰囲気醸し出している外国美人。……………メイド服姿ってい
うのが、驚かされたけど。

とかく驚かされたのは、まっすぐに私を見据え「ユキの婚約者」と
言った、和風美人の方。うろたえる由希なんて見た事なかったから、
尚更――

（由希は否定してたけど……………）

由希の表情の豊かさは、きっとこの人のおかげなんだろう。

「由希の恋人に立候補しても、いいかな？」なんて言ったけど、私
は横で狼狽する和風美人と同じ舞台に立つ前に、敗北を悟っていた。
なぜって？

過去の経験から、私はそう感じた。私は由希を喜ばせるどころか、
きつと不快にさせてしまう。多少強引でも由希の事をよく見ている
彼女とは違うのだから。

「なぐんてね！びっくりした！？」

付け足した“からかい”の言葉で、私は“ステージ”を降りた。

だって、勝ち目のない戦いに立つほど、私は強くないのだから。

帰って行った由希達の姿を見送りながら、私はただ、あの二人の幸せを願うだけだ……。

番外編：素直になれない私の本音（後書き）

当初、この“沙織”を美雪のライバルに！と、考えてました。が、
いかんせん、如月舞とキャラ被る。

という事で断念。

ちよくちよくストーリーには登場しますが……………今の所、まだ未定
です。

20：平日奇襲は変態だけじゃない！？（前書き）

学校生活に戻ります。

20：平日奇襲は変態だけじゃない！？

昨日、綾館姉妹の服を見繕っている途中で、久々に会った古馴染が余計な言葉を口走りやがった。

よって、帰りは変態先輩が終始、自分の魅力とかを延々と俺に言ってきたり、密着度が3割増と、いつもよりアピールが強かった。

で、今日は月曜日。つまり学校。ここ最近の事で学んだ変態先輩の行動を考えれば、今日は俺の部屋に奇襲をかけてくる可能性は大！
！ま、そんなわけで窓に鍵を掛けたり、部屋の出入口の扉に施錠したり。

これで変態（美雪）先輩への対応もバッチリだ！

……………なんて思ってた俺の馬鹿野郎っ！！！！

「おはようございますユキ！清々しい朝ですね」

目が覚めると、眼前にリリナ（制服Ver.）先輩が居た。

「鍵を内側からかけるといのは中々のお考えですが、私には朝飯前でした。なにせ私は綾館家の侍従長ですから」

普通のメイドはそんな技術は持ち合わせてねえよ。
一歩間違えば泥棒だかな。

……………さて、ようやく気付いた事がある。

「……………美雪先輩は？」

「妹は、弓道部の朝練に行きました。なんでも副部長から「朝練サボるな!!」と、お叱りを受けたようでした」

……原因の一部は間違いなく、俺ん家への襲撃だろうな。

「朝食の準備は既に整ってございます」

「なんか、毎回すみません……」「いえいえ、ついでにユキのお召し物のお着替えも手伝いま「出てけ!!」」

最近、ますますリリナ先輩が変態に毒されてる……………。

「おはよう」

「おはようユキ」

「おはよ」

ああ、そついや両親帰って来てたんだつたな。

ここ最近の定番になりつつある、リリナ先輩の手料理を発表しよう。

国産大豆使用の無添加味噌汁・新潟魚沼産コシヒカリのご飯・烏骨鶏の卵焼き・無農薬栽培の小松菜のお浸し・佐賀関一本釣りで捕れ

たサバの開き。

典型的日本の朝食だが、どれもこれもブランド物である。

勿論、誰も文句を言う人間はおらず、俺も豪華な朝食に舌鼓を打った。

登校中である。ただまあ、いつもの騒がしい変態がいないあたり、静かに登校しているんだが、リリナ先輩と二人っきりというのなんだか違和感を覚える。

「しかし初めてですね。ユキと二人きりだというのは」

「言わないで下さい。ただでさえ違和感を感じてるんすから」

「あらあら、まあそれはともかく、昨日はありがとうございました！あの服、とても気に入ってます」

昨日、服をなんかやかと（シャツ・インナー・パンツ（スカート）の1セット）を、3セットづつ選んだ。なにせ初めて女性の服を選んだから、悪戦苦闘したのは言うまでもないが。

「妹も、とても喜んでました！」

「気に入ってくれたなら、よかったです」

自分の感性と相手の好みを合わせるといのは、とても大変な事だ。しかしながら、こうして喜んでもらえて、嬉しくないはずはない。ちなみにだが、美雪先輩には黒い帽子ハットを、リリナ先輩には白い帽子をプレゼントした。

何となくだが、似合うと思ったのと、リリナ先輩には朝食のお礼を兼ねて。美雪先輩には……………リリナ先輩ばかりにプレゼントしたら、後でギヤーギヤー言いそうだったから、ついでに、だ。

さて、あんまり話す話題も無く……………というか、学校までが徒歩10分という近さもあって、あっという間に学校に到着。

ちょうど校舎正面の玄関に差し掛かるうとした時、体育館横の弓道場から美雪先輩が出て来た。

「おはようユキ！どうだ、私の弓道着姿は。中々に惚れるだろう？」
「惚れるかどうかは別として、似合ってますよ、相変わらず」

俺は素直に似合うと言っただけだ。けど、予想外の言葉だったのか、美雪先輩は顔を真っ赤に染めた。

「め、面と向かって言われると、は、恥ずかしいな……………」

じゃあどうしろと？

「……………あ、言い忘れていたが、私と愛の逃避行というやつをやってみないか？もしくは私を抱いてみないか？」

「全力で断るっ！！！！！」

やっぱり変態は変態だ。朝っぴらから抱くとか言っただ下ネタ女！！！！

「ぬうあっ!!こ、これで250回目の玉砕か!!!!」

「美雪、安心しなさい!嫌よ嫌よも好きのうち、ですよ!!」

へえ、250回も俺は断つてんのか。つかりりナ先輩、俺はその言葉の部類には入ってねえよ。

21: 変態さんに入れ知恵をしないで下さい(前書き)

新キャラなんです、今後の登場は無い……………かも

21：変態さんに入れ知恵をしないで下さい

「だいたいユキはおかしいっ！容姿端麗・成績優秀・スポーツ万能・性格の、才色兼備な私を拒むなんて、どうかしてる！！」

普通、そういう事は自分じゃ言わねえ。どんだけ自信過剰なんだか……。それにどっちかってーと、先輩は“美少女”というよりも“美人”だと思うが。

ギヤーギヤーと自分アピールをする変態……もとい美雪先輩に、うんざり気味の俺。

「美雪っ！いつまでも休憩してんじゃないわよっ！！ほら、さつさと来なさいっ！！！！」

「ひひゃい！ひひゃい！！ヒュキ、ヘリュプミー！！」

ああ、なんとという天の声。怒声とともに美雪先輩の背後に現れたのは、弓道部副部長の井芹いせり・おうか桜花先輩。

勉強成績は謎だが、運動成績は学校一といわれる“スポーツ美少女”。

普段は可愛い顔の井芹先輩だけど、今回は鬼の形相と言わんばかりの表情である。おっそろしく怖ええ！！

頬つぺたを抓られながら必死に抵抗する美雪先輩だが、ズルズルと引つ張られて弓道場に連れてかれた。

「……………あ！美雪っ！！」

突然の事だったから、リリナ先輩も呆気にとられてたんだな。我に

返って、慌てて追っかけてった。

はあ……やっところさ、解放された。

毎度の大川^{バカ}のうざい絡みに耐え、現国・数学・保体・現社の午前授業を済ませ、やってきた昼食兼休み時間。いつも通りのメンバーで昼食を摂りながら、いつも通りに談笑。

「……ところで、なんで今日は綾館姉妹の他に、井芹先輩も混ぜてるんすかね？」

経験上、綾館姉妹が後輩たる俺達メンバーの中に混ぜるのは、わからないでもない。むしろ想定範囲内。しかし、今回は想定外の生徒が混ぜてる。

先刻（朝）に述べた、井芹桜花先輩である。

「うん？ いや、美雪のハートを射止めた相澤由希君がどんな人か、見てみたくなったのよ」

井芹先輩、本人は射止めたつもり無いです。

「ならば井芹先輩、俺が井芹先輩のハートを射止めてみせましょう！！」

健一（大川）、毎度の事ながら、その自信はどっから来るんだ？見る、周りの（俺含めた）視線を。

「ん？キミ、面白い事を言うね？どうやって私を口説くのかな？」

おお！意外にも井芹先輩が健一にノツてきた。気さくな人だなあ。

「では…………井芹先輩、俺と愛の逃避行してみませんか！？」

…………あれ？なんかどっかで聞いた台詞じゃねえか？

「う~~~~ん…………心に響かないなあ。ユーモアもセンスもダメダメ。及第点は、あげられないね」

「そ、そんな…………」

みんなが“だろうな”的な言葉を口にしたり表情に出したりする中、意外な人物がフォローを入れた。

「わ、私は中々良かったと思うぞっ！」

美雪先輩である。なんで先輩が健一なんぞにフォローを入れたのか…………俺はその理由を知っている。というか、思い出した。

朝、先輩からの記念すべき250回目の告白の台詞が、まるっきりこんな感じだったな。

つまり、この健一の“告白”にダメ出しされるという事は、美雪先

輩もダメ出しされてるって事になるわけだ。

「え〜〜、 “愛の逃避行” とか、今時使わないよ？」

「うっ……………」

「それに捻りを入れるんなら “一緒に愛を探しませんか？” 的な、大袈裟過ぎるくらいのほうがいいと思うんだけど？」

「あう……………」

「中途半端なんだよねえ…………… 逃避行って、逃げるわけじゃん？ 意味不明だし、それくらいならむしろ “好きです！ 恋人になって下さい！！” って、ストレートに伝えた方が、相手も思わずドキッとするんじゃないのかな？」

「……………」

健一も美雪先輩も、言葉も無いって感じだな。
まあ井芹先輩が言わんとする事はよくわかる。

「例えば…………… うん、そうだね。相澤くん、キミが好き。私とお付き合ひしてくれないかな？」

「うおうっ！？！？ いきなし俺かつ？ ってか演技っすよね！？？」

「そっだよ。どうかな、私の告白は？」

不意打ちされるのは嫌いだけど、やっぱしストレートな告白ってのは、誰であれ嬉しいな。不覚にもドキッとしたよ。

「ユ、ユキは渡さん！！」

「だから見本なんだって。それともう一つ、これは少し変化球でやってみるよ。…………… 相澤くん、私と遊園地デートしてくれないかな？ なんだか、妙にキミの事が頭から離れないんだ」

「あ〜〜、確かに “愛の逃避行” よりもはるかに良いですね。受けたこっちももしかして、俺の事が好きなんじゃ？ って気になります

し」

俺としては、ストレートに告白をしたいしされたいが、変化球の告白ってのも、意外と有りだな。

「ユキは渡さん!!」

「だからあ、あくまでも参考なんだってば!」

呆れ顔の井芹先輩。俺とて、“参考”で好きにはならねえよ。美雪先輩、K（空気）Y（読め）。

「さつてと、参考になったかな?」

「うむ、実に有意義だった!」

「勉強になりました!俺の持てる知識と参考を元に、今度、もう一度告白させて下さい!!」

健一はめげないなあ。つか、これはひよつとしなくても美雪先輩に入れ知恵する結果になっちまったんじゃないかねえか?

「アッハハハ!おおしまくんだけ?いつでもいいよ、頑張って私をときめかせるような告白を考えてみてね〜」

大川なんだけどな、まあどっちだっていいか。だって健一だしな。

22・落としものは……………（前書き）

新キャラです。今後バンバン登場する機会のあるキャラです。

22：落しものは…………

毎度恒例となつた綾館姉妹の我が家（部屋）襲撃、そして変態らしい“ド下ネタ”の告白も251回目の玉砕となつた今日は火曜。
ちなみに今日の告白台詞は――

「ユキ、一糸纏わぬ私の身体を見たいとは思わないか？ いや、いつそ今日は初夜――」

もう恋人関係以上を望んでいらつしやる。あくまでも俺と変態先輩は“友達関係”でしかないのだから、それはもう丁重に「黙れ！ 年中発情女っ！！」と、お断りさせていただいた。

羨ましい奴……………なんて思う人もいるかもしれないが、俺は彼女でもない女の裸を見て喜ぶほど、まだ落ちぶれちゃいない。

まあ早朝はそんな感じで、これまた勝手知つたるなんとやら……………
みたいな感じのリリナ先輩の手料理に舌鼓を打たせて頂いた。

ちなみに両親だが、昨晚父親は単身赴任として地方へと戻り、母親はまだ夜も明けぬうちから香港へ。

そして、妹と二人つきりになつた我が家は、相も変わらずな日常に戻つた。

妹に見送られ、俺と綾館姉妹の三人で登校する風景も最近は当たり前のようになり始め、学校へ到着するや否や、井芹先輩に強制連行されていく美雪先輩と、その後を追うリリナ先輩。そんな光景に笑みが零れつつ教室へと入れば、これまた変わらぬ面々からの、普段通りの挨拶を交わす。

学校での一日も終え、今日は生徒会へと出向していく美雪先輩に帰りの挨拶を済ませ、家へ帰る。

家に帰れば家事を済ませ、夕飯の支度。

全ての家事を熟し終えた頃には妹も帰宅し、ぼろくその評価を得た夕飯を済ませ、何気なく開いた冷蔵庫を見て気付く…………。

（…………食料が無え…………）

最近、我が妹君の食欲は俺の倍ほどある。故に食料の消費も早いんだが、まさかこれほどとは…………

「凜、買い物に行くけど何か欲しいものあるか？」

「ん、特に無い」

ほお、珍しい。

ま、それはさておき買い物行くか。

学校とは逆方向にあるスーパーへは、徒歩10分と近い。しかし、

俺は自転車で行く。何故？ママチャリは前と後ろにカゴがついてるから楽！という理由だ。

適当に肉・野菜・魚介を買い物カゴに詰め込み、日用品云々に目を配りながら、レジで精算。

チャリカゴに買った品物を入れ、いざ帰宅！といわんばかりにチャリをこぐ。

まあこれといった問題も無く、普通に家に帰り着くんだろうなあ……なんて思ってた矢先だった。

「なんだあれ？」

スーパーへ行く時には無かった黒い塊が、歩道を遮るように横たわり、時折車道を走る車のライトに照らされている。

近づくに連れ、その黒い塊はぼんやりとした姿を明確にさせ、5メートルほどまで近づいた時、俺はようやく気付いた。

「だ、大丈夫ですか!？」

ボロボロに破けた服、汚れや傷、滲んだ血。黒づくめの服から覗くそれは、間違いなく人間の女性だ。

擦れたり切れた傷跡、ボロボロに破けた服はとても痛々しく、その痛みのせいかわびかけにも反応しない。顔の近くに手を持っているけば、はつきりとわかる息遣い。おそらく気を失っているようだ。

救急車を呼ぼうと思い、携帯に手を伸ばして、気付いた。

女性の羽織っている黒い服は、丈がやけに長く、様々な刺繍が施されている。

俗に言う“特攻服”というヤツだ。すなわちこの女性は、暴走族という類に属する人らしい。

「下手に通報するのはやばいかもな……………」

独り言を呟きつつ、抱え上げてみれば、意外と軽い。このまま道にホツとくのも気がひけるので、おんぶ状態で自転車を押しつつ、とりあえず家に連れていく事にした。

「……………えらく珍しいものを拾ってきたみたいね」

「馬鹿言つてねえで手伝つてくれ！」

帰宅早々の俺に、妹は顔色一つ変えない。とりあえず気絶してる女性をリビングのソファに寝かせ、俺は食料をその辺に起き、濡れタオルやら薬箱やらを取りに行く。その間に凜は台所へ行き、コップに冷蔵庫でキンキンに冷えた水を注いで、女性の元へと持っていき。いや、気絶してる人間が飲むわけ無えだろって……………

バシャッ！！

「って何やってんだお前えええつつ！？！？！？」

あろう事か、冷水を女性の顔にぶっかけやがった！！

「う、うう……冷たい……」

「あ、気付いた」

そりゃ気付くだろうが、荒いよ凜……

「大丈夫っすか？」

「ここ……は？」

「俺ん家っす。本当なら救急車呼ばうと思ったんですけど、その格好じゃ、呼ばないほうがいいと思って。あ、俺は相澤由希です」

状況が把握できねえんだろう。まあ無理もない、目が覚めたら知らない人ん家にいました。だもんな。

「……悪い、手間かけちまったようだな。アタシはもう大丈夫……」

ドタンツ！

「だ、大丈夫っすか！？」

「だ、大丈夫……っ！？」

バタンツ！！

どうやら相当ダメージが残っているようで、足元が覚束ないようだ。フラフラと立ち上がる事は出来ても、歩く事はままならない。

「無理しないほうがいいっすよ、今日は泊まってって下さい」

「アホか！腐っても“獅子神”の総長やってんだ、これ以上弱みなんて見せられねえ……」

「……ユキの言う通りにしたほうがいい。そんな状態で出ていく

なんて、無謀……」

凜が俺の意見に賛同するのは珍しい。まあそれくらい身体が弱ってるんだとわかるのだろう。

つか“獅子神”って何だろうか、暴走族のチーム名か？

「無謀かどうかはアタシ自身で決める！他人にとにかく言われる筋合いは無えっ！！」

「……威勢がいいのは認めますが、弱ってる人間を見過ごす事は、俺には出来ねえんすよ」

「アタシは弱ってねえ！！！！」

強情っ張りだなあ。

「たまには他人に甘えるのも覚えたほうがいいんじゃないすかね？意地を通すのも結構ですが、そのうち身を滅ぼしますよ」

「うるせえ！」

あーもーしゃあねえなあ……

「……ガタガタぬかすな、あんたがどうなろうと知ったこっちゃねえが、そんな身体で外に出て、もしもの事があったら、なんて考えたら、こっちの目覚めも悪いんだよ」

「な、なっ！？」

「別に恩を売るつもりも無えし、返してもらうつもりも無えよ。あんたは俺らを疑ってるみてえだが、俺はあんたを疑っちゃいねえ。人はもちつもたれつで生きてんだ、俺はあんたが倒れてたから助けた。ただそれだけだ、他意は無い」

昔っから、俺達兄妹は両親が多忙の身で、いつも二人っきりだった。

それに、周りから支えられて、今の俺達がある。だから他人であっても、ほっとけないんだ。

「今日一日ゆっくり休んでくれれば、それでいい。うちは両親が仕事でいないから、気兼ねする必要もないし」

「……………ま、待て！アタシは見ての通りの人間だ。アタシがお前ん家に泊まってる姿を誰かに見られたら、お前らに迷惑が掛かる」

ま、確かに暴走族を家に招いた……………なんてのは、初めての経験だな。

「俺はあんたを担いで来たんだ、今更だ。なあ？」

「……………風評で困るほど、私達は弱くない」

凜の言う通りだ。

「……………ありがとう」

あれだけ威勢のよかった声は小さくなった。けど、どこかすまなさそうに、そして嬉しそうな女の人の声。ボロボロになった衣服でも、汚れや擦り傷の付いた顔でも、恥ずかしそうに笑ってくれたその顔は、何故だか綺麗だった。

23：走り屋と暴走族の違いがわからねえ……………（前書き）

短めです。

23：走り屋と暴走族の違いがわからねえ……

多少強引ではあるが、俺は拾ってきた女の人を家に泊める事にした。んで、あまりに汚れてたんで風呂に入ってもらう事になり、妹が着替えやら寝床の準備をする中、俺は食事の準備に取り掛かる。

彼女が家に泊まる事が決まった瞬間、これまたきれいに聞こえたんだよ、腹が鳴る音が。

「お風呂ありがとう」

「飯、出来てますよ」

買い出しに行っただけなので、材料には事欠かない。口に合うかどうかは定かじゃないが、とりあえず焼き豚チャーハンとワカメスープ、それにサラダを作ってみた。

「い、いただきます！」

お口に合うといいんだが……

「……………美味い！」

よかった。あゝホツとしたよ。

よほどお腹が空いていたらしい。チャーハンを食べる手が止まらない。

ものの数分で――

「ごちそうさま！美味しかった！！」

完食。お粗末様でした。

「ユキ、焼き豚を入れた分、塩はもう少し抑えたほうがいいと思う。ワカメは火を通し過ぎ」

凜、お前、1時間前に飯食ったよな？

「……次から頑張ります……」

「あ、アタシはちょうどよかった！」

妹君の酷評をフォローしてくれてんだな。でも、慣れてますから……。

飯を片付けた後で、女の人から自己紹介された。

名前は獅子神紗姫ししがみ・さきといって、年は18歳だとか。地元で30人ほどの仲間で“走り屋”をやっているとか、名字がそのままチーム名になってるとか。

んで、今日は隣のチームと乱闘したとかで、背後から木刀で殴られて、その後は袋叩きにされたいらしい。あの場所にいたのは無意識のうちに、だそうだ。

ちなみにだが、現在獅子神さんは、俺のTシャツとジャージを着ている。下着は凜から借りたが、服は妹のサイズが入らなかった。

だって、身長が176ある俺とあんまし変わらないから。汚れた顔の時は気付かなかったが、輪郭は逆玉子型で、目付きは鋭い感じの“キツメ美人”だ。風呂に入っただ、綺麗に櫛で梳かれた栗色のショートカットな髪型が、実によく似合っている。

Tシャツ姿だからそこまでは感じないのだが、走り屋をやっているのが勿体ないくらい、スタイルが良い。

「いや、今日は本当に助かった。まだきちんと礼も言ってなかったな。本当に、ありがとう!!」

「あ、い、いやいや！」

さっきまでの強情っ張りが嘘のようだ。素直に感謝の意を言葉にした獅子神さんに、俺のほう慌ててしまった。

あまりに話し込んで（主に俺のお節介について）いたので、夜もだ
いぶ深くなってきた。

獅子神さんは妹が用意した寝床で寝るのだが、準備されたのが、妹
の部屋だった。

「……ダブルベッドだから、広々安心」

「あ、アタシは寝相悪いから床で……」

「大丈夫、私のほうが寝相悪いから」

うん、理由になってねえよ凜。とはいえ、凜は前から“お姉さん”
をご所望だったから、一緒に寝たりしたいのだろう。綾館姉妹が来
る時とかは、何となくご機嫌だったりするからな。

べ、別に悔しいとか、そ、そんなんじゃないんだからねっ！？

ああ……自分で言っ
て不毛だと気付かされた。

番外編：重なる面影……（前書き）

新キャラの“獅子神紗姫”の視点&過去編です。ちょい長いかな？

番外編：重なる面影……

日付けが変わった。けど、眠れない…………。

私、獅子神紗姫は今、初対面の男の家のベッドで寝ている。

ま、まあ誤解のないように言っておくが、男の部屋ではなく、その男の妹の部屋で寝ている。

元々、私は夜型の人間だから眠れないのもあるが、やっぱり会ったばかりの人間の家で一夜を過ごすという理由が、大半を占めているのだろう。

私を介抱してくれた男は、私よりも2歳年下の高校生。切れ長の瞳はどこか私に似てもいるが、お人よしな性格は、私と相反する。

相澤由希……………だっけ、妹からはユキって呼ばれてたな。

私は人と関わるのが苦手だ。小さい頃の記憶だが、顔を合わせれば口論ばかりの両親、学校へ行けば、クラスメイトから陰湿なイジメを受けていた。

絶望の日々を過ごす中で、私は自分以外の人間を信用出来なくなっていた。

イジメに対抗するために覚えた、護身のための空手。絡まれた不良を薙ぎ倒すくらいに強くなった。イジメも無くなった。

けど、同時に周りには私を恐怖の目で見えるようになった。

離れていくクラスメイト、干渉しない両親……………不満ばかりが募る毎日に、私はある日、夜の街に出た。

安っぽいネオンの光、下卑た笑みを浮かべながら男を誘う客引き、夜に輝くホストやホステス・キャバ嬢。全てが見慣れない光景だった。

しかし、夜に活動するのはそれだけじゃない。

街外れの空き地に差し掛かった時、私は不良連中に絡まれた。

下品な連中に虫酸が走る、肩に置かれた手を払うと、男連中は一斉に飛び掛かってきた。

ま、不良なんぞ私にとっちゃ他愛のないもんだ。5、6人を相手にしたが、私は大して殴られるような事も無く、男連中を地に沈めた。もちろん、そこで終わりのはずだった――

「へえ……………あんた強えなあ」

拳に付いた血をハンカチで拭いている最中だった。見知らぬ男の聲が、私に向けられた。

「……………何？なんか用？ああ、もしかしてコレ、あんたの仲間だった？」

外灯下、キャップを深々と被った男にそう言葉を返すと、男は高らかに笑う。

「アツハハハ！いやいや、俺はこいつらみたいなクズとは似て非なるもんだ。俺は剣灘明^{つるぎなだ・めい}、走り屋だ」

剣灘と名乗った男は、そう言った。

なんでも“ソード”という走り屋の代表で、夜な夜な街をバイクで駆けているという。

「暴走族と変わんないじゃん」

「ま、確かに。ただ、俺達にゃルールがある」

他人には迷惑を掛けない・酒無し・薬無し・喧嘩上等！の、暗黙のルールがある。と、そいつは言った。

所謂、硬派な“暴走族”というところだ。

「んな事より、お前、高校生だろ？」

「……関係ねえだろ」

気付きやがった。

「ま、関係ねえな。ただ、親に心配はかけるんじゃないよ」

「てめえにや関係ねえだろっ！！アタシが家にいない事も気付かない、顔を突き合わせりゃ口喧嘩ばっか！学校に行けば、アタシを腫れ物扱いの教師にクラスメイト！！みんな、アタシの心配なんかするわけねえだろっ！！！！」

剣灘って奴の言葉は、私の何かを弾いた。つい、不満と本音をぶちまけた……。

「……お前、名前は？」

「あ？んだよ急に……」

「名前だよな・ま・え！」「し、獅子神紗姫……」

なんでこの時、素直に自分の名前を口にしたのか、今でも不思議に思う。

「へえ、かつこいいな！んじゃ獅子神、ちつとこっち来い！」

言うが早いか、剣灘はつかつかと私に近づいて、手を引っ張った。

「え、な、何だよ、何すんだよ！？」

「ああ、心配すんな！俺は年下なんぞにや興味ねえから」

「心配って何だよ！てか、アタシもてめえなんか興味ねえ！！」

「アッハッハ！お前面白れえな、んじゃ行くぞ！！」
「ひ、人の話を聞けーっ！！！！」

強引な奴だった。ケラケラと笑う剣灘は、他の男とは違う屈託のない笑みだった。だからだろう、口では否定ばかりする私なのに、嫌じゃなかった。

連れて行かれた先は、私が普段よく使うコンビニだった。けど、中には入らずに駐輪場へ。

原付きにチャリが並ぶ中、剣灘が1台のバイクの前に近付いた。

「ホレッ！」

ポイツと投げられた丸い物体を受け取る。ヘルメットだ。

「んじゃ行くぞ！ほれ、乗れ乗れ！！」

「え、え、え？あ、ち、ちよつと待つ！！」

エンジンを掛け、さっさと走りだそうとする剣灘。私は慌てて、彼の後ろに跳び乗った。

「メット被ったか？んじゃ、しっかりつかまってるよ？」

車道に出て、私を乗せて走り出したバイク。ぐんぐん上がる速度に、私は必死になつてしがみついた。

しばらく走っていたバイクのスピードが緩み、そして止まった。

「おら、着いたぞ！」

恐る恐る目を開けた。人気のない山の中のように、私は恐怖で身構えた。

「何やってんだ？そつからじゃ見えねえよ」

は？見えるって？

ザクザクと茂みを掻き分けて、覚束ない外灯を頼りにどんどん上の方へと登っていく剣灘。私も慌ててその後を追い……

「ほら、見てみるよ！」

ぽつかりと広くなった、貯水漕らしき施設のような場所から、彼は指さした。

「……………うわぁ！」

それは今でも忘れない、二人で見た夜景。

外灯や街の看板やネオン、そして、車のテールランプの赤。

「俺、ここの景色が好きなんだよ。綺麗だろ？」

「ま、まあまあじゃん！！」「んだよ、素直じゃねえなあ……………」

照れ隠し。素直に感動してる事を悟られまいとした私の意地に、彼は苦笑。

「……………あ、この場所、誰にも言うなよ？俺だけの秘密だったんだかな！」

「うっくん、どうしよっかなあ？」

わざと、そんな事を言ってみる。慌てる彼が、面白かった。しばらくその景色を見て、ふと思つた事を疑問にした。

「なんでアタシをこの場所に連れて来たの？」

「ん………そういわれりゃ、なんでだろうな？」

「はあ？何それ？」

思わず笑つた。久しぶりに笑つた。そういえば、最後に笑つたのはいつだつたつけ？なんて思つた。

「なんだ、笑えんじゃん！」

「ばっ、バカにしないでよ！私だつて笑うわよ！！」

「アッハッハ！それだけ言いりゃ大丈夫だな。お前、なんか死にそうな顔してたからな」

そんなに暗かつたのか？

「ま、元気が無くなつたらまた連れて来てやるよ」

帰るぞ！なんて口にした彼。本当は、まだ帰りたくなくて………。思えば、私は彼に恋をしていたんだ。

ご丁寧にも、彼は私を自宅近くまで送ってくれた。なぜ自宅の前じゃないのか？それは、バイクのエンジン音が、騒音になるからという配慮から。

もらった名刺は、彼の仕事場である整備工場の名前が書いてあつた。

案外近所だという事が、何となく嬉しい。

それから私は、学校帰りにはちよくちよく彼の仕事場である整備工場へと遊びに行ったりした。そこで働く男連中は、ゴツイけど面白い人ばかり。みんな“ソード”のメンバーだという。鬱憤が溜まった時やむしゃくしゃした時なんかは、よく彼のバイクの後ろに乗って、みんなで走った。

そのうち私も、バイクの魅力に惹かれ、まずは原付き・そして18歳の誕生日を期に、中型免許を取得した。これで、みんなと肩を並べて走れる！

嬉しくて、1番に彼に報告しようと思った整備工場……………。

「な、なんだよコレ……………」

黒と白の幕。嫌な胸騒ぎは的中した――

「サキちゃん……………明が、明が……………」

メンバーで1番のクールフェイスの坂巻さんが、歯を食いしばっていた。

「明さんが、どうかしたんですか！？ねえ、坂巻さんっ！！」

受け入れたくない現実。メンバーのみんなが零す涙が、彼の“死”を物語っていた。

「……………屍神”の連中にやられたんだよ……………」

「嘘だ！剣灘さんは、剣灘さんはあんな連中相手に負けるわけないっ！！」

“屍神”は、ソードと敵対する暴走族のチームだった。恐喝・カツ

アゲ・婦女暴行の噂が絶えない、外道。そんな奴らに、彼が――

「坂巻さん！屍神の拠点はどこ！？」

「なんでそんな事――」

「決まってるでしょ！潰すのよっ！剣灘さんが決めたルールに“喧嘩上等！”があるわ！私は許さない……絶対に許さない！」

もう、いてもたってもいらなかった。私は坂巻さんの言葉も待たず、工場を飛び出した。

走っても走っても見つからない。苛立ちも疲労も募る一方の中、大勢のバイクが、私の前に止まった。

「乗れ！明がやられて悔しいのはサキちゃんだけじゃねえんだ、俺らは今から弔い合戦に行く！！怪我也覚悟なら、ついて来い！！！」

坂巻さんだった。そして坂巻さんを筆頭に、ソードのメンバー全員が、揃っていた。

「坂巻さん、みんな……行くぞ！弔いだっ！！！！！」

思えばこれが“獅子神”の始まりだった。

着いた先は、廃工場。

そこに、屍神の連中はいた。

「んだ、お前ら？」

「ソードだよ。…………理由は、分かってるよな？」

「理由？…………ああ、そーいや剣灘って奴をボコッたっけか？あ、もしかして死んじゃったとか？」

『ギャハハハ！……！』

リーダーであろう金髪の男は、悪びれた様子もない。連中から下品な笑い声が上がる。

もう、我慢出来なかった――

「詫びは地獄で言いやがれえ！！！！！」

こっちは十数程度。向こうは50近く。数では圧倒的に不利だった。しかし、数なんて問題にはならない。私達はもう、決死で殴り込みに来たのだ、覚悟の出来た人間に、怖いものは無い。

徐々に優勢になっていく。屍累々とはいわないが、あちらこちらで、戦闘不能になった屍神の連中。

残すはもう、小数の連中とリーダーの金髪だけだ。

「な、なっ！？！？！？」

「テメエらみてえな外道が街にのさばってるたけでヘドが出るんだよ……………」

「ま、待て！」

「謝るのが遅えんだよ……………」

泣いて詫びを入れようが、私の愛した人はもう帰っては来ない。今の私を支配しているのは、怒りのみ。

転がっていた鉄パイプを拾いあげた私は、腰をぬかして動けない金髪を見下ろしていた。

「語釈は地獄で並べやがれええつつつ！！！！」
「ひ、ひいい！！！！！！！！」

鉄パイプを振り下ろし、奴の頭は血だらけになる……………はずだった。
ガシッ！！

「なっ！？」

しかし、すんでの所で鉄パイプは金髪の頭上で止められた……………。

「……………やめとけ……………」

「なんで……………なんで止めんだよ坂巻さんっ！！」

鉄パイプの先端をしっかりと握っていたのは、坂巻さんだった。

「悔しくねえのかよ！？アタシは、アタシは……………っ！！！！」

「悔しいに決まってるだろ！殺してやりてえよっ！！けどな、これを振り下ろした瞬間、お前はこいつらと同等になっちまう！！あいっは……………明は、そんな事を望んじやいねえんだよっ！！」

ポタリ……………ポタリ……………坂巻さんは、泣いていた……………。

「つく、うう……………」

「……………帰るぞ」

だらりと力無く垂れた手から、鉄パイプが音を立てて地面に転がった。

そして、私を支配したのは怒りでも悔しさでもなく……………哀しみだ

った。

坂巻さんに優しく諭され、私達は呆然とする金髪を尻目に、廃工場を後にした――。

柄にも無く、過去を思い出した。

あれから数カ月、私は坂巻さん以下、メンバーのみんなから誘われて“獅子神”としてチームを立ち上げた。“ソード”から“獅子神へと”名を変えても、私達のルールである（酒無し・薬無し・喧嘩上等！）は、今も受け継がれている。

いや、それだけじゃない。私は他にも、剣灘さんから受け継がれた物がある。それは、彼の愛車と特攻服。^{バイク}

そして、私だけじゃない、メンバーのみんなが、彼の意志を引き継いでいる。

つい数時間前の出来事、私は屍神の残党に襲われた。鉄パイプに木刀、凶器になる物で散々に痛めつけられたが、レイプ紛いの事にならなかっただけ、マシだったのだろう。

走りが出る前に徒歩でコンビニに寄る途中だったから、おそらくバ

イクも無事。とはいえ、身体はボロボロだった私は、なぜあんな所に居たのだろうか？
不思議でしょうがない。

……………なぜ過去の事を思い出したのか、今、何となく分かる気がする。

切れ長な瞳や年下って所、それに彼とは違ってお調子者って感じはなくても、どこか似た“強引”な所は、彼の面影を見せた……。

「相澤由希……………か……………」

規則正しい寝息を立てている女の子を片目で見ながら、私は強引だけれどお人よしな、家主の名前を口にした。

24：襲撃！困惑？変態さんと獅子神さん

「な、誰だお前はああああつつ！？！？？」

朝、耳をつんざくような“誰か”の大声で目が覚めた。時計は午前4時を過ぎたばかり、起きるにはあまりに早過ぎるが、我が家で起きているであろう現状を確認するには、ベッドから出て、声の聞こえた方向へと足を向けるしかない。

んで、足を向けた先はリビング。するとそこには……………

「あ、ユキ！誰だこの女はっ！！」

「この女だと？てめえこそ誰なんだよ！？」

あ、忘れてた。そいや昨日、獅子神さんを家に泊めたんだっけ。…………それはそうとして、綾館姉妹よ、やけに今日は来るのが早いな、そしてどっから侵入した？

「ユキ「相澤！」」

なんでハモる。

「「こいつは誰だっつ！！？？」」

なんか似てんな、二人とも…………

「はぁ……………先ずはこちらから、俺の高校の先輩で、綾館美雪さん、そして勝手に台所で料理を作っているのが、美雪先輩のお姉さんの、リリナさんです」
「……………よろしく」

なぜ反抗的な目をしてるんだ先輩。

「で、こちらが昨日知り合った、獅子神紗姫さん」
「……………ども」

だから、なぜ反抗的な目をしてる？そしてなぜ睨んでんだ！？

「ユキ、私は納得出来ん！なぜこの女はユキの服を着てるんだっ！？」

「しゃーねーだろ！替えの服を準備してコンビニに行くバカなんていねーよ！！だいたい、こんな朝早くから人ん家に来るなんて非常識だろがっ！！」

「なんだとっ！？」
「んだコラ！？」

売り言葉に買い言葉。手が出てない事（乱闘）自体が、不思議だ。ただ、一触即発って感じではあるが……………あんまり騒がないでほしい。まだ日も昇ってないし、妹が心配だし……………

「あの「先輩」って立場を利用して図々しいんじゃないか？これじゃ相澤が迷惑してんのが目に見える」

「騒がな「図々しい」のはそっちだろが！昨日知り合ったばかりでいきなり泊まり！？常識知らずが！！」

「ちよつ、マジで騒がな」「ユキ」相澤は引ッ込んでろ！」「て！」

……ブチッ……

「黙れボケ共があつ！さつきから騒がしいつつてんだろぅがつ！
！こっちは寝足りない上に妹がキレないか冷や冷やしてんだ！近所迷惑も考える！！！！！」
「「……ごめんなさい」「

つたく、ちつたあこつちの身にもなれ――

「お前が1番うるさいんじゃないやボケユキがあつ！！！！！」

ドフッ！！（背後から脇腹を蹴られる音）

荒神（凜）様、降臨。

「「ヒイツー！！」「

般若顔負けの形相で俺の脇腹を遠慮無しに蹴った凜に、美雪先輩・獅子神さんの両名は恐怖で顔を引き攣らせる。

「あら、みなさんどうなされましたか？」

料理を片手に、リリナさんはマイペースを崩さなかった。どんだけ

料理に集中してんだよ……………

ま、何となく恐怖から蟠^{わだかま}りも落ち着いた綾館妹・獅子神の両名は、対面に座る。俺の隣に座った獅子神さんに、美雪先輩が睨みを利かせているのは気のせい……………だと思いたい。

本日リリナ先輩が用意したのは、焼きたての自家製食パンと、契約農家から貰ったという有性卵のスクランブルエッグ、そして無農薬栽培のイチゴから作ったというジャムに、出来てから1時間と経過していない手作りバター、そして青野菜のサラダ。

最近、ホントにリリナさんに朝食を作ってもらってばっかだなあ俺。しかしパンを焼いてくるなんて、どんだけすげえんだリリナ先輩！

と、全て金では買えないような、とても美味しくて体にも優しい朝食を堪能した一同。

「ごちそうさま！」

「ごちそうさまでした」

「美味しかったです、リリナ先輩」

「美味しかった！ごちそうさま！！」

「お粗末様です！」

リリナ先輩、毎度謙遜しているが敢えて言わせてほしい。

お粗末なんかじゃない！！

「さあて、夜も明けたし、アタシは帰るよ。相澤、ありがとな！この服、洗って返しに来るから」

「またいつでも来て下さい。基本的に、夜は家にいますから」

一言二言を交わし、獅子神さんは家に帰っていった。………つと、そっぴや綾館姉妹はなぜこんなにも朝早くから我が家に来たんだろうか？

「んむ、実はだな、まだ夜も明けきれぬ内にユキの部屋に侵入し、添い寝して既成事実を作ろうと思ったのだ！それに、今日はノーブラだぞ！！興奮するだろう？せつかくだ、見るか？」

「見ねーよ！シャツ捲るな！！」

「あら、じゃあ私の方を見てくださいか？」

「だから見ねーよ！シャツ捲るな！変態姉妹があつ！！！！！」

ああもう！收拾つかねえ……………しかもリリナ先輩が、完全に変態先輩に毒された！！

やべえ……………変態先輩が二人に増えた。一人でも手をやいてるつつのに！！！！！！

25：嫉妬してます変態さん

早朝の一件（獅子神さんの事）で、今日の美雪先輩のアピール度ならびに愚痴・説教・密着度が、いつもより倍増した。

「私はユキ好みのスタイルを維持しているし、胸だって………見るか？」

「見ねーよ」

「では私の胸「だから見ねーよっ!!」」

ますますリリナさんが変態化してゆく………ああ、もう。

「だいたいユキが悪い！あんなどこの馬の骨ともわからんような女を家に招くなど!!」

「……じゃあ、怪我して道端で倒れている人をほっとけと？」

「うつ……だ、第一、あの服はなんだ！特攻服というヤツだろう！？不良じゃないかつ!!」

「獅子神さんは悪い人じゃないですよ」

「ユキは人が良すぎるのだ!!」

なんやかんやと喚く美雪先輩。ま、人が良いと言われるのは、想定範囲内だが。

「その人の良い俺ん家に、勝手に不法侵入するような美雪先輩には言われたくないですね」

「む、むう………」

リリナ先輩は悪くねえよ。勝手じゃあるが、料理作ってくれるし。問題は一利も無い美雪先輩だ。

「ともかく！見知らぬ女を家に泊めたりするのは許さんっ！！」

有無を言わせぬ口調でそう言う美雪先輩。

なんか言い返そうとした俺を察してか、リリナ先輩は美雪先輩が俺から顔を背けた時、小声で――

「ヤキモチを妬いてるのですよ」

と言った。勘弁してくれ、俺は彼女でもない美雪先輩から、なんで嫉妬されなきゃいけないんだ。

「ま、そりゃ相澤が悪いよ」

「なんで？」

「だって、考えてもみなよ！綾館先輩の相澤大好き！！つぷりは、今じゃ学校公認じゃない！」

「公認した覚えは無えけどな」

教室に入り、隣席の如月に今朝の出来事を話している最中である。俺の気持ちを理解してくれるだろうと思っていたんだが、どうやら舞ちゃん（って本人に言ったら殴られる）は“美雪先輩”側らしい。

「見ず知らずの女の人相澤ん家に居た、ってなったら、そりや美雪先輩も焦るだろうし、下手な勘繰りだってするもんじゃないの？」
「そんなもんか？」
「そんなもんよ」

やれやれ、女心はよくわからん。

昼休みである。綾館姉妹を含めたいつものメンバーで昼食中、今朝の一連の出来事から話が派生し、話題は“好きな異性のタイプは？”へ。

「タイプ？愚問だな、私のタイプはユキに決まっている！！」

美雪先輩はいつも通りだな。ま、まあ嬉しくないわけではないが。

「私は、やはり包容力のある殿方が理想的ですね」

なるほど。リリナさんのタイプは包容力のある人か。ってか、包容力ってなんなのだろうか？

「私は年収が五百万以上で、職業は公務員で、身長は170以上で、優しくてかつこいい男……かな」

容姿はともかく、えらくリアルだな如月……。見ろよ、男連中（俺含む）を。

「……」

「な、何よっ!？」

リアル過ぎるのはドン引きしちゃうんだよ。

「むにゃ……アキ（秋斗）が好き……んにゅ……」
「っ!？」

結城は寝言で大胆告白!って、すげえ動揺してるなアキ（河南秋斗）。

「お、俺は……さ、皐月が、り、りり理想だ……」

うわーお!ー!河南も大胆ってか、噛みすぎだろ。だいたい、河南と結城は二人でワンセットだし、二人が付き合ったとしても、なんにも変わんねえ。

「俺っ!俺は可愛い女の子なら、誰でもいい!ー!」
「……………」

毎回思うんだが、誰か大川健一^{バカ}にKYという言葉を教えてやってほしい。俺?こいつに説くような優しさは無えよ。

「さつて、湊^{みなと}はタイプの男つて、どんな感じだ？」

ある意味、1番謎だらけなメンバーの湊奏。寡黙であんまり喋らないから、プライベートは全くの皆無。

「……………男に興味ない」

……………

……………

……

は？

「……理想は、可愛くて身長の低い妹みたいな女の子……」

……踏み込めねえ！！こ、これって俗に言う――

百合かあ！！

25：嫉妬してます変態さん（後書き）

おかげ様で、お気に入り30件を突破致しました！！
PVも2万を突破し、嬉しい限りです。よろしければ、感想・評価
もお願いします。

26：再び登場

美人で美声を持つクラスメイトからの爆弾発言は、うちらメンバーはおるかクラス全体をざわつかせた。

「ま、まあ誰が誰を好きになろうと、それは当人の嗜好性の問題であり、第三者となる私達が――」

美雪先輩の口調から、動揺が隠せてない。ま、そりゃそうだな。俺でさえビクビクしてる。

「……………他者から理解してもらうつもりは無い……………ちなみに、今狙っているのは由希の妹……………」

こ、こええよ湊っ！！！！つかなぜ凜を知ってる！？

「……………この前街に本を買いに行った時、私がナンパされた……………偶然通りかかった凜ちゃんに助けられた……………惚れた……………」

フラグ立てとる！！

「……………華奢で可憐なイメージとは裏腹に、身の丈が倍近い男を薙ぎ倒す強さ……………惚れた……………」

“惚れた”は2回聞いたよ。

「万々歳じゃないか！！」

「どこがだよっ！！」

自分の事しか考えない“万年発情色ボケ女”めっ！！

色々と衝撃的な昼休みから3時間後である。学校も終わり、家が視界に映り込んだ矢先、うろつろと家を窺うような人影が見えた。

服装とかは遠くから見ると限りではまともでも、その挙動は完全に不審者だ。

しかしまあなんとというか、近づけば近づく程、その不審者に見覚えが――

「あつ！相澤っ！！」

黒い半袖ジャケットに、真っ白なインナー。タイトな黒いジーンズに身を包んだショートカットの女の人が、俺を見つけて声を掛けてきた。

「――あ、獅子神さんっ？」

昨日、我が家で一夜を過ごしたツリ目美人の獅子神さんだった。

「き、昨日から借りていた服を洗ったから返しに来たんだ！」

「ああ、別に返さなくてもよかったのに」

「そうはいかん！恩というのは、キッチンと返さないと罰が当たるものだ！それに、私の信条に反する！！」

なかなか硬派なお方である。

「ま、せっかくですから家でお茶でもどうですか？客人をもてなさずに返すのは、我が家の“家訓”に反しますので」

「アッハッハ！こりや嬉しいお誘いだ。んじゃ、お言葉に甘えて……」

意外と冗談やユーモアにも長けた人のようである。

家訓というのは嘘だが、お人よしな俺を察しての事だろう、昨日の事もあるし、すんなりお誘いにノツてくれた。

昨晚の特攻服姿とは打って変わって、私服姿の獅子神さん。モデル顔負けなスタイルの良さと、露出した手足の細さは、決して“走り屋”の総長をやっているとは思えない。

そんな事を考えながら茶を淹れて………あ、我が家のキッチンに知らない調味料やらお茶やらが増えてる。リリナさんだな。

「どうぞ。あ、これは即席ですが……………」

我が家の粗茶と、買い置きしていた芋羊羹いもようかんをパツとアレンジしたキンツバを差し出す。

口に合えばいいが……………」

「ありがとう。……………んん、美味しい!」

あ、よかった!

余談だが、妹は生クリーム系の洋菓子。俺は小豆餡系の和菓子が好みである。

「即席と言ったが、これも相澤が作ったのか?」

「作った……………という程の事でもないですが」

キンツバを作るのは、意外と簡単である。市販の羊羹に、小麦・片栗を混ぜた混合粉を水で薄く溶き、それを羊羹に浸け、熱したフライパンで焼く……………ただそれだけ。

「へえ……………そういや“あの人”も、和菓子が好きだったなあ……………」

「“あの人”?」

「ん?ああ……………アタシの初恋の人だよ。もう、死んじまっていないけどなあ……………」

「す、すみません!軽率でした!」

何気なかった言葉は、獅子神さんの心の悲しみをさらけ出していた。「アッハッハ!気にすんなって!」って、獅子神さんは笑っているが、いたたまれない……………。

「ま、今だってアタシの心の中に生き続けてんだ。下手な同情は、かえって相手を怒らせる。だから気にすんな!!」

「は、はい!!」

「ん、よし!!」

諭すような物言いには、一切の影は見えない。こっちとしても、気分が楽になる。サバサバと気さくな感じの獅子神さん、やっぱり良い人そっだ。

「それはそうとして、やっぱりアタシも料理とか覚えるべきだよなあ……」

「しないんですか？意外と何でも出来そうなイメージですけど」

ちとばかり、よいしょしてみた。

「相澤、アタシは人の嘘やお世辞を見抜くのは得意なんだ」

全く通用しなかった。

「ま、まあ誰にだって得手・不得手はあるし……」

「というより、料理をした事が無い」

そっちなか！って事は、この人も実家は金持ち――

「うちは共働きで、メシの代わりにお金が置いてあったから、だいたいコンビニかファミレスが主だったんだよ」

共働きか。俺ん家と似てるな。

「ま、そこに料理を作るって考えが浮かばなかったんだ。ただアタシも来月には19になるし、いい加減、料理くらいは覚えたいと思ってるんだ。今更遅いとは、思うんだが……」

「何かを始めるのに、遅い・早いは関係ないんじゃないですか？　ようは当人のやる気次第なわけだと、俺は思いますが」

これは、全ての事に共通すると俺は思う。もちろん“やる気”だけじゃやっていけない事は多々あるが、それでも“〳〵まで”“〳〵くらいなら”なんて気持ちで物事に臨むよりは、ずっと進歩する。

「付け加えるなら、小さな事から目標を定めるのも良いと思いますよ？」

小さな目標ってのは、誰でも簡単に出来るような事だ。例にあげる程でもないが、自分に出来そうな事を最初の目標に定め、それを達成した後、次はそれよりも少し難しい事を目標に………達成すれば、その次は達成したものよりもまた少し難しい事に、ってな具合である。最初から出来そうにもない目標を定めるのは、出来なかった時に「ま、ダメ元だし」という言い訳にしかない。

「理屈はよくわかる。けど、実に解せない……」

「えっ、解りづらかったかな………？」

だいたいは誰でも把握出来るような説明だと思っただけだなあ………。

「妙に言い回しとか説明が上手いんだよなあ………なんか、年下のくせに生意気………」

解せない所ってソコかよっ!？

27：お料理ですか？獅子神さん

外は春から梅雨へと季節を変えゆく。あれほど晴れ間を覗かせていた空も夜が近づくにつれ、雲に暑さが増していた。

そんな時間帯、俺は来客である獅子神さんに料理のレクチャーをしている。

「では、まずは味噌汁を作りましょう！」

「う、うん！！」

俺愛用の黒いエプロンを着用してる獅子神さんは、些か緊張気味である。

「まず最初は、カップに水を注ぎます。今回は――」

材料は俺、妹、獅子神さんの三人分を準備。味噌汁って家庭ごとに具材や味噌が違っただが、今回はオーソドックス（？）に、豆腐と油あげ、ワカメの入った味噌汁を作る事にした。

「んで、沸騰させたお湯の中に、鰹節を投入しましょう」

「は、はい！こ、このくらい――」

「いや、もっとガバツと入れましょう」

「えっ？こんなにっ！？」

ま、驚くのも無理ないか。でも鰹節っていうのはケチらずガバツと大量に入れるのが、旨味を引き出すコツでもある。

「ひと煮立ちさせたら火を止めて、ガーゼで鰹節を漉します」
「ふむ」

熱心にメモを取る所は感心に値する。
が……………

「鍋が吹き零れてますよ！火を止めて！！」

「あ？あぁっ！？」

慌てて火を止める獅子神さん。そういや、メモ帳なんてどこから持
つて来た？

「で、ガーゼを敷いたボウルに移すんだっけ？」

「んあ？あ、あぁ、そうです！」

いらん事ばっか考えてた。今は料理を教えてるから、そっちに集中
せねば。

「次は、ガーゼで漉したスープを再び鍋に戻して下さい」

「んで、次は材料を切りましょう」

鍋にスープを戻すまでは、まあたいした不安も無かったんだが、問
題は包丁である……………あれ？

「なんか、妙に似合ってますね……………」

「そう？鉄パイプとか木刀は持ち慣れてんだけどねえ？」

「あ、あはは……………」

うわぁ……………容易に想像出来るのがまた怖え……………。

「ま、まあワカメを水で戻す間に、豆腐と油あげを一口サイズに切

りましょう!」

「OK!」

添え手やら切り方やらを教え、不安げながらも豆腐から切り始めた獅子神さん。トン……トン……と、ぎこちないのは仕方ない。が、意外と几帳面なのか、豆腐を試しに並べてみれば、肉眼では寸分違わぬキッチリと切り揃えられてる。

「えっと、な、何か問題でもあるか!？」

「ああ、いや、几帳面なんだなあと思つて」

「そ、そうか？」

なんともいえないさそうな表情は、不安の表れだろう。ただ、不安になる要素は今の所無い。

んで、ぎこちないながらも豆腐・油あげを切り終え、水で戻しておいた乾燥ワカメも、適当な大きさにカット。それらを鍋に投入し、今度は沸騰させない程度に火を調整し、味見をしながら味噌をおたまで溶く。

「ん、いいでしょう!」

「……あ、美味しい!これ、私が作つたんだ……」

こういう些細な嬉しさっていうのも、上達を早めるんだよな。小皿で味見をし、嬉しそうに口角を緩ませる獅子神さん。なんか、キツそうな見た目よりも、ずつと可愛い。

他には卵焼き・青菜のお浸し・鰯の開き（自家製）なんかも調理。なんやかんやと悪戦苦闘……というほど、ハプニング的な事は無かったので割愛。

んで、全ての調理を終えてテーブルに料理を並べているさなか――

「ただいまー」

妹君、降臨（帰宅）。

さてと、料理も運び終えたし――

「……お邪魔します」

「ユキ！スウィート・ハニーが帰って来た………あ？」

「お邪魔しますユキ。夕食の準備をお手伝い………あら？」

予定人数分をオーバー。というより……

「なんで湊が！？」

「ユキの友達？この人、面白いから連れて来た」

「……連れて来られた」

白色黒髪寡黙美人、湊が家に来るのは初めてだな。つーか、明らかに妹狙いだろ……

「貴様あ！性懲りもなくユキをたぶらかしにきたのかっ！！」

「黙れストーカー女あつ！！てめえこそ妄想膨らまし過ぎて現実とごつちやになってんだろっ！！！！」

「何いっ！！」

「やんのかコラアっ！！」

ちよつ、美雪先輩やめて！獅子神さんも包丁構えないで！！

そ、そうだリリナさんに止めてもらえば――

「あら？これではお料理が足りませんねえ、予め材料は手配してお

いたので――」

うわぁ……既に別世界にトリップしてらっしゃる。つか、この状況
を俺にどうしろと？

28：変態とツリ目とメイドと百合（ある意味豪華な属性女子）（前書き）

短めです。

28：変態とツリ目とメイドと百合（ある意味豪華な属性女子）

女の子、三人集まりや姦^{かしましい}しい……………なんて誰かが言ってた。

……………わかる気がする。

「だいたい押し付けの恋愛なんか成立するわきゃねえだろバーカ！
！……！」

「はあっ！？お人よしのユキの性格に付け込んで図々しく家に上がり込むような不良に言われたくないっ！！」

変態さんと獅子神さんは、リビングで口喧嘩の冷戦状態である。

「……………可愛い……………お姉さんと付き合わない……………？」

「ユキ、この人面白い」

湊よ、俺の前で妹を口説くのはやめてくれ。いや、というか口説く事自体をやめて下さい。

「ユキ、お食事の準備が出来ました！」

早っ！！つか、喧嘩を諫^{いさ}めるのを優先して！一方は貴女の妹ですよ！！

さて、一方で口喧嘩、もう一方で愛の告白（というか口説き中）の我が家のリビング。
まあ、先ずは――

パソコンッ！パソコンッ！！

「あいたっ！？」

「って！？」

あんまり騒がしいので、アルミ製のお玉杓子で変態さんとツリ目さんの頭を叩く。

「何をする！！」んだよっ！！」

なんでこんな時ばっかハモるんかねえ。

「……黙れ。今すぐ家を追い出されるか、大人しくしてるか……どちらかを決める」

「「うっ！！」」

こういう時、ツリ目ってのは役立つ。いかんせん目つきの悪い俺だから、目を細めるだけで、たいていの人間は黙る……不本意だが。

「どうしますか、お二人さん？」

「「ごめんなさい」」

はい、こっちは片付いた。さてと、問題は妹と湊の方だな……。

「お付き合いって、つまり恋人？」

「……………そう」

「お姉さんは、レズ？」

うわぁ……………どストレートに言っただけだ。

「……………そう」

「……………うん……………」

そう、しか言わないな湊は。つか、凜……………悩むんだ！？

「ごめんなさい。お友達じゃ、ダメ？」

「……………充分」

なんとかこっちは口を挟まなくても大丈夫そうだな。自然に片付き
そう――

「……………友達から……………やがて、恋人……………」

怖い怖い怖い！！！！諦めて湊おっ！！

なんとかギヤーギヤーとした騒ぎも落ち着いた（別の問題は保留）
ので、夕食だ。両親を含め四人家族の我が家において、8人用テーブルという無駄な家具が役に立つとは思わなかった。テーブルには獅子神さんが作った料理とリリナ先輩の作った料理が並ぶ。

「では！」

「いただきます！」

「いただきます！」

「い、いただきます！！！」

「……………いただきます！」

各々が一様に手を合わせて、席前に並んだ料理に箸を付けた。

さて、反応はどうだろうか？

「ん、今日も美味いぞユキ！」

「……………（コクリ）……………」

ふむ、変態先輩と湊に出したのは獅子神さんの作った料理だが、反応は良い。

さて、俺も一口……………ん、美味しい！

「塩加減は上々、鯖の脂乗りもちょうど良い」

「こ、これ、美味すぎないか！？」

さすが鋭敏な味覚の持ち主の凜。獅子神さんの反応、初めてリリナさんの飯を食べた時の俺と同じ反応だな。ま、リリナさんは高校生（？）だが、本職は現役メイドだからな。素材も良いが、味をきちんと引き立てる腕前を持つてる。

美味しい食事を摂れば、自ずと幸せな気持ちになるのが人間だ。あれだけギャーギャー言い争っていた美雪先輩と獅子神さんだが――

「むうう……………悔しいが美味い！」

「あ、ありがとう……………」

素直に美味しいと認めた美雪先輩もそうだが、威張る事無くきちんと「ありがとう」と返した獅子神さんも、立派だ。

……………飯食い終わったら、またギャーギャー言いそうな気はするが。

まあそれは食事中には起こらないだろうが、問題は――

「……………ご飯も美味しい……………でも……………凜ちゃんの方が……………もっと……………美味しそう」

湊、食事中に妹をナンパするのはやめろ。なんかキャラが崩壊してるぞ！

28：変態とツリ目とメイドと百合（ある意味豪華な属性女子）（後書き）

書いてるうちに気付きました。

「あれ？湊奏のキャラが崩壊してないか？」
と。

湊奏は、寡黙で色白なミスティアス美人……というのが、私の中での設定だったのですが、いつの間にか「百合っ娘」になったり、滅多に喋らないはずだったのに、途切れ途切れながら長い台詞を喋ったり。

正直、ブレすぎ。

ただ、まあ……ユキの周りの女の子で唯一のまともキャラが如月舞だけになったりと、全体的に濃いキャラばかりに。

こんなキャラをいかに活かせるかが、今後の私の目標になってます。以後も精進致します。皆様、これからもよろしくです！

29：お泊りですか？変態さん

夕食を済ませ、獅子神さんと湊は帰った。

現在、我が家に居るのは俺・妹・綾館姉妹の4人。時刻は夜9時を過ぎているにもかかわらず……

「ユキ、良い湯加減だった！」

「ユキ、明日の朝食の下準備は済ましておきましたわ」

綾館妹は勝手に人ん家の風呂を浴び、綾館姉は、勝手に台所で下準備を済ませている。

明らかに、帰るつもりは無いらしい……さて、明日も学校だが、どうしたものか？

「……先輩、何故勝手に風呂に入った？そして何故、俺の私服とおぼしきジャージを着ている??」

「着替えを持って来ていないからだっ！！！！」

吠えるほどの事じゃないと思うのは俺だけだろうか？だいたい、さも当然といった雰囲気醸し出されてもこっちが困る。

「まあユキがどうしてもというのであれば……」

お、やっと帰る気になったか？

「そんなに私の裸を見たいとは——」

「有り難く俺のジャージに包まれて下さい！！」

そうだった！奴（美雪先輩）は変態だ、思考回路が常人とは違うの

だ。

「ユキ、お風呂いただきました」

いつの間につ！？つかなぜにリリナ先輩も俺のジャージを！？

「凜ちゃんから借りました」

「…………貸した」

敵は身内に居た。姉妹共々、完全に泊まる気だ。

「ユキ、夜も深いのに女の子を外に放り出すのは、男として最低な事だと思う。もちろん、私の兄であるユキは、そんな事をしないだろうと私は確信してる」

「うつ！？」

妹君は遠回しに“お前はそんな非人道的な事はしないよな？”と言っているのだ。今までは妹を論破せず、先に折れる形をとっていた俺だが、今回は話が別だ。論破出来ないのだ。妹が正論だから………。

「「ユキ」「」

「…………手狭ですが、泊まってって下さい……………」

午後11時。

俺のように家事全般を一人で熟す人間にとって、睡眠時間というのはとても重要なものである。

しかし――

「ユキ、ユキ！今度は――」

美雪先輩が、眠る事を許してくれない……。

我が家ではあまり使用しない家庭用ゲーム機“P〇3”で対戦ゲームにハマっている美雪先輩。こういうTVゲームを全くといってした事が無いらしいから、無理もないのはよくわかる。だが、時間帯を考えてほしい……。

「美雪、あまりユキを困らせてはいけませんよ？」

「むう……」

ありがたい！リリナさんから助け舟が！！

「土曜日にでも、ゆっくりゲームをすれば良いではないですか」

つまり、土曜日にまたお泊りだと？

「うむ、姉様の言う通りだ！ユキ、土曜日の午後から宿泊を希望する！――」

「あいにく当館は予約の受け付けは致しておりません。ってか、こっちの都合は無視か？」

「ええっと……ユキはこの先一週間の間に、家を空ける、もしくは外泊・旅行のご予定は無いみたいですが？」

俺のプライベートが筒抜けだとう！？！？そしてどこからメモ帳を取り出したんだリリナさぁーん！……！！

「私が教えた」

やっぱりお前かマイ・シスター！……！！！！

午後11時30分。

さて、いつも10時くらいで寝る俺にとっては、けっこう遅い就寝時間にな——

「なぜ俺のベッドに居る！？！？」

音も無くマイベッドに潜んでやがった、言わずもがなの美雪先輩。

「ユキの匂いがある………はぁはぁ………」

「出ていけド変態があっ！……！！」

流石だ。やつぱり変態は言う事が違う！！……………って、俺ってそんなに臭うのか？

「だいたい客間にお蒲団敷いてたじゃないですかっ！」

「馬鹿者！好きな男の子の部屋に忍び込んで一緒にイチヤイチャするのはお泊りの定番じゃないかっ！！」

「そんな定番無えっ！！」

…………… ああ、誰だこの変態に余計な事を吹き込んだのは。

「減るものではないじゃないか！！」

「減るわっ！俺の精神と理性がっ！！」

いくら変態であろうと、美雪先輩は美人である。これは認める。美人であるからこそ“間違い”が起きる可能性だってあるわけだ。

口では先輩の告白に対して否定ばかりを並べる俺だって、好きだと言われて嬉しくないはずはない。

だからこそ、理性が本能に負ける可能性だってある。朝起きて「昨晚は激しかった」なんて言われた日にゃ、俺は全責任をとらなければならぬ。

「ほう、少しは私も女として意識してくれている……………と？」

「そりゃ、ね」

悔しいが、それも認める。俺が先輩に対して踏み留まっている理由が、彼女のぶっ飛んだ思考。これがもし、品位も恥じらいも良識も備えた思考性であったなら、俺は間違いなく、美雪先輩を彼女に迎えていただろう。

「やれやれ、今回ばかりは退散しよう」

おっ？意外にもあっさりと退いてくれたな！珍しい事もあるものだ。

「ふふつ、珍しい事もあるものだ………なんて思っているような顔だな」

あれ？俺って顔に出やすいっけか？

「ユキに意識してもらえた、そんな他人には些細かもしれない事が、私は嬉しいのだ。強引にでも一緒に寝間で共に一夜を過ごしたいという気持ちはあるが、不粹な事で、せつかくの幸せな気持ちを壊したくないからな」

「おやすみ！また明日」と、美雪先輩は言葉を添えて部屋を出た。不覚にも美雪先輩に見惚れたのは、秘密の事。己の理想に“妥協はしない”と言った。けど、破天荒で言動や思考がぶっ飛んだ美雪先輩が時々見せる“まともな言葉や表情”は、俺の意志を揺るがせる。

拒み続け、早く先輩にも俺以外の好きな男が出来ないかな？なんて今までは思っていたけど、その行動自体が、間違いだったんじゃないのか？なんて考えている内に、意識は薄れていった――

30：梅雨入りと不運の予兆

朝が来た……時計を見て驚いたのは、6時にセットしていた目覚まし時計が解除されていた事と、既に朝の7時を過ぎていた事。

「おはようございますユキ。差し出がましい事とは思いましたが、目覚ましは解除されていたきました！」

「な、なぜ？」

慌てふためく俺に気付いたのか、リリナさん（メイド服Ver.）が俺の部屋に来室。つか、気配消して来るのはやめて！

「たまにはぐつすりとお休みになられたほうが良いですよユキはほら！」

ずいつ！という疑問系が似合いそうな感じで差し出されたのは、手鏡。そんな顔に向けられても、寝癖と我ながらに思う目付きの悪い表情くらいしか――

「クマですよク・マ！ここ最近、色々とお疲れのようでしたし」

「…………原因があるとすれば、主に綾館姉妹絡みだと思っんですが？」

「あら、ほほほ……………」

疲れてる、とは自分でも気付かなかったが、原因はだいたい目前にいるこの人絡み。そんな事を口にすれば、すっげーぎこちない笑いのリリナさん。

「と、とりあえず朝食の準備は終わってますので、着替えを済ませ

たらリビングの方へ来て下さい！」
「は、はあ……」

↓

「おはようユキー！」

「おはよう」

「……おはよう……」

「おはようございますユキ、まずは顔を洗って来てくださいね」

「おはようみんな………あ？」

さて、我が家には現在、俺を含め綾館姉妹と妹の4人が居るはずだ。
しかしながら、俺に向けられたおはようの言葉が、なぜか1人分……
……多い？

「あ？………み、湊っ？！」

「………そう」

お前、家は綾館姉妹と同じで逆方向じゃないか？

「………凜ちゃん……友達……いつか……恋人………」
「うおいー！」

は十分な時期だ。それに、現在外の天気は雨。激しくはないが、じつとりシトシトと降る雨と、高い湿度である。

“今日の占い”

天気予報も終わり、8時前の占いが始まる。俺自身は占いというものを信じちゃいないが、我が家の女帝もとい凜は、占いを欠かさず観る。

“今日の一位は双子座！思いがけない幸運が舞い降りてきそうです！ラッキーアイテムは――”

「…………ふふふ…………」

湊こわっ！！

さて、双子座の湊が不気味な含み笑いをしていく中、どんどん発表される星座。だが、俺の射手座が出て来ない…………。

“残念！今日の最下位は射手座のあなた。知らず知らずのうちに、悪い出来事に巻きこまれそう。ラッキーアイテムはピンクのリボンです！”

持つてねえよ。

占いを信じてない俺だが、結構へこむ。なんで朝っぱらからテンションを下げられなきゃいけないんだ。

「ユキ、ピンクのリボンを貸しましょうか？」

「いらねえよ」

リリナ先輩、貴女は何でも持つてるんすね…………。

31：不快な雨……………（前書き）

サブタイトルはあんまり関係ありません。ちなみに綾館姉妹も出ません。視点は前半が相澤由希、後半が獅子神紗姫となっております。

31：不快な雨……

これといった不運的な要素も無く、学校は終わった。ほら、占いなんて当たらない！………なんて思っていた朝の俺、出来るならばぶん殴ってやりたい。そして、素直にリリナ先輩からピンクのリボンを借りればよかった。

今、俺は工場跡地らしき廃屋に居る。何故？俺が聞きたい。俺が把握出来ているのは、鼻につくシンナーの臭い・後頭部を襲うズキズキとした痛み・そして麻縄らしきロープで錆びた柱に括りつけられている、という事だ。

「よお、お目覚めか？」

背後から掛かる声は低く、男だという認識は出来た。だが、足音は一つじゃない………金属的な物が地面に擦れる音と共に、複数の足音が、水でべちゃべちゃに濡れた地面を叩く。振り向けないが、恐らく10人以上はいるようだ。

「お前にゃあ怨みは無えが、下手に暴れられちゃ困るんでなあ、少々手荒になっちまったあ。悪いねえ」

一人の男が、俺の正面に回りこんでしゃがむ。スキンヘッドに眉無し、唇の端にはピアス、右肩には髑髏の入れ墨………見た目からして、不良だ。

「………あんたは？」

「んあ？俺あ“屍神”の鎌池洋治ってんだ」

“屍神”…………さて、どつかで聞いた事があるんだが、何だったかな？

「お前、“獅子神紗姫”って知ってるよなあ？」

「…………まあ…………」

獅子神さんっていえば、たしか“走り屋”をやってるって聞いたな。てことは、喧嘩絡みだろうか？

「ほお、素直だねえ…………まあこつちとしちゃあ都合はいいが」

「目的は？俺は獅子神さんとはあんまし面識無いんすが？」

だいたい付き合いも一昨日からだし。

つか、なんとなく思い出したよ。今日は一日中雨だったから、傘を目深にして帰ってたら、背後からいきなりドンッ！！って殴られたんだよ俺。

「ああ、まあそうだなあ……………つーかあ面識さえありやいいんだよ。俺らのチームはあいつらのせいでバラバラになっちまってなあ……………お礼しなきゃ気が済まねえんだよお」

「……………なおさら、俺は関係ねえんじや……………」

「いやいやあ、充分役に立つんだよお？あの女は義理堅いからなあ、ちよつとでも関わりのある人間が自分のせいで捕まったとなりやあ、必ず来るんだよお！まあお前も大人しくしてりやあ痛い目は見ずに済むからよお」

成る程ね。俺は人質か……………げすい考えた。

「まあ目えつぶってりやあボコボコにされるあの女を見ずに済むがあ？耳だけは悲鳴がこびりつくだろうなあ？」

『ギャハハハハハ！……！』

下品な笑い……… 実に耳障りだ。考えはよくわかった、すなわち俺を人質に獅子神さんの動きを封じてボコボコ……… って事だろう。さて、身動きが取れないうえに、獅子神さんの邪魔になっちまうが……… どうすつか……… あ！

今日も今日とて平日営業。“あの人”が働いていた鉄工所で、私、獅子神紗姫は事務員として働いていた。主な仕事はコピーにお茶汲み程度だけど、最近は色々と仕事を教えてもらって、充実した日々を過ごしている。

ガチャンッ！……！

突然、窓ガラスの割れる音がした。いきなりだから、作業をしていた手が止まり、数秒間、事務所と工場が静寂に包まれた。

「なんなんだ？」

坂巻さんが、事務所にやって来た。そして、窓ガラスを割ったであろう原因を、私の足元に見つけた。

「……………なんだよこりゃあ!？」
「どうしたんすか？」

石を包んだ紙……………おもむろに紙を広げた坂巻さんは、私と紙を交互に見遣った。

引ったくるように紙を取り、私は紙に書かれていた文面を見て、背筋が凍るような冷たさに襲われた――

“お前の知る男を預かっている。解放してほしければ、一人で廃工場に来い。もちろん、下手な行動は人質を苦しませると思え。屍神”

この前、私に不意打ちをした“屍神”の残党からの手紙だ……………。

「サキちゃん……………」

「……………すみません、早退させて下さい」
「待て!まさか行くつもりじゃ……………」

止めないで下さい坂巻さん。この手紙には、思い当たるフシがあるから……………。

「“屍神”の狙いはアタシです」

「だが！みすみすやられてしまうのを見過ごすわけには……！！！」

「……………“獅子神”の人間は、簡単にはやられません。私は、大丈夫です」

それだけを口にして、私は坂巻さんの制止を振り切り駆け出した……。

32：止まない雨……………（前書き）

綾館美雪の視点です。

32：止まない雨……

不穏な空気だった……。空は雨雲に覆われ、降り続く雨足は、徐々に強くなっていく……。

「美雪、どうかした？」

「……いや……」

部活も終わり、制服に着替え直していた私に、弓道部副部長の井芹桜花から声を掛けられる。

「雨って憂鬱になるよね……」

「まあな」

「ってか、なんか元気くない？」

「そうか？雨のせいだろう……」

今日の練習において、私はあまり好調とはいえなかった。まあ、たまにはこんな事もあるだろうと私は思っていたのだが、どうも桜花から見て、今日の私は弓道の練習以外にも、あまり調子が良いようには見えなかったらしい……。

「とりあえずお疲れ！！んじゃ私は先に帰るね〜！」

「ああ、また明日」

着替えを先に済ませた桜花が、先に部室を出た。残されたのは私とリリナ姉様の二人。

「姉様、私は疲れているように見えますか？」

「いや、私には何時もの美雪に見えるのですけど」

姉様も別段、私に違和感を感じてはいないようだ。
桜花の思い過ごしだろう、なんて思いながら、私も姉様と部室を出た。

↓
↓
↓
↓

「さて、今日もユキの家に行こう！」

「あらあら、相変わらず美雪はユキラヴですね！」

「当たり前です！ユキはいずれ、私の夫となるのですから！！」

校門を出てすぐに、私は家とは逆報告に位置するユキの家へと、姉様と共に足を向けていた。

ユキの家は、学校から徒歩で10分程度と通勤の利便性が良い。何時も通りに姉様とユキの事を話していて、後少してユキの家に着く……という所で、背後から爆音を轟かせながら走って来る一台のバイクに気付いた。

「あ、お前っ！」

「ん？あぁっ！お前はヤンキー女っ！！」

私達の横を通り過ぎてすぐに、急にスピードを緩め、そしてバイク

は止まった。おもむろにバイクに乗っていた奴はこちらに振り返り、私を指差しメットを脱いだ。

そいつは、我が愛しきユキの家にて一夜を明かした、憎きライバル！たしか……………獅子神なんちゃらって名前だったと思う。

「貴様っ！また性懲りもなくユキの家に上がろうとしてるのかっ！？」

「んだとコラ！テメエも似た……………じゃねえ！！お前、相澤に会ったか！？」

私の挑発に乗り掛かってきたヤンキー女だが、ハッと思い出したように相澤^{ユキ}の事を尋ねだした。

「今から家に行くところだが……………なんだ、ユキがどうかしたのか？」

様子がおかしい……………まだ三度ばかりしか顔を合わせた事のない間柄だが、ヤンキー女の表情が、焦りを隠しきれていない。

「連絡は出来るかっ！？」

「どうしたんだ急に？」

「ユキの携帯番号なら、私は知っておりますが？」

……………あ、リリナ姉様はユキの携帯番号を知っているんだっとな。むう、羨ましい！

「今すぐ連絡をとってくれっ！！」

「は、はあ……………」

「一体どうしたというのだ！？」

ヤンキー女の焦る表情と、口から出た“相澤”という言葉が、なぜか私を不安にさせた。もしか、ユキの身に何か――

「もしもし、ユキ？……………あなたは、ユキではないですね？」

「貸せっ！もしもし！？……………やっぱダメエらかっ！！相澤は関係ねえだろが！」

姉様から引ったくるようにして携帯を取ったヤンキー女は、私と口喧嘩をする時とは違う、鋭さのある目付きとドスの利いた口調で、電話の先にいる人物と話しているようだ。

「姉様、一体何が？」

「…………おそらく、ユキは何かに巻き込まれています。おそらく獅子神さん絡みの事でしょう」

「何、だと？」

「電話に出たのは、ユキではありません。誰かがユキをさらった、とも考えられます」

冷静で、口調にあまり変化がみられない姉様だが、普段の優しい目元が、その時はなぜか、笑みを消していた。

「っクソオ！！！！」

電話は終わったようだが、携帯から顔を話したヤンキー女は、全身から怒りという感情を噴き上げていた。もう、間違いは無い……………ユキの身に、何かが起きている。

「おい、ヤンキー女！ユキに何があった！？」

「……………」

「……………答える。ユキの身に、何があった？」

「…………アタシのせいで、捕まってる」

「どういう意味だ!？」

「昔、アタシら走り屋と対立していた“屍神”って不良グループが、私をおびき出す為に、相澤をさらった……………」

ヤンキー女は、齒噛みしながら理由を説明した。

大まかに言うなら、ヤンキー女のグループの前身の走り屋と、屍神ってグループが過去に一悶着あったらしく、その時に屍神のリーダーは逮捕。で、その残党が腹いせにヤンキー女を呼び出す為に、ユキを掠い、人質にとっている……………という事か。

「アタシのせいで関係無い相澤を巻き込んだ……………アタシのせいで……………」

「…………ヤンキー女、そいつらの居場所はわかっているのか？」

「…………ああ……………」

「なら、案内しろ」

「けど、あいつらはアタシ一人で来るように言っただけ!それに、これ以上誰も巻き込みたくねえ!!」

ヤンキー女、お前の気持ちもわからないではない。が、こつちとしても、ただ殴られに行くお前を、黙って見ているわけにはいかない。それに――

「ユキは私の大切な人だ、黙って見過ごすわけにはいかない!」

「け、けど……!」

「……………案内しろ。この綾館美雪を怒らせただの、連中には、高い“代償”を支払ってもらう……………姉様っ!」

「手筈は整ってございます!」

私の呼びかけに、リリナ姉様は携帯電話をパチン、と閉じた。…………

…さて、綾館の人間を怒らせた罪、じっくり味わって貰おうか。

「……ヤンキー女、私をバイクに乗せろ」

「だ、だが……」

「ごちゃごちゃ言うな……今の私は最高に機嫌が悪いんだ、連中のいる場所に着く前に殺されなくなかったら、さっさと私を案内しろおっつ！……！！！」

32：止まない雨……………（後書き）

おかげ様で、P V 3 0 , 0 0 0 突破、ならびにユニーク5 , 0 0 0 突破致しました。ありがとうございます！！

33：開戦！（前書き）

ユキ↓美雪↓獅子神↓ユキの視点になります。内容の表現がごちゃごちゃで、読みづらいかもです（謝）。

33：開戦！

今日の占いは最下位で、知らず知らずの内に、事件に巻き込まれるかも？……………なんて不吉な予言が的中し、囚われの身となっている俺だが、そんな不幸な出来事の中でも、それなりに“救い”のある事もある。まず一つ目。俺を縛っているものが、鉄製のチェーンではなく麻縄のような細い紐だという事。

二つ目。柱を中心に後ろ手に縄を縛ってある、という事。そして三つ目。柱の角が腐食し、錆びてギザギザになっていた事。

これらの三つの点が、俺自身を自由にさせる。気付かれないように、微かに縛られた手首を上下に動かし、縄を削る。

「んだあ、トイレにでも行きたくなったかあ！？」

「ええ、まあ……………」

「悪いなあ、そのまま垂れ流してくんねえかあ？こつちもおめえに逃げられでもしたら、計画が台なしだかんよお。ギャハハツ！！」

ふう……………なんとかバレずに済んだな。さてと、いい感じに縄が削れてきた。後はどのタイミングで縄抜けするか……………だな。

ブーーヴォンヴォン！！！！

「……………来たなあ！」

工場の外で、雨音を割って聞こえた爆音。その音に反応したのは、リーダーらしきスキンヘッド野郎だ。

「いいかぁお前らぁ!!」

『うおおおお!!!!!!』

連中の数は総勢20前後。その全てが、各々に角材やら鉄パイプやらを手にしている。

ガツシャアアンツ!!!!!!

窓ガラスを突き破って飛び込んできた一台のバイク。ってか、登場カッケーなぁ!!

「あん? んだぁ、かつわいい援軍連れてんなぁ! たしか俺らは、お前一人で来いっつたんだがなぁ?」

「あぁ? こいつは関係ねぇよ、ただの観客だ……… テメエらが地べたに這いつくばる姿を見てえんだとよぉ!!」

バイクから降り、髪を掻き上げる仕種を見せながら、獅子神さんは威勢のいい声で、スキン野郎以下、不良連中を睨んだ。

一方で、ヘルメットを被ったままでバイクから降りてきたのは、顔こそ見えないが、同じ高校の女子指定制服に、見慣れた背格好。あぁ、だいたい誰か見当はつく……………。

「ユキッ!」

メット（フルフェイス）被ってるから声が通らねぇ!! くぐもつてるよ美雪先輩っ!!

「相澤、大丈夫かつ!？」

「ま、なんとか……」

「すまない、アタシのせいで……」

気にする事ないですよ、と言わんばかりに手を振った。……そう
“手”を。

「なっ!?! テメエ、なんで縄が!?!」

驚くスキン野郎と以下不良連中。ってか、その獅子神さんも驚いてる。メット先輩は手をバタバタさせてるから、多分驚いてるんだろっな。

「もう少し、縛るものとか場所とかを考えた方がよかったですね？
ハゲてるから、髪の毛と一緒に知能も抜けたのかな？」

「んだとテメエ!?! その口すぐに塞いでやらあっ!?! お前ら、やれ
えっ!?!?!?!」

軽い挑発に簡単に乗ってくれるってのは、こちらとしてもありがたい。

「ユキ! 加勢するぞ!?!」

「おっしやあ! 縛るものが無えなら、存分に暴れてやるぜっ!?!!
!」

だ・か・ら! メットで声がくぐもってるよ美雪先輩。そして獅子神さん、なんか生き生きしてますね。

周りは凶器を手にしてるし、こっちの二人は素手。俺としても、素手で大勢を相手は少しキツイな。ま、手には縄もあるし、なんとかなるだろ! んじゃ、俺も暴れさせてもらおうか!?!

むう……ヘルメットを被つてると、視界が狭まる。というより、狙いが私ではなく、ユキやヤンキー女に集中してる。とりあえずヘルメットを脱ぐか。

「うおっ！すっげえ美人！！」

ふふん！中々の反応だ。

ただ、腐れ不良連中に言われても、嬉しくはない。

「だめだよお、こんな所に来ちゃあ！ギャハハハッ！！」

っ！ユキすらまだ私の手を握っていないというのに！！……その汚い手を

「離せ下郎！！」

バキッ！！

「ぎゃあっ！？」

「おっと、すまんすまん！」

少しやり過ぎた。メットが頭に直撃してたし。ま、これで少しくらいはまともな頭になるだろう。逆に感謝しろよ、下郎。

うおっ！あの生意気（美雪）女、強え！ってか、メットで殴られた奴、哀れだなあ…………

「よそ見てんじゃねえぞ！」

「っ、危っ！！！」

あと少しで鉄パイプの餌食になるところだった。つか、威力は充分なんだろうが、いかんせん…………

「的外れなんだよ！おらあっ！！！」

ドフッ！！！！

「ぐあっ！！！」

他愛無えなあ！鳩尾に一撃！で、倒れやがった。さつてと、こつちは闇討ちされた借りも返してえところだし、いっちょ派手にいくぞおらあっ！！！！

「おらあー!!」

「つと!」

「しゃあっ!!」

「おっ!」

「死ねえっ!!」

「ととっ!」

三人掛かりを相手にするってのは、ちとばかりキツイ。ま、不本意だが慣れてるんで大丈夫だけど。

今、俺の手持ちは俺を縛っていた“縄”だけ。とはいえ、これもけっこう使い勝手が良い。というのも……

「まず一人!」

振り下ろされた角材に縄を搦め、グイッと引っ張りやあら不思議! 摩擦で角材が不良の手から離れ!!

「二人目!!」

縄でわっかを作りましょ! 不良の頭に引っ掛けて!

「ラストー!!」

鉄パイプ野郎の前にグイツと縄を引つ張れば、二人目の男が「ぐえっ!？」と言いながら足元に倒れ

「うわっ!？」

ドテっ!!

走り込んできたところに、いきなり障害物が出たとなりや、バランス崩してほら転倒!

地面がコンクリ地だから、こけたら痛い。さて、素手になった一人目の顎に蹴りを入れ、後は縄で縛るだけ。

「いつちよあがり!」

「「「きゅ〜」」」

おお! ヤラレキャラならではのボコボコにされた時に出る効果音じゃないか。

さて、とりあえず三人は片付いた。ちよつとばかり角材をお借りして、ちゃっちゃと終わらせるか。

34：凶刃紅雨を降らす……（前書き）

内容がシリアスになってきました。ちょっとコメディ要素が減ってきます。

今回はユキ↓獅子神↓ユキの視点です。では、どぞ！

34：凶刃紅雨を降らす……

俺が不良連中から奪取した角材（木製）を振り回しながら、チラツと美雪先輩に目を向ければ、メットをガンガンと振り回し、連中をバツバタと薙ぎ倒している美雪先輩。

ありや頭を保護する為のものであって、武器に使うもんじゃない。メットの外殻は、ボロボロ。ちよつとばかし血が付着してるのが、見てとれる……。

え、えげつねえ……。

俺だって角材を木刀代わりに使っちゃいるが、あくまでも防護用である。それでも抵抗してくる相手には、足を狙って一撃！

足ってというのは、人体を支える為に必要不可欠な部位だから、ここさえダメージを与えれば、言わずもがな、戦闘能力は著しく低下するのだ。

「ユキ、大丈夫かつ！？」

「むしろ美雪先輩の周りで屍々累々と化した連中の方が、俺は心配ですがね」

「む？正当防衛だ！」

きつと過剰防衛だと言われてもフォロー出来ないっす。

「さて、後少しですね」

「ヤンキー女は気に入くわんが、女一人に多勢で向かっていく連中は、もっと気に入くわんな。……不本意だが、助太刀しよう！」

うん、俺は美雪先輩のメット（凶器）攻撃で被害に遭わないように

気をつけよう！

「ツクク！アツハハハ！！もう終わりかあ！？」

「く、ぐう……………」

流石に、素手でエモノ（凶器）を持つてる10人弱の連中を相手にするのは辛え……………。とはいえ、あの二人を巻き込んだアタシが、弱みを口には出来ない。

腹に角材からの一撃を受けたのが、結構効いたな。足腰ガクガク、立ってる事すらキツイ……………

……………ただ……………

「ハンツ！テメエらの力じゃ、この獅子神の“紗姫”は倒れねえよ！」

「んだとコラあ！さっさとくたばれこのアマあつつ……………！」

「つつ……………！」

力任せの拳が空を切った……………掴まれた腕、ハゲ野郎が手にしていた鉄パイプは、的確に私の頭上から振り下ろされた……………

ガギッ……………！！！！

「……………」

——はずだった。

「ダメっすよ、女性に手をあげちゃ！」

「な、テメエはっ?!?!?」

金属が、何かとぶつかった、高くもなく低くもない音。痛みを感じない頭。そして、みように廃工場に響いた年下の男の声と、驚くハゲの声——

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ!!」

「ゲフッ!?!」

「おふあっ?!?!?」

周りで悲鳴をあげる屍神の連中……………

「大丈夫っすか、獅子神さん？」

「ヤンキー女、助太刀するぞ!!」

閉じた目を開ければ、振り下ろされたはずの鉄パイプは角材に遮られ、私の背後には相澤が、周りで悲鳴をあげ、ピクピクと痙攣しながら地べたに転がる屍々累々の連中の真ん中で、私が貸したメットを振り回す生意気女。

「ああ！メットがボロボロじゃねえかつ!!」

「言っに事欠いてそれかよヤンキー女!!!!!!」

だって買ったばかりかしだったんだぜ！？まだ三日も経ってねえんだよ！！

「…………さて、もうあんた独りだけど？まだやりますか？」

「く、くそがあっ！！」

カラッ！！

今、この場で立っている屍神の残党はハゲ野郎のみ。手にした鉄パイプが地面に接吻し、音を立てた。

「…………終わったな」

「ああ。帰りますよ、獅子神さん」

…………決着はついた。屍神の思惑とは裏腹に。

「ありがとう、相澤…………綾館…………」

「む？面と向かつ「まあまあ美雪先輩、さっさと帰りましょ！！」」

きつと、相澤は察してくれたんだろうな。今のアタシは照れ臭くて顔を上げられないことを。嬉しくて、涙が零れてることを…………。

ごしごしと目元を擦りながら、アタシは立ち上がる。会社で着る事務服はボロボロ、空はドシヤ降りの雨なのに、心はなぜか、晴れ晴れとしてる。

おおよその確信は無い、が、私を心配してくれている人がいる。憎まれ口を叩きながらも、私を助けてくれた奴がいる。

嬉しい――

ウー！！ピーポーピーポー！！

「ゲッ、警察!？」

「リリナ姉様が呼んだのだ。心配する必要は無い!綾館の名を出せば、如何様にも改ざンできる!！」

「……………」

「な、なんだその目はっ!？」

きつと相澤も私とおんなじ気持ちになったんだろうな。

“これだから金持ちはっ!!!!!!!!!!”

「さて、余計な詮索をされる前に帰りましょうか」

「ああ」

「そつだな」

サイレンの音が徐々に大きくなってくる。ま、美雪先輩絡みならば、大して余計な詮索をされる心配も無いだろうが、やっぱり警察って

のはなあ…………。

「ユキ、帰ろう!」

「ですね。帰りましょう、獅子神さん!」
「うん」

工場を出ようとしたその時、地面に膝をついていたスキンヘッドがいない事に気付いた。
まさか——

「獅子神さん危ないっ!——!」

「えっ——?」

「ヒ、ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヤヒヤヒヤヒヤ
ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ——!——!」

ドスツツツツ!——!——!

間に合わなかった…………けど…………

「あ、相澤…………?」

獅子神さんが、大丈夫だったから…………

35：私の怒り&俺の見た夢（前書き）

前半は綾館美雪 後半は相澤由希の視点です。

35：私の怒り&俺の見た夢

振り続く雨の音を、今日ほど不快に感じた事は無かった。
白ばかりの飾り無い部屋に、愛しき人は眠っている……。

「…………ユキ…………」

その名を口にしても、彼は眠りから覚めない…………どうして？

「…………貴様が、貴様がユキを…………！」

「…………すまない…………」

「それだけしか言えないのかっ…………ユキは貴様を庇って刺されたのだ…………！」

「……………」

「何とか言え…………！」

「ちよつと！病室では静かにして下さい…………！」

言いようの無い怒りが、今の私を支配している。誰かに当たらなければ、私はどうにかかってしまいそうで――

「美雪、落ち着きなさい！」

「けど、ユキがこの女と関わらなければっ…………この女が…………この女が…………！」

パァンっ…………！

「っ…………？」

じんわりと、頬が熱くなった。その後で、痛みが感じられ…………

「美雪の気持ちはよくわかります。ですが、他者を詰^なつて傷付けるのは、ユキを刺したあの男と変わらないのです！」

「……っ……！！！」

リリナ姉様に打たれた。これほどに彼女を怒らせたのは、初めて。だから、堪えた。いかなる理由があるにせよ、私は自分の憤りを、誰かにぶつけた……それは、現実を直視出来なかった私の“逃げ”。

「……すまない……」

「謝るべきは、私にはないでしょう？」

……姉様の言う通りだ。私の心無い言葉で傷付けた人がいる……。

「……本当にすまない」

「い、いいって！あ、謝るのはアタシのほうだ！！アタシのせいで相澤が刺されたんだから……」

辛いのは、私だけじゃない。ここにいるヤンキー女だって、無関係なユキを自分のせいで傷付けたと、苦しんでいる。

そして、今も病室で眠っているユキも、左胸を刺されて、苦しんでいる……。

今は、その場にいる全員が、一人の男の回復を願っていた――

俺の視界には、死んだはずのじーちゃんがいて、優しかったばーちゃん
が居て――

（そっぴや、俺ってスキン野郎に刺されたんだっけ？）

って事は、俺、死んだのか……………。

なんか、呆気ねえな。死んだってのに、実感湧かねえ……………つか、
天国ってお花畑とか天使とかいねえのか？どう見たって、ここ――

（じーちゃんの家じゃん！！）

古ぼけた木造家屋、くすんだ茶色い柱、色褪せた畳……………。
見覚えがあるのは、間違い無く死っていたから。

「由希、稽古つけてやる。こっちに来い！」

見知った庭。上半身の服を脱ぎ、ちよいちよい、と手招きするじー
ちゃんは、相澤流古武術って流派の武闘家で、小さい頃はよく稽古
つけてくれたっけ。

「いよっし！いくぞじーちゃん！！」

間合いを取りながら、右・左・上・下！幾度も拳や蹴りを繰り出す

俺だが、じーちゃんはひよいひよいと避ける。ちつくしょ！当た
んねえ！！

「甘いぞ由希！だからチンピラなんぞに遅れをとるんだ！」

「っ！痛いところを突くな、じーちゃんは！」

「フッフオッフオ！だが、身をていして女を庇うその意気やよし
！だから、これは饞別だ……………」

ドフオツ！！！！

「カハツ！！」

じーちゃんの一撃は、“双掌打”という両手を使った張り手のよう
な技だが、全体重を乗せた一撃は、俺を軽々と吹っ飛ばす……………
………って、飛び過ぎじゃねえ
かあっ！？！？

「由希、お前はまだここに来るべきじゃない！まだまだ青春を謳歌
せよっ！！」

「じーちゃん！ばーちゃん！！……………」

徐々に視界が暗くなる……………真っ暗になっていく中で、最後に
見えたのは、にっこりと笑う祖父母の顔だった——

「う…………ん…………」

目が覚めた。その視界に映ったのは、見覚えのない真っ白な天井と、鼻をくすぐるような、消毒液の臭いだった――

「先生！相澤さんの意識が戻りました！！」

バタバタと部屋を出て行く女性の姿を見て、ようやくその人が看護士さんだということ、ここが病院だということに気付いた。

同時に、体の怠さと口元に装着された酸素マスクが煩わしく、俺は生きている事を実感――

慌てて来た主治医の先生の話によれば、刺された箇所は心臓から僅かに外れていたが、出血量が多くて、一時は危篤状態だったとか。意識を取り戻したから、後は傷の状態に気をつけさえすりゃ大丈夫だとか。

話はよくわかったが、今はただ、眠らせてほしい……………

入院から一週間が経ち、傷の具合も良くて、ようやく集中治療室から一般病室に移された俺。

「ユキ、傷はもう大丈夫か？」

「ええ。ご心配をおかけしました」

「ユキ、マズい病院食ばかりで辟易していると思ひまして、私が特別に料理を作りました！」

「返答次第では病院の居心地が悪くなりそうなので、ノーコメントで。料理は有り難く頂きますリリナ先輩」

一般病室に移った当日、早速、綾館姉妹がお見舞いに来てくれた。

「何をしてる、さっさとこっちに来い！」

「っ！」

「いいから、早く!!」

病室入口で中を伺っていたのは、獅子神さんだ。美雪先輩に促され、気まずそうに中に入って来た。

「あ、相澤あ……ごめん、アタシのせいで！」

「いやいや、名誉の負傷っすよ。寧ろご心配をおかけしました！」

「相澤あ……よかった、よかったあ!!」

ぎゅっ!!

「ぎゃああ!!いでで痛い痛い痛い!!」

感情的になつて抱き着かないで獅子神さん!傷口が痛い!!!!!!

「貴様あ！ユキに抱き着くとは言語道断！！私ですらまだ経験していないのにつ！！」

「ほほえましいですね」

違うよりリナさん！論点ズレてる！！ってか痛い痛い痛い！！！！
！誰か助けてええつつ！！！！！！

その後、俺は退院が一週間延長したのは言うまでもない。

35：私の怒り&俺の見た夢（後書き）

どうも、矢枝です。つくづく思いました。

「俺、戦闘描写下手過ぎ……」

だと。

ま、まあ、苦手な描写も克服出来るように頑張ります！

さて、本編はユキも退院し、いよいよ夏編へと突入します。暑い夏！
！暑苦しい美雪先輩を、お楽しみに！

36：退院・テスト・抽選会？（前書き）

長文……………なのか？

36：退院・テスト・抽選会？

入院に二週間ちよつとを要し、通院生活を経て三週間が経過。

ようやく傷もほぼ完治し、運動にも支障を感じる事が無くなった俺だが、自称“婚約者”と“スーパーメイド”姉妹の、過保護すぎる介護と、“走り屋”兼“工場事務員”のツリ目美人からの毎日のお見舞いに、辟易していた。

ちなみにだが、クラスメイトでまともに心配をしてくれたのは如月だけ。大川からは「美人姉妹の看護なんて羨ましい！いつそ氏ね、いや死ね！！」とねちっこい厭味を言われ、湊からは無言で「妹に会わせろ！」オーラを放たれ、河南は結城のお世話で手一杯。その他クラスメイトは、無関心。如月、お前だけだよ、唯一の良心は……。

で、両親については一切見舞いには来なかった。我が親ながら、なんと冷たい事か……。暴君たる妹君、凜に至つては、退院直後から「飯作れ」「掃除しろ」と、怪我人に対する配慮無いお小言を頂戴した……。

リハビリも兼ねて、徐々に家事に手を付けながら、入院していた間に進んだ各教科の勉強。中々大変ではあるが、夏休み前の中間テストを乗り切らねばいけないし、成績を下げるわけにもいかないから、仕方ない事だ。

そんな日々を過ごし、相変わらずめげない（諦めが悪い）人からの告白を毎度のようにスルーしながら迎えたテストの三日間。

「やべえよ赤点取っちゃったああ……………」

バカ（大川）は思考も学力もバカだった。

「ん〜可もなく不可もない」
「右に同じく」

如月と俺は、成績順位にあまり変動がない。俺は一つ順位が上がり、如月は一つ順位を落とした。

「……………」
「…………んじゃあ……………」

河南は、学年一の秀才。不動のトップ。結城はトップテンの常連だ。

「……………3位」

クールな百合娘、湊は3位。俺の周りはバカー一人以外は、秀才の巣窟だと言ってもおかしくない。

この河南・結城・湊の三人が、クラスの平均点を底上げしているのだ。

さて、無事に七月を迎えた俺だが、夏休みという学生にとって最大の長期休暇を前にして、一切の予定が無い。

これは前年も同じ事だったが、敢えての予定といえば、お盆の三日間のうちの一日を、祖父母の墓参りに費やそうと考えているくらいだ。

そんなわけで、一切の予定もなく自宅でのんびりと過ごすんだろうな、なんて考えながら学校から家へと帰る途中、牛乳を切らしてい

るのを思い出した。

だから何？と思う人は多いだろうが、我が家の暴君様は、毎日、朝と晩に牛乳を飲む。理由は教えてくれないが、おそらく低い身長を気にして、のことだろう。以前に牛乳を切らして、学校帰りに買ってくるよう命じられていたのを忘れた事があったが、その時の凜の表情は、般若顔負けの底から寒気を覚えそうなほどの冷笑を浮かべていて、俺は小1時間、冷たい廊下で説教という名の体罰を受けた過去がある。

そんなわけで、一度家に帰り、手荷物（学生カバン）を放り、頻繁に利用するスーパーへ。

普段は活用しないママチャリを使って、学校とは真逆、つまり綾館姉妹のお屋敷方向へと走ることで5分、いつものスーパーに到着。が、なんか店頭でワイワイと騒ぎが。よくよく見れば、たまにやつてるお買い上げ金額一定以上のお客に対する“ガラポン抽選会”の上り旗を発見。

ううん……………三千元以上のお買い上げで1回の抽選か……………

「お、相澤っ！」

「んあ？あ、獅子神さん！」

綾館姉妹とのエンカウト率は毎日必ずだが、最近は獅子神さんと会う確率も高い。ま、美雪先輩のような煩わしさを感じることは無いが。

「いやあ丁度いい所で会ったな！実は今から相澤ん家に行こうと思っただんだよ！！」

「そりやまたどうしてっすか？」

「相澤って、アタシにとっちゃ料理の師匠だから！今日はアタシの腕をみて貰おうと思っただけ！」

師匠って………たかだかみそ汁とお米の研ぎ方、それに青菜のお浸しくらいしか教えてないんだが。

「なるほど」

「んで、相澤は何を買いに来たんだ？」

「まあ牛乳を………後は適当に………って量多いっすね！？」

獅子神さんの手には、いっぱい食材が詰め込まれたレジ袋が、その数5袋も！！重くないのか？

「料理を始めたら楽しくってさ、色々作りたくて、なんか1万くらい使っちゃった！！アツハハハ！」

笑い事じゃなくない！？1万円？俺が一度にそんな額を払ったのって、たしかマイ・包丁を買った時くらいなもんだぞ！

「んじゃ、どうせアタシも相澤ん家に行くから、ちょっと待ってるよー！」

「鍵渡しとくんで、先に家に上がってていいですよ？」

「おいおい、もしもアタシが空き巣だったらどうすんだよ？」

「空き巣をするような人が、義理堅く俺を助けになんて来ないですよ？」

自惚れだと思うが、俺は人を“見る目”があると思う。獅子神さんだって、バイクを乗り回している時は“特攻服”を着て喧嘩上等！を掲げる、傍目から見れば“暴走族”や“不良”だと思われる可能性はあるが、この人と初めて会った時から、俺は良い人だと感じていたし、俺を助けるために、単身（美雪先輩もいたが）で敵対していた不良連中の待ち構えていた廃工場に乗り込んで来た人だ。これで疑うほど、俺は心が狭い人間じゃない。

「かなわねえなあ……ま、相澤がなんと言おうと、アタシはここで待ってるよ！」

苦笑いされてもなあ……つか、獅子神さんってムダに頑固な所あるよな。

「んじゃ、ちゃっちゃと買ってきますね」

「アタシの事は気にせず自分のペースで買い物して来いよ！」

んなこと言われてもなあ……………

で、なるべく早く買い物（牛乳のみ）を済ませて外に出たら、獅子神さんはホントに待ってやがった。

「あり？早かったな、アタシの事なら気にすんなって言ったのに」

俺の方が気にするんで、とは言わず「牛乳だけっすから」とだけ言っておいた。ここで余計な一言を口にしたら、面倒事に成り兼ねねえからな。

「あ、そだ！相澤、レシート持つてるか？」

「レシート？一応は持ってますが……」

「ええっと……うん、これで1万2千円超えたし、6回は抽選できるな！」

……ん？俺が買ったのは、牛乳2本のみだから400円弱だよな。
ってことは――

「1万1千円以上使ったんすかつ！？」

「ふあ？ん、まあそうなるな」

……家に帰ったら、獅子神さんに“堅実”という言葉を教えてやろう。

「相澤、何やってんだ？こっちこっち！」

と、獅子神さんに手招きされて、抽選会のテント前に。つか、俺を呼ぶ必要ってあるか？

「いやあ、アタシってこういう抽選会とか“引き”が悪くってさ、アタシと交互に引こうぜ！」

「い、いや、でも！」

「いいからいいから！おっちゃん、頼む！！」

「あいよっ！ええつと6回だね」

俺の意思は無視して勝手に始まった抽選。まずは、獅子神さんの一回目。

「白！残念、ポケットティッシュだね」

「あっちゃー！次、相澤な！！」

ここで「いや、俺は……」なんて言ったら、またややこしくなりそうだし、素直に従うことにした。

「んじゃ兄ちゃん、行ってみよう！」

「は、はあ」

んー、おっちゃんのノリにいまいちハマってない俺だが、とりあえずガラポンを回してみることに。

「金色！金色だぞ相澤っ！」

「またムチャブリを……」

……………「ロン……………」

「えつと、これは……あ、あれ？」

「ん、んん？」

「おおっ！出ました銀色！一等の地デジ対応の液晶テレビ42型！おめでとうございますー！！」

マジかー……………！！？！！？？

「相澤スゲー！」

「い、いやいや、偶然っすよ！よかったっすね獅子神さん！！」
「ん？なんかアタシが貰う的な感じになってないか？」

いやいや、どう考えても獅子神さんのものだろ！俺はただ引いただけだし。

「相澤はいらんのか？」

「家にありますよ。買い換えただけだし。つか、獅子神さんはいらないんすか？」

「いや、欲しいのは欲しいんだけど、どうやって持って帰るかなんだよ」

そついや、獅子神さんってバイクだよな。

「ねーちゃん、心配いらねえ！配送はサービスでタダだよ！！」

「マジで？」

「よかったじゃないですか！」

配送無料ってのは、ありがたいな。さて、次は獅子神さんの番だ。

「いよっし！次こそ金色引いてやる！！」

「獅子神さん、頑張って！」

俄然やる気の出て来た獅子神さん。この勢いなら金色（特賞）出るんじゃないか？

ちなみに特賞は、ペアのハワイ旅行だとか。

「赤！おめでとう、三等の佐賀牛サーロインとリブローース5万円分だ！！」

「おおっ！」

なんだ、引き強いじゃん獅子神さん！

「むううう金色が出らん！」

愚痴る獅子神さんだが、俺としてはテレビより肉の方が嬉しいんだけどな。

「次、相澤行け！」

んじゃ行ってみるか。

「白！残念ティッシュだなあ」

ま、これが普通だろ。

んで、獅子神さんの3回目もハズレてティッシュ。残るは一回だ。

「相澤、最後を託す！」

「マジでプレッシャーやめてー！！」

「アッハハハ！冗談だよーだんー！！」

その手の冗談は精神に悪い！

「最後だ、兄ちゃん頑張れよー！！」

ただ回すだけでどう頑張れと？

ま、まあとにかく、やってみつか…………。

「相澤、やっぱお前スゲーよ！」

「単に運がよかっただけだと思っんですけどね」

補助道路でチャリをこぐ俺と、車道でバイクをゆっくり走らせる獅子神さんの、なんというか、アンバランスな風景。

「つか、普通3回のチャレンジで一等と二等を当てるか!？」

「や、あれこそ奇跡ですよ。まあ獅子神さんの希望通りの色は出なかったですけど……」

「いやいや、あんなのって普通ハズレて当然じゃないか!それを一等と二等だぜ!？」

興奮覚めやらぬって感じの獅子神さん。特賞こそ出なかったが、最後の一回は茶色（銅）の二等。まさかの全国共通商品券10万円分を当ててしまった。

獅子神さんから「相澤が引いたんだから、相澤が貰うのが当然!」と言われたのだが、丁重にお断りさせていただいた。「獅子神さんに今日の夕飯を作ってもらうのでチャラですよ」と、理由を付けて。

そんな事より、まさかの奇跡を起こした俺は、このまま運が下り坂にならないかが不安でいっぱい。
ともあれ、俺（と獅子神さん）は、凜の待つ（待ってるかどうかは知らん）家へと帰った……………。

36：退院・テスト・抽選会？（後書き）

シリ阿斯も終わり、「変態さん」らしく明るめな話に戻りました。七月、学生にとっては学校生活で最大の長期休暇、夏休み前のお話でしたが、皆さんは、夏休み前のテストとか、どうだったでしょうか？私はユキや如月舞と同様に、可もなく不可もない、って感じだったのを覚えています。

次回から、夏休み編に突入します！ユキの周りの美女軍団やら追試の大川健一^{バカ}やら、一体どうなるのかっ！？

お楽しみに~~~~~ ♪ 矢枝

37：俺は変態さんの婿（未来系）らしい？（前書き）

夏編といえば海！と思っていたんですが、まずは前話の続編をどうぞ

37：俺は変態さんの婿（未来系）らしい？

「美味いつすよ」

「ええ。塩加減も上々、焼き具合も申し分ないです！」

「お姉様、美味しい」

「むう……………悔しいが美味しい！」

獅子神さんのお手製料理は、鯛の塩焼き・キノコとほうれん草のバター炒め・ご飯・キャベツの洋風スープと、中々に凝ったものばかり。ま、獅子神さんも言ってたが、料理は覚え始めると楽しい。きっと、独学でここまでの料理を作り上げたのだらう。

まあ、獅子神さんの事はいいとして……………

「なんでアンタがいるんだあああつ！！！？？」

いや、もう言わなくてもわかるよな。

「まあまあ、食事というのは大勢で食べるほうが美味しく感じますし」

「そうだぞユキ！家族団欒という言葉もあるように……………」

「いや、アンタら他人だし！」

綾館姉妹である。ちゃっかり我が家に侵入してやがった。

「ユキ、将来を誓い合った仲じゃないか！」

「そんな約束した覚えは無え！！」

やべえ、妄想に磨きがかかってきてやがる！？

「まあまあ、別にさしたる障害もありませんし」
「大アリだよ!!」

リリナさん言ってる意味分かってんの!?

「ご馳走様でした!」
「ご馳走様でした」
「堪能致しました」
「うむ、美味かった!!」
「あ、ありがとう!」

何時もは（最近知り合ったばかりだが）気丈でかつこいイメージの獅子神さんは、へへッと照れ臭そうに笑って下を向く。なんか、こういうギャップが男心をくすぐるんだろっな、なんて思う俺。そついや、獅子神さんも“年上の美人”だよな。でも、なんかときめかないんだよねあ………なんでだろ？

ガチャン!!

んあ？

「あっちゃ〜！ご、ごめん相澤！！」

皿を割ったんだな。ま、気にする必要も……………

パリーン！！

え？

「あ、ああ！！」

「や、別に大して気にしなくても……………」

ガッシャアアン！！！！

ええ〜！！？

「……………獅子神さん」

「ご、ごめー！！」

「いやいや、とりあえず料理の次は、洗い物を教えましょう」
「……………よろしく」

まあ、その前に後片付けから、だな。

皿洗いに気をつける事っていうのは、実に基本的なこと。

“洗剤による滑りに気をつける”

だけ。それさえ意識しときゃ、あとはなんとかなる！というのが俺の持論。

後は数を熟しや、大丈夫だと思う。

そんなこんなで皿洗いも終わったし、俺と獅子神さん、そして、凜はともかく当たり前だろ！なんて感じで、完全にソファで寛いでる美雪先輩。リリナさんは……………

「お洗濯済みました！」

うおい！?!?!?俺の下着干してる！

「ちょ、下着も!?!」

「え？たかが布きれじゃないですか」

「……………」

価値感の違いってやつだろうな……………俺の精神力は減ったが、この人には関係ないんだろ。
リリナさん

「パンツだろうが靴下だろうが、侍従たる私には、全く関係ないのです！ユキも、気にする必要はありませんよ」

「はあ……………」

「ちなみにですが……美雪、ユキの下着が干してありますよ」

「なにいつ！？！？どこだ、お宝どこだあああつ！！」

「やめんか変態！！！！」

お宝つて……………俺でよかったな美雪先輩。他人なら、即刑務所
行きた。

「んじゃ、アタシはそろそろ帰るよ！」

「けーれ（帰れ）けーれ！！」

「ほんつと腹立つな！まあいい、じゃな、相澤！！」

「ゴチでした〜！またいつでも来て下さいね」

夜も8時になりかけた頃、獅子神さん退場（帰った）。が、相変わ
らず……………

「ユキ、一緒に寝よ」

「お布団は並べてあります」

この姉妹は全く帰る気がない。

「つか、親が心配しますよ」

「ん？ああ心配いらん。他のメイドには給金を渡して休暇扱いにしてあるし、父様は今、ヨーロッパのルーマニアにいる。もっとも、逐一ユキの事は話してあるし、父様も帰国後に是非、未来の娘婿に会いたいとおっしゃっていた！」

……牙城が外堀からどんどん埋め立てられてる。

もう綾館家の人間には、相澤由希は“未来の婿”で浸透しているらしい。

先（未来）が怖い！！！！

「まあそういう事だから、一緒に寝ようじゃないか！」

「何がどう“そういう事”に繋がってるかがわからない！」

「一晩を共に過ごした仲じゃないか！何を今更恥ずかしいのだ！！！」

「同じ“屋根の下”ってだけで、一緒に寝た事は無いっ！！！！！」

誰か暴走してる変態さんをとめてええええっ！！！！！！！！

38：終業式です（前書き）

はぁ……………まだ夏休み編に行かない。

38：終業式です

毎度毎度に襲撃を重ねる綾館姉妹（主に美雪先輩）に慣れた対応をしつつ、今日はいよいよ終業式。則ち、夏休みが始まるのだが――

「健一、なんかキモい」

「ああ」

「……（コクリ）」

「同感だ。皐月、いい加減に起きろ」

「んにゅーう」

如月は、頬もこけて別人と化した大川を一瞥し、終業式前だというのは、机に突っ伏し眠る結城を除く俺を含めた何時ものメンバーも、如月の言葉に頷いた。

「……ハハツ。多分、生きてきた中で1番頭を使っただけ……僕も、無事に夏休みを迎える事が出来るんだ」

うわぁ……バカが本格的に壊れやがった。

普段なら“俺”なのに“僕”って言ってるし……。

「なんだ、コイツまじキモッ……」

「ダメだよ如月さん、女の子が下品な言葉を使っちゃ」

「あ、相澤！まじでコイツ怖い……」

いや、俺に同意を求めんな。

大川が“爽やか風キャラ”のまんまで、全校生徒が体育館に集まる。程なくして始まった“終業式”。開会の挨拶をするのは、弓道部兼生徒会副会長の、あの人だ。

「これより、終業式を始めます！生徒の皆さんは、起立して下さい！」

凜とした声が館内に響き、皆が一斉に起立。壇上に立つのは、我が家を襲撃する常連さんの綾館美雪先輩である。

……あ、あれ？美雪先輩の背後に立ってるのは――

「お、おい、美雪先輩の背後に立ってる銀髪美人、誰？」

「マジで美人だよな！」

「あの人って、この前転入してきた人だよね！？」

他のクラスから、そんな囁きが聞こえてきた。カーテンで影になっているが、間違いなくリリナ先輩だ。

「始めに、校長先生からのお話です。礼！」

壇上から美雪先輩（リリナ先輩）がはけ、校長が代わりに壇上に上

がる。

さて、ここまでは他の学校となら変わりないだろう。しかし、この後の校長先生の“ありがたいお話”から、他の学校の終業式とは違ってくる。

「えー皆さん、夏休みは事故の無いように、楽しんで下さい。以上！」

「礼！」

10秒にも満たないスピーチ。これで校長からの挨拶は終わりなのだ。

「続きまして、生徒会長挨拶。全員、礼！」

椅子は用意してあるのだが、終業式が始まるまで座るだけなので、あとは立ったままで式は進行する。

ちなみにだが、生徒会長は女性である。名前は長東京都さんながつか・みやこといい、学校一の才女である。

「皆さん、本日午後より夏休みが始まりますが、遊んだり騒いだりするのには、補導されない程度にお願いします。後の注意事項は教室に戻った後で、先生からプリントが配布されます。そちらに詳しく書いてありますので、目を通しておいて下さい！では、九月に会いましょう！」

「礼！」

厳格とは程遠い言葉である。各々が自己責任を持つ事を校風に掲げているこの学校だが、凄いのは、これほど自由な校風なのに、一切の事故や補導をされた生徒がいない、ということだ。

「以上をもつて、終業式を終わります！礼！」

これで終わり。体育館に全生徒が集合した時間は20分程だが、終業式に要した時間は、5分にも満たない。

学年ごとに体育館を出て行き、俺のクラスも先生に先導されながら教室に戻った。

「全員揃ったな、プリントを配るから席に座れ」

程なくして担任が教室に入り、手にしていたプリントを配り終えた後――

「ま、夏休み中は事故に気をつける。以上、解散っ！」

呆気ない。これで終わりだ。現在午前9時30分、以後、学校を出た瞬間から、夏休みは始まるのだ。

「よっしゃ！今から夏休みだ！！」

如月は普段のテンションをMAXに上げ――

「臯月、帰るぞ！」

「んみゅ〜？にゃ？もう終わったの〜？」

河南は普段通りのままのテンションで結城を起こし、結城はネコみ
たいな声で起き――

「僕は女子校のお姉様方とお茶会があるので……」

健一は人格が変わってしまっ程、頭を使ったらしい。虚言&妄想癖
まで加わってやがる……キモい。

「……………紗姫お姉様と、遊ぶ……………」

湊……………あれ？“紗姫”って、どっかで聞いたことがあるような――

「ってか、相澤はこの後どうすんの？」

「ん？ん〜〜とりあえずは妹の昼飯の準「もちろん、学校一の美人女子高生である私とデートだ！！」

出たな自称“婚約者”！！

「私もおります！」

知ってるよ“メイド先輩”。だいたい変態先輩とセットだし。

「デートか……………臯月、デ、デートするか？」

「にゃ！？デデデデデート！？！？」

すげえ、普段なら河南の言葉に動じない結城が、過剰反応してる！
初めて見たっ！！

「つか美雪先輩、なんか他に予定とか無いんですか？」

「私の予定表によれば、昼過ぎにユキと映画を観て、その後はゲームセンターとかいう施設で、一緒に遊ぶ。夜には郊外の料亭で共に食事を摂り、最後はホテルで……………」

「行かない！ぜったい行かないっ！！何考えてんだアンタは！！！！」

「何って、ナ「言わせねえ！！」」

言ってる意味を理解してんのか！？つか、予定表のノートに“ユキノート”って書いてんじゃねえっ！！！！！！

39・夏といえば……（前書き）

かなり短めです。

39：夏といえば……

ことの発端は、自他共に認める“お金持ち”の、美雪先輩の一言で始まった――

「さあ夏休みだ！ユキ、我が綾館家が管理するプライベート・ビーチでにやんにやんしよう！！」

「――は？」

昨日、終業式も済んで本格的に夏休みを迎えた俺。

特に予定も無く、昼まで寝ている妹の昼食を準備していた時、もうすっかり慣れてしまった住居侵入の常習犯となっている美雪変態（先輩）から、突然のお誘いを受けた。つか、“にやんにやん”ってなんだ？……いや、聞きたくねえ。

「反応が薄いぞユキ。我が綾館家が保有する別荘に招待しようと言っているのだ！どうだ、嬉しいだろう！！」

「いや、別に……」

「ユキ、嘆かわしいですよ。夏休みというのは、本来学業から解放され、思いっきりハメを外す事を目的とした長期休暇なのです」

うん。絶対違うよりリナ先輩。

「まあなんだ、私としてはユキと二人っきりでイチヤイチャするのが目的なのだが、それではユキから拒絶されかねん………そこで！！」

ガチャ………

「ユキ、美人姉妹が誘ってるんだぜ！これで行かないって事はないよな？なっ？」

「いやー私もヒマしてたからさ！」

「俺としては、皇月と一緒にならどこでも……………」

「海だにやー！潮干狩り・釣り・サバイバル！」

「……………女の子……………ああ、いい……………」

「海だと聞いちゃ、黙ってらんねえ！アタシも有休はたいて行くぜっ……！」

なるほど。敵（変態）さんは外堀から埋めてきやがったな。これで断ったら、全員（健一・如月・河南・結城・湊となぜか獅子神さん）からブーイングの嵐がくるのは必至。

まあしかし！こつちには最終手段の毒舌少女（？）、我が家の女帝様（妹）がいる！これを理由にすれば、断る口実も――

「ユキ、早く準備しなさい」

「……………ハイ」

出来なかった。お前（凜）、さっきまで部屋で寝てたはずだよな！？なぜに準備を終えてる？腰には浮輪装備！？頭にはゴーグル＆シヨノーケル！？？準備良すぎじゃね！！！？？

40：別荘到着！（前書き）

またまた短めです。

40：別荘到着！

我が家から車で1時間、空港から飛行機に乗り、30分ちよつとを要し、割とでかい港から船に乗って20分………幾つもの小島が点在する中央に、美雪先輩の言う“別荘”がある無人島に到着。

さて、ここまですんなりと説明出来たのは、大まかに言っただけであり、詳しく説明するなら、空港へ行くまでに使ったのは、綾館家所有の白いリムジン。空港から乗ったのは、自家用セスナ………ここまでくれば、船も当然、自家用クルーザー。あゝあゝ金持ちの自慢ってやつですか、はっ、これだから金持ちは嫌いだ。

「うおおっ！スゲー！！」

獅子神さんは純粹に驚いて、ってか嬉しそうだな。

「俺、現地の美人女性ナンパしてくる！！」

健一はバカだな。ここは“無人”島だっつたろーが。

「あの岩場つたいから投げこんだら、イシダイとか釣れそうだなや！」

妙に釣りに詳しいな結城は。ってか、完全に語尾が“にゃ”に定着してる…。

「臯月、たまたま俺、釣り竿持って来てるんだが」

うわぁ………恋って人をここまで変えるんだ……。

「ありがとアキちゃん!」「た、たまたまだ……」

これが、バカップルってやつか。ポーカーフェイスな河南秋斗が、顔を真っ赤にしてる。

「奏、うちらどうする?」「……………美少女を観察……………もちろん、舞も……………」

「あ、ああそう……………」

如月い!そこで顔を引き攣らせんな!!

「まずは冷たい飲み物が欲しいわ」

「麦茶・アイスティー・アイスコーヒー・その他の飲み物も用意してありますよ」

どこ行っても女帝様だな凜は。リリナ先輩、あまり妹を甘やかさないで。

「各々、みんな喜んでくれてなによりだが、まずは荷物を部屋に運ぼう!」

「お部屋の鍵をお渡ししておきます」

ま、正論だな。

リリナさんから鍵を受け取り、まずは急拵えで準備したバッグを部屋の片隅へ。別荘と言っていたはずだが、俺が想像していたよりもでかい。大浴場を完備してるらしいし、宛がわれた部屋には、きちんとベッドやらテレビやら冷蔵庫が。なんというか、旅館のような感じだ。

ガチャ…………

「ユッキー！」

「な、なんで入ってこれた！？鍵掛けてたよな！？！？」

まさかの事態を考慮して部屋に鍵を掛けていたのに、なぜか乱入してきた美雪先輩。

「ああ、私はユキと相部屋だからな！鍵は同じものなのだ！！」
「チェンジで！」

こんな所にまで来て、不法侵入されてたまるかっ！！

「むう……海だぞ！普通はもつと開放的になるだろ！！」

「美雪先輩が部屋に乱入してきた時点で開放的にはならねえよ！！」

原因はあんただよ！

「ま、冗談はさておき……………」

「鍵を持つてる時点で冗談に思えねえ……………」

「早く水着に着替えてこい。みんなで遊ぼう！なんなら、私がてつだ「出てけっ！！！！！」」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら指をワキワキと動かすな変態！！

どうにかこうにか変態を部屋から追い出し、サーフパンツを着用。
ちなみに色は黒！

あ、男の水着なんて興味ない？そりゃ失礼！

41：バレーボールが凶器に変わる！

「悪い！待たせ……………」

別荘前のビーチには、俺以外のメンバー全員が揃っていたんだが――

「おっせーぞつ相澤！」

「どうだユキ！お前好みのスタイルを自負してるだけのことはあるだろう？」

う、ううむ……………」

獅子神さんはオレンジの、美雪先輩は黒地に赤いハイビスカスの刺繍の入ったビキニ姿……………」

「にや？アッキー真っ赤っ赤にや！」

「お、お前！露出し過ぎだっ！！！」

「うにや！？アッキーえっちにや〜！！！」

おーおバカップル。結城はピンクのビキニでパレオ（腰巻き）付き。河南はサンライト・イエローのハーフパンツ。

「ち、ちよっとくつつき過ぎじゃない！？」

「……………ふふ」

湊に密着されて引き攣った表情が継続中の如月は藍色の競泳水着、ポーカーフェイスの百合っ娘湊は、胸元に白い羽根の刺繍をあしらった青いビキニ。ちなみに如月とは対称的に、嬉しそう……………」

「水着の女の子がいっぱい……ふふ……」

り、凜……。お前まさか……。スクミズ姿の我が妹君は女性陣を一望し、ご満悦の表情。

「ふふ、私も満更ではないでしょう？」

う、うおっ！！？？

真打ち登場とでもいうべきか、リリナさんの格好は黒・グレー・白と一見して地味そうな配色でありながら、日頃はメイド服姿で徹底ガードされた肌を惜し気もなく披露した、まさかの紐ビキニ！つかむ、胸が……。でけえ！！

「お、俺は……。今日ほど神様に感謝したことはない！神様ありがとうーっ！……！」

バカ健一、周りの目を見てみるよ……。

「な、なんかあいつ目が正気じゃねえ……」

「うーむ、いくらユキの学友とはいえ……」

「キモッ！」

「にゃ！？ケーチ（健一）が怖いにゃー！」

「……………（ブルブル）……………」

「ユキ、お友達も選んだほうがよろしいかと……」

女性陣の健一を見る目が、変態を見るような感じになってる。

「あの野郎…………… 臆月を変な目で見てやがる…………… “狩る” か——」

河南やめて！スプラッタ（血まみれ）になったら“R（指定）”が付いちまう！！ただでさえ美雪先輩の言動が“R―15”ギリギリなのに！

「……………」

さて、バカ（健一）は砂に埋めだし、これでスプラッタな事にならないで済むだろ。

ただ、まあ……

「ユキ、早くこいつ！」

「んだ？アタシに見惚れたか？アツハハハ！」

ビーチバレーをしようって事になったわけだが、男は俺を含めて河南と二人。女子率高しで、目のやり場に困る……………。

「お、俺をわざとずれるなあ……………」

ちっ、結構深く埋めたつもりだったんだがな。早くも復活しやがった。

「ユキは私とペアだなっ！」

「なんでそうなる？ここはアタシとペアだろ！」

…………… お？もしかして、俺モテてる！？

「美雪、ここは公平にユキに聞いてみればいかがですか？」

うおい！一番プレッシャーな言葉キター！！

リリナさん余計なことを…………… って、なんでニヤニヤしてんの！？
まさかSに目覚めたとかっ！？！？

「ユキ、当然嫁である私を選ぶよな？」

「はあ？やっぱ大人の色気漂うアタシを選ぶだろ！なっ、相澤！！」
「間をとって私とペアを組んでみてはいかがですか？」

余計な火種を増やさないでリリナさんっ！！！！

結局、公平なじゃんけんの結果、俺は獅子神さんとペアに。美雪先輩はリリナさんとペア。他は河南・結城ペア、湊・凜ペアになって

……………

「この際如月でもいいっ！！」

「こっちは願い下げだ変態がああっ！！！！」

どっおっ！！！！

「あびゃあぁーっ！！??」

「へえ、きれいな左上段蹴りだ！」

うん、そんな情報要らないよ獅子神さん。

頭から砂にダイブした健一はほっとくとして、如月は審判に。既にネットも張ってあるという用意の良さに感心しつつ、遊びだと思っていたビーチバレーは始まった。

「いづくにゃー！」

ドフッ！

「甘い。お姉様」

「……………（コクッ）」

「……………それ」

ドガァッ！！

「うおっ！」

俺にとって、ビーチバレーというのは“楽しみながら”するスポーツであって、ポンツ！と弾むビニール製のボールが破裂せんばかりの音をあげて飛び交うものじゃないと思う。

既にボールは三つ目、前の二つは衝撃に耐え切れず破裂した。

どうやら俺の周りの女子って、腕力も男以上のような……。

湊・凜ペア対河南・結城ペアの試合（死合）を傍観している俺だが、既にやる気は失せている。

結果だけ説明しておく。凜の空手仕込みのアタックが河南の前頭部に直撃し、試合続行不可。

河南、すまねえ！！

「いよっし！いくぞ相澤！！」

$$\begin{matrix} \lceil & \wedge & \vee & \wedge & \vee & \dots & \lceil \\ \vdots & & & & & & \vdots \end{matrix}$$

「んだよやる気ねえなあ……こんな美人のお姉さんがペアなんだぜえ？ まちつとやる気だそうぜ！」

ち、ちよつと！あんま密着し、む、胸がつ！？胸が当たって！！

「貴様あ！ユキに色気を使うなあつつ！！」

「へっへん！恨むならじゃんけんで負けた事を恨めよう！」

「ぬああゝゝゝ！！！！絶っつ対負けん！！！！！！！！」

売り言葉に買い言葉つてやつだ……年齢にそぐわない幼稚な口喧嘩。そ、それよりもいい加減に離れて獅子神さん！

「死ねヤンキー女ああっつ！！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

「ぬるいぜ生意気女！つと相澤あ！！」

「おっと！」

「よっしナイスストス！喰らえやあああああっ！！」
チユドオオオオオンツ！！！！

もうバレーじゃねえ！！ボールを叩く音が！音が！！砲撃並じゃねえかつ！！！！

さっきの湊ペア対河南ペアの比じゃねえし！こんなのもに喰らったらタダじゃ済まねえし！！！！

ドゴオオオアアア！！

「相澤危ねえつ！！」

「え？ぐああっ！？！？！？！」

ああ……………河南もきつと、こんな感じで意識を飛ばしたんだろうなあ……………なんて考えながら、俺も真っ白になった視界の中に意識を飛ばしていた――

42：海で夕食といたら？

あ？なんか後頭部がふや〜んとした柔らかな“何か”に包まれ……
：そっぴや俺、たしかビーチバレーの最中に美雪先輩の殺人的スパイクをまともに喰らって――

「……」

「お、気付いたかユキィ！良かった！ホントに良かった！！」

目を開ければ、泣きそうな美雪先輩の顔が俺を覗き込むような……
……あ、あれ？なんか体勢がおかしくない？ってか近っ！？

「おわっ！？」

ぷにょん♪

慌てて起き上がろうとした俺と、さらに俺の顔を覗き込もうとした美雪先輩が、接触。なんとも心地良い感触が顔面を覆ったのだが、これってまさか――！？

「いやん！ユキのえっちい♪」

「うわああ！ち、違っ！！ふ、不可抗力！！けしてわざとじゃ！！！！」

――美雪先輩の豊かなむ、胸が当たっていたわけで――

「あらあら」

「ユキ、大胆」

「羨ましい！羨やまし過ぎるぜ親友っ！！」

「あーあ」

「臯月、お、俺も膝枕……………」

「ハレンチNGにゃ！」

「……………チッ」

「……………（いいなあ）……………」

ギャラリーからは生温かい視線と様々な反応を頂戴した…。

「ふふん！ユキの顔が真っ赤だ。私の胸も、まんざらでもなかろう？もつと触ってみるか？ん？」

こんな状況でも、誰も俺に救いの手を差し出してはくれない…。俺、一から友達作り直そうかなあ——

日はすっかり傾いていた。2、3時間くらい意識を飛ばしていた俺は、その間ずっと美雪先輩の膝枕で手厚い（過剰）介護を受けていたらしく、美雪先輩が余計な事をしそうになる度に、獅子神さんが咆哮したそう（リリナさん談）。

長い時間、つきっきりで介抱してくれた美雪先輩に申し訳なさど嬉

しさを覚えつつ、危うく“R指定”になりそうな美雪先輩の行動を止めてくれた獅子神さんにも、後でお礼を言っとくべきだな。

夏休み、海といえば――

「やっぱりバーベキューだな！」

「うむ、ベタではあるが一番盛り上がるのは、やはりバーベキューだ！！」

獅子神さんと美雪先輩って、普段は口論が絶えない仲なのに、時々妙にうまが合うんだよね……似た者同士っやつか？

「……………うう」

「リリナお姉様、どうしたの？」

「せっかく大勢なのに、腕を振るえなかったんですう……………」

ああ、やっぱりリリナさんは根っからのメイド気質なんだな。色々と今日のために材料用意してたっばいが、結果バーベキューだし。ただ焼くだけだもんな。

「リリナお姉様、私アイスが食べたいわ」

うおい凜！リリナさん傷心だから！こんな時に女帝ぶりを発揮しないで！！

「でしたら！私腕によりをかけて作ります！」

「出来ればフルーツたっぷりのシャーベット系」

「お任せ下さい！このリリナ・F・ナイトロードに不可能はござい

ません!!」

「お任せするわ」

「はいっ!」

おお!こんな時に凜の我が儘が使えるとは!

リリナさんの表情が一気に明るくなっただし、喜々として巨大クーラーボックスから果物いっぱい取り出してる。

ま、今日はアイス作りで我慢してもらおうとして、明日は目一杯、リリナさんに腕を振るってもらおう。

なんか最近、リリナさんに対する甘え癖が出てんな俺達兄妹……。

「あ、それは俺の肉だっ!」

「早い者勝ちだバーカ。臯月、ほら早く食わないとなくなるぞ」

「アッキーは過保護にゃ!」

バカとバカカップルは相変わらずで――

「……………」

ひょいっ!

「え、えーつと奏?」

「……………」

ひょいひょいっ!

「な、なんでお肉ばっか私の皿に乗せんの?」

「……………“ない”……………」

たった一言だが、湊は同時に如月のある“部位”を指差した。

「なっ！なっ！？き、気にしてるのにつー！」

「……適度な運動……と、脂肪……バストアップ……」

ああ、胸か………たしかにペツタンコだもんな、如月は――

「あんた、今、何考えた？」

「い、いや何も――」

危ねえ………口にしないでよかった！

「……誰かに、揉んでもらうのが………手っ取り早い………私が………揉む？」

「いいいいいや！遠慮するっー！」

「……そう………残念………」

ノーマルだもんな如月は。アブノーマルな湊の行動が、よほど怖かったらしい。まあ俺が同じ立場でも如月と同様に、だろうな。

ふいー食った食った！満腹だ。

その後はバーベキューも終わり、花火は翌日しようという事になった（三泊四日の予定）ので、各自風呂へ。先に言っておくが、俺は健一のように風呂を覗く趣味はない！ま、まあ勿論興味がないというわけじゃないが……。

ちなみに風呂は馬鹿でかい露天風呂で、急拵え的な仕切りで、男・女に分かれている。

となると当然……

「塀の向こうはパラダイス！いやっほー！ー！！」

健一がバカ丸出しで出撃。結果は先が読めていたが案の定――

「貴様のようなバカに皐月の裸を見られてたまるかつ！」

ブスッ！

「みぎやあああああつ！！！！目が！目があああああつ！！？！
？！？」

あーあ、言わんこっちゃない。

「由希……お前も覗きなんてするはずないよな……………？」
「も、勿論だ！バカと一緒にすんなー！！」

目え据わってる河南が怖え……。

なんて恐怖に怯えている俺を余所に――

「なんか向こう騒がしくないか？」

「まあだいたいの見当はつくけど……………」

「……………」

「にゃ？」

「アッハハハ！男はバカだかなあー！！」

「まあそういう所も可愛いのですけどね？」

塀の隣からは、女性陣の暢気な声が聞こえていた。

43：二日目・朝食・ゲロテスク？

ガチャ……………

「……………ん……………」

ガチャガチャ——

「（——が……………ない……………か……………！）」
「……………ん？……………」

ガチャガチャガチャ……………

「（……………うえ……………だっ……………！！）」
「……………なに……………？」

ガチャ……………ドッゴオオオオオオンッッッ！！

「な、なんだ！？敵襲かつ！？！？」
「グッモーニーンユキィ〜〜っ ♪♪」
「やっぱしあんたか変態がああっ！！！」

そんな朝的一幕……………。

なんら我が家にいる時と変わって……………いや、我が家じゃない分、襲撃方法に加減が無え……………。

んで——

「おはようございますユキ。あら、美雪はなんでタンコブを作ってるのかしら？」

勿論、手加減はしたが制裁させていただいた。

さて、こんな離島の別荘地でも、リリナさんはやっぱりメイド服なんだな。

「ういっす！おはよう相澤っ！！」

「おはようユキ」

「おはよう由希」

「ユツキーおはようじゃ！」

「おはよう親友！そしてお美しいレディ達！！」

「……………」

「おはよ相澤。っつか健一キモッ！」

「なんでかな？……………まだ朝の6時だぜ、なんで全員揃ってんだ？ま、とにかく——」

「おはようみんな！」

かくして、早くから二日目は始まったのだ——。

さて、腕によりをかけて作りました！と、リリナさんの言葉通り、およそ普段の俺らには無関係そうな料理がずらりと並び、一同はその料理の前に――

『……………』

終始無言。

「あら、皆様……………お気に召しませんか？」

リリナさん……………どここの家庭にも、朝っぱらから“熊の手のスープ”“仔牛の頭のロースト”“鶏足の豆板醤炒め”“雪蛙のココナッツミルク”なんて料理が出てくるんすかね……………。

「今日は中華にしてみたのですが――」

うん、論点はそこじゃない。おそらくだが、一同の気持ちと思しき言葉を発してみよう……………。

「リリナさん……………朝っぱらから画的にグロい」

「……………」

「そして見た目が濃い」

「……………た、たしかにユキの言う通りです。私は……………侍従失格です……………ううう……………」

ホロリ……………リリナさんの頬を伝って――

「う、うわあ！ち、ちょっとリリナさん、泣かないでっ！！」

や、やべえ——！どうしよう、どうする俺！？

「い、いただきます！」

ゴクッ……………むしゃむしゃ……………！！！！

「う…美味い！」

とりあえずここは、リリナさんの顔を立てて“鶏足の豆板醤炒め”を思いきってパクリ！

見た目にグロいってのが若干引つ掛かるが、口に入れた瞬間に広がる旨味！豆板醤の辛み！それでいてシツコクないスツキリ感！！正直、朝から随分と濃い料理と思っていたが、見た目に反して、食欲を煽る味付けや調理の仕方は、完全に朝向きである。

「美味しいですよりリナさん！見た目こそあれですが、これはリリナさんにしか出来ない味付け、さすがです！！」

「……ほ、ホントですかっ！？」

「お世辞抜きで美味しいですよ！ちよつ、皆も食べてみ！」

「まじ？」

「ま、まあユキがそう言うのだから……………」

そう言つて、恐る恐る料理を口に運ぶ獅子神さんと美雪先輩——

「美味いっ！！」

「うむ！流石はリリナ姉様だ！！見た目に反して細やかでありながら、一日の活力となりえる味付け…………正直、外見で拒絶した自分が

愚かしい」

称賛である。ま、この二人がその後、怒涛に食べ始めたのも影響してか、他のメンバーも思い思いに箸を持ち、見た目はあれだが味は最高の料理に手を付け始め――

「美味しい」

「ホント美味しいわ!」

「……（もぐもぐ）……」

「朝から濃い気もしたが、これほどに美味しい朝食は初めてだ」

「リリニヤン美味しいにゃ〜!」

「まさにパーフェクトメイド!リリナ先輩、私を貴女の一生のパートナーにして下さい!」

おお!まさに称賛の嵐。つか健一、朝っぱらからウザッ!&キモッ
!!

「皆様ありがとうございます!ちなみにですが大川さん、全力でお断りです」

「にぎやあああつつ!?!?!?」

ほれ見る。なんで結果は分かりきってるのに健一は同じ事を繰り返すんだろつか?やっぱバカだなあ――

44：見惚れた俺に天誅下る！？（前書き）

短めです。

44：見惚れた俺に天誅下る！？

さて、朝食後は各々自由行動中である。結城・河南のペアは釣りへ、如月・湊・健一の3人はビーチフラッグ、凜はリリナさんに懐いてるんで、多分一緒だろう…。

で、残るは俺・美雪先輩・獅子神さんの3人。ま、この二人と関わるとロクなことがないし、俺は夏休みの課題でも……………

ガシッ♪

「ユキ、遊ぼう！」

「いや、俺は……」

ガシッ♪

「遊ぼうぜ相澤！」

「え、えーっと……」

グイッ♪

「遊ぼうユキ「相澤！！」」

「……………はい」

ハナっから分かりきっていたことだが、俺に拒否権は無い…。
右手を美雪先輩、左手を獅子神さんに掴まれ――

「「連行」」」

一度、別荘へと連れて行かれることに。一体、何すんだらうか……

…？

「……で、なんなんすかこの恰好は？」

「うむ、やはり某テレビ番組でやっていた、お笑い芸人のサバイバル生活をやってみたいと以前から思っていてな！」

「獲った●ゝ！！ってヤツだろ？アタシもあれ好きなんだよ！」

俺は真つ黒な、美雪……もとい変態先輩はピンクの、獅子神さんは青いダイバースーツ姿……。

で、俺は三つ又の銚^{もり}を、獅子神さんは一本銚を装備してるんだが、変態先輩も装備は、明らかに異質……

「み、美雪先輩……その手に持つてる物は……？」

「ん？やはり女の子とはか弱い生き物だからな、縄付きの水中銃だ！」

や、やっぱり……。ってか、水中銃って免許が必要なんじゃ――

「あ！美雪ばつかずりい！！」

「紗姫は免許持って無いだろう？」

「ぐっ…」

その口ぶりだと、この人免許持ってるのか…。いや待て、だいたいこういう類は18歳以上じゃねえと持てないはずじゃないか？

「……先輩、免許持ってるんですよね？」

「と、当然だ！」

「じゃあ免許証を見せてくれませんか？」

「え、えーと…」

あ、こりゃ明らかにおかしいな。

目は落ち着きなく右往左往してるし、口調もなんだか…。

と――

「美雪、私の水中銃を知りませんか？つて、あぁっ！」

「ね、姉様！？」

リリナさん登場。うわっ、昨日の紐ビキニ姿でもかなり刺激的だったけど、ピッタリと肌にフィットした競泳水着姿つても、結構……

「もう、ダメですよ！美雪は免許持っていないのですから……どうしたのですかユキ？」

「あ、いや…」

あまりまじまじと見るのは失礼だが、やっぱりリリナさん…胸デカッ！！足長っ！！ウエスト細っ！！

こっぴどかしい例えになるかもしれないが、女神って、きつとりリナさんのような感じなんだろうなっと思う。

「ユキ、ユキ！」

「——ハッ！？」

いかんいかん、完全に見惚れてた。美雪先輩に呼びかけられてなかったら、思わずル・ンダイブしてたかも（しねえけど）……………って

「アダダダダ！？痛い痛い痛い！！！！！」

耳！耳が！！引つ張らないで美雪先輩っ！

「愚か者！私という嫁がおりながら鼻の下をのばしおって！！」

「いだいいだいつ！！し、獅子神さ！た、助けっ…」

「残念だ相澤…私も今、猛烈に嫉妬している！」

「ち、ちよつ、ま、待って……」

なんで！？獅子神さんも美雪先輩も手をワキワキと動かさないで！

「「問答無用！！」」

「ちよつ、ま、あ、ああ、あ、あ、あ、あああああ！！！！！」

44：見惚れた俺に天誅下る！？（後書き）

PV4万を突破致しておりました。読者様、ユーザー様、御礼申し上げます。

はてさて、夏編に入っております。夏といえば海！という安直な考えで執筆しているのですが、筆者は今、そんな安直な考えで投稿しているが故に、ネタ尽き・先の見えない構想という天誅を喰らっておりますです、ハイ。

45・海には“ヤツ”がいる(前書き)

夏休み・海編。二日目の午前～昼までの話です。

45：海には“ヤツ”がいる

「…あ、あいつら…」

人には、誰しも“弱点”がある。それは身体的・精神的…様々だ。俺の場合、弱点は肉体的な部位。特に脇腹と足の裏が弱い…。

今回、俺が無意識にリリナさんの水着姿に見惚れてしまったのが発端だが、変態さんは嫉妬（？）、獅子神さんは…多分おもしろ半分で、俺の脇腹をくすぐり攻撃。あえなく撃沈と相成った。

ウエットスーツを着込んでいたんだが、密着するのでくすぐり攻撃は有効だったというのが、俺の敗因だろうな…つか、誰が弱点を教え――

「……（ニツコリ）…」

「お前か凜！」

「えーなんのことー？凜わかんない」

ああ、間違いない…。お前かマイシスター。棒読みだし、なんかニコニコしてやがるし…。

「だいたい、こんな美人でユキ好みのスタイルを自負している私を差し置き、姉様に見惚れるなど…」

「そうだぞ相澤。私とて、それなりのスタイルだぜ？…まあ、あのリリナってメイドの胸には負けるが…なあ？」

「いや、同意を求められても…」

甚だ困ったことである。ま、まあたしかに、獅子神さんも美雪先輩も、スタイルはいい。

…が、俺は一度として「自分好みのスタイル」という言葉も内容も、

口にしたことは無い。

大方、また美雪変態の妄想&虚言だろう。

…ま、スタイル云々はともかく、二人とも嫌いじゃない…口には出さないけどな。

↓

ギャーギャーと騒がしい美雪先輩はともかくとして、海に潜つての食材探しつてのは、面白そうだ。

あの“番組”にもあるように、普通、漁つてのは“許可”が必要だ。その点、ここは綾館家の所有物であり、許可が云々と懸念する必要もない。今、俺が一番懸念しているのが、あの騒がしい二人よりも、自称：“完璧メイド”のリリナさんが言った――

「少しばかり、鮫を狩ってきますね♪」

発言だ。ニツコリと微笑んだリリナさんだが、手にはウォーターライフル…。

危険度MAXじゃないかつ！？

という心配を余所に、凜を引き連れて颯爽とクルーザーへ。
これから素潜りする俺らに掛ける言葉じゃねえだろ！…と、不安…。

「ユキ、心配はいらん！鯨とはいえ、ジョーズに出てくるような凶暴なヤツじゃないし、そう大きくない！」

「あ、それなら…」

「3メートルくらいだし、イタチザメだ！」

「デケエし人喰いだよっ！！」

ああ、不安ばかりが付き纏う…

↓

さて、素潜りとは言ったが、予想以上に浅い。

小島の入り組んだ地形だから、浅いのは当たり前かもしれないが、一番深い所で5メートルくらい。浅い所は膝下で、潜るというよりしゃがむ…って感じた。

しかし――

「っしあ！イセエビゲットオー！！」

「サザエにアワビゲットだ！」

獅子神さんはイセエビを手に、美雪先輩はサザエとアワビを手にし

てる。

かなり高級な食材ばかりだ。…銚の意味くない？

「エビ・貝とくれば、あとはイカ・タコに魚類だな！ユキ、魚は任せた！」

「…よし！」

魚か…さて、大物を狙うには、ある程度は深い場所がいい。ま、そんなわけで、俺は（美人）二人のいる浅場から離れ、小島と小島の間、すなわち谷になっている深場へ。

「…！（いたいた！）」

シュノーケルをくわえているので口には出せないが、岩場沿いには、多くの魚の群れ…。その下には、小魚を狙ってか、でかい魚が…ハタだ。

「……………」

銚をセットし、一気に海中深くへ潜水。俺自身、泳ぎにはそこそこ自信がある。間合いをとりながら、射程圏内まで近付き…発射！

ガッ…

「！？」

当たったのだが、鱗に阻まれたらしい。図体のでかさと見た目に反し、もののすごい速さで逃げられた…チクショウ！

と、ここで異変に気付いた。ハタばかりに集中して周りを気にして

なかったが、あれほどまでごちゃごちゃしていた小魚の群れや、エビ、小ガニが、一匹もない…。俺とて、周囲に気どられないようにしていたが、それでもおかしい。

と、海底付近にいた俺の真上に、影が出来た――

「……………」

推定3・4メートルはありそうな魚体。幅も広く、堂々とした泳ぎっぷり…。

そういえば、リリナさんが言ってた…

「ちょっと鯨を狩ってきますね♪」

いたー！！！！ここにいたよりリリナさん！！

パニクる俺を余所に、気にしないとばかりの鯨。種類こそわからないが、とにかくデケエし堂々としている。まず、一刻も早く気どられないように避難せねば…

ドンッ！

「っ！？…！！！！」

手にザラツとした“何か”がぶつかった。視界に映ったのは、“特有の背鰭”。上ばかりに気をとられていた自分を恥じた。

目の前を泳いでいった、一匹の鯨…。背後からも、どんどん姿を見せる。

その数、ざっと十は超えている！

ヤバイヤバイ！とは思ったが、どうする事も出来ない。酸素は足りないし、この数を相手に…いや、たとえ一匹だろうと、敵う相手じゃない！

どうする！？どうする俺！？

と、気構えた俺だったが、意外にも鯨の群れは、俺なんぞ気に留める必要もない、といわんばかりに悠々と過ぎ去り、やがて大海原の向こうへと消えていった…。

「ぶはあっ！っはあ…はあ…」

我ながら、よく息が続いたものだと思う。同時に、よく生きていられたものだ…。

「おーいユキーっ！」

「相澤ーっ！」

小島の岩場から、美雪先輩と獅子神さんが俺を呼んでいた。

「さ、鯨が…」

「鯨？いたのか？」

「マジ？でかかったかっ？」

まず、大丈夫だった？という言葉が聞きたかったのは、俺の甘えなんだろう。二人を見た安心からか、ドッと疲れが押し寄せた。

45：海には“ヤツ”がいる（後書き）

こんにちは。矢枝です。

海編の二日目、朝食後、お昼前のお話でした。

皆様、水族館以外で鯨を見た事がある方はいらっしゃいますでしょうか？

私は熊本出身（現在系）でよく海に行きますが、なかなか遭遇しません。過去に一度だけ、1メートル弱を釣りあげた事がありますが、鯨…というのは“獰猛”“殺し屋”“人喰い”のイメージが付き物です。

ですが、実際に鯨の中で人を襲う種というのは、全体の一握り程度。見た目や某映画が、そういったイメージを定着させたのかもしれないね。

今話でユキが遭遇したのは“イタチザメ”という種類です。これも大型は4・5メートルになる人喰い鯨と呼ばれる種類ですが、ユキを襲わなかった理由は、満腹状態だったからです。

鯨が人を襲う最大の要因は“腹減り”だそうで、海洋資源が豊富な海エサの鯨というのは滅多に人を襲わないらしく、今話では、それを踏まえて執筆致しました。

46：刺激的な二日目！？（前書き）

R指定がかからない程度に、ちょいエロあります。…が、期待する程のものでもありません。なんせR指定にかからない程度ですから。

46：刺激的な二日目！？

素潜り漁の結果、美雪先輩はアワビ・サザエを各10個前後。獅子神さんはイセエビ3尾とワタリガニ・イシガニを2匹づつ。魚類を任された俺は、未知（鮫）との遭遇により、断念。代わりといっては何だが、岸に戻る直前に、中々のサイズのタコを発見、そして捕獲。

「よし、後でリリナ姉様に調理してもらおう！」

ということで、一度別荘近くの岩礁帯に出来たタイド・プール（岩のくぼみに出来た海水の水溜まり）に、獲ってきたばかりの魚介類を活かしておくことに。

「相澤、なんか顔色悪いけど…大丈夫か？」

「…え、ええ。大丈夫です！」

獅子神さんが心配してくれるのも、無理ないか…。おそらくだが、俺の顔色は真つ青だろう。水深5メートルから一気に急浮上した結果、水圧で体調を崩したようだ。吐き気はするし、頭も痛いし、体全体が怠い…。

「…よし、相澤！」

「…え？なんす…おわあっ？」

別荘から今いる“岩礁帯”は、50メートルもない近場だが、不意に身体が“浮いた”のは、獅子神さんが俺を“お姫様抱っこ”で抱え上げたから…。

その際に俺の脇腹近くが獅子神さんの、形の良い胸に密着するとい

う嬉しいハプニ…ゲフンゲフン！…つまり動揺。

「お？顔が真っ赤だ…大丈夫か？熱でもあるのかっ！？」

「だ、大丈夫！大丈夫だから、お、降ろして…じゃないと——」

「貴様あ！ユキが弱っているのをいいことに、お姫様抱っこだと！
？胸を密着させるな破廉恥ヤンキー！！」

…ほら、やっぱり。美雪先輩だっているんだし、あまり大胆過ぎる
行動はご遠慮願いたい…。

「誰が破廉恥ヤンキーだコラア！毎度毎度相澤ん家に襲撃かけるよ
うなテメーにや言われたくねえ！！」

「ユキ、離れてろ…コイツとは一度、決着をつけなきゃならん…」

「いや、無理」

だって力出ねーし。バタバタ暴れたら、岩礁帯で腰を打つ可能性大
だし。

…別に獅子神さんの胸が密着してるのが嬉しいからじゃない。もう
一度言っが、断じて違う！！

「ほれ、お子様は散れ散れ！」

「くっ…」

「獅子神さん…できれば降ろして…」

「相澤、年上美人のお姉さんの言う事は、素直に聞きなさい。わか
ったか？」

「……はい……」

有無を言わせぬニツコリスミイルな獅子神さんは、俺を抱き上げて
いる手に力を入れている。則ち、下手な抵抗は余計に体調を悪化さ
せるぞ、って事らしい。

↓

50メートル弱の道程だが、俺は島に来ている仲間から、好奇の視線を向けられ、獅子神さんの隣からは、殺気の籠った視線を送られていた。

…ああ、なんという羞恥プレイ…

その後、別荘に到着した俺は、獅子神さん・美雪先輩からの騒がしくも手厚い介護を受けた（いつそ放っておいてほしかった）ので、昼食前には体調も回復。

程なくして、リリナさん・凜を除く他のメンバーも、海から帰ってきた。

「河南んところは、釣れたか？」

「バッチリにや〜」アッキー、見せたげるにや！」

ほお、えらく自信満々だな結城は。河南は…あ、あれ？表情暗い？

「…これだ」

「ん、どれど…うおあっ!？」

「げっ!」

「……………」

「気持ち悪っ！」

「まじかよ!？」

「ほお………」

どれもこれもが、あまり評判の良い言葉じゃない。青バケツを前に差し出した河南の表情が曇ったのは、これが理由か……

「ウツボにゃ！」

そう、ウツボである。岩礁帯の“ギャング”でもあるウツボは、バケツの中でとぐろを巻いている。

「ウツボは美味しいにゃ！高知県じゃ普通に売ってあるに！」

へえ、そうなんだ。朝も思ったけど、世の中ってグロい奴程、美味しいものが多いんだな。

「後でリリにゃんに料理してもらうにゃん♪」

「お任せ下さい。ウツボはタタキにしていたきましょう！」

颯爽とリリにゃん…じゃなかった、リリナさん登場！相変わらず水着姿が抜群のプロポーションを際立たせてる。

「けっこう大きいのが狩れたわ」

凜も登場。コイツは普段、無表情か眉間に皺を寄せてる表情しか見せないが、今回は機嫌が良いらしい。
つか、狩ったんだ、やっぱり…。

「二人じゃ引き揚げられないので、お手伝いをお願いしたいのですが」

「大川健一、立候補します！」

健一…“何を”引き揚げるとはわかってんのか？

「おっしゃー！力仕事なら任せなー！」

「もちろん、姉様の頼みとあれば私も手伝おう！」

「俺も！」

「私も！」

「…（こくり）」

「アッキー、一緒に手伝うにゃ！」

「ああ」

多分、俺・美雪先輩・獅子神さんの三人以外は“何を”引き揚げるとは知らないだろう…見たらびつくりすんだらうな。

↓

「うわっ！」

「デカッ！！！」

「怖っ！」

「マジ!?」

「ほお!」

「へえ…」

「イタチザメにゃ〜!」

「すごいな…」

全長4メートルはあろうかという大物。そして…

「こ、こいつ、海底で見た鯨だ!」

俺にぶつかったり、関心無く悠々と泳いで行った、あの鯨だ…。

「この辺りは、海洋資源にとっても恵まれており、鯨は人間を襲う必要も無いのですよ。海洋資源に乏しい環境であれば、おそらくユキは……お腹の中から出てきたでしょう。」

サラッとすげえ事言いやがった!

「この鯨は結城様の言う通り、イタチザメ。英名をタイガーシャークと言います。なぜタイガーをイタチと呼ぶのかは存じませんが、茶色の縦縞が、由来だと思われます」

「へえ」

「鯨はヒレを乾燥させたフカヒレが高級食材として知られておりますが、その身も美味しいものです」

はあ。リリナさんって博識だな。何でも知ってるみたいだ。

「…とはいえ、こちらの鯨は“さる漁協”からの依頼によって狩ってきたものです。残念ながら、皆様のお口には入りませんが…」

へえ、リリナさんって漁協とかにも顔が知られてんのか…あ、って事は！

「リリナさんがよく家に持って来てくれる食材って…」

「察しの通りですユキ」

なるほどね…。

「姉様は農・畜・水産の関係者からも一目置かれた存在だ。今では姉様の^{ひいきどころ}覇^は肩^{かた}処^{どころ}は、“一流”だと言われている」

すごいなリリナさん！

って事は、リリナさんが家に持って来る食材って、全て一流って事か。

↓

さて、リリナさんを含め全員で鮫を引き揚げ、某有名テーマパークのセットみたいな感じで記念撮影。

その後、鮫はリリナさんの手によって念入りに処理され、クルーザーの特大冷蔵庫に。

昼食は予め用意されていた食材から、俺・美雪先輩・獅子神さんの

獲ってきたタコ・カニ・エビ・貝に、結城達の釣ったウツボをリリナさんはテキパキと捌き、また調理してゆく。

「できましたー！」

サザエとアワビの網焼きに、イセエビは刺身、タコはリリナさんお手製ドレッシングを使ったカルパッチョ、カニは豪快にぶつ切りされて味噌汁に。そして結城の釣ったデカウツボは、丹念に骨を切り、タタキへと変貌した。

『いったただっきまーすっ！！！！！！』

↓

昼食に舌鼓を打った後、リリナさんはクルーザーで“さる漁協”とやらへ。ちなみに凜も付いて行った。

残る8人はビーチサッカーやらサーフィンをやったりと日が暮れるまで遊び、日も傾きかけた頃に、リリナさんと凜も帰ってきた。

そして、前日から気合いの入っていたリリナさんお手製のお食事後、お風呂へ。前日同様に女風呂へ覗きを企てた健一は、これまた同様に河南から一撃を受けた。

しかし――

バキヤアアア！！

「「あ」」

お情け程度に仕切られた壁へと運悪く激突した健一のせいで、壁大破。

要するに…

「きゃあっ！」

「…！！」

「…エツチ」

「にやあ！？破廉恥にやつ！！！！」

女の子達の“あられないお姿”が、湯煙越しにバツチり見えてしまった。

当然、如月・湊・結城の同級生や凜は批判的に湯をバシャバシャ掛けられた。いや、不本意だが気持ちはわからんでもない。しかしながら…

「む、とうとうユキに裸を見られたか…」

「アッハッハ！どうだ相澤、アタシもなかなかのもんだろ？」

「ふふ、ユキもなかなかの“モノ”をお持ちで…」

年上女性の寛容さつてのは、如何なものかと思う。裸見られても堂々としてるし、むしろ俺は“モノ”を見られたという羞恥により、河南と一緒に、逃げるように風呂を後に。

そんな中、河南と一緒に健一を回収する際…

「パラダイスって、ホントにあるんだな…」

と、恍惚な表情で健一は鼻血を噴き出していた。

もちろん、俺を含む男子連中がなかなか寝付けなかったのは、言うまでもない…。

47：最後のお泊り（前書き）

夏休み海編の三日目です。最後のほうは、ちょっぴりシリアスです。

47：最後のお泊り

昨晚、あまりにも“刺激的”な女性陣のお姿を目にしたせいで、なかなか寝付けなかった男性陣一同。

俺自身、意識が遠のく前に目にした時間が、午前3時あたり。つまり、それ以後に眠りについたことになるわけで…

「——んう…」

ようやく目が覚めたのは、昼前の11時過ぎ…。おそらくだが、こんなに遅くまで起きていた…また、起きたのは初めてだ。まだ寝足りないのは事実だが、かといって一日の時間には限りがある。早々にベッドから上体を起こし、大きく伸び。

コンコン！

と、規則的なノックが来訪者を告げている。

「…どうぞ」

「おはようユキ！…ん、どうした？」

来訪者は美雪先輩だった。というか、昨晚の今日である…あまりにも刺激的なお姿を目撃した手前、面と向かって顔を見る事が出来ない。

「あ、あゝいやあ…」

「？」

本人（美雪先輩）に自覚無しつてのも、どうかと思う。現に俺は、

その…は、裸を見たわけだし、み、見られたんだし…。

「ふむ、今日は男連中の寝起きが悪いのだ。ユキ、理由はわかるか？」

「あ、い、いや…」

い、言えねえ…。

「まあおそらく、昨日の温泉でのことだろう。たかが裸を見たくらいでなんとも不甲斐ない！…で、ユキよ…」

「な、なんすか？」

「見たいのなら遠慮なく言え！ほれ、見「出てけアホ痴女っ！！」

この女…知っててわざとからかいやがったな…。

変態痴女（美雪先輩）を部屋から追い出し、さっさと着替えを済ませて食堂（？）へ。

「おはようございますユキ」

「…お、おはようございますリリナさん」

「?…ふふ、私に何か付いてますか？」
「あ、いや…」

年上の“余裕”ってやつだろう。リリナさんはおそらく、俺の態度で察したようだ。

「目の保養になりましたか？」

「はい…あ、いやっ!？」

「ふふ、素直ですねユキは」

あしらい方も、流石でございます…。

さて、遅めの朝食とも早めの昼食ともいえる食事を堪能した俺。今日で綾館家の別荘に来て3日目。明日で帰ることになると、なんだか寂しい気持ちもある。

「相澤、おはようっ!」

どふっ!

「おわっ!お、おはようございます獅子神さん」

「どした?感慨深い顔して…あ、さては昨日のアタシの姿を思い出して、下半身おったてやがったか？」

「ち、違いますって!…ってか下ネタ反対!」

「んだよツレねえなあ」

ったく…。いきなり抱き着いてきて言うことそれかよ。

「今からサーフィンやんだけど相澤も来ないか？」

「ああ、いいっすけど…やった事ないっすよ」

「大丈夫大丈夫！既にメンバー集まってるし！！」

何が大丈夫なんだろうか？とはいえ、メンバーが揃ってるなら早く支度をせねば…。

「遅いぞユキ！待ちくたびれた！！」

昨日の今日で、ビキニ姿は目の毒だよ美雪先輩…。

「ふふ、サーフィンですか」

う、うーむ…。首から臍^{すね}あたりまでのピッタリとした競泳水着姿のリリナさん。露出はほとんど無いのに、な、なんかエロい…。

「さあって相澤も来た事だし、早速行くぞおっ！！」

テンションの高い獅子神さんは、リリナさんとは違うタイプの競泳水着姿。スラッと伸びた足が艶めかしい…。

というより、なんで女性陣は美人ばかりなんだろうか？

「…由希、寝不足か？」

「人のことは言えんだろ。クマがひどいぞ」

男性陣三人の中で一番の美形である河南だが、俺と同様に寝不足の疲れが目の下にクマとして浮き上がっている。

「そついや、結城は一緒じゃないんだな」

「…昨日の“アレ”以来、変態扱いだよ…」

ま、結城は普段から「破廉恥反対！」って言ってたからな。それに、昨日の壁大破の責任の一端は、河南だし。

「それにしたって…」

「ああ…」

テンションの高い女性陣（美雪先輩・リリナさん・獅子神さん）をよそに、俺と河南は低いテンションのまま…

「「はあ…」」

ため息を吐いた。

「ち、ちよつと待っ！あぶっ！？」

バsshアァァン！！

「アッハッハ！だらしねえーぞ相澤っ！！」

俺：サーフィンって聞いたはずなんだけど。

「ま、待ってリリおぶあっ！？」

バsshアァァン！！！！

「ふふ、ふふふ……」

リリナさんがDS化してる！？

さっきも言ったが、俺らはサーフィンをしに海に出てるはずだ。しかし、まともにサーフィンをやってるのは――

「如月、もっと重心を前に傾けるんだ！」

「り、了解つと……うわわっ！？」

「湊、上手いぞ！」

「……………」

美雪先輩を含め、如月と湊の3人。ちなみに健一は未だに部屋で爆睡中。凜はマイペースに――

「獲った」

昨日、獅子神さんの使っていた一本銚で、一人、漁に勤しんでいた。つてかデケエなああの魚！！

結城に到っては――

「釣りとは孤独な趣味なのだにや！」

という言葉を残し、別荘に到着した当日から気になっていたという潮通しの良い岩地で釣りをしてる。

…で、話は戻る。俺と河南はサーフィンと聞いて海に出たのだが、用意されていたのは水上バイクが2台と、足場を固定するタイプのボードが2つ。

いやゝな予感がしたんだが、そういう時の予感ってのは、大概是当たるもの。

俺と河南がやっているスポーツってのが、ボートとかで引っ張ってもらう“ウェイクボード”ってやつだった。

「相澤、もう一本行くぞっ！」

「う、ういーす…」

「河南さん、もう一度いきましょう！」

「は、はい…」

小型船舶免許持ちの獅子神さんとリリナさんは、水上バイクで俺と河南を喜々として引きずり回す。

持ち手を離さないように踏ん張るだけでは足元が疎かになるし、なかなかハード。しかしながら、何回も経験を積み重ねれば、何とかなるというものだ。

波・スピード・重心をキチンと頭の中で計算し、後は馴れ…。

「つとと！」

「っは、上手くなったじゃん！まだまだへっぴり腰だけど」

「そりゃどうも…うわっと!？」

「氣い抜いてんじゃねーぞ！アツハハハ！！」

ちよつと誉められて、テンションが上がった瞬間、集中が途切れて海中へダブイブ！！

その後、俺も河南もコツがつかめたので、日が暮れるまで楽しんだ。

「なんで起こしてくれなかったんだよお…っ わああん！」

「泣くなバカ！うっさい!!」

「同感だ」

「だつてだつて！秋斗とユキは、女の子達とイチャイチャじでんだろお！？俺も混ぜろよお…!!」

イラッときたのは、どうやら河南らしい。目で合図したら、無言で頷いた。

「「逝つてこい!!」」

ドカツ！バキツ！！

「ぶべらぎゃ！？！？」

ふう、幾分かスッキリした！

さて、バカ健一も砂に埋もれた事だし、リリナさんの美味しい夕食でもいただこうかな。

スパイスからこだわった、リリナさんの特製カレー。辛いけど美味いから、ついついおかわり3杯目。やっぱ夏はカレーだな！

んで、凜が獲ったお魚は豪快に網焼きと刺身に。つか、兄の面目を潰さんばかりの大物ばっかだよ。

空気読め…。

食後、すっかり闇一色となった砂浜で花火大会。

赤・白・黄色・青・緑…。鮮やかな火花が、闇を明るく照らす。はしゃぐ健一や如月、二人で仲良く線香花火をする河南・結城、なぜか仲の良い凜と湊は、ロケット花火を打ち上げ、俺はのんびりと浜

辺で、みんなを眺めていた。

「ユキ、お前は混ざらんのか？」

「…ええ。なんか昼に遊び過ぎたみたいで、ちょっと疲れてるから」

リリナさんお手製の果汁百パーのジュースを手にも、美雪先輩がやって来た。

Tシャツにハーフパンツとラフな恰好だが、美人は役得。何を着ても似合うもんだ。

「…明日で、終わりなんすね」

「そうだな…楽しんでもらえたか？」

「ええ、とても…」

「それはなによりだ。私も嬉しいぞ！」

ホントに、美雪先輩は純粋な笑みを浮かべてくれる。飾り立てられた、貼付けられたような上辺だけの笑みじゃなくて、心からの笑顔を…。

「何を感慨深い顔をしてるんだ？」

「…さあ。自分でも、よくわかんないっす」

「なんだそれは？」

こうやって大勢でワイワイやりながら同じ時間を過ごすというのは、ホントに楽しい。だからこそ、明日でこの旅行が終わってしまうと思えば、なんとも寂しく感じてしまうのかもしれない。「わかんない」なんて言葉を濁らせたのは、気恥ずかしさからくる、自分なりの照れ隠しなんだろう…。

「明日からは、また普通の夏休みに戻るな…」

「…寂しいですね」

「…そうだな。だが、何も変わらない。皆で一緒に遊んだ事も、こうしてユキと話している事も、消える事の無い事実だ。たとえこの先、進学や就職で離れ離れになろうとも、私達が同じ時間を共に過ごしたという事実は変わらない。私はずっと忘れないさ——」

「…そうですね」

きつと、俺の気持ちを察してくれたんだろう。寂しいと感じている自分を、慰めてくれるんじゃない…背中を押してくれるような、そんな温かい言葉——。

ドーンッ！

「うおっ！？」

「ふふ、今夜一番のサプライズだ」

響く轟音と、夜の闇に咲いた大輪の花…。

「綺麗ですね」

「ああ」

砂浜に座り、どちらともなく縮めた距離は、肩と肩が触れそうで…。

「……」

「美雪先輩？」

「今だけ…今だけは、何も言わないでくれ——」

ただ、それだけ言った美雪先輩は…静かに掌を俺に重ね、肩に頭を

預けた…。

意識なんてしてない、俺に恋愛感情なんて無いはずなのに……美雪
先輩の横顔を見た瞬間、俺の鼓動は速くなっていた——

48：帰宅（前書き）

短めです。コメディ要素もほとんどありません。

48：帰宅

綾館家の別荘へと来て、四日目の朝。則ち、今日でこの島ともお別れになる。

何となく寂しい気持ちにもなるが、今はそれ以上にみんなと一緒に過ごした楽しい思い出のほうに、俺の気持ちを占めている。

朝食をいただき、家に帰る準備を済ませ、部屋の掃除。“来た時よりも美しく”ってのが、俺の信条だから。

「ユキ、支度は出来たか？」

「ええ」

「…そうか、なら早く荷物を持って別荘の外へ来い。みんな待ってるぞ！」

美雪先輩は荷物を詰め込んだバッグを手に俺を促す。しかし、あと10分くらいは余裕があると思ってたんだが、俺を急かすという事は、結構時間が経ってたのかもしれない。

「ほら、行こっ！」

「…了解！」

不意に手を引っ張られた。けど、手を払いのける理由なんて無い。だから握り返す、優しく…そして強く――

美雪先輩の言う通り、既に全員が揃っていた。

「では、皆様お並び下さい！」

リリナさんは三脚にカメラをセットし、皆を一カ所に集めた。海を背景の記念撮影…皆と過ごした、一生の思い出を撮るために。

「リリナさん早く！」

「え、は、はいっ！」

パシャっ！

慌てるリリナさんつてのも、なかなか珍しい。最後はメイド服という動きにくそうなことも災いしてか、砂に足をとられてよろけながらの滑り込み。

ギリギリセーフで間に合ったリリナさんは、画面中央に位置してた俺や美雪先輩の下の方からのピースサイン。

これには写真が撮れた後で、みんなが笑った。

帰日も綾館家所有の飛行機やらリムジンやらで手厚い送迎を受け、あっという間に俺達の通う学校の近くへ。

「じゃな相澤！」

最初は獅子神さんが車から降りた。

「ユツキーまたにゃん!」「また学校で」

で、次は結城と河南。

「またみんなで遊びに行こうぜっ!」

「じゃね!」

「……（ペコッ）」

大川・如月・湊が車を降りる。

車に残ったのは、綾館姉妹と俺、凜の四人。

疲れが溜まっていたのか、凜はまだぐっすりと眠っている。

「後はもう、ユキ達だけになったな……」

「……そうですね」

名残惜しいとも言っべきか……美雪先輩の言葉が、妙に胸に響いた。

「……………」

「……………」

言葉が続かず、沈黙が社内を包んでいた。けど、何も言えなかったのは、単なる気恥ずかしさだけじゃなくて、楽しかった思い出が、口にすれば安っぽく感じてしまうような……そんな気がしたから――

車は止まった。そこがもう、終点だから――

「美雪先輩…いや、美雪さん。すごく楽しかったです、ありがとうございます！
ございました！」

「ありがとうございます」

「うむ、ユキに喜んでもらえたのは、私にとっても嬉しい！」

車を降りて美雪さんに声をかけたら、綺麗な笑顔でそう言ってくれた。堂々と、そして素直な気持ちで俺に笑顔を向けた美雪さんは、窓から手を差し出した。

「またな、ユキ！」

「ええ、また！」

交わした握手から、美雪さんの熱が伝わってくる…。ほんの2、3秒の時間が、10分にも1時間にも長く感じてしまったのは、何故だかわからない…。

でも、手を離してしまえば…この楽しかった時間が終わってしまうような、そんな気がした――

49：特売日のスーパーは主婦（夫）の戦場！（前書き）

8月突入編。コメディーに戻ります。

49：特売日のスーパーは主婦（夫）の戦場！

俺らの帰宅を待っていたかのように、降り続いた雨。ようやく晴れ間を見せたのは、綾館家所有の別荘地から帰って来て、8日間目のことだった。

雨は強弱をつけた降り方だったので外出する気も無く、欠勤のところは冷蔵庫にあった食材を食い尽くし、一週間自宅に引きこもるという結果となっていた。

その間に綾館姉妹の襲撃は無く、実に静かな毎日だったが、逆に物足りない気持ちになったのは、あの姉妹が俺ん家に居ることが当たり前になっていて、俺もそんな環境に慣れていたからかもしれない。本人の前じゃ、口が裂けても言わねえけど。

で、静かだった一週間くらいの間に、夏休みの課題と称した分厚い“敵（宿題）”に挑み、撃破したのはつい1時間前のこと。すっきりと晴れた天気は久しぶりで、日付を確認すればもう、8月に突入していた。

「凜、ちよつと買い物行つて来る。なんか欲しい物あるか？」

「お姉ちゃん」

「残念だが期待には応えられん」

「じゃあ妹」

「それも無理だ」

「…アイス」

「わかった」

凜はユーモアだな。いや、多分本気だろう…。あいつは昔っから“従姉妹”に懐いてたし、よく姉が欲しいと吐かしてたかな…。

「んじゃ、行つてく——」

ドツカアアッ!!

「ユキイッツ!一週間ぶりにユア・スウィート・ハニーがやつて来たぞ——あれ?」

「美雪、正確には一週間と22時間35分41秒で——あら?」
「~~~~~!!」

「どうした」ましたか?」

ドアに手をかけた瞬間、顔面直撃の扉と共に、やって来たお騒がせ姉妹…。

正直、あまりの激痛に言葉が出ない。

「ユキい?」

「…」

「ユーキー?」

「…」

「ユウキィ?」

「だああ！暑い！鬱陶しい！！くつつくなあつ！！！！」

ようやく痛みは失くなってきたが、スーパーへと足を向けている道中の俺にくつついてきた美雪先輩は、文字通り“くつついている”。こんのくそ暑い日にベタベタされるのは、痛みも相成って余計にイラツとさせる。

「一向にだんまりのユキが悪いんだぞ！」

「その原因はあんただよ！」

「む、玄関の件は謝ったじゃないか！」

「“お、悪い悪い！”って態度のどこが謝ってるんだ！？」

「むう…あんな所にいたユキが悪い！！」

「逆ギレかよ！？」

なんでこの人からキレられなきゃいかんだ…キレてえのはこつちだし！

「一週間だぞ！一週間も私はユキに会えなかったんだぞ！」

「実に静かで清々しかった」

「私は実に寂しかった！ユキがいなくて手足が痙攣したんだぞ！！」

「アル中かよ！？」

まったく…実に変態極まりない。そんなやり取りをしながら、ひんやりとクーラーの効いたスーパーに到着。ああ、涼しい…。

「このスーパーに来たのは二度目だな」

「そっぴやそっぴやでしたっけ。ん…ああつ！」

「ど、どうした！？」

だ、大根が一本19円だと！？しかもお一人様一本限りだと！？あ、

あつちは国産和牛の切り落としがグラム70円!?

「そ、そうか!」

「な、なんなんだ一体...!?!」

今日はこのスーパー、月に一度の大安売りだったのか!?!どつりで客が多いと思つたぜ...。

「美雪先輩!」

「な、何だ!?!」

「今日、ここは戦場だ!」「せ、戦場...?」

そう...安売りに群がる主婦(敵)を押しわけ、数多くのお買い得商品(戦利品)を手に入れなければいけないのだ!この際、「今日は何(料理)をしよう?」なんて考えは置いとくとして、まずは目玉商品を手に入れるべし!

これは主婦(主夫)としての腕の見せどころだな!

「美雪先輩!カゴを準備!」

「あ、わ、わかった!」

「まず手始めに大根を確保!」

「大根!?!あ、あれか...というか人が多いな...」

「突入!」

「え?ち、ちよつと待つ!?!」

「よし、確保！美雪先輩は…あ、いた」

戦場（青果コーナー）でまずは大根を確保し、俺は一時離脱。その間に他の商品を肉眼で捕捉する中――

「それは私の大根だ！離せ！！」

「アタシが先に取ったんだよ！テメエこそ離しやがれ！！」

「なんだと貴様！…あれ？」

「やんのかコ…あ？」

あれ？美雪先輩と壮絶な大根の争奪をしてるのって――

「ああ！貴様はヤンキー女っ！！」

「テメエは生意気女！！」

…獅子神さんだった。

49：特売日のスーパーは主婦（夫）の戦場！（後書き）

スーパーに群がる主婦って、結構すごいですね。かくいう私も、主夫（独身ですが）として、特売日にはよく参加します。どこがどこより幾ら安い！とかはあまり気にしませんが、タマゴや米、食パンなんかの「スーパーの白い三種の神器」が安い時には、けっこうな確率で戦場^{スーパー}に赴いてます（笑）。

50・夏はさっぱりしたものが良い（前書き）

タイトルはほぼ無関係です。

50・夏はさっぱりしたものが良い

「ただいまー！」

「た、ただいま……」

「お邪魔しま〜す！」

俺はいつも通り、美雪先輩はぐったり、来客として来た獅子神さんはテンション高めで帰宅。

「お帰りなさいませ」

「ああ、おかえり」

リリナさんと凜の温度差のある対応にも慣れ、買ってきた食材を冷蔵庫へ。

特売日とタイムセールが重なり、百グラム十円の国産若鶏もも肉を大量ゲットした俺。今日は唐揚げを作ろうと考えている。

もちろん、三日分程の食糧を買い込む中で、必要な特売品は、きちんと確保している。ダテに戦場^{ヤール}で鍛えられたわけじゃないからなおかげで顔見知りの主婦や自炊をやってる独り暮らしの面々からは変なあだ名まで付けられる始末……ま、なんて呼ばれてるかは言わねえけど。

とりあえず冷蔵庫へ“戦利品”を仕舞い、昼飯なんぞを作ろうと思っ——

「お昼ご飯出来ました〜！」

既にリリナさんが作っていた。今日はさっぱり“ざるうどん”だそうな。

ちなみにだが、リリナさんの的には“ざるうどん”に使う麺は乾麺が良いとのことで、今日は日本三大うどんの一つである《水沢うどん》を使用。弾力のあるコシと、通常より細い麺は喉越しが良く、美味堪能させていただいた。

俺と美雪先輩が買い物へ行き、再び家に帰るまでに要した時間は約40分。その間に、稼動中だった洗濯機もすっかり仕事を終え、リリナさんの手によって中庭の物干し竿にて優雅に日光を浴びる状態となり、毎日欠かさない各部屋の掃除も、いつの間にか埃一つ落ちてない空間へと早変わり。

毎度の事ながら申し訳ないと思いつつも、干してある自分の下着が彼女の手によって干されたという事実には、いつも恥ずかしさが込み上げる。

しかし、あの人には俺の常識は通用しないし、逆に論破されかねない自分の不甲斐なさと言語能力の低さから、最近じゃ閉口ばかりだけ。

夏の盛りというべきだろう、八月は何せ暑い！世間じゃエコだとか節電だとかが流行っていて、噂ではゴーヤの成長を利用した“グリーン・カーテン”なるものが人気だとか。

我が家は節電がどうこう言う前に、なるべく冷却装置エアコンを使わないように心掛けている。間取りの関係とかで、家にいるよりも中庭に出てるほうが涼しい。

とはいえ、やはり暑さは厳しい。

「あつづ〜」

「アチイなあ……」

「暑いな……」

「暑いですね……」

予定の無い俺・獅子神さん・美雪先輩と、予定を全て済ませて暇になったリリナさんは、中庭に出られるリビング横の戸を開放して座ってアイスを食べているのだが、やはり暑さには敵わない。

それより、リリナさんの恰好（黒地に白フリメイド服）は、誰がどう見たって熱いんだろうなと思う。

「……ユキ、あの小屋は何だ？」

「ああ、物置ですよ。ただ、何が入ってるかは俺にもわかりませんが」

美雪先輩が指さしたのは、中庭と車庫の間に建てられた小さな“物置”。周りをコンクリートの塀やお隣りさん家の木でカムフラされているので、玄関側からじゃまず見えない。

「ううむ……なんつーか、そういうのって漁ってみたくならねえか？」

「同感だ」

「私も興味がありますわ……ユキ、如何でしょうか？」

あゝ、まあその気持ちはわからんでもない。なんつーか、物置とか倉庫って、宝探しをやってる気分になるんだよな。

「ちとばかり、掘り出し物でも探してみますか」

「賛成！」

「異議無し！」

「そうしましょう！」

こうして、《宝捜し》と称した物置漁りが始ま――

「ユキ、鍵が必要みたいなんだが？」

「鍵？ 鍵なんて知りませんよ。多分親も知らないんじゃないですかね」

「んじゃ開かねえじゃんか！」

――る前に、中止が濃厚となった

51：お宝探し？

小屋（物置）漁りをしよう！と、意気込んだものの、初っ端から鍵が掛かっているという《壁》にぶつかっただけ。綾館姉妹は意気消沈気味なんだが、俺としては、自室にある《工具》を使って、こじ開けてもいいかな……なんて思っている。

念のために親父に連絡を取ってみて、わかった事がある。

この家は中古物件で、物置自体、両親は使った事が無いらしく、おそらく前に住んでいた人の私物が残っているであろう……ということ。

鍵自体は、もともと不明だということ。

前々から物置の存在は気になっていたんで、きちんと中身を調べておく必要があると、親父は思っていたらしい。

漁ってもよいかな？と尋ねたら、割と簡単に許可してくれた。

「——というわけで、多少強引な方法でも開けていいみたいです」

「うむ、お義父様からの許可を戴いたのなら問題ないな！」

「とはいえ、いざ開けるとなれば、簡単にはいかないでしょうね。

電気ドリルとかチェンソーのような工具があればよいのですが」

工具なら、とりあえず一式は揃っているので問題な——

「つか、けっこう錆びてっから、力入れて引っ張ってみりゃ開くんじゃねーか？こっやって、引っ張っ——」

バギィ！！！！！！

「『『『あ』』』」

ドアは開かなかった。しかし、獅子神さんの怪力はドアノブごと引っこ抜く形に……。

「あら、適度に穴が開きましたね」

「い、いや、壊すはずじゃなかったんだ!!」

「あーあ、こーわした〜こーわした!!」

ヤバッ! って感じの獅子神さんに、美雪先輩はここぞとばかりに口撃。つか、からかい方がガキっぽいな。

「まあまあ、どうせ開かなかったら工具を使うつもりだったから。結果オーライですって!」

「まったく……ユキはヤンキー女に対して甘すぎる! 少しはその優しさを私に向けてくれてもいいのに」

何言ってるんだか……優しくすれば付け上がるくせに。

「まあともかく、あとは開けるだけ……あら、開きました」

リリナさんがドアノブ跡の穴に手をかければ、簡単に開いた扉。おそらくだが、獅子神さんがドアノブを引っこ抜いた拍子に、ロックされていたノブも壊れていたようだ。

「さつてと、手間も省けたことだし、入ってみますか!」

「だな」

「ですね」

「あ、ああ……」

案外脆かった戸に拍子抜けしつつ、未開の地だった物置へと足を踏み込むことに。

なんだか複雑そうな獅子神さん、別に気にしてないんだけどなあ。

物置の中は意外とひんやりしていて、埃っぽくもない。

とりあえず物置の中にあつた段ボールや年代物の本などを中庭の芝生に並べていく。俺らの年代にしては物珍しい空き缶のパッケージや週刊誌もあつたのだが、これといってめばしいものは無い。

ま、こんなもんか……なんて思っていた矢先――

「ユキ、ちよつと面白いものがあるぞ！」

物置の最奥付近にいた美雪先輩が、何かを発見したようだ。

「ん？なんすかね、こりゃ……」

「なんだろうか？」

「なんでしようね？」

「なんだろうな？」

美雪先輩が見つけたのは、壺でもなければ掛け軸のような骨董品でもなく、床下に設置された四角い扉のようなものだ。ご丁寧に取っ手まで付いてる。

「とりあえず開けて……つて重っ！！」

予想外の扉の重さに、取っ手に指が食い込む。ギシッと音を立て、扉自体が動くところを見る限りは下に何かがあるような気もするの

だが、それにしたって重い!!

「相澤、ちと代わってみ？」

「ええ？めっちゃ重いつすよ!？」

「いいからいいから!っしょと!!」

ギシギシ……という音と共に、扉(?)はどんどん持ち上がる。
スゲー!!

「っしょあ!!」

厚さ10センチくらいはあろう鉄板が重さの原因だったらしい。
70センチ四方の扉らしき物体を持ち上げた獅子神さんの怪力に敬服しつつ、恐る恐る中を覗き込んでみれば、中は真っ暗。

しかし、光が差し込んで気付いたのは、中へと通じるように《階段》が。

「ほお、これは地下室じゃないか？」

「みたいつすね」

「だな」

想像しうる限り、美雪先輩の言う通り《地下室》のようだ。

けど、入り口の様子を見たりリリナさんは、可愛らしく人差し指を口元に当てて思案しているみたい。

「どうかしました？」

「いえ……これは私の推測なのですが……とりあえず、懐中電灯が何かを持って中に入ってみましょう」

男の俺ですら抵抗のある真っ暗な入り口だが、リリナさんには何

か思い当たるフシがあるみたいで、事前に準備していた懐中電灯のスイッチをオンにして、突入！

俺らも後に続く

懐中電灯の明かりを頼りに中へ進む俺達。やはり地下室だったよう
うで、室内は予想外に広いし埃っぽいが、物置以上にひんやり冷た
い。

「やはり……」

「え？やはりって何……うおっ！」

「ほお！これは……」

「すげえ……」

ライトが照らし出した先、俺達の視界に飛び込んできたのは――

51：お宝探し？（後書き）

前回は50話を突破しました。初めてです、こんなに長く連載したのは。

本来なら、番外編のような《○○話突破記念》みたいな感じで本編とはまったく関係のない話を書いてみたほうがいいのかもしれませんが、何せ私は行き当たりばったりな感じなので、本編だけで手一杯……いつか、心に余裕を持って取り組んでみたいと思います。

おかげ様でPVは5万件を突破し、ユニークアクセスも後少しで5桁を突破しそうです。

心より御礼申し上げます。と、同時にお気軽な感想・評価もお待ちしております！

52：未成年には無用の長物（前書き）

タイトル通りです。ちなみにですが、文中に出てくる《名前》はあてずっぽうですので、深くは追求しないで下さい（笑）

52：未成年には無用の長物

リリナさんの手にした懐中電灯が照らす先には、おびただ夥しい数の酒瓶が列んだ棚が！！

「やはり《カーヴ》でしたか」

「『かあう？』」

「《カーヴ》というのは酒倉のことで、一般的にはワインの貯蔵に用いるのですよ。この入り口へと入る前に、少しの埃っぽさと冷風を感じたので、まさかとは思ったのですが……やはり推測通りでした」

リリナさんの説明によれば、ワインや日本酒などのアルコール類は、光度・気温・室温に大きく左右されやすく、味なんかも変化するらしい。人間と一緒に、酒も日焼けをするらしく日に焼けた酒は、香り・味が落ちるんだとか。

「ワインの本場フランスでは、ワインを貯蔵する際に半地下で気温・室温が一定に保たれたカーヴで保存するのですよ」

流石は完璧メイド！知識も人並み以上である。

その後、念のために照明のスイッチを探し、棚の裏側で発見。ダメもとで押してみたら、意外にも点灯！お酒の事を考えてか、照明を点けても薄暗い。

「それにしても……」

「すげえ数だなあ……」

「まさに圧巻だ……」

「私も、これほどの数のワインを見たのは初めてです」

照明によって浮かび上がったカーヴの全体面積・ワイン（その他複数の酒類）の数に、圧倒された一同。その数は、ざっと見積もっても数百以上……下手すりゃ千本位ありそうだ。

「コルトン・シャルルマーニュの79年物に、ムルソーの76年物……こちらにはシャトー・マルゴの66年物に、オーブリオン・ボルドーの70年物!!」

リリナさんは興奮気味だが、未成年の俺達三人には、何を言ってるのか全然わからん！

「ユキ、これは恐ろしく高価な品物ばかりですよ!」「は、はあ……」

「姉様、さつきからコルトンだかコットンだか言っていたが?」「ワインの名前ですよ美雪。今ではヴィンテージ物となった物や、プレミア物まで揃っているのです!!」

饒舌が止まらないリリナさん。どうやら相当な価値があるっぽい。しかも、ワイン以外にもウィスキーや沖縄の古酒、その他にも酒マニアには生唾ものばかりだとか。

俺にやまったく理解できんが……。

「姉様、ちなみにだがお金に換算すれば幾らになるのだ?」

たかが酒だろ?いくら高くても、大した額にはならねえだろ。それに、このワインだって普通に酒屋に置いてあるんじゃないや——

「うーん……総額はいかほどかはわかりませんが、ユキが手にしているシャンパンの《クリュグ》は、たしか10万位だったと思いま

すけど」

な、な、な！！？？

「何い！！？？」

ツルツ

「ギャアアアッ！！！！落ち——」

ガシッ！

「つと！セーフ——」

獅子神さんが、俺の手から滑り落ち、床に接吻しかけたシャンパンを滑り込みキャッチ——！これほど感謝したいと思っただけがないほど、俺は獅子神さんに対して

「姐御！何処までもついて行きます——」

120度くらいのお辞儀＋やくざ映画に出てきそうな口調で感謝の意を述べたら、「阿呆！」と獅子神さんからげんこつを頂戴してしまった。

まあいいさ、諭吉様10枚分に比べりゃ、げんこつなんて安いもんだし！

その後、俺の視界に入ったお酒は全て《札束》にしか見えなくなってしまうという恐怖に苛られ、一通り散策した後、カーヴから出ることに。

ここで再び美雪先輩が、入って来た方角とは違う場所の階段を登

見。全員で上つてみて、光が差し込む《出口》的な場所に辿り着き、先陣をきって俺が扉（？）を押し上げると――

「……何してるの？」

牛乳を飲んでいた凜が居た。つか、帰ってたのか。凜が居た場所はキッチンの冷蔵庫の前であり、薄いカーペットが敷かれている床付近に俺達は出てきたらしい。

考えるに、中庭からリビング、そして俺達が出てきたキッチンまでの面積の地下室だったようで、俺や凜や両親には知られず、お酒はずっと眠り続けていたようだ。

凜にことの経緯を説明した後、再び親父に連絡を入れて説明。その後、親父から家を買った際に仲介となった不動産屋の連絡先を聞き、以前に住んでいた人の住所と連絡先を教えてもらった。

再び電話を取り、教えてもらった連絡先に電話を入れれば、老いた男性の声が返ってきて、いきさつを説明。男性は畑中という人で、今ではアパート暮らしをしているそうだ。

ワインの引き取りをお願いしたのだが、返ってきた言葉は意外にもNOで、なんでも酒に溺れて事業に失敗し、酒の話は聞きたくないと言つ。

ならばと思い、カーヴで眠る酒の総数資産には満たないが、それなりの《金銭》の話（綾館姉妹の案）を持ち出してみたが、これも「酒にまつわる金なんざ一円も要らない」とのこと。結果的に「

飲むなり売るなり好きにしている」と言われ、俺は望まずして大量の酒を手に入れることになった。

「で、どーすんだ？」

「う〜〜ん……」

獅子神さんに尋ねられても、まともな返事は出来ない。なんせ、売りに出すには保護者からの委任状、もしくは同伴が必要になるし、未成年だから飲むわけにもいかない。

「とりあえず、今度はお袋にも連絡を入れて見ますね」

頼みの綱は、親父では無くお袋の菜々子。だって親父、まったく酒が飲めねえし。

お袋に連絡を入れたが、すぐに留守番電話サービスに接続された。まあ、多忙なんだし仕方ないが。

あれこれと議論しつつもなかなか話が纏まらない俺達。そんな折、携帯電話の着信が。言わずもがな、お袋からだった。

『もしもし！由希から電話なんて珍しいわね。で、どしたの？』

なんとテンションの高い我が母、菜々子。とりあえず経緯を説明。

『マジ！？んじゃ大至急取りに行くわ！ちよーど来月の打ち上げにワインが必要だったのよ！ところで味はどう？腐ってない？？』

「飲んでねえのにわかるわけねえだろ！」

『ええー！勿体ないわね、んじゃすぐに帰るわ！！』

テンションが高いまま、お袋は嵐のように言葉をまくし立てた後、一方的に電話を切った。

その後2時間、再び俺達はあーだこーだと議論を繰り返すが、結論としてお袋を待つ事となった。

52：未成年には無用の長物（後書き）

お酒……未成年の方にはあまり無縁な言葉でしょうが、私は苦手ですね。

特にワインは苦手です。ま、味覚が子供っぽいからでしょうが（苦笑）

53：たまには私がメインです！（前書き）

視点はユキですが、後半に活躍するのは“あの人”です。

53：たまには私がメインです！

急遽帰宅するという母は、直線にして4、500キロはあるであろう会社から自宅までを、飛行機を使って、空港からタクシーを乗り継ぎ、約2時間で――

「ただいまー！！」

ご帰宅なされた。

我が母、相澤菜々子は30歳で専業主婦から一転し、現在の化粧品会社である《Clear》を立ち上げた。

自分自身の経験を生かし、主婦の観点から作り上げたオリジナル化粧品は《アラサー》・《アラフォー》などと呼ばれる女性を中心に支持を集めるまでになり、今では若い世代にも注目されるほどの有名企業に成長。

現在42歳の母は、ひいき目にみても他の同級生の母親よりは若い……と思う。おそらく《化粧品》のおかげだろうけど。

「由希は相変わらず目付きが悪いわねー！」

ほっとけ！目付きが悪いのはアンタ譲りだよー！

「凜も相変わらずのようね。っと――」

「お久しぶりですお義母様！」

「不躰ながら、今日もお邪魔しております」

そついや、綾館姉妹はお袋に会った事があったつけ。にしてもだ……美雪先輩、その《お義母様》はやめれ。

「由希の結婚は早そうね！私も近いうちに“おばあちゃん”かしら？」

話が飛躍し過ぎ——じゃなくて！そんな関係じゃないっつーの！！

「あら？こちらの《ワイルド美人》さんは……？」

「あ……アタシは獅子神紗姫っていいいます！相澤……じゃなくて、よ、由希くんにはいつもお世話になってます！！」

あ、獅子神さんはお袋に会った事無かったんだよな。って——

「ち、ちよつと母さん！そんなにジロジロ見たら失礼だよ！」

舐めるような——という表現が適切だろう。お袋は獅子神さんに近づくと、上（頭）から下（足のつま先）までを、それこそ“舐めるように”じっくりと観察。獅子神さんは、当然——

「な、なんす……か？」

怯えるように、体を震わせた。

するとお袋、悪びれた様子もなく獅子神さんの前に対峙して——

「身長は173で、上から88・59・87……かしら？」

なんか暗号的な言葉を口にした。そんな言葉に、獅子神さんはおるか美雪先輩やリリナさん達、女性陣が反応。凜は——呑気にアイスを食べていた。

「当たり前？」

「は、はい……！」

「ちなみに美雪ちゃんは168の、上から80・56・82で――」
「なっ！……！」

「リリナちゃんは171で、91・60・89……かな？」

「まあ！お見事ですわ」

美雪先輩は顔を赤らめ胸を手で隠し、リリナさんは優しげな目尻を少し見開いた。

なんとなくだが、美雪先輩が胸の辺りを手で隠す動作を見て、俺も数字の意味がわかった気がする。

「えっと、凜は……」

「ぶっ」

「あ……」

「蹴る」

「え――」

「刺「ごめんなさい！」」

我が家の上下関係は《凜＞母＞父＞俺》である。男子陣は不甲斐ないが、我が家最年少の凜に土下座する親というのも、如何なものか。

それはさておき、ようやくわかった事がある。それは母が口にした数字の意味。身長は容易に理解出来たが、その後の二桁の数字……これはB・W・Hだ。
バスト ウエスト ヒップ

リリナさんと獅子神さん、たしかに二人は胸が大きかつ……いや、なんでもない。

「ユキ、なぜ姉様とヤンキー女の胸を見てる？」

ほっとけ、男の悲しい性だ。^{さが}

さて、そんなスタイルの話はどうでもいいので、本題に入らせてもらおう。

今回、我が母である菜々子に帰って来てもらったのは、『小屋漁り』と称して物置で見つけた地下室^{カーヴ}と、そのカーヴで眠っていた様々な酒類についてだ。

まずは母を地下室に案内。行きは戸の軽いキッチン側から。

「うわっ！こりゃ壮観だわ！！」

「一応、電話で話した通りなんだけど」

「ああ、確かにこれはタダ（無料）で貰うつてのは気がひけるわ…

…ま、大丈夫！こっから先は大人に任せなさい！！」

頼もしい事を言ってくれた母は、まずは一度カーヴから出て、俺が不動産屋から聞いていた、以前この家に住んでいた住人の方に連絡。意外にも通話時間は10分にも満たず、揚々と帰ってきた母は

「幾らなんでも、金の魔力には勝てないのよねえ！アッハハハ！！」

社会の『裏側』を臭わせる言葉を口にしやがった。出来れば聞きたくなかったが……。

とりあえず、数百……いや、千本はありそうな酒類は正式に我が家の所有物となった。

「さあて、とりあえず飲んでみよつか！」

母、菜々子は酒豪である。俺の記憶にある限り、仕事が多忙になる以前は毎晩のように、晩酌していたのを覚えている。

「では、こちらのシャトー・ラフィット・ロトシルトは如何でしょうか？年代的には少し《若い》かもしれませんが、さっぱりとした味を好む方にはちょうど良いと思われそうですよ」
「リリナちゃんは物知りね、助かるわ！」

さて、母とリリナさんを除く美雪先輩、獅子神さん、俺、凜にはさっぱりわからん会話を交わしながら、リリナさんは予め用意しておいたコルク抜きで栓を抜き、ワイングラスに少しだけ注ぐ。

「ん……ん！ふむ……んん、美味しい！！」

グラスに入ったワインを飲む前に、匂いを確かめ、口に含み、あらかたの時間をかけた後ようやく飲み込んだ母は、ニコリと笑みを浮かべた。どうやら腐ってはいなかったらしい。

その後も二、三本程のワインを試飲した母は、納得したようにリリナさんの説明に耳を傾けていた。

「いやあ充分だわ！むしろ充分過ぎるくらいの仕上がりだわ！！」
「カーヴの室温・湿度が、ワインをはじめとしたここにある酒類の熟成に適していたのでしょう。それでは、菜々子様の催される打

ち上げに必要と思われるお酒を幾つか、選んでみましょうか？」
「そりゃいいわね！是非ともお願いするわ！！」

成人同士、話が合うのはいい。しかしながら――

「なあ、アタシらってここ（カーヴ）に居る意味あんのか？」

「無いですね」

「無いな」

「無い」

蚊帳の外な俺達一同。やっぱし酒は、俺らにや無用の長物だ

53：たまには私がメインです！（後書き）

ユニークアクセス10,000件を突破いたしました！皆様、ありがとうございます！！

日々、読者の皆様に楽しく読んでもらおうと精進し、頑張ります。
お気軽な感想・評価も待っています！

54：基本的に味方はいません（前書き）

サブタイはあまり関係ありません。

54：基本的に味方はいません

さてと……ワイン（その他酒類）の件は片付いた。

「母さん、今日は泊まり？」

「もち！3日くらいは滞在するわ」

「ならば、家族水入らずを邪魔するわけにはいかんな」

「そうだな」

「ええ」

現時刻、午後5時。たしかに帰るにしてはちょうどよい時間かもしれない。

「ええっ！もう帰っちゃうの！？」

「さすがに長居は迷惑ですので」

「うむ、婚約者とはいえ、そこまで厚かましくは出来ない」

「ま、こいつが《婚約者》とかどうかは知らねえけど、その意見にや賛成だ」

獅子神さんとはかくとして、この姉妹はなんつー《猫被り》！その心遣いを普段からしてくれりゃなあ……

「まだいいじゃない！親御さんには私から連絡しとくからさ」

「ううむ……お義母様がそこまでおっしゃられるならば——」

「私は美雪に任せます」

「ま、別に帰ったって誰もいねえかな——」

「なら決まり！由希、どんどんオツマミ作って！——」

まあ大方は予想出来てたさ。しかし、菜々子（母）は飲む気満々だなあこりゃ。

せっかく買い出しに行ったのに、こりや間違はなく食糧は尽きるなあ……なんて思ってたら、リリナさん、携帯一つで何かを指示し、俺見てニツコリ。

その意味を知ったのは、約15分後のこと――

ピンポーン！

「こんにちはっ！相澤由希様っすね？」

「は、はい」

玄関には、宅配便らしきあんちゃん風の人。その後ろでは、同じく宅配便らしき人が二人、1メートル四方のでかい荷物（発泡スチロール箱）を抱えて待っていた。

「どうもっ！綾館家にて配送を一任されてる鞍口っす！リリナ様から連絡をいただきまして、食材をお持ちしたっす！！」

「え、ええっ!？」

「あら、鞍口くん。早かったわね」

「お疲れ様っすりリナ様！」

助け舟登場。^{リリナ}ホント、この人って細かい所によく気付く。流石は完璧メイドだ！

「食材は鮮度が命ですから！トラックぶっ飛ばして来たっすよ！」

「あらあら、それはご苦労さ——」

ウー！ピーポーピーポーピーポー！

なんだこのサイレン？あれ？なんか《市民の安全を守る職業》の人が鞍口さんの後ろに立ってんだけど……

「鞍口渉、住宅地での無謀運転の現行犯だ！」

「うっす！」

「「うつす!」じゃない!!これで5度目だ、とりあえず署まで来い!」

「わかってますって！別に逃げないっすから。んじゃ、相澤様、リナ様、失礼します！！美雪お嬢様にもよろしくとお伝えくださいます！」

え、ええっ！？！？。っただけ警察に慣れてんの鞍口さん！？つか
5度目って……

「面白いでしょう?」

そんなレベルじゃないですよリリナさん！

「鞍口くんは昔、《暴走族》で総長をやっていたので、走り屋気分が抜けていないのでしょうかね」

「なんつー経歴……」

「でも、彼のような経歴の人ほど仕事に対して真面目な方が多いのですよ。さて、食材も届きましたので早速調理に——」

ちよい待ち！鞍口さんはどうすんのリリナさん！！あの人は俺達

のためにトラックぶっ飛ばして来たんですよ!?

「御心配なさらずとも大丈夫ですよ、鞍口くんの件に関しては何時もの事ですから、既に手は打っております」

「その前に心を読むのはやめてくれませんか?」

「そんな技術はありませんよ。ユキの顔に書いてあったのです」

俺ってそんなにわかりやすいんだろうか?

ともかく、嵐のような鞍口さんの一件は大丈夫らしいとわかったので一安心の俺は、他の二人が抱えている荷物を受け取っ——重
っ!!!!!!

「うんまつ! やっぱリリナちゃんの料理は最高だわっ!」

「お褒めいただき光栄ですわ」

今日は母が居るという事で、リリナさんは《お酒に合う料理》を作ってくれた。《酒の肴》ってのはご飯も進む! ちよい濃いめの味付けだが、かえって食が進むので、最近バテ気味の身体にはベストのようだ。

「リリナちゃんは成人は迎えてるのよね?」

「ええ、一応は高校生ですが」

「獅子神ちゃんは?」

「19になっただばかりですが」

「19かあ……建前上は、お酒は進めらんないけど、今日は別！せっかくお酒が手に入っただから、一緒に飲もう！！」

「まったく、何を言っただか。ま、獅子神さんくらいになれば、お酒飲んでも大丈夫か——」

「美雪ちゃんは17で凧は15だけど、四捨五入すればお酒飲める歳よね？」

「うおい！明らかに未成年の二人に酒を進めんな！！
ま、まあいくら美雪先輩とはいえ、そんなダメ人間の誘いには——」

「お義母様のお誘いとあれば！是非に！！」

「私も構わないわ。どうせ夏休みだし、家の中だから」

良識の欠けた二人だった。

「私は構いませんが」

「嬉しいお誘いつすけど、アタシはバイクで来てるんで——」

「泊まればいいじゃん！女の子の5人や10人くらい余裕余裕！着替えも私のお古でいいなら沢山あるから！」

「えっと、じゃあ……お言葉に甘えよつか……な」

母の毒牙にまた一人……ホント、目的の為なら手段は選ばねえな。

「由希もどう？」

「俺は遠慮し「まさか女の子だけにお酒を飲ませる訳はないよなユキ？」」

「いや、お「ユキ、美雪の言う通りですよ？」

「だから「飲もうぜ相澤っ！」

「けど、やっぱ「ユキ、少しは空気読め」

毎度毎度の事ながら、ホント俺には味方がいない。つか、凜の「

K（空気）Y（読め）」発言が、俺が一番堪えたよ……

55：母の交渉（前書き）

申し訳ありません。文面グダグダです（謝）

55：母の交渉

「ほお……新しい化粧品のコモモデルですか」

「うん、けどさあ……中々イメージするようなモデルの子がいなかったわけ」

皆が泊まる事を前提に、母を含めて晩酌中。現在の話題は、母が経営している化粧品会社の新製品について。

「という事は、見つかったわけですね？」

「そうなのよりリナちゃん！考えてみたら、わざわざモデルの子の中から探す必要なんてないじゃない？ちよつと視野を変えてみたら、見つけたのよ！」

なんともテンションの高い母。よほど嬉しかったんだろうな。

「へえ、どんな人なんだろう？」

「どんなって、目の前に居るじゃない！ねえ、獅子神ちゃん？」

「ぶふあっ!？」

事前通告無しだったんだな。派手に古酒（泡盛）を噴き出してるし。

「な、なんすかいきなり!？」

「え？言ってなかったっけ?？」

「聞いてないっすよ!」

「まあまあいいじゃん！でさ、やってみない？コモモデル!」

「ケホッ、ゴホッ、無理無理無理無理！絶っっ対無理です!」

獅子神さんの拒絶反応がすげえ！よっぽど嫌なんだろうな。咳込みながら、ブンブン手え振ってるし。

「ええ、いいじゃん！それなりの《お礼》は弾むよ！？」

「無理ですって！だ、だいたいアタシなんかモデルなんてガラじゃないし、第一モデルってスタイルが良くなきゃ出来ない仕事ですよ！？」

「大丈夫だって！獅子神ちゃんって並のモデルよりスタイル良いし、顔だって美人！なにより私の求める《ワイルド系美人》そのもののよー！」

さて、カーヴ（地下室）での母とリリナさんのような感じで、俺・綾館姉妹・凜は会話の外にいる。ようはほったらかし状態。

「お義母様は仕事熱心でいらっしゃる」

「その《お義母様》はやめれ」

「凜様、お代わりは如何ですか？」

「もらおう」

あ、やばい！凜は既に酔ってんな。言葉が《気難しそうなオッサン》口調になってる。

「しかし、義母様には悪いが、交渉は難航しそうだな」

「《お》を取れば良いって問題じゃないっつーの。まあ、多分……

軍配は母さんに挙がりますよ」

母と獅子神さんの様子を交互に見ていた美雪先輩はそう言う。たしかに、獅子神さんは「モデルなんか絶対無理！」の一点張りで、一向に折れる気配を見せてはいない。

しかしながら、獅子神さんが母に言いくるめられる様子を比較的簡単に想像できたのは、母が交渉に長けた人だということを知って

いるから。

俺の話はさておき、それでは母と獅子神さんの様子をご覧いただく。

「どうしてもダメ？」

「無理です！」

「どーしても？」

「ダメです！だいたい、アタシなんかじゃなくても他にいっぱいいるじゃないですか」

「そうは言っけどさ、なんかこう……見えたのよ！《ビジョン》が
！」

「びじょん？」

「ビジョンってのは、たしか《画面》とか《映像》って意味だった
っけ？」

「そう！スクリーンに映し出された獅子神ちゃん、大売れで鳴り止
まない出荷要請の電話！」

「で、でもアタシじゃ………」

「もちろん、無理強いはしないけどさ……でも、どうしても私は獅
子神ちゃん……いや、紗姫ちゃんにモデルをやってほしいの！」

「……ホントに、アタシなんかこんなお話をしてもらって、女性
としては嬉しいんですが——」

美雪：「なあ、やっぱり無理っばいぞ？」

俺：「これくらいで諦めるような人じゃないですって」

「そっかぁ……じゃ、この新製品のCMは無かったことになるなあ

……」

「え？でも、アタシ以外のモデルさんを起用してCMを作るんじゃない？」

「ダメなのよ、私は化粧品の口紅一本作るのもCMを一本作るのも、常に全力でいたいのに！常に納得したものを作りたいのよ！私が獅子神ちゃんを化粧品モデルに起用したいのは、私が貴女なら納得出来るCMを作る、私が作った化粧品の1番使いこなしてくれると思ったからなの……」

美雪：「これは……私なら一も二もなく引き受けるだろうな。ヤンキー女も、ぐらついてるみたいだ」

俺：「母は仕事熱心ですからね。でも、まだまだ押してくるはずですよ」

「でも、ダメね……私は、納得出来ないと世には出さないの。このままだと、CMも新製品も、世には出せないわ……」

「そんなんっ……」

「社運を賭けた商品だったんだけど、このままじゃ社員にお給料も払えなくなるかもしれないわね……」

美雪：「これは――」

俺：「何も言わないで下さい。言わんとする事は把握出来てますので……」

母、最後の作戦……それは《脅迫》。手段を選ばないところは、我が親ながら恥ずかしい！！

「社員のために妥協するべきだとは思うの。適当に宣伝して、可も不可もない売り上げさえ出してれば、たしかに会社はやっていけるけど、それじゃ私のプライドが許さないのよ！私は私が納得出来なきゃ、何も世には出したくないの……」

「……………」

「あ、アハハ！ごめんね暗い話して、ホントに、獅子神ちゃんに化粧品モデルをやって欲しかったんだけどなあ……でも、叶わないかでも仕方ないよね、無理強いはいけないもの……あーあ、これで明日から皆路頭に迷うはめになるなあ……」

美雪：「エグい……」

俺：「恥ずかしい……」

「わ、わかりました！！」

「え？」

「ア、アタシなんかそこまで期待をしてくれるのであれば、不肖、獅子神紗姫！ど素人ですが、菜々子さんのお役に立てるよう頑張りますー！！」

「ホントに？CMに出てくれる？化粧品モデルをやってくれるの？」
「アタシも妥協なんて言葉は嫌いだし、口にした以上は引っ込める」

わけにはいかねえ……CMだろうがモデルだろうが、全力でやらせてもらいます!!」

「いやっほーい! ありがとう獅子神ちゃん!!」

美雪・俺: 「「堕ちたな」」

交渉は成立したようだが、息子(俺)の前で“出演料”とか“契約金”とか、リアルな《お金》の話はやめてくれ。

あれ? そっぴや凜とリリナさんは――

「ユキ、凜様はダウンされたようなので、お部屋のほうまでお運びしておきました」

「何から何まですみません! そっぴや、凜はどのくらい飲んでたんですか?」

「ええと……“ドン・ペリニオン”が一瓶と、“灘の白鷹”を冷で5杯くらいでしょうか?」

げっ! あいつ(凜)飲み過ぎ!!

56：酔いも様々……

母はニンマリ、俺はゲンナリ……。

交渉成立と相成った母は、受かれ気分の上機嫌。対する俺、《大
人の下劣な一面》を見せた母に引き気味である。

一方、半ば強引とも思える母の交渉によつて、化粧品モデルを引
き受けた獅子神さん。やけくそ気味に「何だつてやつてやらあつ！
！」つて言つてたんだが、その後飲み続けて1時間――

「アタシにモデルなんて出来んだろうか……やっぱ引き受けるんじ
やなかったあ……」

酔つてネガティブになっていた。うわあ……《姐御肌》が特徴の
獅子神さんの「やべえよ……やべえよあ……」なんて言つてる姿な
んて見たくなかった。

「ユウキい……飲んでないじゃないかあ！もつと飲めえ！！」

「うわっ！酒臭っ！！」

「なんだとお！私が美人なのは昔からだぞおっ！！」

「ひとつ言も言つてねえよ！！」

美雪先輩は会話のやり取りが出来ねえほど酔つてやがる。美人で
絡み辛い酔い方する人つて、普通の人なら引き気味になるだろう。

しかし、俺は大丈夫！！

何故かつて？美雪先輩は俺にとつちや《うざキヤラ》の立ち位置
だからな。酔つたところで“免疫”が付いてる俺にはあまり変わら
ないのだ。

ま、《うざキャラ》ってのはちよつと言い過ぎかな。

そついや一つ《気掛かり》なことがある。

それは――

「あつはははははは！ーリリナちゃんって“イケる口”ねっ！」

「うふふふふふふふ！ー菜々子様こそ“お強い”ですわ！」

笑い上戸な母とリリナさん。テーブルの上や下には、おそらく二人で開けたであろうワインや日本酒、ウイスキーやシャンパンの空き瓶が10本以上……。

酒量は常人の域を超えているが、そんな事など関係ないとばかりに飲むペースが衰えない。

さて、酔っているとはいえ《笑い上戸》以外はあまり変わらないリリナさんに、美雪先輩と獅子神さんのことは任せて大丈夫だろうから、俺は先に風呂でも入るか。母さんは……ほつといても問題ないか。

麗しきかな、適度に焼けた肌・弾ける水飛沫・胸横の斜めに入つた刺し傷――ごめん、俺でした。

あゝ俺も相当酔ってんなあ……。

まあともかく、酔って火照った身体にシャワーの冷たい水が心地良い。なんだか酔いも醒めていくようだ。

「ユウキい！背中流しつこしよう！！って、あ、開かなっ！？」
「いますぐ脱衣所から出ていけえっ！！」

前言撤回！やっぱ酔ってる暇なんて無え！！

風呂場でギヤーギヤーと喚きながら、何とか脱衣所から美雪先輩を追いつ出し、ジャージに着替えて再びリビングへ。本来なら風呂上がりはタンクトップにトランクスという簡素な恰好だが、今回はそうもいかない。なんせ《男女比率》が5：1だからな。

さて、いい加減、あの二人も酒量が――

「うおっ！増えとる！？」

空き瓶が風呂前と今とで全然違う！明らかに増えてる！！しかも倍近い！！！！

「由希、美雪ちゃんは？」
「え？来てねえの？」
「見ておりませんよ。たしかユキがお風呂に行ったので、けしかけたところまでは記憶しておりますが」

か。

「ユキの匂いがするぅ……んにゃ……」

寝言まで変態チックだなオイ！

自室のベッドは美雪先輩に占拠されたので、寝るのはリビングのソファにでもしようと考えている俺だが、リビングには酒豪が二人と酔い潰れたライオン（獅子）が居るので、まだまだ眠れる雰囲気じゃない。

つか、まだ9時にもなつてねえしな。

「ユキ、美雪は居ましたか？」

「俺ん部屋のベッドで呑気に眠ってましたよ」

「あら、無防備な女の子を前にして、何もしてないの!？」

「しねえよ!そんな奴はケダモノだろが!！」

「男は基本、ケダモノですよ」

菜々子（母）は息子（俺）を犯罪者にしたいのだろうか？リリナさん……あなたは男の何を知ってるんすか!？

「ああはははははははははは!……!……!」

だあっ!!酔っ払いつてホントに質が悪い!!

「うああ……白玉が……餡蜜が……みたらし団子があ……!!」

今度はデザート（和菓子）に襲われてるみたいだな、獅子神さん。
そのファンタジー（？）な夢の中を見てみたいよ。

57：宿酔い達の朝（前書き）

二日酔い（宿酔い）って辛いですよねえ……未成年の方にはわからないでしょうが（苦笑）

57：宿酔い達の朝

リリナさんに担がれ、早々に自分の部屋で就寝となった妹。

酔っ払って脱衣所（風呂場前）に乱入し、その後は勝手に俺の部屋のベッドを占拠した揚げ句、「ユキの匂いがするう」なんて変態らしい寝言を吐かしやがった美雪先輩。

いつもは姐御肌で何かと世話になりつつ、案外可愛い部分もあるのに、酒に飲まれてネガティブになった状態のまま、テーブルに上体を突っ伏す獅子神さん。

ま、これら三人は早々に眠ってしまったので問題は無いのだが、残る二人が、俺にとってはアルコール以上に頭痛の種になっている。

「アッハハハハハハ！！」

「オホホホホホ！！」

笑い上戸な母とメイド。テーブルには、空となった酒瓶の山……。話は尽きないようで、騒がしい。

「母さん、そろそろ寝たら？」

「ん？ 由希は堅物ねえ」

「まったくですわ。自分の部屋で眠る妹に手を出さないなんて……据え膳喰わぬはなんとやら……ですよ？」

「アハハハハハハ！！」

手えつけられん……。堅物なのは関係ないし、自分の妹に手を出

せなんて、普通言わないだろが！出した時点で犯罪者の仲間入りになるだろ！！

「さあつて、堅物息子は放っておいて、風呂にでも入ろつか！」

「でしたらお背中を流しますわ！」

「あら、至れり尽くせりねえ！うちのお風呂は大人四人くらい余裕で入れるから、一緒に入りましょ！！」

「光栄ですわ！！」

ああ……騒がしい……。でもようやく、俺にも安眠出来る時間がやって来たようだ。

起床時刻、午前6時。何時もより1時間くらい遅いが、まだ誰も起きてる気配は無い。

なんせ、俺はリビングのソファで寝てたからな、台所や各部屋へ行く場合には、リビングを通る必要があるんだが、その形跡も無いし。

身体をバキボキと鳴らし、まずはゴミ捨て。今日は……古紙か。騒がしい昨晚から一夜明け、辺りはすっかり朝になっている。ただ、まあ……暑い事には変わらない。

そんなこんなでゴミ捨てを終え、我が家に戻って洗面所で洗顔・

歯磨き。その後は直ぐさまエプロン着用。なんせ飯食わなきゃ、一日が始まらない。

「……粥か？」

昨晩は酔っ払いが増加したので、あつさりとした食事が良いと思うのだが、お粥は安直過ぎるような気もする。

まあ結果として粥を作る事に変わりは無いのだが、ちょっとした工夫は必要になるな。

「お、おはようございま……うつぷ!？」

「おはようございますリリナさん。大丈夫ですか？」「き、昨日は調子にのり過ぎまし……た」

リリナさんが弱ってるし。酒って強いな。

ま、自業自得だな。……半分くらいは菜々子（母）のせいだけだ。

「わ、私も、何かおて、お手伝いいたしま……うう……」

「とりあえずテレビ横の薬箱の中に“胃腸薬”があるので、それでも飲んで下さい。手伝える雰囲気じゃないみたいなので」

「こ、今回はお言葉に甘えさ、せていただ……ぐう……」

よろよろと壁を頼りに薬箱へと向かうリリナさんの為に水を用意し、再び朝食作りに取り掛かる俺。

うん、とりあえず副菜を作ってみるか。

高菜の胡麻油炒め・鳥そぼろ・野菜味噌・鮭フレーク・梅とかか（鰹節）の和え物……副菜はこんなもんでいいか。

いつも思うんだが、ただの白粥に梅干しだけじゃ、味気ない思っていた。栄養価だって知れてるもんだし。やっぱ朝飯は活力の源だからな、副菜を粥の上に自分で自由に乘せて食べるスタイルなら、身体と好みに合わせて食べる事も出来るだろうし。

「ユ、ユキ……おは、よ……うつぷ！」

あんたもか美雪先輩。

「うう……相澤……お、おは……よ……」

ううむ、獅子神さんも二日酔いだなこりゃ。

「おはよう由希！ありゃ？みんなどした？？」

流石、鉄壁の胃袋を持つ《うわばみ》菜々子。

「ユキおはよう」

そして“うわばみ”の血を引く凜も普通に起きて来たみたいだ。そういや、俺も昨晚はけっこう飲んだ（飲まされた）はずだが、体調に影響は無い。これも“血”だろうか？

さてと、全員揃ったみたいだし、朝飯食うか！

「うむ、これは良いな！胃にも負担がかからない」

「ああ、自分の好みに合わせて食べるスタイルもありがたい！」

「流石はユキ、味付けも申し分ないです。私は野菜味噌が気に入りましたわ」

宿酔いの三人には好評のようだ。作った俺としてもありがたいお言葉である。 とはいえ――

「由希、私は物足りないんだけど。なんかカツ丼とかないの？」

「私はサイコロステーキが食べたいわ。200グラムくらいの」

我が家の肉食系女子（？）には、あんまり評価を得られなかった。つか、どんだけ朝から濃いんだよ、見ろよ周りを！げんなりしてるだろが！！

58：妹は母の血を濃く受け継いでいる（前書き）

文章短めです。

58：妹は母の血を濃く受け継いでいる

結局、菜々子（母）と凜（妹）は、朝からガッツリとトンカツを召し上がりやがった。買い物した際に肉を買ってて良かったよ、まったく……。

「ユキ、美味しかった！ご馳走様！！」

「誰かに料理を作ってもらうというのは、嬉しいものですね。ユキ、ご馳走様でした！」

「美味かった〜！なんか身体もスッキリしたぜ、ご馳走さん！！」

お粗末様です。喜んでくれてなによりだ。

まあ、綾館姉妹も獅子神さんも、朝飯を食ったら各々自宅へと帰って行った。んで現在、我が家には母・妹・俺の三人が居る。母は休暇と称して、フローリングの床に寝転びファッション誌に目を通し、妹は部活という名目のもとに外出の準備。俺は課題も終わったので、いつものように洗濯・掃除・皿洗い。

「っし、終わった！」

「ご苦労さん」

俺に一切の視線も向けず、イラッとするような感情の籠ってない感謝の言葉を返す母。そんな性格は、凜がバツチリ引き継いでるよ……なんて思っていたら、いきなりガバツと跳ね起き、「そういえば……」なんて呟いた母は、俺に顔を向けた。なんなんだ？

「さっきのツリ目美人の……獅子神ちゃん、だっけ？あの娘と由希って、どんな関係？」

「どんな関係って……どんなんだろうか？」

正直なところ、俺と獅子神さんって、なんなんだろう？ まあ一番しっくりくるのは“友達”だろうな。……年上の女性に対して友達というのもどうかと思うが。

「んじゃ、出会ったきっかけは？」

「ん……たしか、獅子神さんが歩道で倒れてたのを、俺が“拾った”んだと思うけど」

「ほうほう！ で？」

「で？」と、言われてもな……

「その後は、なんか獅子神さんに因縁つけてる連中に俺が拉致られて、俺がナイフで刺されて死にかけたんだよな、たしか」

「へー！ そうなの……って、刺された！？」

「で、まあよくはわかんないけど、時々家に遊びに来てくれるような関け——」「ちょい待ち由希！ あんた刺されたの！？」

今更だな母よ。俺は二週間くらいは入院してたと思うぞ。

「左胸にブスリと。傷は深かったけど、心臓と肺をすり抜ける感じだったから大丈夫だった」

「私、あんたが刺されたとか入院したとか聞いてないんだけど！」

おいおい、んなはずは無いだろ。凜が連絡してたはず——

「——あ、そういえば！ なんかよくわかんない電報が書類の中に紛れてたような…… なんか「アニキクスグカエレ」とかなんとか書いてあったような——」

こんな時代にまさかの電報！？

「アナログってみた」

「やっぱお前か凜！」

「私は迷惑メールとかの類だと思ったわよ！！」

「テヘツ」

テヘツじゃねえ！！感情0で舌出すな！

つか、完全に凜のせいじゃねえか、両親が見舞いに来なかったのは。

「そ、それより由希は大丈夫だったの！？」

「大丈夫なのか心配なのは母さんの頭ん中だ。無事だから此処に居るんだっての！」

「まさか幽霊！？」

「……………」

ツッコミを入れるべきか悩む事を言うな。

59：お互い苦労しますね……（前書き）

サブタイはあんまし関係ないです。

59：お互い苦労しますね……

八月十三日～十五日の三日間といえば、先祖の御霊が帰ってくる《お盆》である。

その盆の始めである十三日、我が家一行は父の実家を訪れていた。

「久しかねえ！ まま、入りんしゃい！！」

叔母に迎えられ、言われるがままに広間に行けば、既に他の親戚は集まっていた。

駆け付け三杯ともいうべきか、親父は勧められるがままにビールを煽る。

母は…… オイ、なんで普通の家にジョッキが用意されてんだ！？

「ユキモリンも久しぶりやね！ 元気してた？」

「あ、はい」

「うん」

酒を煽る大人達はさておき、俺や凜は、久しぶりに顔を合わせる従姉妹に声を掛けられた。

「そかそか！」

「恵さんも真琴さんも、相変わらずですね」

「アハハハ！ 私は何時も通りよ！！」

「うるさくない日は無いわ」

「マコが静か過ぎるんや！」

なんとも掛け合い漫才を見てるような気分にさせてくれる我が従姉妹。名前を相澤^{けい}恵・真琴^{まこと}という姉妹だ。

「ユキい、お姉ちゃんユキに会えて嬉しいわあ!!」

むぎゅ

「恵さん、暑いから!何気に首にキテるから!!」

「ええ〜!お姉ちゃん離れたくないい〜!!」

ぎゅぎゅ〜!!

「く、首……!息……息が出来な!!」

恵さんは、元気が取り柄のプロレスオタク。可愛い顔とは裏腹に、力が半端なく強い……ってか意識飛びそ……

ゴン!

「いったーい!!」

「やめるバカ。ユキが苦しんでるだろう」

「た、助かった……」

け、恵さんの愛情表現はリスクがデカイ。胸は小さ………なんでもない。

それにしても助かった!やはり頼りになるのは真琴さんだ。危うくお盆に死んだじーちゃんと遭遇するところだった。

「助かったよ真琴さん!一瞬じーちゃんの姿が頭に浮かんだよ……」
「ごめんユキ、うちのバカが」

「姉に向かってバカとはなによ!」

「身長も成績も私に負けてる恵に、姉の威厳は無いわ」

「うわ〜ん! マコがいじめるう〜!!」

「……よしよし」

ま、従姉妹の中では一番年少の凜に助けを求める時点で、恵さんに威厳は無いわな。むしろ真琴さんのほうが姉っぽいし。

つか、なんで凜は恵さんに膝枕してんだ?

「ユキは可愛くなくなった! 昔は「けーちゃん」って私の後ろを着いてまわってたのに!!」

「何時の話!？」

「ええつと……たしかユキが幼稚園の頃――」

「覚えてねえよ!!」

ある程度、腹の中に食い物を詰め込んで、兄弟同士・嫁同士・従姉妹同士でバラバラの会話が弾んでいた。

ちなみに俺達兄妹と恵・真琴姉妹の話題は、なぜか俺の小さい頃の話になってた。やめろ恥ずい!

「リンは変わんないよねえ〜! 今も昔も可愛い!!」

ぎゅ

「恵！リンまで犠牲にするな！大丈夫かり——」

「美少女と密着……ふふ……」

「……………」

恵さんにぎゅっ、とされ、ご満悦のマイ・シスター。ごめん真琴さん、俺もどうしていいのかわかんねえ……。
とりあえず——

「ほっとくか……」

「そうですね……」

お互い苦勞しますね。ハア……。

変人同士、気が合うというか……凜と恵さんは、外出。二人の会話に出てきた《リサイクルショップ》にでも行ったんだろう。
古本やら中古CD・ゲーム・ホビーとなんでも売ってあるらしく、中々面白いと言ってたからな。

「やれやれ……うるさいのもいなくなったが、酔っ払いの相手をするのも気が進まないな」

「まあほつとしても心配ないでしょうね、大人は大人同士、勝手に盛り上がるでしょ」

こういう集まりって、子供は損するんだよね……基本的にはほったらかしにされるし。

凜や恵さんのようにマイペースな人間には、関係ないかしんねえが。

「……そういえば、最近新しくゲームセンターが出来たんだが、息抜きに行ってみないか？」

「真琴さん……熱でもあるんですか？」

「む、心外だな。私はそんなに堅物ではない」

真琴さんって、真面目を地で行く人だから、どうもゲーセンと接点が無いように感じるんだけど……ハッ！まさか！？

「もしかして、好きな人が働いている……とか？」

「生憎だが、私は従兄弟をダシに好きな人に会う口実を作ろうというほど器用ではないし、生まれてこのかた、好きな男などおらん！」

やっぱり堅いな真琴さんは。つか、異性に興味が無いんだろうか？まあとにかく、せっかくのお誘いだし、断る理由もないから――

「行きますか！」

「ん、行こう」

真面目な人とゲーセンという組み合わせ、こりゃ興味津々だ。

60：真琴さんは俺の――

《相澤真琴》という従姉妹は、寡黙にして冷静であり、頭も良くて真面目で堅物なイメージを思わせるような人だ。

現に真面目という意味で間違いは無いのだが、無鉄砲で破天荒な性格の真琴さんの姉、恵さんと一緒の時なんかは、尚更そのイメージが際立つ。

見た目は、150センチの恵さんが見上げるくらい身長が高く、聞いた話によれば170センチ以上あるとか。細面に目付きの鋭さは獅子神さんや俺以上で、動物に例えるならば孤高の《狼》のような“凄みのあるかつこいい美人”。

初対面の人からすれば、近寄りがたい印象を抱く可能性が高い。

まあそんな真琴さんだけど、実は俺の《初恋のお姉さん》でもある。

小さい頃から真琴さんは物静かで勉強ばかりしてる人で、俺や凜が遊びに行った際の遊び相手は、真琴さんではなく恵さんや祖父だった。

俺も当時は真琴さんの事を《おっかない姉ちゃん》だと思っていた、話す機会も殆ど皆無。

当然、交流といえる思い出も、その年までは無かった。

これは今でも覚えている事だが、俺がまともに真琴さんと会話するようになったのきっかけは、小学2年の、やはり今日のように暑い盆の時だった。

小学生や中学生、それに高校生にとって夏休みで一番厄介なのは、やはり大量の宿題だと思う。

今でも厄介な代物だと思うが、遊ぶ事が第一だと考えていた当時の俺にとって、それは難敵中の難敵。あまり解答を埋めることも出来ないまま、盆を迎える事になった。

「ううーん……」

祖父の家に親戚が集まり酒宴が始まる中、俺は算数のページをめくったまま、「うう」とか「ああ」とか呻いていた。

「どうした？」

そこに救いの手を差し延べてくれた人こそ、真琴さんだった。

「……手伝おうか？」

俺と宿題を交互に見た後で、真琴さんはそう言ってくれた。

真琴さんは当時小学5年生で、小2だった俺の宿題の解答を埋める事くらい造作もない。

けど、解答欄を埋める事をせず、俺に解答までの導きを教えてくれたのだ。

「この問題は、掛け算だね。掛け算のやり方は――」

今は会話くらいしかないけど、真琴さんって、勉強の教え方が上手かった。公式を当て嵌めた説明をするだけじゃなく、よりわ

かりやすいようにおはじきやビー玉を使って教えてくれたりもした。

そんな事があつたから、それから次第に話すようになっていったし、仲良くしてもらつうようにもなった。

そついや、当時は「マコちゃん」って呼んでたな。　今じゃ恥ずかしくて口には出せねえけど。

その後は、プロレスにどつぷりハマつた恵さんに《愛情表現！》と称した関節技をかけられてる俺を助けてくれたり、よく理解しきれていない教科を教えてもらつたりと、今じゃ頼れるお姉さんである。

同学年や先輩にも、真琴さんのように落ち着いた女性が周りにいなかったから、俺はいつの間にか魅了され、それが《初恋》へと変わっていったんだろう。

さて、そんな《初恋》の相手に連れられ、到着したゲームセンタ―で30分が過ぎた。

我が麗しき《従姉妹》様は――

「うっ……」

かわいらしい“ぬいぐるみ”が景品となっているUFOキャッチャーで、金額にして《野口さん》を2枚ほど吞まれていた。無論、収獲0。

「ユキい……」

「うつ……！」

普段は無表情な真琴さんの泣きそうな表情って、思わずグツとくるなあ……じゃなくて！

「え、えらくそのぬいぐるみにこだわりますね!？」

「……恥ずかしながら、私はこういうモノが好きなのだ」

真琴さんの話によれば、以前にも友達に連れられてこのゲームセンターに来た事があるとかで、たまたま見たUFOキャッチャーの景品になっている“ぬいぐるみ”を一目見て、是非とも手に入れたくなったんだとか。

うつ、うつむ……真琴さんとぬいぐるみの組み合わせって、似合わねえ……。

「ユキ、お前は今、すごく失礼な事を考えなかったか？」

「め、滅相もない!!」

リリナさんもよく俺の考えを読み取ってたけど、俺ってそんなに顔に出やすいんだろうか???

「一応だが、私もここに入っているぬいぐるみを探したんだが、一向に見付からなくてな……」

そういえば、意外とUFOキャッチャー専用の景品って多いらしいな。探しても見つからないって事は、このぬいぐるみもおそらくその類だろう。

「とりあえず俺も挑戦していいですか？」
「うん」

ゲーセンに来て30分以上が経過したが、俺はまだ何もチャレンジしてなかったんだよな。

俺はあまりゲーセンとかには寄らないんだが、たしかUFOキャッチャーの景品がぬいぐるみの場合は、アームの強弱の関係で、幅が広くて引つ掛かりやすい箇所を狙うのが良いつて、健一（大川健一、覚えているだろうか？）が言ってたっけ。

ええっと、真琴さんが狙ってたぬいぐるみの掴みやすい箇所は――

――おっ、持ち上がったぞ

「あ」

このまま振動で落っこちなきやいいが……

ガコンッ
♪

「……………取れた」
「……………」

まさか一回のチャレンジでゲット出来るなんて思ってもなかったんだが……………ヤバイなあ……………
真琴さん無言だし！俯いてるし！！

「あ、あのお……………」
「ユキ……………」
「ご、ごめ！？」
「すごいぞユキ！まさか一回で成功するなんて！！」

あ、だ、大丈夫みたいだ。怒ってはないみたい。

「と、とりあえずコレ……………」
「え？わ、私にか！？」

いや、別に俺が欲しくて取ったわけじゃねえし。つか、そんな驚くほどの事をしたつもりもない。取れたのは偶然、まぐれだ。

「あ、ありがとう……………大事にする！」
「よかった。マコちゃんが大事にしてくれるなら、俺もプレゼントした甲斐があります」
「マコちゃん？」
「……………あ……………」

し、しまったあああ！！！！思わず昔みたいに呼んじまった！！

「ふふ、マコちゃんか……………懐かしいなあ……………」
「ご、ごめん真琴さん！思わず……………」

「ユキは私の可愛い弟分だからな。それに、マコちゃんと呼ばれたほうが、私は嬉しい」

「そ、そんなもん？」

これまた意外だ！俺はてっきり、じーちゃん直伝の《正拳突き》が飛んで来るかと思った。

「私は淋しがり屋だからな。他人行儀にされるのは嫌いだから、これからはマコちゃんと呼べ」

まさかの命令系！？

「《真琴お姉ちゃん》か《マコ姉ちゃん》でもかまわない」

「ぜ、善処します」

「期待している」

寡黙でクールな初恋の人の姿はそこに無く、代わりに世の男の全てを虜にしてしまいそうな笑顔の従姉妹が、嬉しそうに俺を見つめていた。

61・墓参と酒宴と恵さんの感性（前書き）

今回は連日投稿です。

61：墓参と酒宴と恵さんの感性

その後、なんやかんやとゲームセンターを物色した俺と真琴さ……マコ姉だが、俺の記憶にある限り、UFOキャッチャーしかしてない。

というのも、マコ姉がUFOキャッチャーのコーナーから一切動かなかったというのが原因。

「ユキ、あのワニのぬいぐるみはどうやって取れば良いんだ？」

「あのウサギのぬいぐるみ……可愛い……」

「携帯ストラップのUFOキャッチャーもあるのか！」

台の大小を合わせ、数にして12台のUFOキャッチャーの全てにチャレンジしたのは、このゲーセン史上、俺とマコ姉だけのような気もする。

救いがあるとすれば、このゲーセンのUFOキャッチャーのアームが強かったということ。おかげで沢山の景品をゲットする事が出来た。

財布はダイエットしたけど……

夕方になり、再び祖父の家に戻れば、酔っていた親戚達は、既に身なりを整えていた。

「親父とお袋に挨拶せにやなあ！」

叔父や父の親父とお袋……すなわち俺や凜、従姉妹にとっての祖父母の事であり、暑さが和らぐ夕方に墓参しようというのだ。

祖父母の墓は家からあまり離れた場所にあるわけではない。家の裏手にある山の麓の集合墓所に在る。

俺とマコ姉も、ゲットした景品を客間に置き、直ぐさま墓参の準備をした。

まだ新しい墓石に、しっかりと刻まれた《相澤家》の文字。この墓石の下で、今は亡き祖父母は眠っている。

うつすらと生えた苔をタワシで擦り落とし、磨きあげる。墓前に備えられた花を取り替え、線香に火を燈す……。

父や叔父が墓前に語りかける中、俺は静かに手を合わせた――

「ユキ、えらい長く手を合わせてたね？」

墓参を済ませ、徒歩で祖父母の家に戻る道中、俺の墓参での様子を見ていたらしい恵さんが、不思議そうに尋ねた。

「ユキがお祖父ちゃん子なのは私も知っていたが、先程の様子だと特別な思い入れがあるようだな」

マコ姉もまた、そんな俺の様子に気付いていたのだろう。

「ちょっとね……あまり信じられる話じゃないかもしれないけど――

――
そう前置きをした後、俺は入院していた時に夢に見た、祖父母のことを話した。

「――っていう事があったんだ。まず信じられるような話じゃないのはわかってるけど、やっぱ俺は、じーちゃんとかばーちゃんに助けられたと思ってるから、その意味も込めて、ありがとって手を合わせてたんだ……って恵さん!？」

「ううー！良い話じゃん、お姉ちゃん感動して涙が止まらない！
――」

か、感動してくれるのは嬉しいけど、鼻水垂れてるよ恵さん……

「私は信じる。ユキがそう思うのなら、真実、祖父母がユキを救ってくれたのだろう……」
「ところでだが、入院していたなんて初耳だぞ？なぜ連絡の一つも超越さなかったのだ？」

「そ、そうだよ！そうと知ってれば、お姉ちゃんが手厚く看病を

してあげたのに!!」

あれ?このパターンって、前に母とやり取りした時と同じじゃないか?

「由希、お前入院してたのか!?……そういえば、前に預金がけっこう引き出されていた事があったような……」

あ、親父も知らなかったんだっけか?つかあの時、凜は母に電報で知らせてたんだっただが……

「ん?たしか……」兄が死にかけてる。このメールを見た貴方は、親戚十人にこのメールを廻しなさい」とかいう変なメールが送られてきたんだよな。俺は新手の迷惑メールだと思って無視してたんだが――」

「いわれてみれば、私宛てで《奇妙な手紙》が届いた事があったな……差出人や住所は書いてなかったが「もうすぐ夏ですね、そちらは如何お過しでしょうか?私の兄は今、生死の境をさ迷っています」という不気味な内容だったのを覚えている」

おい……まさか……

「お父さんには迷惑メール風、真琴お姉さんには前暑見舞いの手紙風にして知らせてみた」

「やっぱお前かよ凜!!」

これで親戚や親が見舞いに来なかった理由がハッキリしたよ!つか死にかけてた人間を茶化してんじゃねえよ!!!!!!

祖父母ん家に戻った一同だが、まさかまた宴会になるとは……呆れて物も言えねえ。

つか凜！さりげなく晩酌してる親戚をおだてて小遣いもらってんじゃねえよっ！……！

「あ、そうだ！恵さんにお土産。マコ姉と一緒に行ったゲーセンの景品なんだけど……」

「うわぁ可愛い……！私こういうの大好きなの！ありがとユキ……！」
「は、はは……」

俺が恵さんにプレゼントしたのは、本物とそっくりに作られた《蛇》のオモチャ。質感とか重さとかも妙にリアルな代物で、これもUFOキャッチャーの景品……。喜んでくれてなによりだが、俺は上手く笑えねえ……

「な？だから言っただろう？」

得意満面なマコ姉。さすが、姉である恵さんの事を知っていらっしやる。

俺には恵さんの感性が全く理解出来ねえけど。

「……あれ？なんでユキはマコを《マコ姉》って呼んでるの？」

「ふ……人望の差というやつだ」

ゲッ！？あんまし恵さんを挑発しないで！ただでさえ《マコ姉》

って呼ぶだけでも恥ずかしいのに!!

「マコはずるい!じゃあユキ、私の事は《恵お姉ちゃん》か《ハニ》って呼んで!」

「絶対ヤダ!!」

何が悲しくて従姉妹を《ハニ》と呼ばなきゃならんだ!?

そっぴや、恵さんって美雪先輩にそっくりだよな……顔や背恰好は全然似てねえけど、性格は瓜二つじゃないか?

62：翌朝（前書き）

またまた連日投稿。前話の続きなので、めっちゃめっちゃ短いです。次話からは、隔日もしくは二日置きの更新に戻ります。

62：翌朝

昨晚、成人をとつた昔に過ぎた大人連中は酒宴に盛り上がり、いつの間にか酔いを含んだ恵さんから「恵お姉ちゃんもしくはハニーと呼べ!」という無理難題を吹っかけられ、妥協の妥協の妥協という形で、恵さんの呼び名を《恵姉》に強制された俺。

ドライバーである両親が酒気を帯びたという事もあって、その日はお泊りになった。

翌日は実に清々し……くなかった。なんせ雑魚寝出来る部屋が無いという理由で、マコ姉の部屋で眠ることになったから……。

ちなみに恵姉から「ユキ、一緒にねんねしよあゝ!」と熱烈にお誘いされたのだが、あの人の部屋に入って良かったという思い出は皆無。なんせプロレスの雑誌やらDVDを延々と見せられた揚句、興奮した恵姉から関節技をガンガンかけられた、痛い記憶があるからな。

んで、そこに割って入った天の声。

「ユキ、私の部屋なら静かだから私の部屋で寝るといい」

今考えてみれば、まったく天の声じゃなかった!だってマコ姉だよ!俺の初恋のお姉ちゃんだよ!?!?!

風呂上がり湯気を上気させて、ほっぺがほんのりピンクに色づいてたんだよ!布団こそ別々に用意してくれたけど、寝付けたわけねえじゃん!おかげで目の下クマできたよ!!

とまあ、そんな理由で絶賛不眠中である。

「おはようユキ、えらく早いな……ん?目の下にクマが来ているじゃないか、寝てないのか!?!」

「……枕が変わると眠れないタイプなんで」

さすがに「マコ姉を意識しちゃって」とは言えねえよ。

翌日から父も母も仕事に戻らなくてはいけないようで、朝食を有り難く頂いた後、早々に家に帰ることになった。

「じゃあねマコ姉、けい姉！」

「ユキい、リンく、もう帰っちゃうのお！？お姉ちゃん淋しいよお！」

「もう少しゆっくりしていつてほしかったのだが、叔父さん達の都合なら仕方あるまい」

まあ俺としても名残惜しくはあるが、家に帰ったらやる事たくさんあるし、これ以上、ご厚意に甘えるのも気が引ける。

「バイバイ」

「今度はうちにも遊びに来てよ、歓迎するからさ。それじゃまた正月に……！」

窓から顔を出し、叔父さん家族に手を振る。「行くぞ」という父の言葉で窓から出した顔を引っ込め、我が家一行は、住み慣れた家へと帰った。

63：盆明けからハイテンション！？（前書き）

タイトル通りです。かなり昔に登場した《あの娘》も再登場します。

63：盆明けからハイテンション！？

14日を自宅で過ごし、15日を母方の祖母の家で過ごした我が家一行だが、両親は早々に自宅を離れて、主に使っているアパートへと戻った。

前に言ったかどうかは知らないが、うちの両親……父の転勤先と母が経営している会社が近いという理由もあって、同じアパートに住んでいるのだ。

まあ仲が良いというのはいいことなんだが、たまにはほっとかれてばかりの俺らの事も考えてほしいと思う俺の気持ちは、甘えなんだろうか？

ま、月一で生活費はちゃんと振り込まれているので何とかなっている現状を見る限りでは、支障という支障は無いんだが。

さて、盆も明けて夏休みも残り二週間である。宿題なんてのは八月の始め頃に始末していたので大丈夫だが、これといった予定も無くて、ヒマを持て余している現実というのは、あまり好ましいとは言い難い。

妹はさっさと出掛けたし、何すっかなあ……………

「そんな時は、美人で性格も抜群な私とデエエエエトツ！！！」

……あ、洗濯物が少し残ってたし、せっかくだからまとめ洗いで
も――

「そんな私をスルーなユキもベリーキュート！寧ろ愛情の裏返し？」

そついやまだ朝飯食ってねえな。今日はちとガッツリ系でオムライスなんぞ作ってみるか――

「ああ！愛しいマイ・ダーリン♪なんだか身体が火照ってき――」
「うるせええっ！！どっから湧いた！？つか脱ぐなああっ！！！！！」

なんで毎度毎度、あんたらは我が家に侵入してんだよ！！

「ユキ、お久しぶりです。お洗濯は済ましておきました！朝食の準備も整いましたよ」

ぬあっ！せつかくの暇つぶしを！！何してくれてんだ駄メイドッ
！！！！！！

やっぱ来たよ綾館姉妹。つか一週間も経ってないのに「お久しぶりです」は無いだろ。そして美雪先輩のテンションが、今日は普段の五割増しに高い……つかうぜえ……。

「五日も会えなかったんだぞ！私は淋しくて、危うく死ぬところだったんだぞっ！！」

どこぞの草食動物かよアンタは……。

「つか、どっから入って来た！？物音なんて全く聞こえなかったの

に……」

「まさかのスルー！？「お前はウサギかよっ！！」ってツッコミは無しか！！؟؟」

あ、危ねえ……口に出さなくてよかった！

「玄関から入るのは飽きたので、物置のカーヴから……」

「飽きんな！むしろ質が悪いから！！」

やべえ！リリナさんがこの会ってなかった五日間に70%くらい美雪先輩化してる！！

「まあ何はともあれ、私は元氣そうなユキを見る事が出来て嬉しいぞ！」

「私も美雪と同じ気持ちですわ」

……照れも無く、サラッと恥ずかしい事を言う。全く、全く――

「……俺も、美雪さんとリリナさんが元氣そうで、嬉しいですよ……」

むしろ、言葉を返す俺の方が赤面ものだったの！

なんやかんやと言っても、やっぱり憎めないこの《姉妹》。本質

では、この二人って本気で嫌な事はしないからな。
とはいえ――

「だからなんで俺が《下着コーナー》に行かなきゃなんねえんだっ
！！！！！」

「え？だって《恋人》たる者、やはり《彼女》に「こんな下着を着
けてほしい」という願望が――」

「恋人じゃねえし！」

「むしろ婚約者――」

「なおさら違うわっ！！」

ああ……ダメだこの姉妹……。俺の話を全く聞いちゃいねえよ。
つか思ったそばから強烈な嫌がらせだから！！

俺が思わず「ヒマだ」とぼやいてしまったがために、連れて来ら
れたのは電車で2駅先にある《中央街^{センター}》の服屋。その名も《E L I
C E》。

俺の幼馴染の親が経営してる店だが、覚えているだろうか？

「あっははは！相澤のツツコミレベルが上がってるし！！」
「まったく嬉しくねえよっ！！」

幼馴染の旗沙織は、相変わらずである。

「美雪さんメイドさんお久しぶり！」
「うむ、旗殿も元気そうだなによりだ」

なんで言い回しが古風なんだよ美雪さん。
つか沙織、リリナさんって名前だから！本名がメイドじゃないから

!!

「あ……沙織、悪いんだけど、美雪さん達の下着を選んでやってくれ。俺じゃ対応出来ねえ……」

「任せて!」

「ユキ、私がいなかったら迷子になるなよ?」

「ならねえよ!!」

俺はそこまでバカじゃねえっ!!!!!!!!!!

64：服屋の次は？

ほんつとに理不尽極まりない！と思うのは、沙織んとこの店で購入した女性用下着（綾館姉妹が購入）の入った買物袋を、俺が持たされているという事。

しかもこの姉妹、まったく帰るそぶりが見られないし、むしろ最寄り駅とは逆方向に闊歩していく…。

「……自分で買ったもんは自分で持てよ」

「このか弱い私に荷物を持てだとう！？私の知るユキは「重いだろ？俺が持つてやるよ！」と笑みを浮かべて白い歯をキラッと光らせるような男だぞ！」

百歩譲って美雪さんが《か弱い女性》だったとしても、俺はそんな事を言わないだろうし、歯をキラッと光らせるという芸当もしない……つか出来るかあぁっ！！！！！！

「ふふ、ユキは照れ屋さんですね」

「100%本音だ馬鹿やるおっ！！！！！！」

ダメだ……俺一人じゃこの姉妹に対抗出来ねえ。

結局、渋々この姉妹の荷物持ちを引き受けた俺って“やっぱり甘い

な”と思いつつ、美雪先輩に引つ張られて次に立ち寄ったのが、県下最大の《デパート》。

「……で、なにこの人ばかり？」

「ユキ、ボサツとしてないで来い！」

「デパートは戦場ですよ！早くしないと売り切れてしまいます！」

なんか今日は全国の《美味しいもの》が一同に集まった催し物があるとかで、催事場が熱気ムンムン。熱苦しいことこの上ない状況の中、「ハリー！ハリー！」と、やたらテンションが上がっている姉妹。

「《幻のプリン》は私が狙いますので、美雪とユキは根ボツケの開きをお願いします！！」

「誰が寝ぼけだ！？」

「《根ボツケ》です！お魚です！！と、とにかく私はプリンをゲットしてきます！！」

ボケたつもりは無えんだが、半ギレしたりリリナさんはそう言い残して、群がるおばちゃん達を掻き分けて、やがて人込みの中に消えて行った。

「ユキ、こつちだ！」

「え、あ、はい」

グイッと手を引つ張られた俺も、美雪さんと共にお目当ての《根ボツケ》とやらを捜しに人込みの中に突撃！

てか、あんまし見栄えの良さそうな魚ではなさそうだなあ……

日頃から、スーパーの主婦連の中を揉みくちやにされながら特売品をゲットしてきた俺にとって、人込みなんてたいしたことじゃない。

ただ《お連れさん》の場合は、俺のようにはいかなかったらしい……

「大丈夫ですか？」

「う、うむ……」

お目当ての《根ボツケ》をゲットし、一先ず人込みから離れたベンチに腰掛けた俺と美雪さんだが、どうも美雪さんは人込みに酔ったらしい。

ちなみに《根ボツケ》ってのは、いわゆるお魚の《ホツケ》のことだったんだが、スーパーなんかでよく見るホツケよりデカイうえに、めっちゃめっちゃ高価だった！

「なんか飲み物でも買ってきてましようか？」

「だ、大丈夫だ！心配な……うう……」

かなり重症らしい。さて、美雪さんを残して一人で飲み物を買に行くのもちよっと心配だし、どうするか――

「お兄さん、本場青森の林檎ジュースの試飲いかがですか？」

おお、売り子さんの天の声！

「すみません、連れにもいいですか？」

「どうぞどうぞ〜！」

紙コップに半分ほど入った試飲用の林檎ジュースをもらい、美雪さんに手渡す。どれ、俺もいただくか……

「美味しい！」

「美味しい！」

「当然ですよ〜！合成着色料・香料・保存料が一切入ってない、100%本物の林檎ジュースですから〜！！」

林檎本来の甘さと酸味というか、飲み口もよくて、スツキリとした美味しさが口いっぱいに広がる。ぐつたりな美雪さんも、幾分か元気が出たようだ。

「これはいい！是非とも買っていきたい！！」

「俺もですよ。凜も喜ぶだろうし」

我が妹君はポテチやらアイスなんかは《添加物》が入っていても全く気にしないで、ジュースなんかは《純正》しか飲まないという、ちょっと変わった嗜好だからな。

「お待たせしました！《幻のプリン》ゲットです……って、あら？」

「お兄さんのお連れの方ですか〜？両手に花ですね〜！お姉さんも一杯いかがですか〜？」

俺はその“花”ってヤツに振り回されてばかりなんですよ売り子さん……

「……これは《紅玉》ですね、酸味と甘味のバランスがとても良く、後口もスツキリで美味しい！」

「うわっ！飲んだだけで品種を当てた方は初めてですよ！」

リリナさんだしな。

「姉様、是非購入したいのだが」

「ええ、私も気に入りましたわ」

おお、完璧（＋美雪さん化してる）メイドからお墨付きが出た！

この日はこれで帰る事になり、俺は有り難いことにリリナさんから「これはユキと凜様の分です」と、瓶詰め的林檎ジュース（１リットル）を二本もいただく事に。

対価として、指にヒモ跡が残るくらい重い荷物を持たされたが……。

しかも、頼まれて買った《根ボツケ》を夕飯に焼いてくれて（リリナさんが夕飯を作ってくれた）、俺と凜は、その脂の乗った根ボツケに舌鼓を打った。

しかも「人数分ありますので」と、食後には《幻のプリン》まで用意してくれていたの、俺は有り難く頂戴したのだ。

「あ、美味しい」

「うむ、タマゴの濃厚さが、また良い！」

と、俺と美雪さんは美味しくいただいたのだが、凜は無言のまま
で、リリナさんに到っては――

「《幻》という割には、固める前の攪拌が足りないようですね、舌
に少しザラつきが残りますね。卵はおそらく有性卵ですが、香
料が強すぎて、せっかくの卵自体の甘みがばやけてしまっています
し、ほろ苦さを強調するためにのカラメルソースは――」

《幻》を全否定していた。恐るべし絶対味覚（？）

65：口調が似てるとわかりづらい。

盆を過ぎれば、時が経つのが速くなる……なんて言ってた人も居るくらい、あっという間に夏休みは過ぎてゆく……。

相も変わらず綾館姉妹は「遊びに来た！」と称して不法侵入を繰り返す毎日だが、飽きはしない分、充実した毎日を過ごせてはいるのだろう。

そして、夏休みも残り一週間を残すのみとなった――

「そついや最近、獅子神さんが来ないなあ……」

「ユキっ！私という《彼女》が目の前に居るというのに、他の女子おなごの事を口にするとは言語道断――」

おい、毎度毎度の事だが、俺はいつから美雪さんの《彼氏》になった！？

あらためて言わせてもらうが、俺と美雪さんは《友達関係》であり、恋人関係では一切ない！

「そついえば……菜々子様が会社へと戻られる時に、たしか獅子神さんがどうか言っただけだよな――」

「……あ……」

盆前に《化粧品モデル》がどうかで、母からお願いされてたんだっけか？

「ユキ、お客さん」

「客？つか凜、いたのか？」
「今帰ってきた」

今日は空手部の朝練とかで、早々に外出していた凜がご帰宅。しかも客だかなんだかも一緒にいるが、客が来る予定なんてまったく無いんだが……

「やあユキ、元気そうだな」

「え？ま、まじ！？」

「誰だ？」

「どちら様ですか？」

う、ううむ……《再会》にしては早すぎる――

“まさか”と思ったけど、こうしてテーブルに座って妹と会話してる《お客さん》の姿を視認出来てる時点で、これは紛れもない現実。

「ユウ〜キい〜……私というものがいながら、公然たる浮気か？どなんだあ??」

「ち、違いますって！ってかなんで俺が慌てなきゃいけないんだ！?……と、とにかく！この人は俺の――」

「ああ、自己紹介がまだだったか。私は相澤真琴、相澤由希の《従姉妹》だ」

そう。我が《初恋の君》であり、頼れる従姉妹のお姉様……相澤真琴こと、通称《マコ姉》が我が家にやって来たのだ！

「むう……ユキの従姉妹とは……」

「でも、従姉妹同士って結婚できますよね？」

うおいリリナさん！火に油！！

「つまりは《敵》か……」

「ユキ、この騒がしい女の子はどちら様だ？」

「騒がしいとはなんだ！私は綾館美雪！ユキの《通い妻》だ……」

《恋人》からランクアップ！てか違う！まったくもって嬉しくねえ！！それよりマコ姉の前でそんな冗談（本気？）を言うなっ！！！！

そんな事を聞いたら、聞いたら――

「む？ユキの《奥さん》か、それは失礼した。なにぶんユキは私に似て目付きが悪いが、とても優しい奴だ。これからも末永く、私の可愛い弟分をよろしく頼む！」

「あ、はい……」

冗談が通じない人なんだってばあああ……！！！！

と、とりあえず美雪先輩に妨害されないように、冗談を本気に受け止めたマコ姉に事情説明（というか誤解を解く）。

「……成る程。まあ少し考えれば、ユキはまだ18になってないから結婚できないはずなものな」

「私はいつでも準備が出来ているのですが」

「何の準備だ!？」

「何ってもちろんナ「それ以上言うな!」」

下ネタ反対!

「むう、ユキが尋ねたから返したただけなんだぞ!」

「マコ姉の前で要らん事を言わんで下さい!」

「……まあよくわからないが、ゴムはし「マコ姉!それ以上はダメ!」」

まさかのマコ姉まで!?!口にしたが最期、R指定になっちゃうから!!

「いやぁ実に素晴らしい従姉妹様じゃないか!」

「……俺の初恋が崩壊してゆく……」

「うん?ユキの初恋は私なのか?」

しいまつたあああ!!--!思わず口を滑らせちゃったよバツカ野郎おおおおっつ!!--!!--!!--!

「ユキ、気持ちは嬉しいが、私とユキはいとこだし、それに……」

「みなまで言わんで下さい!……あくまでも昔の話ですから!」

「ユ、ユキ、これは慰めにもならんかもしれんが、昔から初恋は甘

酸っぱいというくらい、実らない代名詞じゃないか」

うわあ、ホントに慰めにもならんじゃねーか。

……あれ？ちよつと待てよ、そういえば美雪さんって――

「美雪さん、俺って美雪さんにとって初恋の人なんですか？」

「何をいきなり……当たり前だ！この綾館美雪、生涯に惚れた男はユキのみだ！！……あ？あれ？という事はつまり――」

おお、やつぱし気が付いたか。

「しいいまったあああつっ！！！！という事は、私の恋は実らないじゃないかあああつっ！！！！！！！！」

「美雪、気をたしかに！落ち着きなさい！」

すげえ《狂乱》っぷりだな。頭かかえて唸ってるし……。ま、墓穴ったのは美雪さんだし、俺知くらねえ。

「まあユキの気持ちに応える事は出来ないが、せめて私を《姉》として頼ってくれるのであれば、私は何時でも力を貸そう」

「んーじゃ早速……」

失恋と言える程でもないのだが（結果は目に見えてたし）、姉として頼っていいというので、弟分である俺は、早速お願いするとしてよう。

「あのうるさい《女の人》を止めて下さい。このままじゃ近所迷惑に成り兼ねんし……」

「うむ、そのようだな。事実、ケイ（恵）より騒がしい」

ケイ姉より五月蠅いってよっぽどだな！さて、頼れる従姉妹様は、どうやってあのポリュームMAXの美雪さんを止めるんだろうか？

「美雪さん……だったかな？あまり騒がしいと、近所迷惑になるから止めなさい」

「ううう おおおおおお！！！！」

うわぁ……化け物じみた泣き方（？）になってる。つか、もう雄叫びだよな……。

「リリナさんだったかな？どうやったら止められるのかな？」

「いえ、さすがに私では対応出来ない状態でして……」

「ふむ、ならば止めさえすれば良いのかな？」

「死なない程度なら！」

それ妹に対して言う言葉！？テンパリ過ぎだよリリナさん！！

「ううむ、女の子に武力行使は使いたくないんだが、口で言っても効果はなさそうだな。やむを得ない……」

「と、とりあえず死なない程度なら！」

だからダメだってばリリナさん！！！！マコ姉はなんでも鵜呑みにしちゃう人なんだから！！

「ふむ、身内がそう言うのなら……」

唸る美雪さんの前に対峙したマコ姉。つか、やばくないか？別に秘密にしてたわけじゃないが、マコ姉はじーちゃん譲りの《武道》の才能がある。強さなんて、俺や現役空手部の凜の比じゃない。

「美雪さん、ちょっとこっちを見てくれないか？」
「グルルル……」

もはや野良犬的な唸り声になってる美雪さんを前に、リリナさんは人差し指を向ける。

ん？あれっでもしや――

「てい」

ブスリ♪

「ぐああああっ――!!」

素直にマコ姉の人差し指を見つめていた美雪さんに、マコ姉は無気力なまでの掛け声で、左顎下の柔らかい部分を突いた。もちろん《死なない程度》だから、痛みはハンパないだろう。

いわゆる“秘孔”ってヤツなんだろうが、やる事はえげつない……俺も凜もリリナさんも、かなり引き気味である。

「まあ5分もすれば起きるだろう」

「だ、大丈夫なんでしょうか？」

「心配ない。もちろん加減はしておいた」

してなかったら美雪さんはどうなったんだろうか……考えただけでも恐ろしい。

そして5分後――

「ううん……む？なぜ私は寝ているのだ？」

「なぜって、なあ！」

「うむ」

「……」

「少し暑かったので、倒れたのですよ。幸い真琴様の献身的な《看護》のおかげで、軽い暑気あたりで済んだのです」

美雪さんが起きるまでに、皆で少しばかり口裏を合わせる算段をとった俺達。さすがに「意識が暴走してマコ姉に秘孔を突かれた」とは言いづらいしな。

「そうか、どうやら心配をかけてしまったようだ……ところで――」

「どうしたんですか？」

「この《女子》は誰だ？まさかユキ、私という婚約者が居ながら堂々と浮気かつ！？！？許さん！！！！！」

話は降り出しに戻るようだ。はあ……

65：口調が似てるとわかりづらい。（後書き）

タイトル通り、執筆する私もわかりづらい話になってしまいました。オチもあまりうまくなかったですし……。

ともあれ、早いうちに再登場となった相澤真琴（マコ姉）です。まさかの秘孔を突くという技までやらせましたが、当然これはフィクションであり《そんな事をして意味はありません》。ただ痛いだけです。

良識のある方もそうでない方も、くれぐれも真似をしないで下さい。ホントに《ただ痛い》だけです。

66: マコ姉???(前書き)

またゲーセンでの話になります。

66：マコ姉「???」

意識の暴走により綾館美雪は《猛獣》と化した！しかしそこに現れた正義のヒーロー《相澤真琴》の秘孔術により猛獣は倒され、相澤家に平和が訪れたのだった……。

という一連の出来事により、鎮静化した美雪さんは記憶まで吹っ飛ばされていた。その後「暑さで意識が遠のいたのですよ」とリナさんがフォローを入れ、俺達も口裏を合わせて納得していた。

おそらく我が家史上最大の《記憶の捏造》だと思う。

まあそんな事もあったのだが、やはり矛先は「この女は誰だ!？」と言われたマコ姉に向けられ、正直に「従姉妹です」と言ったマコ姉に対し、掌を返したような態度の美雪さんは、誰の目から見ても滑稽に映っただろう。

ともあれ、我が家に平和が訪れた事に変わらない。……俺はわかりきった失恋を経験したんだが。

そんなことはこの際永久に触れないでおくとして、マコ姉が突然我が家を訪れた理由を尋ねたら「この近くにとても大きなゲームセンターがあると聞いて来た」という始末……。

「ま、まさかそれだけのために車を走らせてきた訳じゃないよ………
……ね?」

「ユキは失礼だな」

「だ、だよ〜!」

「八割はその通りだが、残りは残暑見舞いというやつだ」

あゝあ……聞かなきゃよかった……

とりあえず、マコ姉を案内する形でゲーセンへと車を走らせる。
当然……

「ゲームセンターって、どういう場所なのでしょう？」

「私もあまり詳しくは知らんが、やはり名の通りゲームが沢山あるのだろう」

ここに二人ほど《初心者》がいた。って、俺も好んで行くタイプの人間じゃないが、俺の周りって意外と《ゲーセン初心者》が多いらしい。

とまあ無駄話もそこそこに、到着しましたゲームセンター。建物はビル四階建てという規模だが、いかんせん“ゲームセンター”というまんまのネーミングはいかほどなものか。

「うむ、やはり噂通り大きいな。たしかUFOキャッチャーのコーナーは二階だった」

噂になるほどか？つか下調べ万全だなマコ姉。もっともUFOキャッチャーオンリーかよ！

と、ともかく大勢いるんだし、楽しまねば……

まあ諸々のメンバーではあるが、やはり《好み》には違いがある。凜はさつさとネットゲームのコーナーへと三階へ。

リリナさんは「スロットは以前経験したことがあります」と言つて、美雪さんを置いて一階へ。おい、メイドという仕事はどうした？そして残された俺・美雪さん・マコ姉の三人は、まあ付いて行くがままに、二階のUFOキャッチャーのコーナーへ。

まず思ったのが、盆にマコ姉と行った田舎のゲーセンとは比べるまでもなくデカイ！！ということ。

そして種類（景品）が豊富ということで、くわえて人も多い。

「ゆーふおーきやつちゃ〜というのはどれだ？」

美雪さんは無知の無状態。目の前に広がる幾種類のUFOキャッチャーを眺めながら、ボケた（というかマジっぽい）

「ふふ、美雪さん。ひらがな表記ではなく《UFOキャッチャー》というんだよ」

つい最近までひらがな表記で《ゆーふおーきやつちゃ〜》と呼んで、掬うではなく《救う》と連呼してたマコ姉よ、そんな胸を張つて言うほどじゃない……って羨望の眼差しかよ美雪さん！！

そついや、UFOキャッチャーって掬うんではなくて、正しくは《掴む》んじゃないのか？

「なるほど、箱に入つたぬいぐるみをこのアームで救うのですね？」
「正しくは《掬う》んだよ」

いや、多分どっちも違うと思うよ二人とも。

おそらくだが、マコ姉と美雪さん……似てるのは口調だけではないらしい。

まあ普段の「ユキイっ！マイスウィートダーリン（はあと）」って感じで接してくる美雪さんはケイ姉とそっくりなんだが、初のゲーセンでの美雪さんは、まんまマコ姉である（考え方がという意味で）。

「真琴お姉様、この機械が動かないんですが」

「ははは、この《投入口》に百円を入れるんだよ」

これってデジャヴってやつなんだろうか？まんま盆の時の俺とマコ姉の会話を、別角度から眺めているというなんとも表現しがたい気分だ。

ううむ、それにしても美雪さんは、いつの間に「真琴お姉様」と呼ぶようになったんだろうか？

67：メイドはゲームも達人級？（前書き）

サブタイ通りです。久しぶりに、あのキャラも少しだけ登場します。

67：メイドはゲームも達人級？

“救う”でも“掬う”でもなく“掴む”という表現が正しいUFOキヤツチャーに、真剣に取り組むマコ姉と美雪さんの二人。俺は蚊帳の外……ついて来た意味がまったくない。普段からゲーセンとは無縁状態の俺だから仕方ないと言ってしまえばそれまでだが、ほったらかしというのも中々に寂しいもので――

まああの二人をほったらかしにしておいても大丈夫だろうから、とりあえず凜やリリナさんの様子でも見てみるか。

というわけで、先ずは三階の《ネットゲーム》のコーナーへ。

ここはインターネットを利用したオンラインゲームを主に行っているコーナーで、競馬や対戦系ゲームが多い。もっとも、地元にいながらにして全国のゲーマーと遊べる（対戦できる）という点から人気があるのだろうが……ゲーマーでない俺には、あまり理解出来ない。

さて、ここには我が愛くるしい（言ってみただけ）妹がいるはずだが――あ、いた。

「凜は何のゲームやってんだ？」

「戦国時代系オンライン対戦ゲーム」

無駄にタイトルが長い！というかタイトルか？

まあよくはわからんが“三・志”のようなやつらしい。

「凜は強いのか？」

「割と」

謙遜しないところが凜らしいが、どうやら本当に強いらしい。そういや、我が家のゲーム機をインターネットに繋いだとかで、たまにこんなゲームをやっている凜を見た事があつたっけ？

「えーっと、凜は全国………は？三位！？」

「そう」

淡々と言つてのける凜だが、凜って意外とゲーマー？兄たる俺ですら今知った事実と意外と《やり込んでる》感が否めない凜に、若干引き気味な俺……。

後ろからゲームを見ていた俺だが、凜から「目障り・気が散る」とのお叱りを受け、マジへこみで今度は一階のパチンコ・スロットコーナーへ。

ここにはリリナさんがいるはずだが、探すまでもない。すでにスロットコーナーの一區画に人だかりが出来てる……

「あ、ユキ！なんか大当りが止まらないんですが……」

「……うわぁ……」

野次馬の中心には、やはりリリナさんの姿あり。

最近我が家に来る時はメイド服姿ではなく普通の服装なので、今日ゲーセンに行く事になった時は「そこまで目立ちはしないだろう」的な考えだったんだが……やはり“身なり”は普通でも人だかりを作る《何か》を持つてゐるらしい。

……今回の場合、店員が追加補充をしなければいけないほど大当りを積み重ね、《千両箱》と書かれたメダル入れの箱を山積みにしていた。

そりゃ人も集まるはずである。中には「これが実機なら十万は軽くあるぜ」なんて言ってるオッサンもいたが、所詮はゲームのストックである。いくら何千・何万枚だそうと、お金に換える事は出来ない。

「あ、また？が揃いました！」

『えええええっ！?!?!?!』

ボーナスゲームを終了し、メダルの払い出しが終わって10回転もしないうちに、また《大当り》を引いたりリナさん。そりゃ周りもア然とするわな。

店員さんなんて「お、おめでとうございまあゝす……」なんて言っではいるが、笑顔は完全に引き攣っていた。

いや、俺も引き気味である。

まあ色んな特技を持つてゐるリリナさんにいまさら驚く事も少なくなつたが、俺もしばし野次馬と共に傍観。結局、その後1時間以上も大当りを積み重ね、仕舞いには「飽きました」と言っただけギャンブラーをア然とさせたリリナさん。

「あゝ、こちらのメダルはどうすれば……?」

山積みになつたメダルの箱を見て店員に尋ねれば、店員ですら「

そ、そうですね……」と、言葉に詰まる始末。

場所ごとにもよるが、ある期間（一ヶ月～半年）までメダルを預ける事が出来、期間内であれば再びメダルを引き出して遊ぶ事もできるのだが、リリナさんの場合は次にいつ遊びに来るかも不明。

ということで、メダルは三百枚ほどをそのままに、残りのメダルは全て《店に返す》という事に。

周りからは「勿体ない！」なんて声もちらほら聞こえたが、そのリリナさんの言葉を聞いた店員の「ありがとうございます！」的な笑顔は、経営側としての笑顔だったように思えて仕方なかった。

その後、リリナさんは「これは何のゲームですか？」と店員さんに尋ねていたのは競馬のメダルゲーム。自分の予想した馬にお金（この場合はメダル）を賭け、勝てば倍率の分だけメダルが払い出される、というもの。まあ名前の通り競馬のゲームだ。

「ユキ、遊んでみましょう！」

初めてという事でテンションの高いリリナさんは、《いかにも常連》って感じのゲーマー達の中に混ざり参戦。仕方なく俺も付き合う形となる。

周りは「素人が……」といった感じで半笑いを浮かべる者や、先程のスロットの一件を見て「次はどんな奇跡を起こすんだ！？」と興味津々な者が。

俺は倍率に当たり障りのない馬ばかりを選んでいたが、リリナさ

んは「この馬は名前が面白いですね!」とか「この馬は毛並みが良いです!」なんてCG画面に映った馬を見ながら、全く根拠のない理由で馬を選んでいく。

「レースはこの画面を見ればよいのですね?」

もう笑いを堪えているばかりの常連さんに色々と聞きながら、最初のレースがスタート!画面を見ながら「頑張れ!いけっ!」なんて叫んでいるリリナさんは、格好の笑いネタに。

もう恥ずかしくてしょうがない俺は他人のフリに努めるようと試みて、いまさら無理だと気付く。

ただ、まあ……

「やりましたユキ!一着です!」

「お、おめでとう……」

ビギナーズラック!ってヤツなんだろう。適当(勘)で勝馬を予想したりリリナさんは、見事に当てやがった。俺なんて無難に1番人氣を選んでハズシたのに……。

周りとして「ま、たまたまだろう」「そう何度も……」なんて生暖かい視線がリリナさんに集中。

しかしその後のレースも順当にリリナさんは勝ちを積み重ね、もはや言葉を失った常連は、面目を潰されたようにうなだれた。

「店員さん、このメダルもお返しします」

結局、何万枚と稼いだメダルは全て店に返す事になり、リリナさんはその日《銀髪の天才ゲーマー》として、伝説になった。

好い加減に楽しんだリリナさんは「美雪はどうしているでしょうか?」と、マコ姉達のいる二階へ。

そこにはすでにゲームを終えた凜も合流しており、それぞれの手には、おそらくUFOキャッチャーやクレーンゲームでゲットしたのであろう《ぬいぐるみ》や《お菓子》の景品が。

「うわっ、また沢山ゲットしましたね」

「う……む」

「まあ……」

なんとも齒切れの悪いマコ姉と美雪さん。そして微妙に笑いを我慢しているような凜。

「おお! やっぱ来てたかマイ・ヴラザー(ブラザー)!」

マコ姉の背に隠れて見えなかったが……《バカ》がいた。
つかテンションの高さと発音がうぜえ……

「健一も来てたのか」

「まあな! 《クレーン》のケン》つつつたら割と有名だぜ!」

「なんだそれ?」

なんかまたバカが馬鹿なことを言っている。つか《クレーン》のケン》って何? 呼び名? ダサッ!

「何っ？キミが《クレーンのケン》なのか！？」

「マ、マコ姉は知ってるの？」

「ああ、最近ネット動画で話題になっているUFOキャッチャーの達人だ」

え？そんなんあるの？つかよくマコ姉が知ってたな。俺は全く知らなかったのに。

「実はこのぬいぐるみの殆ども、このクレーンのケンが取ってくれたんだ」

「どこかで会った事があるとは思ってたんだが、そういえばユキの友達だったな……」

「ひどっ！ちよっ、ちよっとユキ！フォロー・ミー！！」

うわ、どうしようか……あんま関わりたくねえ。

——って、ユキって呼ぶんじゃないっ！……！

「ふむ、ユキの学友か。挨拶が遅れてすまない。私はユキの従姉妹の相澤真琴だ。いつもユキが世話になっている」

マコ姉、バカに丁寧な挨拶はいらねえよ。

「な、なんと！相澤くんにこんな素敵な親戚のお姉さんが居たなんて！」

「《相澤くん》って言うなキモい」

「こらこら、仮にも学友にキモいは失礼だぞユキ。すまないね、私の弟分が」

マコ姉！そのバカは甘やかしちゃダメだって！！すぐ付け上がるんだから！

「いえ！それより、よかった今晚デートでも」

ほほう……

「……仮にも俺の前でマコ姉をナンパしてんじゃねえよ……」
「ご、ごめなさっ……！」

次に調子乗ったら手加減抜きでぶん殴るぞ、覚えとけよ健一……。

「ひ、ひゃい！」

「ん？何をコソコソと話しているんだ？」

「なんでもないよマコ姉。な、健一？」

「……」

「な？」

「……」

「け・ん・い・ち？」

「はいっ！」

これでバカの手からマコ姉は救えたな。やれやれ、反抗的な目をしやがって……。

その後、再び俺達はマコ姉の車に乗り、我が家へと帰宅。日も暮れたので「泊まっていけば？」とマコ姉に言っではみたが「騒がしい姉（ケイ姉）の世話をしなきゃいけない」からと苦笑して、実家へと帰って行った。

「ユキい、私は泊まっていきたいな〜！ユキのフィアンセだし〜！」

「帰れっ！……！」
「！」

68・影の薄いヤツ（前書き）

サブタイ通りです。序盤と終盤に少ししか出ないアイツです。

68：影の薄いヤツ

夏休みも残り一週間を過ぎた辺りから、我が家はちよくちよく《来客》が訪れるようになった。

先ず最初は《マコ姉》を皮切りに――

「由希い、宿題写させてくれー!!」

夏休みを《遊び》だけに費やしていた健一が、全く宿題（現国・物理・数学・世界史・科学・英語の全て）に手を付けておらずに泣き付いてきた。

「相澤、悪いんだけど世界史の宿題写させてくれない？」

終了五日前に、あんまり家に来た事のない如月が――

「由希、英文の和訳は出来てるか？」

「ユツキー久々にゃー！ところで冷たい飲み物くらい出してほしいにゃん」

四日前に、河南・結城のペアが。つか結城に至っては単なる暇潰しに来たくらい。

「……………」

「え、えーっと……………」

三日前に来た湊に至っては、宿題とは関係ない理由で訪れたうえに俺を無言で威圧するという、俺にとっては全く得の無い行動を実行。

なんでも前々から凜と遊びに行く約束をしていたとかで、さつさと着替えを済ませて部屋から出て来た凜と外出。

ただ、玄関が閉まる前に見せた湊の表情が、ほんの僅かに“ニヤリ”と微笑んだように思えて、ちよつと妹に対して不安になったのは言つまでもない。

と、ここ最近の我が家はこんな感じだが、前述しなくてもわかるように――

「ユキいゝデートに行こーう!」「行かない」

「では私と……」

「行かない」

当然、綾館姉妹は居る。つか毎日欠かさず来る。

一瞬だけ「友達いないんか?」なんて心配したけど、この《外見美人な猫被り》に友達がいはいはすは無い。

その証拠に――

♪♪♪

「もしもし? 桜花か、どうした?」

覚えているだろうか? 桜花つてのは、美雪さんと同じ弓道部副部長の《井芹桜花さん》だ。

「買い物? 生憎だが、私は今ユキの面倒で手一杯だ!」

面倒を見てもらつてる覚えはねえよ!

♪♪♪

「もしもし？なんだ《京都》か……うん？悪いが他の役員を当たってくれ！私は今デート中なんだ」

《京都》ってのは初耳かもしれないが、読み方は京都と書いて《みやこ》と読む。俺や美雪さん達の通う嶺桜高校の生徒会長で、たしか本名は《長束京都》さん……だったと思う。

おそらくは生徒会の仕事のことだと思うが、俺を理由に断るのはやめてくれ……

その他にも、クラスメイトだとか弓道部の同輩・後輩なんかからよく連絡が来ているのに、美雪さんは断ってばかりいる。

その理由が全て「ユキ」である俺絡みなので、申し訳なさはハンパない。

「って美雪さん、俺を理由に断らないで下さいよ。先輩達に申し訳ないですって……」

「まったく……ユキはわかってないな。これくらいで壊れる友情なら、いっそ壊れたほうがいい！むしろ今連絡してきた友人達は、「頑張れ！」とか「絶対モノにしなよ！」と言ってくれたぞっ！！」

心の広い友人ばかりだなあ……。

ってか先輩方、これ以上美雪さんにエールを送らんでくれ。さすがに俺も対応に困る。

そっぴや、凜とリリナさんは何やってんだ？

「美雪、興味深いチラシを見つけてましたよ！」

「ん？……ほお、花火大会か！」

凜とリリナさんが持つて来たのは、地区内の住民に配られる情報紙。間違つても《情報誌》ではなく《情報紙》である。ようはチラシだ。

そこに載っていたのは、毎年この時期に行われる恒例行事の夏祭りの事で、規模はそんなに大きくはなく、小さな縁日が並ぶ程度。花火大会ではあるが、特別ド派手でもない。

「兎嶺の夏祭りか……」

「ユキは知っているのか？」

「一応“兎嶺地区”の人間なんで。……そついや、久しく行つてなかったなあ……」

小さい頃は、よく家族揃つて縁日を回ったり、父に肩車されて花火を見たつけ。懐かしいなあ……

「開催日は……31日か、明日だな」

「夏休み最後の花火ですか……風情があつて、とても良さそうですね」

明日……明日で夏休みも終わるか。今年はやけに短く感じたな……。

——なんでだろ？

「夏休み最後にパァツといくのも良いな！」

「夏の名残の花火……とても楽しそうです」

《夏の名残》か。それを過ぎれば、もう秋になるんだなあ。
今年最後の夏休みだし、ここは——

「行きますか！」

「うむ！」

「ええ！」

「ん」

「おおーっ！！」

明日は最後の夏休み、精一杯楽しもう！……って、あれ？

「なあユキ、今、私らではない《誰か》の声が混じってなかったか？」

「奇遇ですね。俺もまったく同じ質問をしようとしたところですよ」

「ええ、私も同じです」

「ん」

ということは、俺達四人（俺・美雪さん・凜・リリナさん）の他に、誰かが我が家に《居る》ってことだよな……あ。

「健一、なんでお前が居るんだ？」

「今更！？ここんとこ毎日居るよ！」

まったく記憶にないな。つか、もう話が終わるとこだしほっときやいいか。

「酷くない！？俺の扱い雑じゃない！？！？ってか終わりって何？俺の場面これだけ！？？」

ああ、マジでうぜえ

69：夏休み最終日の朝

あれだけ長いと思っていた夏休みも、あっという間に最終日。今年は綾館姉妹の別荘へ行ったり、盆には従姉妹とゲーセンへ行ったり……何かと慌ただしくも楽しく、時間が過ぎていったように感じる。

昨日、綾館姉妹と一緒に花火大会へ行くという約束をし、今日はその当日。

とはいえまだ朝だから、出発にはかなりの時間もある。

一通りの家事を済ませ、凜に朝食を食わせた後は、ちょっとした休憩時間。

綾館姉妹は夕方に来ると言っていたので、やる事も無い。……居る時は騒がしいと感じても、居なけりゃ少し淋しいと思ってしまう俺は、何となくだが、好意を寄せてるんだろうか？

なんて思っただけで苦笑したら、そんな俺を見ていた凜が「ユキ、キモい」発言。

我が妹君は、実兄にも容赦ない……。

とりあえず話題（というか話をごまかす）変えのためにテレビをつけりゃ――

『この秋、あなたはクールに世界を魅了する！』

母（菜々子）が経営してる化粧品会社“Clair”の新CMが

流れていた…… のだが、こりやどうみても《あの人》なんじゃ――

ガチャ！バンツ！！！！

え、なんか玄関が騒がしくない？つてか、施錠してたはず……

「ユキいつつ！！大変だ大変だ大変だ！！ヤンキー女がテレビCMに出て（出演）してるっ！！！！」

「うおおいつ！まず待て！どうやって玄関から入って来た！？俺施錠してたよな？なっ！？！？しかも合い鍵は取り上げたはずだろ！？」

我が家のセキュリティを疑いたくなるほど、この《姉妹》の登場は謎が多い。言わずもがな、綾館姉妹のことだが。

「そんなことより！」

「俺には“そんなこと”とは言えねえっ！！」

「おはようございますユキ、勝手ながら……」

ニツコリ笑顔なりりナさんが“ほらっ！”的な感じで俺に披露したのは、形状に覚えのある《鍵》……ようするに、この人は俺が合い鍵を取り上げる前に《新たな合い鍵》を作っていたらしい……。

これも没収するべきだな。

「ユキ、それより観たか！？あのお義母様の会社の新CM」

「“お義母様”言うな。…… たった今、観ました」

なんでも美雪さんも食事を終えた後にテレビを観ていた時に“あの人”がモデルになったCMを観て、慌てて我が家に（合い鍵を使って）来たようだ。

たしかに俺も驚きはしたけど。

まあ来てくれた以上、無下に追い返すわけにもいけないので、二人を凜の居るリビングへ。

ピンポン！

なんか来客が多いな今日も。健一は昨日、宿題を終わらせたし、他の如月や河南達が来る予定も無いはずなんだが……って感じながら、再び玄関へ。

ガチャ……

「よ、よおっ！」

「え……えつと、ど、どちら様……？」

玄関先に立つてたのは、帽子を目深にかぶり、目にはでかいサングラスとマスクという、明らかに不審な女性……

「あ、ワリワリ！アタシだって！」

「獅子神さん！」

噂をすればなんとやら……つい数分前にCMに出演してた“あの人”、姐御口調な獅子神さんだ。

つか、なんでそんな恰好なんだろう？

「む！貴様はヤンキー女っ！！」

「やっぱり今日も来てたか！あと“ヤンキー女”っていうな！！」

ああ、やっぱり始まった……どうして美雪さんと獅子神さんって、

顔を合わせりや喧嘩すんだろ？

約二週間とちよつとぶりに、獅子神さんがやってきた。相変わらず姐御な口調は変わらないが、心なしかキレイになったようにも思う。まあ元々が美人な人ではあるんだが、一層美人に磨きがかかった……って感じ。

因みに口には出さない。何故なら美雪さんが過剰反応するからだ。あと獅子神さんの恰好についてだが、本人いわく「知らない人から声をかけられるのがうざい」からだとか。まだそんなに放映開始から時間が経ってないから心配ないと思うのは、俺だけだろうか。

69 2：昼前～夕方（前書き）

書き忘れてた内容……というか付け足しのようなものなので短めです。

69 2：昼前〜夕方

我が家に来て早々の綾館姉妹だったが、突然「しまった！何の準備もしてなかった！」と、帰った。

その際にリリナさんが凜と獅子神さんに耳打ちし、なぜか二人も外出。

まあそんなわけで、俺は家に一人ぼっちである。

やることもなく部屋でベッドに寝転びながら、ヒマを持て余す。たまにやゲームでもするか！なんて思ったが、そんな気もない。仕方なく起き上がった俺の目に、それは写った。

夏休みの始め、皆で海（綾館家の別荘）で遊んだ時に撮った集合写真……。

思えば、今年の夏は楽しかった。海へ行った事を皮切りに、物置を漁って地下室を発見したり、盆や盆過ぎにゲーセンへ行ったり、綾館姉妹と服を買いに行ったり……その殆どで、俺の横には美雪さんが居た。毎日を退屈だと思わなくなったのは、強引で、騒がしくて、自分の欲望に素直で、俺を振り回してばかりなのに、どこか憎めない……そんな先輩のおかげだろう。

だからこそ、俺は自分が求める《理想の恋人》というものが、わからなくなっていた。

“綾館美雪”という女性は、美人で頭が良く、そして堂々たる人物だ。

ただ、騒がしくて、強引で、自分の欲望に素直で、俺はいつも、振り回されっぱなし。

……でも、憎めない。ちょっぴり変態ちつくな女性なのに、いつも俺の近くに居てくれる。今ではその関係が、当たり前だと感じて

いる俺。

かつて美雪さんは俺に「私はユキが好きだ！自分の気持ちに妥協はしない！！」と宣言されたことがある。だから俺も「自分の理想に妥協はしない！」なんて言葉を返した。

なのに、結局今まで突っぱねることなんて出来てはいない。それどころか、少しづつ、けれど確実に、俺は綾館美雪という先輩に心を惹かれていく……。

平行線を辿ってばかりだった関係が、徐々に美雪さんに軍配を上げ始めている。なのに、少しも不安を感じないのは、既に心の中で自分の気持ち、固まりつつあるからだろう。

↓

知らず知らずのうちに、俺は眠っていたらしい。気付けば外の日には傾き始め、夜の到来も間近に迫っていた。

静まり返った部屋の中で上体を起こした時、不意に携帯が新着メールを知らせた。

“ 芦原の神社に集合 ”

八文字の短くて素っ気ない文章を送りつけてきたのは凜だ。あまり待たせるわけにもいかないので、俺も手早く着替え、財布に携帯を手、家を出た。

70：夜空に咲く大輪の花（前書き）

学生さんにとっての夏休みも、今日で最終日ですね。この物語も、あと僅かとなりました。

70：夜空に咲く大輪の花

凜の指定通りに芦原神社に到着した俺を待っていたのは、艶やかな浴衣姿の女性陣と、俺同様に私服姿の男が二人。

早い話が美雪さんとこの別荘へ行った、いつものメンバーだ。

「俺は今、猛烈に感動している！！神様ありがとっ！！！！！」

「うるさいっ！！！」

健一のオーバーすぎる声に叱責した俺と河南。声もハモったが、なぜか服装までもが似ている始末。

まあ野郎の私服姿なんて説明するだけ無駄に思えるので、女性陣の浴衣姿をちとばかり紹介しよう。

「相変わらず騒がしいわね、鎖に繋いでたほうがいいんじゃない？」

トップバッターは女性陣唯一の良心である如月舞。といつよりまとも

ショートカットされた髪はサラサラ猫っ毛で、黒髪に映える水色の浴衣姿がかわいらしい。

「……………」

続いては寡黙な百合っ娘である湊奏。長髪をお団子型に纏め、清涼感漂う白に薄紅の模様が入った浴衣を纏った姿は、いつものミステリアスな雰囲気から一転、実に色っぽい。

「ユッキー三日ぶりにゃんっ」

普段は寝てばかりの猫っ娘の結城皐月は、黄に花柄模様のかawaii

らしい浴衣姿で、いつものストレートヘアを、今日はツインテールに。よく似合っていると思う。その証拠に「似合うな」って口にした途端、「だろ！」と、なぜか河南が反応した。

「ん」

そして我が家の暴君……失礼、妹である凜は、ピンクにリアリティな髑髏の刺繍がアンバランスな浴衣姿。……その感性をどうにかしてほしいと願うのは、兄としての悲痛な想いに外ならない。

「たまには浴衣つてのも悪くないな！」

「あら、ユキも思わず見惚れてます？」

メンバーでトップクラスのスタイルを誇る獅子神さんとリリナさん。獅子神さんは緋に鳳凰があしらわれた刺繍がとても似合っているが、なんとなく「え？その筋の方ですか！？」と口走りそうになった。

一方のリリナさんは、黒に赤い牡丹の花の刺繍が入っている浴衣を着て、普段の優しそうな雰囲気、これまた「姐さん！」と言ってしまいそうになる程だ。ただ、やはり双方ともに年上としての魅力は他のメンバーに比べて群を抜いており、大人の色香が漂っている。

「ユキ、どうだ？似合ってるか！？」

ラストを飾るのは、やはり女性陣一の変態！……失礼、少しばかり下ネタの多い美雪さんだ。

艶めく黒髪は一つに束ねられ、かわいらしい赤サンゴの簪が、かんざし単調なヘアスタイルに華を添えている。

紫紺地の浴衣は足元と袖口に白い桜の模様が施され、他の女性陣

よりもシンプルだが、大人っぽさとシックな感じが相成って、とても――

「すごく、よく似合ってますよ――」

――素直に綺麗だと思った。

芦原の神社から少し歩いた所に河川敷がある。大河というわけもなく小川と呼ぶのも正解ではない兎嶺川はきれいに芝舗装され、普段はゲートボールや少年野球に使われるグラウンドも、今日はちよつとした露店街に変わっている。

花火までにはまだ時間もあるので、それまでは露店巡りをすることに。

多人数で回るのは少し不便なので、河南・結城のペア、如月・大川・湊の三人、リリナ・凜のペアになることとなったんだが、残された俺・美雪さん・獅子神さんの三人で回るはずの露店巡りは「アタシは凜ちゃんのこと回るよ!」との獅子神さんのお言葉により、美雪さんと二人で回ることとなった。

「獅子神さん、急にどうしたんすかね?」

「ふふ…さあな。ユキは私と二人つきりは嫌か?」

「まさか…喜んでエスコートさせていただきますよ」

言葉を素直に返せたのは、自分の中にある気持ちの変化かもしれ

ない。

大差ない、けれどどちらともつかない《好き》の気持ちを確認したいと思った。それが言葉になったから、美雪さんは少し驚いたような表情をして、そして笑った。

「じゃあ、行こう！」

グイッと手を引っ張られた。けど、そこに不快感なんて微塵も感じない。

むしろ嬉しいと思っっている俺はやっぱり――

固まりつつある気持ちを表すように、握られた手に少しだけ力を入れた。

焦げたソースの香りや、交錯する人の声。その場の雰囲気には濁りがない明るいテンションのままで、イカ焼きを食べたり、タコ焼きを食べたり、焼きそばを食べたり、綿菓子を食べたり……って、

「食ってばっかじゃん!!」「うむ、なんとも食欲をそそる匂いに
つられて、つい……」

美雪さんの言いたいことはよくわかる。俺も露店とか行ったらつ
いつい沢山食べるから。

とはいえ限度ってものがあるだろ。軽く野口さんが二枚以上飛ん

だ（全部俺の支払い）。

ってか、美雪さんってこんなに食べる人だったのだろうか？

まあともかく、ぐるっと露店を巡る間に、フランクフルト・フライドポテト・鯛焼き・タコ焼き（二回目）・林檎飴・カキ氷なんかを堪能した美雪さんは、にっこりと満足気。対する俺は結局、樋口さん分の出費（俺が食べた分も含む）によって想定外のダイエットをしたマイ財布を見て、表面上は苦笑しつつ、心の中で涙を流した。

とりあえず満腹になった美雪さんと俺（の場合は胸やけ気味）は、皆が集まっているであろう河川敷の階段に足を運ぶ。

ただ、どういうわけか他のメンバーはまだ来ておらず、仕方なく美雪さんと場所取り。

その後も誰も来ないので不思議に思っていたら、新着メールが一件。内容は「わり！すげえ見晴らしのいい場所発見したからそっちには行けねえ！」とのこと。その送り主が健一だったというのもあるが、俺は何となく「うっほ！ハーレム状態！！」なんて言ってる健一を想像して、思わず笑った。

美雪さんにメールを見せたら、どうやら同じことを想像したらしく苦笑。「見晴らしの良い場所にも行きたいが、どうも少し疲れたようだ」と階段に腰掛けた美雪さんに「じゃあ俺らはここで花火を見ましようか」と言葉を返したら、再び驚いたような表情を見せ、また笑う美雪さん。

「うん。私はユキと一緒になら、何処だっていい」

照れもなく真っ直ぐに俺を見る美雪さんは、やっぱり綺麗な笑顔をしていて、思わず見惚れてしまう俺。夏の終わりにこうして美雪さんと過ごせた事を嬉しく思いながら、彼女の気持ちを受け入れつつある俺の視界に――

ドオォーオオン!!!!!!

——《大輪の花》が夜空に咲いた。

71：学校生活再開、なぜに連行！？（前書き）

夏休みが終わりましたね（一部を除き）。こちら（ユキ達）も、学校生活が再開しました。

71：学校生活再開、なぜに連行！？

休みが明けた。再び始まった学校生活の初日から、いきなりのテストというのは如何なものか、なんて思う生徒達（俺含め）。

そんなことなんて気にしない、なんて感じなのは教師だけだろう。まあテストといっても「夏休みの宿題」から出題される問題ばかりなのでさほど気にはならないが、自分で考えるでもなく他者の宿題を丸写しした連中の顔色が悪くなったのは、言うまでもない。

半ドン授業のテストも終わり、宿題を提出した俺。後は帰るばかりである。

「ユキいゝ待ちくたびれたぞ！放置プレイは私の性格に合わん！」

2年学舎通用口から外に出た途端、仁王立ちで俺の前に立ちはだかった一人の先輩。

言わなくてもわかるだろうが、美雪さんである。

美雪さんの台詞に少し語弊があるので訂正しておくが、俺は一言も「待っててくれ」とは言っていない。あと「放置プレイ」ってなんだ？

「待たせた覚えもなければ待っててくれと言った覚えも無いんですが」

「何を言う！私はきちんと聞いたぞ！ユキが「学校が終わったら玄関で待っててください」と言ったのをっ！！」

「……どこで？」

「夢で」

いつそ病院を紹介したほうがいいんだろうが、これで《通常》な

ので質が悪い。なんだ夢って！

まあよくはわからんが、俺を待っていた事には変わりない。じゃあ「一緒に帰りますか？」なんて言葉を口にする前に、美雪さんから言葉が出た。

「生徒会権限により、相澤由希を生徒会室へ連行する！」

連行？と言いかけて、俺は体格の良い男子生徒に取り押さえられ、わけもわからず生徒会室へと連れて行かれることに。

↓↓↓

「やあやあ相澤くん！ご足労いただいてすまないね！」

重厚な扉を開けた先で、我が嶺桜高校生徒会長の長東京都先輩ながつか・みやこに
出迎えられた。

金髪で左目が青い京都先輩は、ハーフではなく純日本人である。
ようは染髪・カラーコンタクトで雰囲気が外国の人っぽいだけ。

正直な話、連行されるような悪いことをしているわけでもなければ生徒会役員でもない俺にとって、京都先輩とは全く接点が無い。

だからこそ、連行された理由を純粋に知りたかったんだが……

「実は美雪が相澤くんにかまけてばかりで仕事が進まないんだ。来月には体育祭も控えているし、やることが沢山だね。キミに来てもらったのは、『生徒会臨時役員』として私達の仕事を手伝ってもらおうと思っただけのことなんだ。相澤くんが手伝ってくれるなら、私達

も助かるし、美雪も逃げないだろうからね」

……聞かなきゃよかったと後悔。要は「キミのせいで美雪がサボってばかりで仕事が進まないから手伝え！」と言われてるのだ。

なんだか腑に落ちない理屈をこねられてる気もするが、まあ責任が無い……というわけでもない。

もとから美雪さんがきちんと仕事さえしてくれてれば、こんな理不尽なことを言われることもなかったんだがな！

ただ、俺も自分の事（主に家事）がある。「はいそうですか」と簡単には協力出来な——

「そうそう、相澤くん家は御両親が共働きだから、キミが主に家事をしてるんだよね。でも心配は無用だよ、何せ美雪のお姉さんがキミん家の家事一切を引き受けてくれたんだ」

——くはない。道理でリリナさんの姿が見えないわけだ。

ようするに、俺が協力する事を前提として話を切り出したってわけで、後は俺が「わかりました」と返事をすれば、京都先輩のシナリオ通りに事が運ぶって寸法……。

さすがは生徒会長を務めているだけのことはある。とんだ《食わせ者》だ。

まあ素直に京都先輩の話に首を縦に振ってもいいわけだが、あまりにシナリオ通りに事が運ぶってのも、俺としては面白くない。

「わかりました。ただ——」

「ただ？」

「俺にメリットが全くないんですがね」

少し理由（見返り）を臭わせてみる。ま、この辺りまでは京都先輩も想定済みだろう。

「生徒会役員って肩書は、後々の内申に好評価を与えるものだけど？」

「《臨時》に与えられる評価なんて、たかが知れてますよ？それに残念ながら実力至上主義なんで、内申なんてクソくらえです」

もちろん俺の言葉はハツタリ。実力至上主義なんて柄ではないが、内申なんて他者の勝手な評価で一喜一憂するよりは、実力で一喜一憂するほうがマシだと思っている。

さて、京都先輩は俺にどんな《メリット》を提案するだろうか？

「うーん……可愛い女の子を紹介とかはどう？」

「なっ！？京都、それはダメだ！ユキが他の女といちゃいちゃしている姿なんて見たくない！！！！」

俺が断る前に美雪さんが割り込んできたよ。まあ仮に俺がその提案を呑んだとしても、京都さんが俺を納得させるような女の子を紹介できるとは思わないけどな。

「んじゃ、どういうメリットが良いの？」

「さあ？自分で考えてみればどうですか？」

段々と京都先輩の顔色から余裕がなくなっていくのがわかる。俺としてはここで妥協案の一つや二つくらい出してもいいが、相手は生徒代表の《食わせ者》である。

勝ち戦しかしないような人間に俺は容赦しない。

「う、う……金銭的要求とか？」

「それは違反ですね」

「それじゃ、物的？」

「具体的には？内容にもよりますが」

「え、ええつと……ううん……」

勝ち戦しかないような人間は、不意の出来事に対処できない例が多く、京都先輩はその典型的なパターンのようだ。

さてと、そろそろ解放してやるか。食わせ者とはいえ先輩だしな。

「まあせいぜい考えといて下さい。生徒会長なら、それくらい簡単でしょ？」

「……キミ、案外意地悪だね」

「《勝ち戦しかない人》よりは、幾分かマシだと思いますけど？」

この言葉には、さすがに驚いたらしい。京都先輩は苦笑しつつも俺と対峙して、深々と頭を下げた。

「気分を悪くしたなら謝る……ごめんなさい。でも、本当に手伝わほしいと思ってる。美雪が認めたのなら、間違いないと思うから」

そんな中で、やはり美雪さんは誰からも信頼されていることが伺えた。

ま、素直にそう言ってくれたわけだし――

「……これから、よろしくお願いします」

九月一日、この日から俺は生徒会（臨時）役員として、学校生活をスタートさせた。

「ユキと毎日校内デート、校内デート」

そして若干一名は、無責任にノリよく歌っていた。元々は貴女

が真面目に生徒会の仕事をやってくれてれば、こんな事にはならなかったんですがね、はあ……

71：学校生活再開、なぜに連行！？（後書き）

ぼちぼちと、完結が近づきつつあります。もう少しのお付き合いと、これからもご愛顧をよろしくお願いします。

72：《見返り》の解答？

生徒会（臨時）役員……すなわち雑用としての登用が決定した俺。翌日からは授業を終えた放課後から、正規役員の同輩・先輩に混じって雑用に徹する日々が始まった。

「こつち人数分コピー頼む！」

とか

「おーい、前年度のデータ出してくれー！」

とか

「ユキい、愛してるー（はあと）」

とか。……いや、明らかに最後は違う。つか美雪さん、どさくさに紛れて変な事言っな！視線が一気に俺に向けられてんじゃねーか！！
とまあ美雪さんはテンションが高い！……いや、この人のテンションが低いところを見た記憶はほぼ無いに等しいが、いつも（我が家に侵入してる時）以上に、だ。

喜んでくれるのはなによりだが、その前に「巻き込んで悪かった」くらいは言えよ……。

会長・副会長・書記・会計・補佐の五人という小数ながら、精鋭揃いの生徒会は仕事も的確かつ速い。俺が臨時（雑用）に任命されて一週間も経たないうちに、大まかなプログラム・運営は決定した。「いやはや、相澤くんお疲れ様！キミのおかげでスムーズに仕事が終わったよ、ありがとう！」

なんて京都先輩（会長）は言うが、実際は俺なんて必要なかったと思う。まあ役立ったのであれば、何も言わないが。

「さてと、相澤くん」

「なんでしょうか？」

「約束の《ご褒美》なんだけど」

ああ、そついやそんな事を言った覚えがある。まあ“食わせ者”である京都先輩を困らせたかっただけなんだがな。さて、何をくれるのやら……？

「じゃじゃーん！《栄大》の商品券五千円分！」

《栄大》……？えいだい……えいだ……えい……だ……！！！！！！！！

「《栄大》ってスーパー栄大ですかっ！？」

「もち！ってか、食いつきがすごくない！？」

スーパー栄大って、俺の行きつけのスーパーマーケットじゃねえ

か！鮮度良好・品揃え豊富・安心価格の三拍子が揃った、主婦（夫）の味方のスーパー栄大！ しかも商品券五千円分だとう！？

「で、でもなぜ俺の行きつけのスーパーの商品券を？」

「いやいや、よく知ってるよ！タイムセールでは並み居る主婦達と対等に渡り合う実力の持ち主だって事も！」

誰だそんな情報を京都先輩に教えたのは！……いや、おそらく美雪さんか。

「京都、貴様はユキのストーカーか！！」

おい、どの口がそんな事を言ってた？京都先輩がストーカーなら、美雪さんは一体なんなんだ？

ん、待て……ってことは、美雪さんが情報提供者ではないな……。けど、他に俺のプライベートに詳しい人間に心当たりなんて皆無だが――

「いや、いつもうちの“スーパー”をご贖いいただきまして、誠にありがとうございます！」

――は？今、なんだった？“うちのスーパー”って言ったよな？？

「スーパー栄大は、私ん家の親が経営してるんだよ！」

つまり――

「「ええええっ！？！？」」

——寝耳に水ってヤツだった。

スーパー栄大：経営者《長束敏行》。まさか《主婦の味方》の身内がこんなところに居ようとは！

京都先輩の父親がスーパー栄大の経営者だとは、夢にも思わなかった俺。京都先輩は名前が名前だから、どこかのお嬢様だと思ってた。

「相澤くんが求める《見返り》ってのを考えてたら、ふと思い出したんだ。美雪が「ユキは妹と二人暮らしで家事を取り仕切ってる」って言ってたのをさ。それに、よく防犯カメラに映ってるのを見た事があるからね。で、もしかやと思ったんだよ！」

ううむ……推測だろうが、なかなか鋭いところを突いてくるな。さすがは京都先輩、だてに生徒会長を務めちゃいないか。

とはいえ、だ。たしかに商品券五千円分は魅力的だが、俺は別に見返りなんて要求する気持ちなんてサラサラ無いんだよな。

「京都先輩、今更なんですけど、俺は見返りを要求するつもりなんて無かったんです。ただ先輩の思惑通りに事が運ぶのが、何となく気に障っただけなんで、口から出まかせだったんすよ……」

それに、仕事といっても単なる雑用だったし、見返りを要求するような手伝いをしてきたつもりもないし。

「あれ？まさかの辞退！？ま、相澤くんらしいけど、ここは素直に貰つとくべきなんじゃない？」

「せつかく持ってきたんだし！」と付け加える京都先輩は、俺の掌に商品券を乗せてニツコリと笑った後で、こう言った。

「常連さんを大切にするのは、私であり両親のモットーなのよ！」

先輩は、張り切って父親の後を継ぐようだ。どうやら《主婦の味方》であるスーパー栄大も、将来安泰らしいな。実にありがたい事だ！

こうしてありがたく商品券を戴いた俺、それはそれは帰り道もスキップでいけそうな位にテンションが上昇中。

だが――

「ユウゝキいゝ……物で釣られるとは、妻として恥ずかしいぞ！」

今回は影が薄かった美雪さんのテンションは下降中。

そして誰が妻だ！！！！

73：参加種目決め

俺の通っている嶺桜高校ってのは、”前身”が女子高だったというところもあり、生徒数は男子よりも女子のほうが多い。

その名残もあってか、前年までは男子がプログラム参加に占める割合も少なかったんだが、年々男子生徒の入学者も増え、今年はプログラム（競技種目）にも変化が。

「やっぱり男といえば、【力競技】よね！」

生徒会長の一言によって、今年のプログラムに【俵上げ】【混合リレー】【全学年合同ダンス】が追加されたのを知っているのは、おそらく生徒会役員と教師、そして（臨時）役員だった俺だけだろう。

その案件がまとまり、各学年ならびにクラスで発表があったのは、俺が（臨時）役員を解任されて2日後のことであった。

昼休み・掃除を終えて午後の5・6時限の授業がHRになっていた水曜日。それこそが今年度の体育祭の予定およびプログラム参加を決めるクラス会議になっていた。

今年は男子と女子が合同参加となる【混合リレー】や【合同ダンス】が追加された上に、力自慢の表舞台となるであろう【俵上げ】なんかもプログラムに追加されたため、予定表が配布されると、いつもは冷ややかな我がクラスも少しざわついた。

中でも健一は

「【合同ダンス】ってことは、女の子と手を繋ぎ放題じゃん!」

邪な妄想を膨らませたがために、クラスメイトの女子全員から、冷凍ビーム（冷視線）を送られていた。

まあ若干暴走（妄想）気味の健一^{バカ}は極端な話だが、それでも浮かれない男なんていないんじゃないだろうか。実際にクラスの少数男子からは淡い期待に満ちた言葉が小さく漏れているし。

女子は……どうなんだろう？

多少話は逸れたが、今は種目競技に出場するメンバーを決めている最中だ。前半戦の目玉は【合同ダンス】。ちなみに自由参加で、1曲毎にメンバーは入れ替わり、それが3曲分ある。ま、自由参加だから俺は出るつもりもない。

着実に競技に参加する人間が決まっていく中で、俺は最初の競技である【100m走】と【男女混合リレー】【200mハードル】をチョイス。走る種目ばっかだ。

いいわけがましいことだろうが、【男女混合リレー】にエントリする気はさらさら無かった。健一^{バカ}が勝手に推薦したのだ。まあメンバーの女子に如月・湊・結城の3人が混じっていたので、あまり気兼ねする必要も無かったのが救いだ。

んで、あとは全員参加型の玉入れに出場するくらいだが、プログラムの後半に【応援団競技】というものがある。普通の高校では3年生の先輩方が主立って、改造された学ランや袴なんぞを着込んで

自団をアピールするものだろうが、ふざけたことにこの学校では2年、1年生が主立ってやることになっている。まあ有志を募るので強制参加ではない。

「由希、やろうぜ!」

「寝言は寝てから言え。だからお前はバカなんだ」

この目立ちたがり野郎(健一)は、こともあろうに俺を引き込もうとする。ただ俺とて目立つことは嫌いなんで丁重に断ろうとしたんだが――

「由希、俺も出るから出てみないか?」

まさかの河南までもが参加を表明!

「たまにはド派手にいってもいいんじゃない?」

「……(こくり)」

「アッキーの言うとおりにやあゝ…すびいゝ……」

そして如月・湊・結城の女性陣までもがつ!つて、結城は寝言か?それに周りからも「相澤でいいんじゃない?」「つか早く決めるよな」などの声が囁かれている。

かくして【相澤包囲網】なるわけのわからん(俺もわからん)雰囲気で、俺は退路を絶たれ――

「わかった!やってやろうじゃねえか!」

やけくそで受諾。翌日からの激しい練習が待っているとも知らずに――

74：後輩だろうと容赦はしない（前書き）

初のPCからの投稿です。

74：後輩だろうと容赦はしない

今年は忙しい……なんたつて昨年の当たり障りのない競技にばかり出場していたせいもあるかもしれないが、今年は走行種目リレーとかの他に、まったくの未経験といっても過言じゃない【応援団】としての参加が決まってしまったから。

幸いにもく団長>という妙な肩書きを背負うことにはならなかったが、く副団長>という肩書きは背負う羽目になった。ちなみに団長は河南秋斗である。確定した要因は、目つきの悪さ（鋭さ）と何事にも動じない堂々とした雰囲気からの選出だ（一部を除き）。
そこで我がクラスは3組ということもあり（1学年7クラス）、紫団としての活動を始めることになった。

そこ、「紫とか微妙……」とか言うなよ。俺ですらそう思ってたから！

「ああ、まずは団長ならびに副団、そして団員を発表する」

本格的なりハースルは後回しとして、まずは放課後に紫団のクラスである1年三組、2年三組、3年三組の生徒が集められた（第2グラウンドに）。あまり得になるような話ではないが、美雪さんとリリナさんは5組（青団）である。青とかメジャーでいいよね。
それにしても河南の低くてよく通る声……けてして大声ではないのに、集められた生徒全員にも届いているようだ。

そこでまずは選出された団員の発表があるんだが……ちょい待て、俺はそんなことまったく聞いてねえぞ！？

「俺は河南秋斗だ。今年の体育祭で紫団団長を務める。よろしく」

簡素な挨拶を済ませた後で、河南は目線だけで俺に挨拶を促す。
まあ河南のような挨拶をすればいいってことだろう……。

「相澤由希、今回は副団長を務めることになった。よろしく」

ま、こんなんでいいんだろう。河南のほうを見れば、目だけで「よし！」的な雰囲気^{バカ}が伺えるし。

それから大川健一・如月・結城と続き（なぜかいつものメンバー）、そして「大太鼓役」に湊が。余談だが、湊は最初の一言を発するまでに30秒近くを無言で通し、団員以外の生徒からは「あの女ただ者じゃねえ。怒らせると怖いかもしれない」と、畏怖されていたぶん湊としては「なに喋ればいいんだろう？」と思っただけなんだろうが……。

その他に同学年からは、同クラス（当たり前だが）の大峰という屈強な男（相撲部）が旗持ち役、女子剣道部の実力者である斉藤さん、俺らと同じ帰宅部で実家が寿司屋の金沢（男）、陸上部次期部長候補の長安（女）、水泳部の沖邑（男）が。一年からはめんどくさいので男が6、女が4人、団員として参加する。一年はあまり関わらない者ばかりで知らないが、同学年のメンバーは、かなり個性的（というより割りかし有名人）である。なかなか強者揃いだ。^{つわもの}

「団員として参加するメンバーは以上だ。今日は顔合わせ程度なので本格的な活動は3日後からだが、何か質問があるなら早いうちにしておいてほしい」

ううむ、さすがは団長（河南）、後顧の憂いを絶つ、というやつか。

で、そこで手を挙げたのは、一年の男の子。見た感じくやんちゃ>のそいつの名前は……知らん。

「ええつと、相澤先輩に質問っすけど……」

まさかの俺か！？まああらかたの質問なら答えられるが。

俺も「何かな？」と、できるだけ柔らかく応対。目つきの悪さ（鋭さ）は河南にも引けを取らんからな（自慢にもならんが）。

「相澤先輩って、3年の綾館先輩と付き合ってるんすよね？きつかけって何すか??」

おい待て、なぜ付き合っていることを前提に質問してやがる？しかも応援団とかまったく関係ない質問じゃねえか。

「あれっしょ？なんか聞いた話によると、同棲してるらしいじゃないすか、羨ましいなあ！！」

声高らかにデマ口にしてんじゃねえよ。つかアレか？これは俺に對する嫌がらせか??

「どうやってたらしこんだんすか？俺にも教えてほしいなあ！！」

ああ、イライラすんなあこのくソガキの言動にやあ…俺が、いつ、美雪さんをたらしこんだって？そういうデマばかりを口にして他者を傷つけるような人間が、俺はこの世で一番大っ嫌いなんだよ！

「お前……名前は？」

「俺すか？俺は門司っす、ねえ先輩、教えてくださいよお」

……………プチッ（何かが切れる音）

「お前、今のうちに鎮魂歌^{レクイエム}でも唱えてろ……」

「はあ？何言つてんすかアダダダ痛い痛い痛い？！？！？！？」

ヘラヘラと下卑た顔にアイアンクロー。この九州の港みたいな名前の頭が案外小さかったので、片手で簡単に掴める。しかも力を加えやすい。

「おいクソガキ、よく聞け。俺はこれでもまだ加減してやってるほうだ。それともまだ生意気な口が利きたいなら、俺も加減なしでデメエの頭蓋をミシミシ音が鳴るまで握り潰してやつてもかまわねえけど……どうする？」

「スススミマセンっしたあ！！！！」

「……あと、そこでせせら笑ってる奴もだ。俺は自分の事なら何言われてもある程度なら我慢できるが、俺を利用して他の人間を馬鹿にするようなことを言う奴は許さねえ……それが後輩だろうが先輩だろうが、男も女も関係なく、だ。わかったら返事いっつ！！！！」
「は、はいいっ！！！！！！」

俺の一連の行動を見て固まっていた紫団の連中（生徒）に一喝し、返事が返ってきたことで門司だか文字だかわからんクソガキを開放。白目むいてるが、まあほっときや目え覚ますだろ。

ただ、俺は明らかに「やつちまった！」感が否めない。目つきの悪さは態度でカバーしてきたつもりだったが、一瞬で水の泡である。

「……見ての通り、相澤は怖い男だが、決してむやみに人を傷つけるような奴じゃない。それは俺たち団員が保証する。ただ、こんな状態になりたくなければ、むやみに人をあざ笑ったり、誰かを傷つけるような言動は謹んでほしい。わかったか？」

「はいっ！！！！！！」

ナイスフォローだ河南！おかげで少しだけだが、俺に対する恐怖の視線も拭えた……と思う。全部じゃないけど。

「俺たちは優勝を狙う。もちろん冗談なんかじゃない。そのためには、個々が己の持てる力を最大限に発揮するだけじゃなく、紫団のメンバーが一致団結しなきゃいけない。俺はそのためにも力は惜しまない。だからみんなも、俺たちについて来てほしい」

『はいっ！！！！！！』

「ちなみに無断でサボったり一生懸命に練習しているみんなを笑うような奴がいたら、相澤を派遣するのでそのつもりで」

『ははははいっ！！！！！！』

うおい！！フォローを入れてくれた瞬間にこのザマか！？つかテ
メエ^{マジ}らも本気な返事をしてんじゃねえよ！！

74：後輩だろうと容赦はしない（後書き）

未だかつてないPVアクセス10万件突破です。読者の皆様、本当にありがとうございます！！

一部の方（ユーザ様）には「残り僅かで完結を迎える」と言っていました、もう暫くは、続きそうです。ご了承ください（謝）

75：畏怖される俺（不本意）（前書き）

短いです。

75：畏怖される俺（不本意）

つい3日ほど前に起きた一件（俺が成り行きで後輩をシメた件）により、俺の学校生活環境は大きく変化していった。

まず第一に、後輩から挨拶されるようになった（ビビりながら）。

第二に、先輩から敬語を使われるようになった。

そして第三に、一夜にして広がった俺の一件が全生徒の知るところとなり、基本的に交流のある生徒（美雪さん達とか同じクラスメイト）以外の前を通ると、必然的に静かになる。

どれも自慢にならないことばっかだ。ちなみに（仕方なく）シメた後輩の門司って奴についてだが――

「お疲れ様っす相澤先輩！あ、かばんをお持ちするっす！！」

なんか、えらく懐かれた。そんな話を美雪さんにしたら「よかったではないか、ユキもついに舎弟を従えたのか！」と、感心された。従えたつもりは毛頭無いんだが……。

まあそんなこともあってか、俺たち紫団は妙に団結が早かった。たぶん河南が俺を理由に脅しをかけたからだだろうが……。

俺たち応援団の人間は【演舞】ってやつをするのだが、それ以外の紫団の生徒は【マスゲーム】をやることになっている。【マスゲーム】ってのは、音にあわせて大勢の人間が文字とか模様とか作るアレだ。一人が間違えたら全部がおかしくなるので、案外難しい（俺は経験済み）。

ただ、まあ……

「間違えたら相澤が来るから」

俺を理由にした河南の言葉を聞いた団員たちは、恐怖心から一生懸命練習をするようになり、中には授業終了直後や昼休みなんかも、自主的に練習に励む紫団の生徒が増えたとか。おかげで全体練習は他の団よりも格段に上達したらしい。

そのことを聞かされた俺の心境は複雑だったが……。

他の団員が一生懸命に練習する中、俺たち【応援団】の人間も、体育祭で披露する【演舞】の練習に忙しかった。それに、本番で着る衣装なんかの採寸やらデザインやらを決めなきゃいけなかったりと、俺が今まで経験したことのないことばかりで、帰宅するのも日がとつぷりと暮れてから。

疲労感に苛まれつつも家に帰宅し、玄関を開けて「ただいま」と凜に声をかけるのだが――

「お帰りユキいゝ!!」

返ってくるのは血縁関係が一切無い女性の声と、鼻をくすぐるよい匂い……。

それもそのはず。俺を迎えてくれるのは、自称【ユキの嫁】を豪語する美雪さんと、セツトで付いてくるリリナさんと、その手料理。生徒会（臨時）役員の「一件以来、リリナさんは毎日のように我が家で手料理を振舞ってくれる。ついでに洗濯物とか掃除とか、家事一切もやってくれてる。ありがたいことこの上ないが、申し訳なさも比例する。本来であれば俺がキッチンと家事一切を仕切んなきゃいけないのだが、体育祭の現状（練習）で疲労感が半端ない俺は、どうしても甘えてしまっている。情けない……。

「ユキ、一緒にお風呂する？それともベッドで私と寝る？」
「夕食にする……」

疲れゆえにシツコクすらまなねえ……。

76：バカは知名度を上げ警備は脆さを露呈した

体育祭の練習が本格化し、各学年の体育の授業も”体育祭”の一角に染まる9月の半ば……。まだ残暑厳しい昼下がりのグラウンドで、俺たち2年生は――

『…………』

無言で【男女合同ダンス】の練習に勤しんでいた。まあ、正直気乗りしない授業である。

なんでクソ暑い中でダンスなんぞをせにやなんのか……。なんて大半の同輩達は思っているだろう（俺含む）が、若干一名のハイテンションバカは、表情が緩みつばなしである。もちろんバカとは健一のことだ。

「お近づきになれるチャーンスっ！！」と鼻息荒く授業前に口にしていた健一は、やはり練習開始時からテンションが高かった。なにせ【嶺桜】は元女子高で、俺が進学する10年ほど前に共学化したばかりだから女生徒が断然に多い。

つまり健一にとっては数多くの【出会い】とやらが待っていると意気込んでいたのだろう。まあ今年の女子は美人度が高いらしい（河南調べ）ので、張り切る気持ちが微妙にわからなくもない……。

「お姫様、お手を拝借…………」

「は、はあ…………」

テンションの高さに比例して、音楽が変わる度に女生徒に何か一言アドリブ台詞を加える健一は、傍から見ても”イタイ人”だ。それに俺は見逃しじゃない……。戸惑いながらも健一の手をとった女子達の「こいつウザい」的な一瞬の表情から心理を読み取るに、彼^{バカ}

はきつと知名度を飛躍的に上昇させたはずだ（悪い意味で）。

そして――

「如月、俺とダンスを楽しまないかい？」

「ウザい」

けして口にはできなかった女生徒の”本音”をぶちまけた如月も、彼女らの間で飛躍的に好感度を上げたに違いない。

時は過ぎ、放課後。団体練習の【マスゲーム】も一週間を過ぎた今では、多少のミスはあっても一通りの形に仕上がっていた。それとは別に、俺ら【応援団】の演舞も、なかなか様になってきている。今は全員が”体操着”で練習しているものの、本番では”学ラン（オリジナル要素多数）”を着用しての演舞となるわけで、そのことも念頭に入れておかねばならない。

ちなみに学ラン（多量の刺繍入り）に関してだが、これには”とある人物”が大活躍してくれた。

「ういつすー！」

【体育祭衣装関係者】の肩書きを使い（京都先輩が取り計らってくれた）、堂々と学校に入ってきた人物は、俺が初めて逢った時のような衣装【特攻服】を身に纏い、颯爽と、そして気軽な挨拶で練習用ステージの前までやって来た。

「お疲れ様です獅子神さん！今日はどしたんすか？」

本職は町工場の事務員・趣味は単コロ（単車ころがし）の頼もしき【姉御さま】こと、獅子神紗姫さんである。

「おやっさん」が「サンプル出来た」つつてたから、持ってきた」

「ほらっ！」とばかりに渡された紙袋には、応援団20人全員の衣装のイラストが入っていた。一見すれば簡単そうに描かれているが、一人一人の身長や体型を細かに分析し、かつ自分たちが要望した模様・刺繍なんかも事細かに記されている。

「わざわざすみません」

「いいってことよ、おやっさんも「久しぶりにいい仕事が出来そうだ」つつて張り切ってたから、アタシも紹介した甲斐があったってもんだ！あっはっは！！」

豪快に笑う獅子神さん。ちなみに獅子神さんの言う「おやっさん」てのは昔ながらの【仕立て屋】で、主に学生服を専門に扱っているのだが、趣味で制服の【改造】をやっているとか。獅子神さんの持っている特攻服も、その「おやっさん」が仕立てたものらしい。

それはそうと――

「姐さん、今日は」出入り」っすか？」

「あほっ！とりあえずモデルがいたほうが、演舞での参考になるんじゃないかって思ってたきたんだよ！だから中はほら、事務服」

ああ、なるほど。てっきり特攻服を着た状態のままで学校に入ってきたのかと思った。まあその時点で警備員のおっさん（定年間際）

につかまるだろうけどな。

「つか、この学校の警備ってザルじゃねえか？この格好で入っても何にも言われなかったぜ」

その格好で学校に入ってきたの！？おっさん、このままじゃあんなクビになるよ！

77：俺の本音（前書き）

文面ぐだぐだです……申し訳ありません（謝）

77：俺の本音

体育祭の練習も学年練習から全体練習へと移行、授業も体育祭の練習を主とし、学校で過ごす服装も制服より体育服がメインとなり始めた、体育祭一週間前。

相も変わらず「ユキ〜！通い妻がやってきたぞ〜！！」と、朝も早くからテンション高めでやって来る（メイド付き）が、体育祭の練習が本格化した今、会話したりスキンシップ（一方的）したり出来る時間も少なくなってきた。

学校で顔を合わせた際には

「う、うう〜〜〜！！」

何かを言いたそうに唸ったあとで、桜花先輩（と美雪さんは同クラス）に「はいはい今は敵同士〜」と引っ張られていく始末。つか【敵】って……

まあそういう訳もあって、学校じゃあまり会話も出来ない。

……だからだろうか、学校で全校練習がある際には、無意識に美雪さんの姿を探してしまう。

「……何やってんだか……」

そんな自分に気づいて、思わず苦笑。居たら居たで煩わしく思うくせに、居なきゃ寂しい……なんて思う俺は、随分と【美雪さん】という女性の魅力に毒されているらしい。

「どうした？」

そんな俺の様子に気づいてか、河南も時折、俺を気にかける。「いや……」と言葉を濁す俺の態度は、河南の瞳^めに、どう映っているんだろうか……？

それは体育祭も間近な3日前の放課後――

「いよつしゃあ出来たあ！！」

紫団のメインとなる【段上イラスト】が完成。畳10枚分となった巨大なパネルには、紫の龍のイラストがリアルに描かれていた（いや、龍とか見たことないけど）。

”わあゝっ！！”と歓声が上がリ、徹夜&完成にテンションがハイになるイラストパネル班。気持ちは良くわかる。それにしても……

「なあ、なんでこれ3枚重ねなんだ？」

普通、イラストつてのは1枚（多くても2枚）しか描かないはずだが、なぜに3枚も重ねてあんだろうか？なんて疑問を――

「ちょい待ち相澤！残り2枚は本番まで見るな！！」

イラスト班のリーダーである小杉（女）に慌てて止められた。何なんだ一体？

まあ本番では嫌でも目にするだろうから、お楽しみはその時に
てヤツなんだろう。

すると今度は――

「相澤、ちよつと来てくれ」

団長の河南に呼ばれる。いや、河南だけじゃない……俺と普段よ
くつるんでいるメンバー（健一以外）の3人も、なぜか俺の後をつ
いてくる。

そして河南のあとをついて行って到着したのは、人気の無さ校内
ナンバー1の、校内排水処理施設（施設有り）。

「なあ相澤……お前、美雪さんのこと、どうするんだ？」

俺らしか居ないことを確認した河南は、開口一番にそう尋ねた。
……いや、ちよい待て、なんでいきなり美雪さんのことを俺に聞く
んだ……？しかも「どうする」って一体――

「相澤、私らに隠しても無駄だって！」

「ユッキーは顔に出やすいにゃ〜！」

「……（こくり）」

「何のことだ？」

大方の予想はついている。おそらくだが、最近の俺の行動（無意
識に美雪さんの姿を目で追っている）のことだろう。こいつらとは
もう2年以上を一緒に過ごしてきた仲だ。些細な変化だって、見逃
しちゃいないはず。

それでも恍けたそぶりをする俺は、まだ些か天邪鬼を被っている
のかもしれない。

「なあ相澤……つまらん意地を張るのは、いい加減やめたらどうだ？」

「……」

「もうみんな、ユッキーが美雪先輩に好意を寄せてるのは気づいてるにゃ」

「それに、美雪先輩とわいわい時間を過ごす事だって、あと少ししかないんだよ……」

「……（こくり）」

如月の言ってることの意味を、俺は痛いほど理解できているつもりだ。美雪さんはもう3年生、この体育祭が終わった後には、本格的に受験勉強を始めるだろう……そうなれば、必然的に我が家に遊びに来る回数だって減るだろうし、今みたいにくだらないやり取りだって出来なくなる。

けどな、みんな――

「……きっかけが、無いんだよ」

体育祭の練習が始まる前までは「ユキい、今日も魅力的で私のハートはブロークン！そして一緒に婚姻届を役所に出しにいこう！」なんて理解に苦しむ美雪さんなりの【告白】をされていた。

けど、今じゃもう何も言われない……朝会えば「おはようユキ！」「昼に会えば「練習ははかどっているか？」「我が家を出る（帰る）際には「おやすみユキ、お腹を冷やすなよ？」「……。何気ない会話の中に俺を心配する言葉はあっても、かつてのような【意識する】言葉が見つからない……自業自得なのは良く分かっているけど、そんな些細なきっかけすら、掴めない……作れない……」

「河南たちの言うとおりだよ……俺は今までの現状に満足して、居るく返事すら返してねえ……そのくせ、居なきゃ寂しいなんて思

つてる。……告白するきっかけなんて、いくらでもあったのに……」

正直、今俺が河南たちに言ってるのは、愚痴以外の何ものでもない。でも、それが本音……。自分から行動することの出来ない、臆病な俺の本心……

「相澤、もしきっかけが作れたら……お前は どうしたい？」

低く、けどよく通る声が、俺に返答を求めてきた。その問いに対する答えは、俺自身の本音の気持ちを待っているように……。

「俺たちは紫団の応援団であり、同じクラスの仲間だ。そいつが助けを求めなくても、俺たちはそいつを助けてやりたいと思う……聞かせてくれ……お前の…相澤由希の本心を！」

そう……そういうやつなんだよ、河南たちは。だから俺も……俺の本当の真実の気持ち^{ほんとう}を、隠さずに曝け出そう――

「俺は、綾館美雪さんが好きだ……美雪さんが大好きだ！そう言うてやるさ、それが俺に出来る唯一のことだから――」

そう、これが俺の本当の真実の気持ち^{ほんとう}。

「そういうことだ。みんな、聞いたか？」

「うん！」

「にゃ」

「……ん」

河南も如月も結城も湊も、満足そうに頷いた。それから河南はまっすぐに俺を見据え、こう切り出した

「きっかけを作るには、一つだけお前にも頑張ってもらわなきゃいけないことがある……」

「俺に出来ることなら、何だってやるさ」

「……いい顔だ。なら、3日後の体育祭、俺たちと共に優勝を狙うぞ！」

「……マジか？それなら俺だけが頑張っても意味ないんじゃない？」

「安心しろ、お前は自分の参加する種目に精一杯頑張ってくれればいい」

「……わかった、約束する！」

その返事を待っていたとばかりに、河南も、如月たちも、顔をほころばせた。

優勝なんて無謀な気がする……けど、なぜだろう……みんなを見ていると、不思議と優勝も夢じゃないと思えてくる。

きっかけなんて自分の手で掴む（作る）もので、「甘えるな！」

と怒られるのが当たり前だろう。けど、そんな俺に力を貸してくれる仲間がここに居る。

だから俺も、精一杯の力を出して応えよう……それがみんなに対する【誠意】だと、思うから。

あれ、ところで――

「な、なあ……そっいや健一は？」

すっかり忘れていた。うるさいくらいの自称【ムードメーカー】の姿がどこにも見あたらない。

「こんな話をしたら必ず冷やかしたり邪魔したりするだろうから、小杉に頼んで管理棟の中央柱に括りつけておいた」

ああ、さすがは団長兼参謀。健^{バカ}一の思考回路も把握済み&対処済みですか……。

77：俺の本音（後書き）

ぼちぼち完結が見えてきました。おそらくですが、展開的にはベタかなあ……と思います。

残りも少ないですが、もうしばらくお付き合いください。

78：体育祭2日前（前書き）

視点はユキ 美雪 ユキです。

78：体育祭2日前

裏で何があつたのかは定かじゃないが、紫団に属する（同じ組）のメンバーの士気が、日を追うごとに上がっている。

「お前らあ！死ぬ気で優勝もぎ獲んぞおっ！！！」
『おおおっ！！！！！！』

「2年も続けええ！！！」
『うおおおっ！！！！！！』

「3年も遅れんなああ！！！」
『つしやあああっ！！！！！！』

……異常である。他の団から「何事だ！？」と言わんばかりに注目を集める紫団の連中は、練習でも手を抜かない。本当に、この調子なら優勝だつて夢じゃない……。

だから俺も、頑張る。事なかれ主義とはさよならだ。

「相澤先輩っ！ぜってー優勝しましょうね！！！」
「……ああ！」

後輩の門司は、俺の本心を知っているのだろうか……自分の想い人に対する”きっかけ”作りに、俺はみんなを巻き込んでいる……。みんなの目標は【優勝】だ。俺の目標は、優勝後の【先】だ。利害関係が一致しているなら、俺は俺の持てる力の全てで、優勝を狙う。

だから俺の横で無邪気にはにかんでいる門司に対して、俺も力を込めて頷いた……。

「ユキたちの団は、例年以上に盛り上がってないか？」
「あーそーだねえー」

ユキの居る紫団の団席から少し離れた位置にある我が青団の団席から、私と桜花は紫団の様子を見ていた。いや、おそらくは私達だけではなく、他の団も、その異常な紫団の様子を傍観しているかもしれない。

時折「今年の紫団つてめっちゃ気合入ってねえか？」だの「妙に団結力がある」だのと、私の周りから口々に紫団の噂をする人間が増えてきてるのも事実だ。

「今年は紫団が優勝するかもしれんな……」
「まあ団結力は他のどの団よりずば抜けてるね、アハハ！」

そんな紫団の様子を見て、桜花は意味ありげに笑う。というより

「桜花、何か知ってるのか？」
「んー？さあ……。まあ私達も今年が最後の体育祭だし、せっかくだから優勝したいね」
「……そうだな」

はぐらかされたような気もするが、桜花の言うことも一理ある。

私達3年は、この体育祭が終わった後、本格的に受験や就職活動に専念せねばならない……。その点、ユキにはまだ1年も残されている……。ならば私は私のために、最後の体育祭を優勝という成績で終わりたい。

「……ならば私達は、紫団の優勝を阻止しつつ、優勝を狙うべきだな！」

「そーだね、相澤くんに美雪のかっこいい姿を見せつけなきゃ！」

ユキには悪いが、私には3年生として最後の意地がある。そうそう優勝なんて渡さんぞー！

日も傾き我が家へと帰宅した俺を玄関で待っていたのは、美雪さんとリリナさんだった。既に凜は夕食の最中らしく、リビングからは美味しそうな匂いが漂っている……。

「ユキ、今年の紫団は気合が入っているな」

「ええ、本気で優勝を狙っているので」

「そうか。ならば我々青団も、全力で優勝を狙う。ユキには悪いが、私達3年は今年が最後の体育祭だ……。どちらが勝つかなんてわからん……。だが、そう簡単に優勝させんぞ。正々堂々と勝負だ！！」

そうか……。美雪さんも最後の体育祭だもん……。けど、俺にも負けられねえ理由がある。たとえその相手が美雪さんでも、これば

かりは退けない。みんなが一丸となっている、みんなが優勝を狙っている、正々堂々の勝負だと言うのなら、俺も全力で美雪さん達や他の団を押さえ、優勝をもぎ獲るだけだ。

「……負けませんよ」

「望むところだ！」

にこつと笑った美雪さんは、何も言わずに右手を差し出した。対面し、その手を握る俺の手のひらに、ぐつと力が入る。それは決意の表れで、美雪さんも俺の手を握り返した。

一筋縄じゃいかない……けど、なぜだか嬉しい……。優勝なんて簡単なことじゃないが、心にめらめらと闘志が宿っているように、胸が熱くなる。

正々堂々の勝負なら、俺は負けない！負けたくない！！

それは自分のために……そして紫団のために、俺は狙う……【優勝】を――

79：体育祭前日（前書き）

これってコメディー小説なんですよね……最近まったく、コメディー要素がないことを危惧しております。

79：体育祭前日

……いよいよ明日である。泣いても笑っても、これが美雪さん達3年生が迎える最後の【体育祭】。

けど、俺にも負けられな理由がある。それが先輩達の最後の体育祭であろうと……。

私利私欲のために頑張るというのは、理屈抜きに優勝したいと思っっている他の学生には申し訳ない。だけど……それでも――

「俺は、貴女には負けたくないんですよ……勝って、貴女に想いを伝えたいんです……美雪さん……」

自分の部屋……夏休みにみんなで撮った、綾館家別荘地で笑っている集合写真……屈託のない笑みで俺の隣に”居た”想い人に目を向けながら、返ってくるはずのない言葉を口にした。

体育祭を前日に控えた今日は土曜日。普段なら休日ということもあつてほぼ無人であるはずの学校が賑やかなのは、やはり体育祭前だからだろう……。

本来なら今日は「休養日」だが、本番に意気込む生徒の行動を黙認してか、教師陣もグラウンド・教室・体育館を開放し、自主的な練習も容認している。

河南も紫団の応援団長として「土曜日は休みに充てる。無理はし

たくない」と言っていたのだが、先輩の九翁さん（男）、後輩の門司（男）、同輩の長安さん（女）の各学年リーダーの有志により、最終調整と称した練習が始まっている。

「マスゲームはほぼ完璧だが、まだまだ気は抜けねえな……」
「……ああ。だが、それは他の団も変わらんだろう」

団結力という点では、紫団はどの団よりもまとまりがあるだろう……。ただし、団結力が上だからといって「技量」・「個人」・「総合」点が上だとは限らない……。事実、美雪さん・桜花さんの率いる青団や、生徒会長の京都先輩がいる橙団も、虎視眈々と優勝という成績を狙っている。

「まあ」相手さん」も簡単には勝たせてはくれんだろう」
「……だからこそ、面白いじゃないか……」
「ほお……相澤からそんな言葉を聞くとは思わなかった」
「……正直、俺は優勝しようがしまいが関係ない。ただ、みんなが頑張っているのなら、俺は俺の出来る限りで頑張る……きっかけなんて、所詮は自分の行動次第だって気付いたからな……」

家を出る前、みんなで撮った”集合写真”に視線を向けながら考えていた……。紫団の人間で俺の本心を知る人間は、河南と結城・如月・湊しかない。他の団員は、ただ純粹に「優勝したい」と思っただけで頑張っているのだ。

そこに俺の私的な感情を持ち込むのは、利害が【優勝する】という事に一致しているとしても、俺自身が納得できなかった……いや、したくなかった。

考えが甘かったのだ……体育祭で優勝することは、個人プレーだけじゃ出来ない。みんなが一丸となつてこそ、優勝というゴールが見えてくる。優勝できなかったからといって他を責めるのは、愚者

の思想だ。ならば俺自身はどうするべきか――

”他に頼るな、自分自身でチャンスは掴め！”

俺の導き出した答えだ……。事実、美雪さんは己の本心から俺を求めてくれている……。たぶん。ならば俺は美雪さんのように、自身自身の力で、自分の本心を伝えなきゃいけない。

そこに他人の力を必要としてはいけない……。そう思っている。

「俺にとって優勝は二の次だ。けど、今はみんなが頑張っている……俺に残された時間はいくらでもあるから、俺は今、自分の持てる力を、みんなのために使いたい」

「……いい顔だ。これで本当に、紫団は団結したな」

切れ長の双眸をより細め、一生懸命に練習する他の生徒に視線を移しながら、河南は微かに口角を緩め、笑った。

「……優勝できるといいな」

「バカを言っな、優勝できるといいんじゃない……【優勝する】んだ」

「えらく気合が入ってるな……」

「当たり前だ。俺の異名を知っているか？」

今度は歪に口角を吊り上げた河南。それは【嶺桜の情報屋】の異名を持つ、天才軍師の顔だった。

夕方ともなれば、真昼の暑さも和らぎ始める時間帯……心地よい疲れと共に我が家へ差し掛かって気がついた。

「あれ、これって――」

普段はまったく使われていない車庫に、見覚えのある車と、見覚えのある單車……一方は俺の知り合いの單車であり、もう一方は――

「ただいま」

「お帰り由希！」

「おう、お帰り」

「よう相澤！」

「ん」

やっぱり帰ってきたのかマイペアレンツ（両親）。つか獅子神さんまでいる。

「おう、明日はいよいよ体育祭だろ！？アタシも料理の勉強してきたから、今日は相澤にスタミナのつく料理を振舞おうと思ったわけよ――！」

「……ああ、道理で……」

ニコニコ顔の獅子神さんと、テーブルに盛られたいかにも「スタミナ満点」の料理……そしてリビングの片隅から覗く、台所の異様な残骸……。

獅子神さんお手製の「スタミナのつく料理」を堪能したあと、台

所の焦げたなべ、生臭い流し台、床に飛び散った油を掃除すること
にスタミナを消費……。結局はプラマイゼロ……。いや、疲れが倍增
した分だけマイナス……。か？

80：体育祭直前の朝（前書き）

本文は長め……なのかな？」

80：体育祭直前の朝

うだる暑さも和らぎ、朝・夕と穏やかであり爽やかな風が本格的な”秋”の到来を告げる10月……。今日は晴天、少しばかりの雲と突き抜けんばかりの青空。天気予報でも【全国的な秋晴れ】を発表した今日……ついにやって来た【体育祭】の当日。

昨年まで、体育祭なんてものに一切の顔出しをしなかった両親が、今年は揃って応援に来る……。

口じゃ「恥ずかしいからやめろ！」なんて言っても、心の中じゃ嬉しく思っている俺は【天邪鬼】なんだろうな……なんて苦笑してみたり……。

両親が揃って学校行事に参加（見にくる）なんて、おそらく小6の卒業式以来だろう……。ましてや体育祭に関心の無い凜（妹）ですら、今日は来るようで、張り切ってリリナさんお手製のお弁当（5段重ね）の料理の詰め込みを買って出るほど……。あ、あれ？……リリナさん？？

「リ、リリナさん、なんで居るの!？」

本来なら美雪さん専属の侍従長を名乗る綾館家の長女（メイド）であるリリナさんが、今日は美雪さん抜きで我が家に来ている。しかも自前のエプロンまで持参して……。

「あら、侍従たる私がお料理のお世話をするのは当然、ましてユキは私の妹の大切な方……勝手ながら、参じた次第ですわ。美雪には話してありますので、お気になさらぬように」

うん、言い回しが古風。

リリナさんの話を付け足すなら、「ユキは選手として頑張ればい

いから、弁当等の役割は任せろ!!」ってことらしい。なんとなくよく出来た女性であろうか……。最近性格が美雪さんに似てきてるリリナさんだが、美雪さんには無い【配慮】が備わっている分、俺としては気が楽で助かる。

まあ体育祭が始まる前に弁当とか作るのが面倒くさいと思っていたので、今回のリリナさんのお心遣いは非常に助かった。

「助かります、ありがとうございますリリナさん」

「いえ、私に出来ることは美味しいお料理を食べてもらうことと、高校の事務局に根回ししてユキの学業成績を改ざんすることだけですから」

……後半は聞かなかったことにしとこ。今、リリナさんの背後にめっちゃめっちゃどす黒い【オーラ】のような【霞】^{もや}のようなものが見えたのも、きっと気のせいだ、うん!!

AM 8:00 嶺桜高校第2グラウンド・紫団^{ステージ}応援席裏

まばらながらに生徒達が続々と学校へやって来ている中、紫団の応援団員は最後の演舞調整に時間を割いていた。——というもの

『……………』

「……………テヘッ!」

『テヘッ!じゃねえよバカ!!!』

応援団員総ツッコミ（マジギレ）状態の原因を作っている一人の男……。いわずもがな、健一^{バカ}が、未だにまともに演舞が出来ていないからである。というより、応援団の中で一番やる気のあった健一がまともな演舞を踊れていないのには理由がある。

……こいつ、夏休み後にある^{テスト}全科目【赤点】という前代未聞の珍事をやったのけた挙句、追試・追試・また追試と、全科目がようやく【可】に認められる成績を収めるのに3週間以上を費やし、本格的に練習に参加できるようになったのが2週間前の事。

練習当初時から俺の目にちよくちよく健一が映っていたのは追試から逃げていたという理由からで、すぐに教師陣の包囲網によって確保され、網の中で逃げ惑う魚のように暴れ、抵抗しながらも、本校舎の中へと連行されていく姿を記憶している。

まあそんなこともあってか、一生懸命（？）に練習をしてはいた健一も、未だに完璧に踊れたためしが無い。

「……どうする？」

「どうするといっても……」

「打つ手なし……にや……」

参謀兼応援団長を務める河南も、その恋人兼演舞指導役の結城も、物覚えの悪い健一に頭を抱えた状態。如月は既にさじを投げているし、湊は……太鼓役だから関係ないか。

「……よし！」

「ユツキー秘策でもあるのかにや!？」

結城の言う秘策というほどではないが、試してみる価値のある策は一つだけある。

「健一、ちょっとお前に話しておきたいことがある。ちょっと来てくれ！」

「な、何？」

「まあそうビクビクすんな。むしろお前にとっちゃいい話かも知れない」

”ちよいちよい”と応援団席の片隅に健一を誘導し、他の誰にも聞こえないような声で健一に耳打ち――

「え？うん……ん……は！？ちょ、マジ！？」

「ああ。俺も処分に困っているんだ。下手に表には出せないし……だから、誰にも聞こえないようにお前だけに言ってるんだ」

「是非！その【お宝】を私めに！！」

ああ、なんか悪い商人に甘い誘いをかけている悪代官のようなやり取りだ。つか、健一の食いつきっぷりがハンパねえ！

「……条件がある」

「か、金か？今は持ち合わせがねえから体操服と携帯しか……」

「なんでデメエの体操服なんぞと交換せにやなんのだ。つか金じゃない……俺が提示する条件は、応援団の本番で完璧に演舞を踊りきったら……だ。今、お前は応援団のみんなの足を引っ張ってる存在だし、俺は【ソレ】の処分に困っている……ここでお前が本番で完璧な演舞を披露すれば、信用は一気に回復するし、お前はお宝も手に入る。それに俺は健一に【ソレ】を渡すことで自動的に処分する形になる……これならお互いに得をする方法だろう？」

これは一種の賭けだが、俺はこの方法に少しかり自身がある。まあその方法はおいおい話すとして、今は健一がどう出るか……

「……ユキ、俺やるぜ！本番で完璧な演舞をしてみせる！そしてお宝ゲットだつ！！」

「その意気だ健一！お前はやれば出来る男だ！！」

……よし、【墮】ちた。まあやれば出来るってのは事実だしな。

「じゃあ健一、俺は河南たちとリハの打ち合わせが残ってるから、しばらく演舞の練習をしててくれ！」

「任せる親友！うおわっはあ！！」

さあって、今回だけは特別に【親友】という言葉を使っても許してやる。俺は心が広いんだぞってな具合で、今度は河南・結城・如月を、健一から離れた管理棟の物置近くへ誘導。

「由希、一体どうやってあのバカのやる気とテンションを上げたんだ？」

「ん、まあそのことで一応断りを入れておこうと思って」

「断り？」

「にや？」

ここであらかじめ、健一がお宝と言ったり俺が処分に困ると言ったりした”ソレ”の説明……。まあきつと、散々罵声を浴びせられるだろうな……

「なっ！？」

「にやにやっ！？」

「ち、ちよつと何それ！ってか何でそんなものが存在するの！？」

まあ俺にとつちや予想通りの反応が返ってきた。

「お前っ！マジでふざけんなよ！！つか、なんてモノと取引してんだっ！！！！」

「最っ低！相澤がそんな奴だなんて思ってた！！」

「ユツキー最悪にや！悪魔にや！！大体なんで温泉の写真なんか持ってるにやあっ！？」

三者三様、河南には胸倉を掴まれ、如月には軽蔑の眼差しを向けられ、結城は顔を真つ赤にして必死に抗議……その結城の言う【温泉の写真】ってのが、俺が健一に取引を申し込んだときに報酬とする予定のブツだ。ちなみに温泉の写真ってのは、夏休みに綾館家の別荘に行った際に入った温泉のことで、その時に健一が女湯を覗こうとして河南に盛大なとび蹴りを喰らい、男湯・女湯を区切っていた柵が大破し、女性陣の【あられもないお姿】がばっちり目に焼きついた時に偶然撮られた写真……

「相澤……返答次第じゃ絶交も半殺しも厭いとわな……あ？」

河南に胸倉を掴まれたまま、がくがくと揺さぶられている俺だが、言葉を紡ぎ出している最中に何か異変に気付いた河南の手から、ゆっくりと力が抜けていく……助かった。もうちょい遅かったら、俺は再びじーちゃんとか対こ面！となってたかも！？

「あ、あっきーどうしたにや！？悪者ユツキーは成敗にや！」

「そっだよ河南、いくらなんでも相澤はひどすぎる！！」

「……いや、違う……。相澤、謀はかりったな？」

ようやく気付いたか。つたく、参謀兼情報屋の河南らしくもない……まあ結城がらみのことだからしょうがないとはいえ――

「……もう少し加減しろよな。おかげで説明する前に口も利けなく

なっちまうところだった」

「……悪い……」

「どういうことにゃ!？」

「……簡単な話だ。至極単純明快な——」

そう……河南の言うとおり、至極単純だ。いや、単純すぎたというところか。

「……考えてもみる。あの時、温泉には誰が居た?そして、誰がカメラなんて持っていた?もう一つ、相澤が健一のやる気を出させるために、仲間を売るようなまねをするか?ましてあの時、温泉に入っていたのは俺らだけじゃない……綾館先輩達だって温泉に入っていたんだ」

「——つてことはにゃ!」

「つまり写真なんて——」

「あるわけないだろ」

そう、あるわけがない。あの時、別荘に来ていた人間(俺たち10人)の全てが、ほぼ同時刻に温泉に入っている(不本意ながら確認済み)。そんな中で写真を撮るような人間はいなかったし、全員が湯船に入っていた。まして温泉の中にカメラを持つてくるような人間はいないし、シャッターを押す事だって不可能に近い。

即ち、俺の手元にそんな写真なんて存在しない。これは全て俺の作った話であり、フィクション。簡単に説明するなら【嘘】なのだ。

「だ、だったらどうしてそんな嘘なんか……」

「それも簡単、健一の思考は単純だからな。みんな知つての通り、あいつは自分の益になるようなこと(女絡み)なら死にもの狂いで頑張つて、それなりの成果を上げているだろ?しかもおだてられや

すい…… まあ条件の引き合いに出した【温泉の写真】ってのは、俺の表現力の乏しさだと思ってくれればいい」

いや、それだけ衝撃が大きかったのも事実だけだな（口には出せないが）。

それはともかくとして、なんとか納得してくれた一同。湊には後で如月から説明してくれるらしいので、面倒な手間は省けた。

それにしても、だ……

「あいつ、無駄に張り切ってるな……」

「哀れだよな……」

何の実入りもなく、ただ【女の子のあられもない姿が納められた写真】という架空の報酬とみんなへの信頼回復のために頑張る健一の姿を見て、俺と河南は改めて「あいつがバカで良かった」思うのであった。

81：開幕！！（前書き）

タイトル通りですが、まだ競技（種目）には入りません。

81：開幕！！

”パァン！！”という爆竹の音が、体育祭開始の合図を告げた。選手入場口と書かれた看板の前で待機しながら辺りを見回している
と……居た。親父だ。

父、相澤良隆は、俺が家を出るよりも早く学校へと足を運んでいた。
あいさわよしなが

なぜって？母から「場所取りよろしく！」と命令されたからだ。
ななこ

我が相澤家においての力関係は【男<女】である。【親父の威厳】

【兄の威厳】というものは存在しないのだ。

まあその甲斐あって、グラウンドの中央の最前列に陣取った親父は、清々しい笑みを浮かべている。

馬鹿め……最前列っていうのは見晴らしは確かに良いだろうが、砂埃がハンパないんだぜ。

たまにテレビドラマなんかで”わが子の晴れ姿を見て興奮し、周
りから失笑される親”なんてシーンがあったりする。現実問題とし
てそんな親なんて”希少種”であり、今の今までそんな光景なんて
見たことがなかったために、「あんなの嘘だろ」なんて思っていた
【過去の俺】よ、その光景は嘘なんかじゃない！！

「由希、こっち向けこっち！！」

「あなた、今がシャッターチャンスよ!!」

「……」

「相澤あ、似合ってたぜ!!」

我が両親はそんな”希少種”であり、俺はそんな希少種の息子だった。めっちゃ恥ずかしい!!しかも獅子神さんまで居るし!!!!

両親の辺りからは失笑……同団のメンバー内からも「クスクス」と笑い声がこぼれている。いつそ行進している列から抜け出て両親を正座させて説教の一つでもしなけりゃ気が済まないが、今は体育祭の本番である。うかつな行動は生徒どころか他の生徒の親・親類にまで知れ渡ってしまう。

ぐつと堪えてやや俯き気味に行進する状態の中――

「どんまい」

隣で行進する如月の言葉がより一層、俺の心中をどん底まで叩き落した……。

行進を終え、全団がグラウンドに集まる。その後は校長の”ありがた〜いお話”や来賓からの挨拶があったり……。快晴で日差しがきついからはよ終われ!なんて心の中で悪態をつきながら、ようやく準備運動に入る。

その後、いよいよ体育祭が始まる……最初の種目は――

「相澤、行くぜ!」

「ああ、最初っから出番か……」

無駄にテンションの高い健一に連れられ、俺と健一、そして湊と

その他女子（表記するのも面倒）の4人は【男女別100m走】のため、再び選手入場口へと足を向けた。

「お疲れ様つす相澤先輩!!」

「なぜ既に俺が疲れていると……いや、言っな……」

入場口に着いて早々に、最近やたらと懷かれている後輩の門司から挨拶される。こいつは初対面こそ少しばかりムカツときたが、なかなか空気も読めるし気も利いている。健一とは大違いだ。

「ん？なんか言っただ？」

「……いや」

口に出したはずは無いのだが、もしかして俺、健一にまで思考を読まれているのか!?……いや、単なる”勘”か。

「いやあさつきは面白かったぜ由希の両しぶっ!??!?」

「……よかったな門司、このバカが俺が疲れている理由を代弁してくれたぞ」

「く、”口は災いの元”ってやつっすね……」

引き攣り顔の門司を余所目に、俺は行動で「口にした瞬間にこうなるぞ」と注意。門司、これでお前もまた一つ賢くなったな。

82：体育祭の序（前書き）

サブタイトルは「なんかかつこよくない？」と思って付けただけです。

82：体育祭～序～

【男女別100m走】の結果から説明するなら、気合十分の健一がなんと1着！そして女子の湊は前評判どおりの活躍で、2着と大健闘。そんな周りの順位に多少のプレッシャーを感じつつも廻ってきた俺の番……結果は――

「へえ、黄団うたんの陸上選手を差し置いて1着でゴールなんて、さすがだね――！」

先に滑走を終えた黄団の【参謀】兼【生徒会長】である長東京都先輩は、走り終わった俺を見て苦笑い。……1着……いや、俺としては自慢じゃないけど当然の結果。

なんせ――

「逃げ足」だけは速いんで

「？」

無用な騒乱事から避けてきた賜物とでもいうべきか……この目つきでやたらと不良連中に絡まれる事が多く、あまりに面倒な場合は、文字どおり”逃げていた”。おかげで無駄に脚力が付いた結果が、この順位に反映されているといっても過言じゃないと思うが……まあそれこそ”自慢になることじゃない”。

まあそんな事なんて知る由もない京都先輩は「ん？」と小首をかしげているが、説明する必要もない。いや、したくないと言ったほうが正しいか……。

「京都先輩も速いですね。何気に同じ場所（1着）ですし」

「まあね、生徒会長というのは頭だけじゃなくて身体能力において

も生徒の模範になるべきだと私は思っただよ!」

なるほど、一理ある。

「それに美人だし!!」

それは余計な一言だと思いますよ京都先輩……。

さて、俺と京都先輩の会話を羨ましそうに傍観（というよりも睨
んでいる）健一^{バカ}は放っておくとして……

「ユキはずるいぞ!綾館先輩に限らず生徒会長の長束先輩まで手を
出すなんてつ!!」

……これを放っておいたら後々、俺に対する周りの評価が下がっ
てしまう可能性”大”だな。つか手を出した覚えなんて全く以っ
て”無い”。嘘を言うな嘘を。

第一、そんな嘘なんて誰も信じるはずは無いのだが、俺の知る中
に一人だけそれを信じて勝手に暴走する人が――

「ユキい!愛人など絶対許さんからなつ!!」

言わんこっちゃない。やっぱり現れたか美雪さん……って、

「大声で無い事ばかり言ってるじゃねえ！愛人どころか彼女だっていねえし！！つか、どこから湧いて出た！？」

「何を言う！私は綾館美雪だぞ！！」

「まったくもって理由になってねえよ！！」

あゝ綾館副会長、彼氏とイチヤイチャするのは競技後をお願いします

場内アナウンスにより、生徒はおるか保護者・関係者までが爆笑。「彼女じゃねえし！！」とアナウンスに向かってツツコミを入れて、後悔……。いや、美雪さんに対してではない。爆笑の「第2波」が起こり收拾がつかず、そのせいで競技が一時中断するという前代未聞の珍事まで引き起こしてしまったのだ。

……そうだ！こういう時にとっさの「機転」で生徒会長の京都先輩が何かやってくれるはず！！と期待して顔を向けたのだが、誰よりも腹を抱えて笑っていた。

畜生、こんなときに役に立たねえ……………仕方ない――

「ふぐあ！？何で？何で俺が殴られるのっ！？！？」

元はといえば健一^{バカ}のせいだが！！！！

↓
↓

再び競技が再開したのは10分後のことで、俺に向けられた色んな（嫉妬・好奇・羨望？）視線が痛い……この珍事を引き起こした

健一にはそれ相応の”報復”済みだが、拡大化した要因である美雪さんは「当たり前のことを言っただけが悪い！」と開き直り、アナウンサー役の生徒からも謝罪は無かった。

応援団席に戻り様々な視線に耐えながら再開した競技に目を向けている俺は、周りの目から見て「堂々としてるよな」なんて思われているんだろうか？

そんな事を考えている最中に、トコトコと近づいてくる影一つ……。

「ユキ、面白い漫才でしたわ」

「いや、そんなつもりないし……って、なんすかりりナさんの”格好”は！？」

銀髪・白肌が太陽に晒されてなんとも見目麗しいりりナさん登場！……だが、その格好は明らかに”学校”の、まして”体育祭”には不釣り合いの黒いメイド服（白フリ付き）。当然、視線は集中的に俺の方に向けられる。
りりナさん

「まあ一応は”高校生”なのですが、やはり私の正装といえ……ねえ？」

いや「ねえ？」と言われても……。周りからは「おい、あれってマジもんのメイドか！？」だの「うわっ、めっちゃ萌え〜」だの「りりナたんハアハア……」だの……。って、明らかにキモい奴が混じってる！？

まあそれだけならまだ良いほうかもしれない。なんせ「おい、あいつメイドにまで手を出してんのか」だの「氏ね！いつそ死ぬー！」だの、俺に向けられた台詞は罵声ばかり……。

そもそも”高校生”のりりナさんが「正装だから」とメイド姿に

なるのは如何なものか。

「そんなことより、素晴らしい脚力でしたわ。美雪が一目惚れしたのも納得できます」

「足の速さだけで！？というかりりナさんは競技には参加しないんですか？」

「私が参加したら」 とんでもない結果” になりますわ。 ふふっ」

怖くて先が聞けねえ……

「そうそう！私も別に正装だからという理由でこの姿になっているわけではありません。なんでも【借り物競争】とやらで「私が必要だから」とこの姿にされたのです」

……そういや、1ヶ月ほど前に生徒会の” 仕事” とやらを手伝っていた際に、京都先輩が「やっぱり【借り物競争】は派手でなくちゃー！」と言った気が……。つまりりりナさんは、そんな京都先輩にとって” うってつけ” の人材だったってことか。お可哀想に――

「まあ私もこういう催し物には参加した経験がありませんので、緊張しているのです。そこでユキに相談なのですが……」

「待て、そういうことは俺でなく美雪さんに相談すればいいんじゃない――」
「美雪も「姉さまは楽しんでくれるだけでいい」と言ってくれたのですが、どう楽しめばよいのかと訊ねたら「うむ、そういう相談事なら私ではなくユキに聞いたほうがよい」と言ってたので――」

なるほど、俺に” 丸投げ” して逃げたって事か。それにしても、丸投げされたほうはプレッシャーだぜ美雪さん！りりナさんは真剣

に相談を持ちかけてきたわけだし、さて、どう言えばいいんだろう？

「あ、リリナさん（メイドver.）にゃ！」

「相澤つてどこに居ても人目を引くよね」

「……（こくり）」

失礼な！俺が人目を引いてるんじゃないくて俺の”周り”が人目を引くんだぞ如月。

とはいえこういうとき、俺にとっての数少ない（？）女友達つてのは救世主に見える！！結城・如月・湊に丸投げだ！い！！

「マジでナイスタイミングだ！なんかリリナさんが折り入って”相談”したいことがあるらしい」

「にゃ？相談事なら任せろにゃん！」

「私らでよければ……」

「……（こく）」

「実は……」と3人に相談しているリリナさんは、時々質問したり頷いたり、真剣に耳を傾けている。数分の後に「なるほど、御三人様の言われるとおりです！」と納得し、清清しいまでに爽やかな笑顔を残して美雪さんの居る青团の応援席へと帰っていった。
スタンド

そしてなぜか、その爽やかすぎるリリナさんの笑顔に、俺は根拠の無い”不安”を抱いていた――

82：体育祭〰序〰（後書き）

文章通り、次話は”リリナさん”が活躍する【借り物競争】です。
そしてユキの”不安”とは？

お楽しみに〜！！

83 - 1 : 借り物競争・前編（前書き）

タイトル通りです。前話のあとがきに記したりりナさんは、まだ
出ません。

83 - 1 : 借り物競争・前編

まだ体育祭も序盤であり、各団の得点にもばらつきは無い。そんな中で迎えた【借り物競争】に出場予定の俺には、一抹の”不安”というものが付きまとっている……。

揚々と美雪さんのいる青団へと戻っていったリリナさんを見送った後、結城たちに丸投げした”相談”ごとの解決方法をさりげなく聞いたとき、結城から帰ってきた言葉は――

「そんなの簡単にや！」「リリにゃん」「はリリにゃんらしく、いつも通りで楽しめばいいから」って言っただけにや。下手に気構えたら、かえって楽しめなくなるから」

――と。

うん、まあその通りだ。俺も結城たちと同じ立場で言葉を贈るとすれば、同じようなことを口にしていたはずである。

ただ……ただ、だ。

相手は”一般”に属する人物じゃない……”リリナさん”である。綾館家の専属の侍従長^{メイド}であり、その才能は家事・身体能力・頭脳において、他を圧倒する。

そんな人物に”いつも通り”という言葉を送るべきなのか……？俺が不安に思っているのはその事だ。

まして、最近じゃ性格も美雪さんに似てきている……それだけ、過去は自分の自我を押し殺してきたことにならないだろうか……

「ユッキーどうしたにや？早く入場門にいこうにや！」

「あ、ああ……」

河南に手を引かれ、なんとも小動物的な雰囲気すら漂う結城に促された俺は、未だ漠然とした不安を抱えたまま、選手入場門へと歩き出した。

「うおい！俺を置いて行くなあ！！」

「相澤先輩、俺もいるっすー！！」

「ああ、悪い。いくぞ門司！」

「はいっす！」

「俺は無視かよ！？」

うるさい健一！ただでさえ俺は今【注目的】になっちまってるんだ、余計な大声出すんじゃねえっ！！

↓

募る不安とは裏腹に、紫団はおるか隣の応援団席の赤団（の中の男のみ）のテンションも、異常なほどに高い……。

その主たる原因は、先ほどリリナさんが話していたこと「借り物競争に参加してはいけない」が関係している。なんせ「ぜつてえあのリリナさんと手を繋いでゴールするぜ！」だの「なんの！俺の俊足で虜にしてやるぜ！」だの「リリナたんはあはあ……」だのつて、いつぞやに聞いた変態「まで混じってんじゃねえか！？」

しかもそれだけじゃない。なんか、俺（とその一部）には見覚えのある“格好”をした“女の人”までが、なぜか関係者用のテントで準備中……獅子神さんだ。

そんな獅子神さんの姿に「ねえ、あの人って化粧品CMの……」
だの「うわあ、実物もめっちゃきれいじゃん!!」だの「え?あの
格好って暴走族じゃ……!?」だのと口しているのは、殆どが女子
や保護者である。

そんな声が耳に届いたのか、リリナさんは男子の方へと顔を向け
て「ニコッ」と微笑み、獅子神さんは照れくさそうに鼻っ柱をポリ
ポリと搔いたあと、女子の方へと小さく手を振っていた。

「リリナさんのメイド服姿も可愛いよなあ!!でも、獅子神さんの
特攻服姿の凛々しさも捨てがたいし……うひよひよ!!」

と、健一^{バカ}は変な妄想を始めたので、俺の隣に居る門司^{もじ}に「あんな
風にはなるなよ」とさりげなく忠告。もちろん健一のように空気が
読めないわけでもない門司は「あのポジティブな考え方だけは尊敬
できるんすけどね」と、苦笑い。

健一……後輩に見放されても、頑張れ……何を頑張ればよいのか
アドバイスは出来ないけど。

↓
↓

そして【借り物競争】がスタート!まずは1年の男女からである。
この場合、普通なら男女別に分けられる競技かもしれないが、今年
から【男女混合】として正式に決まった。

京都先輩いわく「借り物競争はただ走るだけじゃなくて、指定さ
れた”借り物”が重要だから、体力は関係ないんだよ!」とのこと。
まあ言いたいことはよくわかる。いくら脚力・体力に優れていよう

と、指定された【借り物】自体を上手く見つけださなければ意味がない……要するに、【借り物】さえ上手くゲットできれば、足が遅かろうと充分にトップを狙えるのだ。

そんな思惑を知ってか知らずか、一斉にスタートした1年生たち。門司は……うん？周りを気にしてか、先頭から遅れて現在5番手……既にトップの男は【借り物】の書かれた封筒を開けている。

……が、あれ？なんで固まってるんだ？？その間に続々と後続が封筒を手にして……何人かが物・人の類を探し始めた。

門司は……お、すでにアナウンス席のほうに足を向けている。

ええっと、自分のカードは【会社を経営している・もしくは重役のポストに就いている人】っす！該当する方は放送席に来てくださいます！！

ハードル
難易度高っ！！何それ？漠然としすぎじゃね！？！？しかもこれ

「自分は会社を経営してるんだよ！」だの「自分は管理職に就いてます！」だのと、下手すりや自慢にもなりなねない内容だし、保護者も逆に出て行きづらい！

しかし門司、放送を上手く活用したのは見事だ！先に封筒を手にしていた奴等も、ようやくその活用法に気付いたらしく、門司が使用したあと、奪い取るようにそれぞれの【借り物】をアナウンスを使っ探している。

それにしても、門司の指定した人物とやらは簡単には見つけ……あれ？目を擦ってグラウンドから放送席の方へと走っていく女性をよくよく見る……ああ、そっぴやっぴかり忘れてた……。

おおっと、紫団の門司くんの指定カードに該当する人物が現れた模様です！……ええっと、門司くんの指定カードには【会社を営んでいる・もしくは重役の人】でしたが、では発表をお願いします

!!

発表するの!?

「【Clair化粧品】代表取締役社長の相澤奈々子です!息子の由希がお世話になってます!」

おおつと!2年二組、紫団応援副団長の相澤由希くんのお母さんはなんと!幅広い女性から支持を集める化粧品会社”Clair”の社長さんです!もちろん条件クリアーですので、ゴールへとお願いしまーす!!!!

くそう、このアナウンス俺に恨みでもあんのか!?本人は名調子だと思ってるだろうが、名指しされた俺はたまったもんじゃない!こうして俺の傷心とは裏腹に、門司とお袋の活躍(?)によって1着となった紫団。その他続々とゴールしていく各団とは裏腹に、1番最初に封筒を手にし、未だ固まった生徒の手に残されていた指定カードには、この学校で禁忌きんきとも云われている【教頭先生のカツラ】と記されていたそうなの……。

83 - 2 : 借り物競争・後編

【借り物競争】1年の部が終了し、残りは2・3年生の部である。前述どおり、借り物競争で重要視されるのは脚力でも体力でもなく”指定カード”と”とっさの機転”である。いくら難しい【借り物】であつたとしても、その”難点”さえ克服できれば、脚力や体力があろうとなかろうと関係ない。

逆にその【借り物】に手間取り、自分の頭脳や”ひらめき”が働かなければ、どんなに足が速かろうとビリに終わってしまう可能性だつてある。先ほどの「教頭のカツラ」というワードで暫定1位だつた1年男子が何も出来なくて結果、ビリになつてしまったのが良い例だ。

まあ誰であれ学校の”禁忌”^{タブー}といわれている【教頭のカツラ】を上手く解決できるとは思わないが……。

そんな話もそこに、いよいよ俺ら2年の出番である。この場合、いかに”難しいワードを引かない”かが重要視されるが、こればかりは誰にもわからない……要は”運次第”なのだ。

そんな”運次第”な【借り物競争】の準備が始められている中、明らかに”おかしなモノ”が混じっていることに気がついた。

参加人数分よりはるかに多く用意されている借り物競争用指定カードの入った”真つ白い封筒”の中に、”ピンクとオレンジ色の封筒”が、1枚づつ混じっている……。

えゝこれより【借り物競争】2年生の部を始めますが、ここでお知らせです！お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、2年・3年生の部の借り物競争には”チャンスカード”が混じっています！！内容は秘密ですが、このカードを引いた方には文字通り”チャンス”が待っている………かもしれないので、参加選手の皆さんは頑

張ってください!!

放送席から”お知らせ”が入る……そういえば、さっき(1年生の部)は「借り物競争に参加しなくてはいけない」と言ってたリリナさんや、特攻服姿で参加する気満々だった獅子神さんに関わるような”借り物”は出なかった。

となると――

「おい、あのピンクとオレンジ色の封筒が、放送で言ってた”ソレ”だよ……」

「なあ、もしかしてその”チャンス”って……」

「”メイド姿”のリリナ先輩とか、あの”特攻服を着てる”めっっちゃ美人のお姉さん……とか？」

俺と同じく競技に参加する選手(同輩)が、小声でそんな事を言っている。まあ可能性としては”アリ”だろう。実際にリリナさんは応援団席でニコニコと笑顔を振りまいているし、獅子神さんは、なぜかそれとなく準備運動をしてるし……。

ただ、最初に選手(男)の一人が口にした「ピンクとオレンジ色の封筒」という言葉が、どうも引かかる。白い封筒だらけの中にピンクとオレンジの封筒は、確かに他のどの封筒よりも目立つ……が、その”派手な封筒”がチャンスカードの入っている封筒とは限らない。なんせ「今年の借り物競争は派手にやりたい」と言ってたのは、他ならぬ生徒会長の京都先輩である。その京都先輩が、そんな簡単な”指定内容”のカードを用意しているとは思わない。

それに、そもそもリリナさんと獅子神さんが”参加する”とも”チャンス”とも言ったわけではないし……。

そんな俺の思考(考えすぎかもしれない)とは裏腹に、参加選手の男どもは健一^{バカ}を筆頭に、一気にテンションを高めている。そんな男子とは対照的に冷ややかな女子たちも、一部では「あの化粧品の

CMに出演^でした人だったらいいな！」と、小声で話していた。

それでは位置について！

グラウンド

場内アナウンスの声で皆がスタート位置につき、数瞬の後に”パ
アーン！”というスタート・ピストルが、競技開始の合図を告げた。

先頭をきつて指定カード（チャンス有り）へと走り出したのは、やはり男子達である。健一もスタートで出遅れたものの「美人お姉さまとお近づき！」と、根拠のない己の欲望に足を速める。俺はなんとなく”嫌な予感”がしたので、1年の部で様子を伺いながら走り出した門司のように、先頭集団（男子だらけ）より少し後ろの位置を走っていた。

先頭集団は、やはり”チャンスカード”の入っている可能性の高いピンクやオレンジの封筒を狙っているようで、先頭集団の中でも真つ先に抜け出した青团の男は、わき目も振らずにピンク色の封筒を取る。

「……メイドさんキタアー！！」

大方の予想通り、やはり”色つきの封筒”の中は、リリナさんや獅子神さんらしい。ただ、それが”チャンス”とは限らないだろうが、探す手間が省ける分（リリナさんや獅子神さんの格好は目立つ）、ある意味”チャンス”ではあるのかもしれない……てか青团の男、その台詞はどうかと思うぞ……。

これで大方の確信（色つきの封筒は美人さん）を得た先頭集団の野郎（男）どもは、こぞって残りのオレンジ色の封筒めがけて突っ込む。一歩遅れて到着した健一は、つまらなさそうに足元の白い封

筒を拾い上げ、中身を確認し……あ、なんか急に青ざめてやがる。

「っと、これでいつか」

俺も封筒がばら撒かれた場所^{エリア}に到着し、一番近い位置にあった封筒を拾い上げる。中身は……

”ハズレ！”

「ハズレ！」ってなんだバカ野郎！！」

異常に多い封筒には、やはり対象外も混じ^{タミ}っているらしい。思わずイラっとして声を出してしまった。と、とりあえず気を取り直して次の封筒は……

”今日来ている【お客様・関係者・保護者】の中で、”一番美人・もしくはカッコいい”と思う女性が男性”

ある意味難しいっ！！落ち着け俺……ここで身内なんぞ連れて行って「自分の身内が自分の中では一番カッコいいと思う！」なんて言えばクリアかもしれないが、周りからは失笑だろう……かといって放送を使って「自分が一番カッコいい・もしくは美人だと思う生徒以外の方」なんて言えば、門司の時以上に人は集まらないだろう（母は例外）。

どうしたものかと思っているうちに、メイド^{リリナさん}枠の条件を引いた青団の男はゴールしているんじゃないだろうか……って、あれ？

さて、意外なこともあるようで、既にゴールしたと思われていた青団の男とリリナさんが、なぜかまだゴールしていない。それに”オレンジの封筒”をゲットしたと思われる選手や獅子神さん、それ

に白い封筒を拾った選手の誰もが、まだゴールしていない。健一は……依然として青ざめたままだ。

いや、そんなことよりまずは自分の引いたカードに見合う人物を探さなくては……。

とりあえず俺の引いたカードの条件に見合う人を探そうと色々と回りながら、獅子神さんの居る（俺の両親も居る）テント前に到着。あ、やはり獅子神さんも”借り物競争の条件”とやらに当てはまっている人物らしく、緑団の男子の選手から「一緒に走ってください！！」とお願いされている。やっぱ白い封筒を持ってる……ん？白い封筒？？

やはり見間違いではない。その手に握られている封筒は”白”だ。となると”オレンジの封筒”は一体なんだったんだろう？……って、今はそんな事を考えてる場合じゃない！！自分の事を考えねば！！

「ああん？イヤだね。アタシは面倒臭いのは嫌いなんだ」

「で、でも、条件には”ヤンキーの格好をした女の人”って……」

「テメエ……アタシがヤンキーだったってんのか？ああっ！？」

保護者席用のテントから離れようとした時である。緑団の男子と獅子神さんの会話が耳に入ってきたのだが、緑団の男子の言葉に、獅子神さんが少しばかり不機嫌になっていることに気付いた。

本来ならそれこそ競技中なので無視する内容の会話なのだが、そこで自分の引いたカードの”条件”に当てはまる人物を見つけたのだ。

「ちょっと失礼」

「え、な、なん！？」

「おう相澤！この男、すつげえ失礼だぜ！！初対面のアタシに「ヤンキーの格好をしてるから一緒に来てくれ」っていうんだよ！！」「だ、だって……」

うっん……間違っではないと思うが、そんなこと言ったら俺までとばっちりが……って、そうじゃなくって！

「獅子神さん、一緒に来てもらえます？」

「あん？」

「ちょっ！？横取りは……」

抗議するような表情をする緑団の男（以下：緑男）だが、俺はそんな事にもお構いなしに、獅子神さんに”カード”を提示した。

「……おいおい、こりゃアタシじゃなくて”生意気女（美雪さん）”とか”メイド（リリナさん）”のほうがいいんじゃないのか？」
「あの二人は”生徒”なんですよ。この条件を満たしているのは、獅子神さんだけなんですよね」

何か言いたそうな緑男はさておき、俺は獅子神さんに話を持ちかける。獅子神さんなら、おそらく誰が見ても条件に当てはまる人物だと思っだろうし、敢えてカードを提示しただけで言葉に出さなかったのは、近く（というかほぼ横）に居る両親（特に母）が出しゃばらないようにするためである。

「うっん」としばらく考えていた獅子神さんだったが、

「しゃーねえ、他ならぬ相澤の頼みだし！」

と、ニツと笑って条件を引き受けてくれた。ううむ、やっぱり姉御は頼りになる！

「ちょ、ちょっと待って！じゃあ俺はどうすりゃいいんだよー！」

緑男は齒噛みして抗議している。まあ後で「あいつが横取りした！」とか言いそうなんで、とりあえずアドバイスしとくか。

「少し考え方を変えろよ。その条件は『ヤンキーの格好をした女性』だろ？なら」自分が思うヤンキーの格好をした女性”を見つけりゃいい。それに条件は口にしないほうがいい。ただ「一緒に来てもらえませんか？」とだけ言ってれば、獅子神さんのように断られなかったんじゃないか？」

「……あ！」

明らかに「しまった！」という顔をした緑男。納得してくれたようなので、俺も獅子神さんを連れてゴール地点へと急いだ。

やはり時間がかかったせいか、既に2人がゴールしている。というより、まだ2人しかゴールしていないのか……リリナさんも来てないし、かなり難易度が高いようだ。

おおっと！ここで紫団応援副団長の相澤由希くんが登場です！えっと、条件は……」今日来ている【お客様・関係者・保護者】の中で、「一番美人・もしくはカッコいい」と思う女性が男性”ですね。そして一緒に来てくださった女性は……え？もしかして現在化粧品のコムに出演していらっしゃるモデルさん！？」

「ど、どうも……獅子神紗姫です……」

なんと！紫団応援副団長の相澤由希くんと一緒にご登場は、CMモデルの獅子神紗姫さん！！これは文句なしのクリアーです！！おめでとうございまゝす！！！！

『おおっ！！』と言わんばかりにざわめく会場と大きな拍手で、困惑+恥ずかしさがこみ上げている獅子神さんは「モ、モデルじゃ

なくて普通の会社の事務員です！」と、なぜか口調まで変わりながら否定してるけど、たぶん無意味だろう。

そしてなんとか3着でゴールできた俺だが、絶つつつ対あのアナウンス係りは俺に悪意を抱いているか、からかっているだろうと確信した。マイク使って俺の名を連呼するし！！

結果、リリナさん（と思われる）カードを引いた青団は、最下位^{ビリ}でゴール。後からゴールにやって来たリリナさんは「あの人は生理的に受け付けないのです！」と、一緒に走るのを拒否していたらしい。青団の男よ……ドンマイ！

そして表情が青ざめた健一は、なんと棄権^{リタイア}したのだが、競技終了後に健一が俺に見せてくれた”カード”には【教頭先生のカツラ】（2回目）の文字が……不運だったな。

それとやはり”チャンスカード”というのは存在したらしい。何でも”とりあえず誰か1人を連れてくる”とか”無条件でゴール”とか。それを引き当てた黄団の女子と白団の男子が、俺よりも先にゴールしていた2人で、やはり全体の難易度が高かった分だけ、こういう条件で競技自体の難易度を緩和していたのだろう。

気がかりなのは”オレンジの封筒”を拾った赤団の男子である。なんとコイツも棄権……どんな条件だったのか……それは拾った赤団の男子のみぞ知るところだが、俺は拾わなくて正解だったな。

まあ俺の拾ったカードの条件によって、獅子神さんに協力を仰いだ次第ではあるが、この機転に不服な者が一人……大方の予想どおり美雪さんである。

「ユキ！そこは恥ずかしがらずに私を連れていくのが筋つてものだろう！！それをこの”ヤンキー女（獅子神さん）”なんぞと一緒にゴールしおつて……！！」

「あぁん？喧嘩売ってんのかテメエ……！？」

と、体育祭に関係なく場外乱闘をしそうな感じだったので、間に割って入り、条件の書かれたカードを見せて説得。さすがに”生徒”である美雪さんも、納得してくれたようだった。さすがにアナウンスが「文句なしのクリアーです！」と言ったのと”生徒以外”というワードで、今回は引き下がってくれたらしいが「むう！覚えてる！！」という吐き捨てられた台詞は、言わないほうが良かったんじゃないか？

自分達の出番も終わり、借り物競争は残り3年生だけとなった。借り物の”条件”の難易度が高くなり、棄権も出た2年生の部の後、果たして3年生の借り物競争ではどんな”条件”が書かれた封筒が用意されているのか……それは黄団応援席で爆笑している”生徒会長（長束京都）”と少数の教師のみぞ知る……そんな事を思いながら、俺は熱くなった体を冷やしに応援席裏の風通しの良い影のある場所へと移動した。

84：張り切るのは知らぬ者（1年）のみ（前書き）

後半の文面がほぼグダグダです、ごめんなさい（謝）

84：張り切るのは知らぬ者（1年）のみ

火照った体を冷やしている最中である。門司（後輩）の用意してくれた冷やしタオル（水で濡らしただけ）で汗を拭っている最中に始まった【借り物競争】3年生の部。応援団席の裏にいる俺にはグラウンド内の様子は伺えないが、アナウンス（実況）や周りの声援を耳にすれば、それがまた白熱した状態だと感じられる。

まあ自分の出番が終わったので関係ないから、とＴシャツを脱いで冷やしタオルで背中を拭いている最中、それは突然に訪れた。

「あついざつわくう〜ん！！……つと、ずいぶんと”刺激的”な格好だね、あははは！」

「うおっ！？な、なんすか京都先輩！」

黄団の【参謀】と名高く”生徒会長”を務める長東京都先輩のご登場である。ただ、俺の格好が格好（半裸）なだけに、突然の来訪は困る！あたふたと慌てながらも急いでＴシャツを着なおし、上体を京都先輩へと向き直した。

「敵陣に乗り込むなんていい度胸ですね？」

「あははっ！まあ私の引いたカードの条件に見合うのは、相澤くんしかないからねえ」

そう笑いながら京都先輩の提示した”カード”には――

”目つきの悪い後輩（男女問わず）”

「誰が目つき悪いって！？いや、まあ否定できねえけど……」

絶対、京都先輩って面白半分^に俺に声かけたよね！大体この”条件”なら俺以外にも候補はいくらでもいるだろうし（河南とか門司とか）。つか、否定できないのが悲しいぜ……

「いやぁ私って人見知り^が激しいんだよ。それに目つきの悪い人って、なんか怖くない？」

”目つきの悪い人が怖い”というのはわからなくもないが、「人見知りが激しい」という点には同意しかねる……というより胡散臭え！！

正直、もう人前に出る（自分が出場する競技以外）のはイヤなんだよな……あのアナウンス係に何か言われる可能性が高いし……な
ど考えている最中である――

「こら京都！私のユキをたぶらかすな！！」

出た……美雪さんだ。いや、この場合は助かったといったほうが良いのかもしれない。「私のユキ」という言葉は全力で否定させてもらうが、ここで美雪さんが京都先輩を追い払ってくれば、俺は再びグラウンドに出なくて済――

「ユキ、お前にピッタリの条件が書かれたカードを引いてきたぞ！
”将来結婚するならこの人がいい！”だ！！」

どっちも行きづらい！！何その俺に有益^{メリット}のない条件は！！！！！！

↓

”究極の2択”から俺を救ってくれたのは、競技終了を告げるピストルの乾いた音と、アナウンスの 競技終了ですーすー！ の声。京都先輩は「あっちゃあ終わったかあ……」と呟き、美雪さんは俺に「ユキのせいで最下位じゃないか！！」と説教をした後で、それぞれが競技場所へと帰って行った。

この場合、臆病者チキンと言われるほうがまだマシだ。

「由希はチキンだなあ！俺だったらペふあ！？」

ただ、健一バカにチキン呼ばわりされるのは癪に障るので”適正な処置”を施しておいた。

そんな【借り物競争】も終了し、グラウンドでは”ある意味目玉競技”である【綱引き合戦】の準備が行われている。綱引き合戦は団体競技なので得点も高く、ここ嶺桜高校体育祭では前半戦で一番の見せ場だと言っても過言じゃない。

この【綱引き合戦】だが、俺は小・中と勝ち残り方式で順位ごとに点数が入るものだったので、この高校でも同じようなものだとばかり思っていたのだが、ここ（嶺桜）では少しルールが違うので、ちょっと説明しておこう。

まずは対戦方式と人数である。対戦方式は全7団（赤・橙・黄・緑・青・白・紫団）が2つに分かれての対戦（例：赤・橙・黄・緑 vs 青・白・紫）になり、参加団数の少ないほうに、臨時の【教員チーム】が参加しての4対4の対戦となる。

対戦回数は先に2勝したほうが勝ちとなり、最大で3回戦まで。

そして参加人数は各団の学年ごとに選抜を10名づつ（必ず男5人：女5人）の、1団につき30名。これが全団（教員チーム込み）合計240名となり、120対120のなかなか迫力のある競技になる。

そして配点だが、1勝ごとに勝利チームにそれぞれ30点が入る。だから2連勝すれば60点が一気に自分の団に入る可能性もあるのだが、裏を返せば2連敗すれば1点も入らずに他の団から大きく突き放される恐れもあるのだ。

「俺、綱引きのメンバーなんす！絶対負けなйтす！！」

気合充分の門司が意気揚々と応援団席から飛びだそうとしたので、まずはそんな門司に……いや、門司ばかりではなく綱引きに参加する1年生に、俺は先輩としてちよつとした”言葉”をかけておかねば。

「門司、気合充分なのはよくわかるが……綱引きは”絶対に負けない”からあんまり気負う必要はないぞ」
「ええ！？必勝法とかあるんすか？？」

「……そんなものは存在しないが、相澤の言うとおり”絶対に負けない”から、とりあえず怪我だけには気をつけろよ」

俺と門司の会話に割って入った河南も、俺とまったく同じような言葉を口にする。そればかりではない、俺ら二人以外にも門司たち1年生の先輩にあたる2・3年生は、競技に参加する1年生に同じように”絶対に負けない”という言葉を掛け、怪我だけはしないようにと念を押している。去年から嶺桜の体育祭に参加している同輩・先輩たちも、俺たちの言っている意味を理解しているので、気合充分！！というようなヤツはいない。

「??」

「まあ参加すりゃわかる……ほら、集合かかってるし、行ってこい！」

「は、はいっす！」

どうしても腑に落ちないといわんばかりの表情をする門司たち参加選手や1年生だが、これは口に出して楽しむものではなく”参加して意味を知る”ものだ。選手達を送り出した後で、俺や河南、それに綱引きの選手でもない同輩・先輩たちは、それぞれに準備運動を開始。

「おい、とりあえず体を温めとけよ！」

「みんな動ける準備をしておいてね！」

3年リーダーの九翁先輩（男）、2年リーダーの長安さん（女）に促され、1年生は困惑しながらも準備運動に取り掛かる。まあ俺も1年生の時には同じように困惑してたっけ……

いよいよ【綱引き合戦】の幕開けである。全ての準備が整い、グラウンドを分断するよう長い”綱”が置かれ、各団の選手が入場。それと同時に”選手でない各団員”も、応援団席での準備運動を止め、グラウンドの選手達の姿を静観……不気味なほどに静まり返った中、アナウンス係の準備・用意・セットアップの声だけがスピーカーから聞こえている。

位置に付いて！

複数団（教員込み）が綱を手にする

用意！

握った綱に力を込める……

パアアン！！

静寂を破って乾いたピストルの音が競技開始の合図を告げる。綱の中心の赤いテープ（目印）から二つに分かれた両軍の力比べが始まった！それぞれが自軍の方へ綱を引き寄せようと力を込めて引つ張る！引つ張る！！引つ張る！！！！

両軍共に負けまいと腰を低く落とし、重心を掛けて綱を引く。一進一退の攻防の状態から1分が経過した時、その均衡に変化が現れた。

青・白・紫・教の混合団が、徐々に自軍の方へと赤いテープが巻かれた綱の中心を引き寄せ始めた！赤・黄・緑・橙の混合団も負けまいと必死に抵抗を見せるものの、綱の中心は少しずつ、けれど確実に動いていく……このままだと確実に【青・白・紫・教員チーム】が勝利を収める……はずだが――

「黄団突撃いっつー！！」

「緑団も続けええっー！！」

「赤団いくぞおおっつー！！」

「橙団出撃いっつー！！」

このままでは負けると思った【黄・緑・赤・橙】の応援団席から、突如として参加外の選手が乱入し、味方の方の綱を持って援護に回る。……これで形勢逆転！！……とはいかないのが、この【綱引き合戦】の面白さとも言うべきか――

「紫団、全軍突撃いっつ！！！！」

「紫団に続くぞ！いくぞ青団の力を見せてやれええつつ！！！！」

「白団行くぞおお！！意地見せるおおおつつ！！！！」

「生徒に負けるな！行くぞおっ！！！！」

両陣営から入り混じっての大混戦である。こうなれば綱はおろか人数が多すぎてどちらが自軍の陣地なのかどちらが勝っているのかなんてわかりはしない。砂埃は舞うし人間は多すぎるし中には保護者だって参加している。やりたい放題である。

パアアン！！パアアン！！！！

あまりの混雑によりピストルが鳴らされた回数も2回と多い。ようやく落ち着いたグラウンドでは、両陣営の選手ともども、泥や埃で汚れきっている。

綱引き合戦、両陣営ともに参加外の選手が加担しましたので、この勝負は”引き分け”となります！またグラウンドの整備により2・3回戦は中止とさせていただきます！両陣営の皆様、ならびに参加くださった先生・保護者・関係者の皆様”お疲れ様”でした！！

「ひ、引き分けっ！？」

「門司、だから言っただろ？」絶対に負けない”って”

「裏を返せば”絶対に勝てない”とも言っただがな……」

この幕引きを予想できたのは、2・3年生の”経験者”のみで、呆然とする1年生の気持ちもわからなくもない……なんせ俺ら2年や3年生も、1年の頃に同じような気分になったからな。

経験済みの俺や河南たちは、想定内の幕引きにグラウンドから出た。

かつて、【綱引き】はこの嶺桜高校体育祭の最後を締める団体競技であり、配点も高いことから逆転に賭ける団も多かったとか。そんな中で、現在とは違うトーナメント方式の競技だった【綱引き】の決勝戦に勝ち残ったのが、青団と黄団。1回戦を黄団、2回戦を青団が勝ち、最後の3回戦で勝ったほうが優勝という大事な場面で、”それ”は起きた。

両団1勝ずつで迎えた3回戦……均衡する力と力のぶつかり合いの中で、優勝に王手をかけたのが青団だった。黄団も必死に頑張るものの、その綱は徐々に青団側へと引つ張られて行く……もう優勝目前という時に、黄団のリーダーが団席から乱入し、負けそうな自分の団に加担。それを見ていた青団の選手の一部も自団の援護に回り、堰を切ったように両団の選手がグラウンドに乱入し、今日のよくな事態となった……らしい。

俺も詳しくは知らないが、その光景を見ていた当時の理事長が、黄団・青団の双方を”失格”ではなく”引き分け”として称えたらしく、以来、この【綱引き】は【綱引き合戦】という名に変えて、現在まで引き分けが続いている……と、新任の国語教師である沢木真穂先生（通称：まほちゃん）が言っていた（嶺桜女子高卒）。

かくして午前中の最大の団体戦の綱引きほぼエキシビジョンも終わり、この後は学年対抗リレー。その後はようやくの昼食である。

またしても俺の参加種目だが、これも配点が高いので、気は抜けない……頑張らねば！

85：前半戦の大勝負！

前半戦最後の競技【学年別対抗リレー】。参加人数は1学年に6人（男子3人：女子3人）によつて構成され、1〜5人目までは半周。アンカーは1周半を走らなくてはいけない。競技配点も高く、1着で30点・2着20点・3着10点から、以下は5点づつに振り分けられる。

当然配点が高いので、学年ごとに脚力に自信のある”精鋭”が揃っている。

ちなみに2年の紫団のメンバーは、女子では”斉藤さん（剣道部）・長安さん（陸上部）・湊（帰宅部）の3名。男子は沖邑（水泳部）・長谷部（陸上部）と俺（帰宅部）の3名である。

この場合、陸上部・サッカー部・野球部の3部活の割合が多い団が有利だろうが、かつては帰宅部のみの橙団が1着でゴールしたという記録も残っているので、どの団も侮れない。

またリレー競技の場合、速さで均衡している状態であれば”バトントス”がもつとも重要だろう……。

そして前半戦の最後の競技ということでは――

「紫雷”に恥じない走りを見せろよおっ！……！」
「朱雀”の橙団の意地を見せてやれえっ！……！」
「青龍”も勝ちに行くぜえっ！……！」
「白狐”のように駆け抜けろおっ！……！」
「赤帝（古代神話の皇帝）”の威厳を見せてやれえっ！……！」
「猛虎（黄団）”の速さを期待してるぜえっ！……！」
「翡翠鳥（緑団）”のように輝けよおっ！……！」

各団に掲げられた”団看板”をバックに、応援にも熱が入っている。

そうそう、俺らの団看板には最初”紫龍”が描かれていたが、早くも2枚目の”サンダーバード”に変わっている。

”サンダーバード”とは北米の神話に登場する巨大な鳥であり、伝承では大きな羽を羽ばたかせることで雷鳴を生み、目・または翼や嘴から紫色の稲妻を放ると言われている。もっぱらの食事は鹿などだが、ときには大海原へ鯨を捕りにいくこともあるという。ちなみに日本にも生息している”雷鳥”は雉科キジの鳥類であり、英名は”ターミガン”または”グラウス”で、看板に描かれている”サンダーバード”とはまったくの別物である。

まあそんな強大なイメージが強いことから、うちの看板係も”サンダーバード”を描いたのだろうが、俺の父の時代の”サンダーバード”といえば、某テレビ番組だろうと思う。

まあ意味のないことをつらつらと説明しているうちに、早くも1年生の部がスタート。各団共に足の速い精鋭が一進一退の攻防。若干リード（先頭）しているのが黄団だが……あ！バトン落とした！……これがあるからリレーは怖い……あつという間に黄団は最下位である……つと！今度は紫団（女の子）がこけた！！選手もトッブを走る緑団は4人目にバトンが渡り、残すはあと2人……つて遅っ！！まさかの失速である！なぜにこの選手（男）が選ばれたのかはわからんが、2位（青団）・3位（白団）との差は一気に縮まってゆく。他の団も負けじと猛追するが、紫団の最下位は免れない可能性大。

ここで逆転に成功した青団が一気にトップに躍り出る！そして5人目にバトンが渡……つてちょっと渡すタイミングがずれた！その間に2位の橙団が……つて橙団！？いつの間にか2位まで浮上してる！ああっ！トップだった緑団が4位まで後退してるし、白団も3

……が、健闘も虚しく最下位でフィニッシュ。結果、1年生の部は1着に橙団・2着に青団の順で白団・緑団・黄団（最後に逆転に成功）・赤団となった。

「しゃくないしゃくない！それよりも怪我は大丈夫か？」

こけて怪我した足が痛いのか、それとも自分のせいで最下位になったことが悔しくて泣いているのか……その理由も定かじゃないが、わざわざ俺ら２年・３年の場所までやって来て謝ると言うことは、よほどこの後輩（女の子）は紫団のために勝ちたい一心で頑張ってきたんじゃないのだろうか……。

「まあ気にするなつて！それよりもまずは足の怪我を手当てしてもらつてきな。ビリになつたのが悔しいのなら、俺らが仇を討つてやるから心配すんな！！なつ？だから泣くな！この次に出る競技で頑張ればいいんだし……な？」

「……は、はいっ！……私、頑張ります！！ありがとうございました！！」

587

直な話、リレーのような”走る競技”で頭を使うのは皆無。1着になれるかどうかなんて、そんなの誰にもわからない……。

だからといって口に出した言葉を簡単に引っ込めるつもりもない。
だから――

「みんな……悪いっ！俺が勝手に口にした言葉を押し付ける形になっちまった！……けど、俺は紫団のためにも、わざわざ謝りに来た女の子のためにも勝ちたいって思ってる。だから――」

「相澤、勝ちたいのは誰だって一緒だ！だから押し付けられたつもりもないし、勝てるかどうかなんてわかんねえけど、俺は全力で走るぜ！！」

「そうだよ相澤！頭上げなよ。紫団応援副団長に頭なんか下げられちゃ、私らが困るって！」

「大体、俺らの目標は”優勝”なんだぜ？こんなところで負けるつもりなんてねーし！！」

「そうそう！あの子一人のためだけじゃなく、紫団全員のために！！」

……ははっ、みんなは頭を下げた俺に「何を当たり前なことをいってるんだ？」とばかりに笑ってくれた。団結心はどの団よりも固く、その目標は皆が同じ……。

目指すは”優勝”の二文字、誰だって負けるつもりは毛頭無い！！

「紫団の優勝のために……」勝つ”ぞ！！”
『オオオツ！！！！！！』

文字通りの”一致団結”。その目標のために、俺らは自分に与え

られた力の限りで走った！走って、走って、バトンを次の走者（湊）に渡す。軽やかな走りである。走るといっても滑るような速さだ。けど、どの団も足に自信のある精鋭揃い。距離だって一歩か二歩の差くらいしかない……。それでも、みんなの足に妥協はない。俺↓湊↓沖邑↓斉藤↓長谷部……。そしてアンカーの長安さんへとバトンは繋がれた。

「長安、頼むぜ！」と長谷部がバトンを渡す際に長安さんへと言葉を掛けた。それに対し長安さんは、バトンを受け取る直前、走り出しながらも黙って頷く……。

現在僅差で2位、この長安さんで紫団2年チームの着順が決まる……。みんなの願いはただ一つ……

” 勝つ！！ ”

託されたバトンを手に、アンカーの長安さんは何を思っていたのだろう……。もう、俺たちに出来るのは” 祈る ” ことだけだ。

僅差ながらも縮まらない差、近づくゴール……。結果を見る前に目を閉じてしまったのは、負ける姿を想像してしまったからか、それとも、一生懸命に走ったから、着順なんてどうでもいいと思ってしまったからだろうか――

『オオオオオツッ！！！！！！』

再び目を開けたとき、大きな歓声……。息を切らす最終走者……。そして――

——応援団席へと”ガッツポーズ”をした、長安さんの笑顔が俺の目に映っていた。

86：昼食時間も休まらねえ……

体育祭も前半戦終わり、現在昼食のための1時間休憩……なんだけど――

「……視線がえげつなくこっちに向けられてる気が……」

【借り物競争】に“借り物”として参加した我が母（奈々子）と、その母の経営している化粧品会社のCMモデル（臨時）で、全国的にも顔を知られた獅子神さん（私服に着替えた）。更には嶺桜高校にて成績優秀なる【生徒会副会長兼弓道部主将】の肩書きを持つ“変態さん”の美雪さんに【綾館家専属侍従長^{メイド}】の肩書きを持つ“完璧メイド”のリリナさん……果ては「賑やかそうだから私も混ぜてっ！」てな勢いで参入した【生徒会長】の長束京都先輩が、現在“保護者・関係者用応援テント”にて和やかに談笑を兼ねた昼食を摂っている。それに我が相沢家の両親プラス妹（凜）が混じっているのだから、大所帯この上ない。まして俺と親父以外は全員女性。しかも学校内でも指折りの美少女（？）ともなれば、視線を集めないわけがない。

好奇心な視線というものに慣れるわけもなく、昼食を摂って体力を回復させても、気持ち（精神）は休まらねえ……。

「母さん！由希の周りにこんなにも可愛い女の子達が！」

「孫の顔も早くに見れそう……ね、お父さん！」

何やかやと気の早い（というよりも話題がずれている）両親にツッコミを入れる気力もねえし、凜はまったく興味も持たず、リリナさんが用意してくれた馬鹿デカイ弁当のおかずを黙々と食べる。俺にとって唯一の“良心”である獅子神さんは、他の保護者たち（主

に女性）からお願いされて「アタシは芸能人じゃないんですけど……」と、困惑気味にサインに応じているから、助け舟も期待できない。

そして問題の美雪さんは、両親のずれた会話に「まあ！ご期待に沿えるよう頑張ります！」と、頬を赤らめて猫を被っていた。被る必要はもう無いはずだが……。

そして何気なく俺たちのいる保護者テントにやって来た京都先輩を確認（視認）した両親は、再び――

「おお、由希には外国のお友達もいるのか！」

「ねえ、ぜひ【化粧品モデル】をやってみない！？」

親父は京都先輩の髪（金髪）を見て勝手に勘違いし、母もまた、京都先輩に“商人”として目をつけたようだ。

「私の母がフランス人なので、正確にはハーフなんですよ」

「まあ！ますます欲しい人材だわ！！由希、お手柄よ！」

何の手柄かは知らんが、完全に両親は京都先輩という人物に興味を抱いた。……ホントは京都先輩って純日本人なんだがな。本人もどんな反応をするのかと思って口にした言葉だろうが、どうも失敗したとばかりに「ごめん、助けて！」的なアイコンタクトを俺に送ってきた。そして――

「ユキッ！私とあろう“妻”がいながら京都に熱い眼差しを向けおつて！浮気は許さんと言っただろうが！！」

変なところで勘の良い美雪さんが、勘違いして怒る。

「まあまあ美雪ちゃん、由希に浮気なんて甲斐性はないわよ！」

「そうそう、なんせ俺の息子だからな！」

「あら、でもアナタは私にとって誰よりも魅力的よ！」

「奈々子……」

「アナタ……」

俺をぼろくそに言っておいて、何をイチャイチャしてやがんだか……。仲が良いのは息子として安心できるものではあるが、それを人前でやるなよ……。

勝手に勘違いした美雪さんも、両親から解放されてホッとしている京都先輩も、バカツプル顔負けの我が両親を見て、呆れてものも言えんとばかりに苦笑。その後で

「相澤くんも苦労するね……」

「ユキも大変なんだな……」

哀れむように俺を見た京都先輩も美雪さん。

同情しないで！余計に傷つくから！！

87：後半戦突入！～女心は怖いもの？～（前書き）

おそらくタイトルどおりです。

87：後半戦突入！女心は怖いもの？

体育祭も残り半分となった……。現在は下馬評どおり紫団が後続（2位の青团）を15点ほど引き離している状態で、暫定トップ。けど、独走状態でもない接戦……。

後半戦は個人種目から【団体戦】が主となる競技が多い。当然、競技配点も大きいので、1度の最下位で、団の順位も大きく変わってくるだろう……。

午後の最初の競技は女子の【玉入れ】。自団の色の付いた“お手玉”を、自団の籠へと投げ入れる“アレ”である。

俺は午後の競技の出番が少なく、最初のうちは男子の応援団の練習（演舞確認）のために応援団席裏で練習をしていたのだが、突然、グラウンドが騒々しくなった。

……ざわつきというよりも“怒号”、声援というよりも“罵声”が飛び交っている……

「てめえ調子こいてんじゃねえぞっ！！」
「うるさい負け犬風情があっ！！」

あまりに殺気立った声……。恐る恐るスタンド席からグラウンドの方へと顔を出した瞬間――

ビュオッ！……！！

俺の頬のスレスレを、“何か”が通り過ぎて行った。そして背後にいた健一の顔面に「ズドオオッ！！」というとてもない衝撃音と共に、その“何か”が直撃。「ギャウッ！！」と、わけもわからん悲鳴を上げた健一は、完全KO状態で地面に伏した……。

「健一いつ！？どうしたっ！？？？」

「きゅっ」

ダメだ、完全に白目むいてやがる……。気絶した健一をとりあえずは応援団席裏に引きずって行っただが、そこには男子連中の全てが集まって、その全員の表情が脅えきっていた。

相変わらず、グラウンドには不良顔負けの恐ろしい台詞が飛び交い、応援団席には「バシっ！バシっ！」と、何かが飛んできている。

「な、何があったんすか！？」

「せ、戦争だ……。女の戦いが勃発してんだよ！！」

先輩の口から出た言葉に、思わず「はっ？」と言いつうになった。何を冗談言っただか、なんて思ったのだが、先輩の目は本気である。それに他の男子連中も、茶化すようなことを言わないし、皆が口々に「怖えよぉ！」だの「あ、ああ……」だのと脅えたままだ。その後5分間ほど、グラウンドには女子達の「おぞましい罵声」と、男子達の【悲鳴】が木霊した……。

“グラウンドの整備”という形で中止になった【玉入れ】競技……。とりあえず参加していた如月と結城、そして湊……は相変わらずの無言状態なので、この二人から話を聞いてみた。

「女の心は怖いにやあゝ！！」

「この発端は、緑団の樺島先輩と白団の高嶺先輩（たかね）ただけだよ……」

如月のいう樺島先輩と高嶺先輩というのは、嶺桜高校で年に2回（春・秋）行われる【嶺桜美少女ランキング】に毎回名を連ねる常連さんで、あまりそういったことに興味のない俺でも知っている有名な人だ。

如月の話では、その二人には彼氏がいるのだが、その彼氏というのがまた厄介なことに、樺島先輩と高嶺先輩に二股をかけていたとか。そこで二人は「どちらが本気でどちらが遊びなのっ!？」と彼氏に詰め寄ったらしく、その気迫に負けた彼氏が「花（高嶺先輩）が本命の彼女だよ」と、言ってしまったんだとかで、その返答に納得のいかなかった樺島先輩が【玉入れ】競技を利用して、怨念を込めた“お手玉”を高嶺先輩に投げつけた……ということから、この惨事が起こった……らしい。

もつとも、発端はこの先輩二人だけなので他の女子には関係の無いことだったのだが、互いが投げていたお手玉が他の女子や他の団の女子に当たり、いつの間にか騒動が拡大したんだそう……。

「浮気はだめにや！最低にや!!」

「……同意」

「ホント、私らにとっちゃいい迷惑だわ。まあ騒動の最中に逃げ出そうとした橙団の彼氏を引きずり出したのは、正解だったわ!」

「まったくや！マイはさすがにや!!」

ああ……あのグラウンドの中央でボロ雑巾と化したあの人型のような物体が、ことの【元凶】か。それにしても――

「如月はよく高嶺先輩の彼氏のことを知ってたな?」

「ああ、そりゃね。私も“一応”ナンパされたことがあるのよ」

「はあ??」

如月がナンパされたのは初耳だ。まあ一般的に“美少女”の部類に入るであろう如月がナンパされたというのは、おかしい話でもない。しかし、それとこれとがどう「高嶺先輩の彼氏」に結びつくんだ？

「“高嶺の花”を射止めた男って、わりと有名な話だし、そもそも私がナンパされた頃には高嶺先輩とあの“ボロ雑巾”は付き合ってたしね」

ま、マジ！？俺、まったく知らねえ……。ってか、たぶん美雪先輩との毎日の攻防で、そんなヒマすらなかったのが原因かもしれんが――

「だいたいさあ、私ってメンクイだけど、“アレ”はダメだわ……。私には……が……るし……」

「ん？なんか言った??」

「あ、ああ、なんでもない！」

あ、あはは、と口を濁した如月は、早々に女子更衣室へと着替えに戻る。

「マイはずっと、健一が好きなのにや。だからあの“ボロ雑巾”にナンパされたときも、瞬時に断ってたのにや」

「……はえ!？」

結城の思いがけない爆弾発言に、俺はお手玉が直撃して気絶した健一以上に素っ頓狂な声を上げてしまった。ってか、ええっ!???

「ユツキは気付いてなかったにや？」

「気付くも何も、初耳だって!ってか、マジ!？」

「大マジにや！大体、いつもの様子を見てるとわかるにゃん！」

……いつもの様子って――

「すまん、皆目検討もつかん。だいたい如月が健一をボッコボコにしてるイメージしか……」

「それだにや。アレはスキンシップのようなものにや！マイは照れ屋さんだからにや」

そ、そうなの！？ってか照れ屋さんだからボッコボコはバイオレンス過ぎないか？

「クラスの間みんなも知ってるしアツキ（河南秋斗）も知ってるにや！」

「マジか！？知らなかったの俺だけ！？？」

「ユツキは単に鈍感なだけにや」

うおう！？何気に傷付くぜ結城……

「まあユツキもそのうちわかるにゃん！」

「そういうもんか？」

「そういうものにや！」

にやははん！と結城は笑う。ホント、結城は猫みたいだ。つい最近までは“眠り猫”なんてあだ名が付いていたくらいに寝てばかりの結城も、河南と付き合い始めてからは、あまり眠っている姿を見なくなった。それくらい、恋人関係が出来ると変化するもんなんだろうか？

「それにしたって……」

「にゃ？」

「如月もなかなか苦勞するなこりゃ……………」

「にゃ〜。まあでも、今は暖かく見守るにゃ！」

「そうだな」

思わぬことを知った俺と、前からその事を知っていた結城は、未だ氣絶したままの健一を見ながら少しだけ笑う。相変わらず白目向いたままの健一だが…………如月、頑張れよ！！と、更衣室へと着替えに戻った如月を、心の中で応援。

「…………失恋…………でも…………紗姫お姉さまと…………凜ちゃん…………リリナお姉さま…………いる……………」

そんなやり取りを傍観していた百合っ子の湊が、ボソツと呟いた。

うん、妹に手を出すのは勘弁してくれ…………

88：【全学年合同ダンス】

後半戦最初の競技【玉入れ】は、結局“中止”という形で幕を下ろした。まあ当然といえば当然だろう……。なんせ団対抗競技なのに、全団を巻き込む騒動に発展したわけだし。

そんなわけで配点もなく、団の得点にも変動は無い。

【玉入れ】競技直後の出来事だが、グラウンドから女子の波が引き、樺島先輩と高嶺先輩を二股かけていた彼氏（以下：ボロ雑巾）は、それはもう悲惨なものだった。

なんせ女子からは「女の敵」だといわんばかりの軽蔑を多量に含んだ眼差しを向けられ、男子からは「男の恥さらし」だの「俺たちの高嶺（樺島）さんを弄びやがって!!」と、罵声と殺気立った視線を浴びせられたのだから……。

まあ自業自得、一番哀れなのは、そんな息子の醜態を目の当たりにした両親かもしれない。来ているかどうかは知らんが。

ようやく後半戦も再開され、始まったのは【全学年合同ダンス】。これは男女・学年関係なく、希望者全員が参加できるダンスで、競技とは銘打ってあるが、もちろん得点なんてものは無い。

俺は“非参加組”だが、それを良しとしない人間がいる。

「ユキい！私は3曲目に出る予定だ！」

「え？俺は出ませんけど」

「な、何いいいっ！???」

もつわかるだろう……。俺を「ユキ」と呼び、拒否ればオーバーリ

アクションな先輩……もとい変態……美雪さんである。

「ユキ！合同ダンスとは好き合っている者同士が堂々とイチャイチャできる場なんだぞ！！」

「誰だ根も葉もないデマを吹き込んだのは！！」

まったくもってそんな競技なんて無えよ！しかも性質^{たち}の悪いでまかせをよく信じたな！？絶対「もしもし？俺、俺だよ！」的な詐欺電話に力モられるぞ！

「違うのか？！京都がそう言ってたぞ！」

あんの腹黒生徒会長お！！

「あのねえ……」

とりあえず俺の知っている範囲で【全学年合同ダンス】の意図・ルールを説明……。なんてしている間に、2曲目に突入である。

「ううむ……だが、イチャイチャできなくとも参加してみようじゃないか！」

「いやいや！俺、ダンスなんて参加しないと決めてたから練習して無いし」

「まあ良いじゃないか、何事にも参加することに意味があるというし！」

なんだその“オリンピック精神”？そもそもこれ以上、人目に自分の姿を曝したくないし、放送席のアナウンス係に冷やかされたくないし……

「ユキ、何事も経験が必要だぞ！好き嫌いでは世の中は上手く渡れん！大丈夫、私がいるから！！ほらっ、行くぞ！！」

「あ、ちよっ！？」

有無を言わず、とはこんな感じなんだろう……。にこつと笑い、俺の返事も待たずに手を握って参加場所へと走る美雪さんと、引きずられる俺。まあ、嫌じゃない……。嫌じゃないんだが、先輩は【合同ダンス】のルールをちゃんと聞いてくれていたんだろうか……。？
だつて――

「なっ！？ユキい！！待てええっ！！」

――だから言つたのに。そもそも【全学年合同ダンス】は一種のフォークダンスのようなものだ。だから曲のテンポやフリが変わる度に、踊る相手も変わる。当然、最初こそ一緒に手を繋いだりして見様見真似で踊っていた俺と美雪さんだったけど、すぐに相手がチェンジ・チェンジ・チェンジ！もう半周以上、美雪さんと離れてしまっている。俺じゃどうすることも出来ないし、すればまた、アナウンス係に冷やかされることは確実。美雪さんもそれを知っているので、うかつな行動はできない。

「あれ？相澤くんじゃなか！」

「出た！腹黒生徒会長！ってイダダダダ！??」

曲が中盤になったところで見知った顔にチェンジ。相手は美雪さんにでまかせを言つた張本人の京都先輩だったが、思わず本音を口にしてしまったがために、全体重をかけた（？）足で踏まれた。つか、マジで痛い！！

「心外だなあゝ相澤くんがそんな事を言うなんて、私、傷ついちゃうゝ……！」

「うわ、胡散臭い！ってか、美雪さんにでまかせ言うのは勘弁してくださいよ！俺まで参加することになったじゃないすか……」

「ありや？美雪ってばマジで信じたの??」

本人にも自覚なしかよ……余計に性質が悪い。

「まあまあいいじゃん！……あら？なぜ寒気がするのかしら……あ」

「あ」じゃない！俺もすごく悪寒が走ってる！うわ、美雪さんがいるであろう場所から陽炎のようにオーラ（?）が漂ってるし！！

「あ、あはは……ばいばい……」

相手がチェンジ……って――

「なんで健一がいるんだよ……！」

「俺が聞きたいぜバカヤロー！」

なぜか健一が相手側ポジションに就いていた。いや、男同士でダンスってのは正直……キモイ！しかも大半が女子の【合同ダンス】で、なぜ男子同士が当たってしまうのか、その確立は低いはずなんだが――

まあこの目つきのせいで、他の女子から怖がられる俺だから……それだけは不幸中の幸いってやつか――。

「おおっと、最後のチェンジだぜ！じゃな！……って、あ？」
「あ？」

あ、あれ〜???なんで美雪先輩が俺の手を握ってるのかな〜?
?そして健一の相手は……如月じゃなか!なにこの“仕組まれた”
感は???

「ユキへの“想い”が強かったのか、いつの間にか最後の相手もユ
キになってしまったな!なぜだろうな??」

「俺はその気持ち“重い”ですよ……まあ……」

あからさまに棒読みな台詞の美雪さんに呆れつつ、美雪さんの手
を握り返した俺。曲もラストに差し掛かっている……だから――

「ラストを飾る相手が美雪さんというのも“悪くはない”ですね」
「やれやれ、ユキはツンデレだな!」

だ〜れ〜が……――

「ツンデレじゃねえよ!」

ジャン!と曲が終わったタイミングで俺がツツコミを入れたため、
静かなグラウンドには俺の声と、隣ではた迷惑にギヤーギヤーと騒
いでいる如月・健一のペアの声が響いた。

その後すぐにグラウンド・保護者テント・場内アナウンスから爆
笑と冷やかしの声が混じったのは言うまでも無い……。

88：【全学年合同ダンス】（後書き）

完結も視野に入った状態で文面がグダグダ状態……読者の皆様、
本当にすみませんでした（苦）

89：“あの人”再来！（前書き）

サブタイトル通りです。かつて1度だけ登場したことのあるキャラが、本当に久しぶりに登場します。ユキは語りです。

89：“あの人”再来！

【全学年合同ダンス】終了後は、【部活対抗リレー】や各学年による【組み体操】や【マスゲーム】という得点に関係の無い競技が展開された。中でも男子全員参加の【組み体操】では、3年生最後の華である“5段タワー”という大技を成功させ、関係者・保護者・先生など、学校に来ている人たちから多くの拍手や暖かい声援が贈られた。俺ら2年は最大で5段の“ピラミッド”を成功させたが、やはり3年生の偉業ともいえる“タワー”には到底かなわない。けど、みんなで何かをやり遂げた達成感というものは、やはり何ものにも代えがたい産物だった。

そして現在、個人競技で力自慢の“花形競技”ともいえる【俵上げ】が行われている。これは30キロある俵を、誰が最後まで持ち上げ続けることが出来るかという“耐久戦”である。ちなみに女子の部もあり、女子用の俵は20キロある。

まあこういう力を要する競技に参加するのは、やはりそういう類の部活動生（相撲部とか柔道部とか）が多く、生半可な気持ちで参加した奴らは早々に脱落。我が紫団からは1年に柔道部の高山、2年からは相撲部であり応援団の“旗持ち”である大峰、3年からは同じく相撲部の島木先輩が出場。1年の高山はやはり未経験の競技で要領が掴めずに早々に敗退。島木先輩は健闘も虚しく5位となった。

そして2年の大峰……コイツはさすがだ。伊達に相撲部副将に座してはいない……並みいる強敵（と思われる）がことごとく敗退していく中、未だ顔色一つ変えずに俵を持ち上げ続けている。

「大峰、いいぞ！頑張れえっ！！」

参加人数15人中13人が脱落し、残すは大峰（紫団）と青団の3年の一騎打ちとなる。ここで紫団から声援が入ると、大峰は紫団^{スタ}応援席の方へと顔を向け、ニコツと笑みを浮かべた。

“気は優しくて力持ち”そのものの大峰は、まさに頼れる同級生だ。そんな相手に一步も退かない青団の3年生もなかなかのものだが、いかんせん体型が違う。大峰は相撲取りでよく表現される“あんこ型”で、どっしりと構えている。それに対し青団の3年生も、身長が高くて体格こそ良いが、大峰のようなどっしり型ではではない……というより――

「……あ……！」

なんとなく見覚えのある顔だな、なんて思っていて、今更になって気付いた……。あの人“番長”じゃねえか！！（09：喧嘩ですか？いいえ、決闘です より参照）

「兄さん、頑張ってくださいっす！！」

「おうよ！任せとけっ！！」

おお、番長に子分（？）からの応援が入ると、ニツと歯を見せて応えている。さすが番長、まだまだ余裕そうだ！青団の女子からも「源九郎先輩、頑張ってー！！」とか「大道くん、ファイトオー！！」なんて黄色い声援が……。つか、大道源九郎^{だいちげんくろう}って、まんま番長っぽい名前だな！！

そついや最近（というより俺が怪我して以来）、“果たし状”が来なくなってたな……。とんとご無沙汰だったし番長と会う機会が無かったから、ずいぶんと久しぶりに見た気がする。というより、5ヶ月経つても番長の風貌が全然変わってないような――

そうこうしているうちに、両者とも顔色が少しづつ険しくなっ

きている。まあ当然か……なんせ俵は30キロあるし、それを長時間も持ち上げ続けなければいけないのだから。

そして――

「む、無念だ……」

ついに番長が高々と抱え上げていた俵を地面に落とした！結果、大峰（紫団）が番長に勝ち1位を獲得。これにより早々に敗退していた黄団との差を広げることに成功だ！！やったぜ大峰、さすがは頼れる“気は優しくて力持ち”だ！！

ガッツポーズする大峰に対し、満身創痍で地面にバタンと倒れた番長……もとい大道先輩。大峰は大道先輩に近づいて上体を起こすと、二、三言、なにか会話をやり取りし、互いにかつちりと握手を交わしていた。ううむ、これが男の友情ってやつだ。女子にはわからんだろうが……

見事、力自慢の花形競技ともいえる【俵上げ】で堂々たる1位に輝いた大峰が帰ってきた。みんな「やったな！」「さすが！」「頼れるぜ！」「かつこよかったよ！」なんて称えるもんだから、大峰は恥ずかしそうに「ありがとう」と小さく呟いた。

そしてその巨体を休ませようと応援席の空いているスペースに腰を下ろした大峰に、俺はつい先ほど番長と何を話したのか、興味本位で訊ねてみた。

「いやぁ勝ったんだけど……どうしても腑に落ちなかったんだ。僕が大道先輩に勝ったってことが……」

大峰いわく、大道先輩がわざと負けたんじゃないかと思っただけ。い。なんせ、両者厳しい状態ではあったが、大道先輩が急に俵を落

としたことが、そう思わせていたらしい。そんなわけで、わざわざ
「わざと負けたんですか？」と言いにいったんだとか。

「そしたらさ「いや、わざと負けるようなことは絶対にしない！何
事も一生懸命がモットーだからな！」って。じゃあなんで急に俵
を落としたのかって聞いてみたら――」

「みたら？」

「「みんなの気持ちに応えようと思って大声を出し続けたら、スタ
ミナが切れた」んだって」

……それ、単なるバカじゃねえか！！！！

90：仮設テントで……

【団体競技】がメインとなる午後の競技……とりわけ【騎馬戦】・【棒倒し】・【応援団演舞・マスゲーム】は、配点も高くて競技総合の“花形”とも言われている。

【棒倒し】は猛者の集う青団に、黄団も紫団も戦略的に対抗したが、所詮は“力に勝るものは無し”といわんばかりに蹴散らされ、あつという間に――

「逆転されてる……」

元々が僅差の順位、一競技で順位の変動があつたりする。【棒倒し】で青団が一躍トップに躍り出たのが、その良い例だ。

とはいえ、やはり1～3位の点差は均衡。残された競技は【総合騎馬戦】・【アメ食い競争】・【応援団演舞・マスゲーム】なんかが、配点競技である。【アメ食い競争】と【応援団】の合間にちょっとしたグラウンド整備が入るが、その間も放送席では余興程度のクイズなんかをやったりと、保護者・関係者が飽きないようにと綿密に進行を練っているんだとか。ちなみに【グラウンド整備】中に各団の応援団は準備に取り掛かる。俺は既に【応援団演舞】以外の全ての競技が終わっているの、ちょっとした衣装部屋（仮設テント）にてお着替え中。団長である河南は、【総合騎馬戦】に選手として出場するので、まだ来ていない。

「ういっす！」

「ういっすておわっ！？な、なんすか獅子神さん！」

テント入り口にて気軽な挨拶が男子応援団の耳に届く。んでまた相手の顔なんて一々見るでもなく気軽に挨拶を返して何気なく声の

方へと振り返れば、仮設テント（更衣室）内を興味津々に覗き込んでいる獅子神さんが……。

一応でもなく獅子神さんは“女性”であり、うちの母（奈々子）が自社CMのモデルに起用するほどの美人さん。しかも一部じゃ有名なもんだから、俺を含めた男子の一同は、自分の格好（パンツ一枚とか）に恥ずかしさを覚え、慌てて服を着たり露出した肌を隠そうと身近にあつたものを手に掴んだりと様々。

「んあ？なにやってんだお前ら」

と、俺らの行動や格好を見てもまったく動じない獅子神さんは、頭に（？）マークを浮かべたように首を傾げた。

「と、とりあえず何しに来たんですか？」

「ん？お、お悪い悪い！実は相澤にとっておきの衣装を持ってきたんだよー！」

俺の問いに一瞬だけ「はて？」と再び首を傾げたのは気にしないとして、何かを思い出した獅子神さんが、紙袋を差し出した。“衣装”と言ってたんだが、応援団衣装は既に俺の手元にあるんだが……はて？

と、渡された紙袋から“衣装”を取り出す。……んだが、なんてことはない、俺が注文したとおりの衣装と前面はほぼ変わらない。何がとっておきなんだろうと背面を見て、俺は獅子神さんのいう“とっておき”の意味を理解した。

「これって——」

「……美雪に告白すんだろ？」

「な、なんで」

「知ってるんですか!？」と言いかけて、ここが自分と獅子神さん以外にも大勢の人間が居ることを思い出し、慌てて口をつぐんだ。そもそも、なぜ獅子神さんがその事を知ってる!?このことを知ってるのは俺を含めて(河南・如月・結城・湊)の5人のはず。健一は口が軽いから話してないのに……

「河南ってヤツがいんだろ?あいつから聞きだしたんよ」

「あ、あんにやろ……!」

「おいおい、河南は悪くねえよ!アタシが無理やり聞き出したようなもんだからな」

む、無理やりて……

「まあ、ここ最近ちいとはかし相澤の様子がおかしかったんでな、ちとばかし拳こぶしちらつかせて聞いてみたんよ」

「うおい!？」

「はっはっは!案外素直にゲロっちまったんで拍子抜けしたけどよ。んで、アタシも相澤には世話になりっぱなしだし……な」

俺の友達を脅したというのは引つかかるが……で、衣装これか……。気持ち是非常にありがたいんだが――

「獅子神さん、世話になりっぱなしなのは俺のほうなのに……」

きっかけは、暴走族の喧嘩で不意打ち喰らってボッコボコにされて地面に突っ伏してた獅子神さんを介抱したのだが、俺はそれをお世話したとは思っていない。それどころか、変態姉妹(綾館姉妹)に比べりやはるかに常識人だし、美雪さんの暴走を止めたり、俺ら応援団の衣装の発注の手伝いや、俺ら年下なのに対等に接してくれ

たり……母の暴走に付き合ってくれたり、世話になってるのは俺
ばっかで……

「……あのさ、恥ずかしい話なんだけど……アタシ、歳の近い友
達なんていねんだ……目つきはワリイしがさつだし、喧嘩しか能
のない……誰も近寄っちゃこねえ……けど、相澤だけは違ってたん
だよ……こんなバカみたいなアタシのために命を張って守ってく
れた……アタシを友達だと言ってくれた……他人からみりや当た
り前かもしれないけどさ……それでも、やっぱり嬉しかったんだ」

「……獅子神さん……」

「だからさ、これはアタシからの気持ちだ。友達^{たち}のために何か力に
なってやりたいなんて、アタシのガラじゃねえんだろうけど……」

へへッと照れくさそうに、獅子神さんは鼻っ柱をぽりぽりと掻い
た。俺が獅子神さんを“友達”と言ったことに、そこまで深い意味
なんて無くて……けど、誰かのために何か力になってやりたいって
気持ちは、俺にだってある。今回の場合、獅子神さんにとっての“
誰か”というのは、俺のことであって、そう言われると、やっぱり
嬉しくなるのは当たり前で――

「獅子神さん、ありがとうございます……!」

「いいか、ぜってえ悔いの無い結果を残せよ!」

ここまで言われて、「やっぱり返す」なんてのは失礼だ。それに、
こうして自分のために力を貸してくれた獅子神さんのためにも、俺
はこの“衣装”を着て、本番に臨みたい……。

獅子神さんは「頑張れ」とは言わない。けど、それがかえってあ
りがたかった。

がっちりと握手を交わした後、獅子神さんは「じゃな、相澤の晴
れ舞台、楽しみにしてるぜ!」と言ったあと、仮設テントから出て

行った。

“ 澤落つる 美しき雪 愛でながら 心を写す 一度の舞”
ひとたび

黒い布地に白銀の刺繍糸ではっきりと刻まれたのは、獅子神さん
なりの短歌だろうか……？ 専門家が見れば他愛も無い内容の刺繍で
も、俺は妙にその短歌が気に入った。

獅子神さんへの礼は、【応援団演舞】の名に恥じない演舞で応え
よう。そして体育祭が終わったら――

91：後輩に〇〇をいじられる

俺が応援団で着る学ラン（獅子神さん特注）の前に、息をするのも辛いほどきつく“サラシ”を胸下から腰辺りまで巻いていた（巻かれていた）時、【騎馬戦】に参加していた河南たちが帰ってきた。獅子神さんと会話したり、現状としてサラシをきつく巻かれて観戦どころの話ではなかったが、2位という上々の結果だったという。男子が終わった時点で順位の変動は無く、女子の結果をふまえたうえで、やはり最後の【応援団演舞・団対抗マスゲーム】で、優勝の如何が決まるようだ。

「よし、じゃあ気合入れんとな！」

「ああ。……ところで大川（健一）はどこだ？」

ん？河南に指摘されて気付いたが、そっぴや健一はどこに行ったんだ？

「お、おまだぜえ……」

「うお！？どうした健一！！」

噂をすれば影……というわけではないが、仮設（更衣用）テントにやって来た健一は、なんつーか……ボロボロ状態である。うん、ボロボロ……。体育祭用の“団シャツ”は所々擦り切れたり破れたり泥が付着していたり、顔も殴られたように腫れている。

「めつちやがかわいい女の子がいたがら、なんばじようどじだら、がれじがいで、ぼっつっぽ……」

ほほお……要訳すると「可愛い女の子がいたからナンパしたら彼

氏付きで、逆上した彼氏にボコボコにされた」ってことか……。まあ、健バカ一らしいといえはそれまでだが、コイツのアクティブな行動力は尊敬に値するな。ただ方向性は間違ってるけど。

「はあ……とりあえずその“みつともない顔”をどうにかしないと
な」

「まったくだ。ただでさえ“みつともない顔”だというのに……」
「ぢょっ！？びどくない？（ちよっ！？ひどくない？）」

悪いな健一、フォローも出来ねえ。河南の言うことはいちいち尤もだしな。それに――

「（如月も苦勞するな）」

「（同感だ。なんだってコイツなんだろう？如月なら引く手数多だろうに）」

アイコンタクトで意思が通じたらしい。俺と河南は同時に

「ハア……」

ため息を吐いた。

↓↓↓

きつく巻かれたサラシの圧迫感に耐えながら、ヘアメイクの最中である。まあ手伝わってもらっているので椅子に座っているだけだが、

他者に髪を触られたり体を触られたりするのには、どうも気持ちの悪いものではない。とはいえ髪型は自分で弄^{いじ}ろうにも、後頭部が見えるわけでもないの、素直に紫団の大看板担当をしていた女子に任せている。

「相澤先輩は染髪します？」

「染髪？」

「はい！スプレー式の染髪剤があるんですよ。別に本当に染めるわけじゃないので、洗えば落とせるタイプですよ！」

はあ、今はそんなものもあるのか……染髪なんて興味なかったからよくわからんだけど、まあなんというか……絶対この後輩、俺を染髪したがつている！なんせ既にスプレー缶を手にとってるし！！

「う、ううむ……」

「あ、じゃあ“付け毛”^{エクステ}みたいな部分染めとかどうですか？」

間違いない……渋る俺だが、向こう（後輩）も諦めるつもりは無いらしい。というより、部分染めなんて出来るのか。すげえな。

「じゃ、じゃあソレやってもらおっかな……」

「了解です！何色にします？やっぱ紫団なんで紫とか？」

うん、紫は無いな！

こうして俺は、後輩に髪の毛を散々いじられることとなる。その間、約20分……うう、辛え……

「出来ました!!」

「えっと、どれどれ……」

ようやく完成したらしい。ずっと椅子に座りっぱなしで動くに動けない状態だったから、「う〜ん!」と一度、大きくノビをしてから手鏡を受け取り確認――

「へえ、すごいな!」

「似合ってますよ先輩!!」

入院していた(6月)頃から髪は切っていなかったたので幾らか伸びていたのだが、後輩はソレを利用してオールバックに仕立てた。部分染めについては、額の両端の2箇所を付け毛の^{エクステ}ようにきれいに染め上げた。赤色に。

自分の顔つき上、オールバックなんかにしたら本当にチンピラに思われる可能性が大きいのだが、部分染めで緩和できてる……と思う。

なににせよ、自分の想像よりも全然良く出来ていたことに感心。

「さあつてと、河南たちはどうだろうか?」

2学年の応援団員の中では一番早く準備が終わったので、今度は同団のメンバーの様子をのぞいてみることに。まずは河南である。

「うお!?!パツ金!!」

「まあ多少はハメを外してみるのもいいだろうと思ってな」

河南は普段の黒髪(俺もだが)からガラッと変わって金髪。少し長い髪は後頭部で一括りにされ、なんというか“異国の侍”のような感じだ。しかしまあよく似合ってるな……俺と同様に不良に間違

われやすい顔つきだが、精悍という表現が似合っている。まさに“応援団長”に相応しい様相だ。

「由希は部分染めにしたのか。俺が言っても嬉しくはないだろうが、よく似合ってる」

「秋斗（河南）もな！すつげえ似合ってるぜ！」

「そうか？良かった。結城たちは“別テント”にいるが、まあ問題は無いだろう。それよりも——」

と、言いかけた河南の視線の先には……なんだあのミイラ！？

「アレは誰だ？」

「いや、知らん」

顔面を包帯でぐるぐるに巻かれたヤツがいる。着ている団シャツの具合からして健一だが、不気味極まりない。河南も俺も健一だとわかってるうえでのやり取りだが、その事に気付かない健一は包帯により声がくぐもってはいるが——

「俺だよ！大川だよ！！ってか前が見えない！！！！」

「健一、なぜお前はミイラみたいな格好をしてるんだ？」

「よくぞ聞いてくれた秋斗くん！」

うわぁ、「秋斗くん」だって！健一は見えてないからわかんねえだろうが、河南はあからさまに「うぜえ……」という表情をしている。しかもミイラから言われてるようなもんだしな……キモイことこの上ない。

「甘ったるい名前の“おじさん”から新しい“顔”でも焼いてもらったのか？」

「違えよ!!」

おお、河南のボケにマジツツコミが出た。包帯でくぐもってるが、健一のツツコミにもキレがある。

「じゃあ顔面がツギハギになっているモグリの“医者”からみつともない顔を普通の顔に直してもらったのか？」

「整形でもねえよ!!可愛い後輩の女の子に「先輩、ちょっと顔を隠しますね」って手厚く看護してもらったんだよ!!」

健一……それたぶん違う。おそらく「見るな!キモイ!!」がその後輩の本心だよ!!

92：アタシの大切なもの（前書き）

獅子神紗姫の視点。獅子神とリリナの会話です。

92：アタシの大切なもの

相澤に応援団の衣装……即ち“団装”を手渡し、テントから出た直後のことだった。

「獅子神様……感謝いたします……」

生意気女（美雪）の姉、リリナ……さん（以下：メイド）に、深々と頭を下げられた。えっと、つまり――

「会話を聞いてたな。盗聴なんて好ましい行動じゃねえけど、まあ聞かれて困るような内容でも無えしな」

「申し訳ありません……」

「あつと、このことはアンタの妹には言うなよ！自分でもガラじゃねえと思ってんだかなー！」

「それは、安心してください。それよりも気になることが――」

あん？気になることだあ？

「獅子神様は、少なからずユキに恋愛感情を抱いていたはず……なのになぜ――」

さすがは相澤の言うとおり“完璧メイド”だけのことはあるな。勘もなかなか鋭い……とはいえ、だ。そんな気持ちを抱いていたのは“過去”であり……

「あんまし気持ちのいい話でも無えけどな……もう“死んだ人間の面影を追うことはやめたんだよ”
「それは、どういう――」

「……まあ錯覚つてやつだ」

——そう“錯覚”……。容姿なんて似ても似つかねえはずなのに、相澤が“あの人”の面影に重なってしまうときがある。あの、ちよつと強引だけど、やることは筋が通っているし、何より誰からも愛され、そしてアタシの初恋の相手だった“あの人”に。けど、それはいつまでも過去の人間に縛られている証拠であり、アタシの弱さ……

「まあそんなわけだし、今のアタシには相澤に対する恋愛感情なんてこれっぽっちも無えよ。それとだな……」

「なんでしよう?」

この話題はこれで終わりとして……アタシはどうしてもこのメイドに言つとかなきゃならねえ事がある……

「頼むから獅子神“様”つつーのだけは勘弁してくれ!某有名アニメ映画のキャラと被るし、何よりこれが原因で苛められた事があんだよ!」

いわゆるアタシの“黒歴史”つてやつだ。このメイド自体はユキ以外の人間に対して“様”を付けて名を呼ぶことに抵抗は無いらしいが、“様”付けされて嫌な気分になる奴がいることを、知っておいてほしい……。

「ああ!どつりで違和感が無いと思ったのですが……獅子神“様”……失礼、獅子神“さん”が気分を害されていたとは気付きませんでした。申し訳ありません!」

「いや、ホントは謝られることをされたわけじゃねえんだけど……」

ううむ……生意気女（美雪）と比べてずいぶんと良識人なメイドだから、ついこつちが申し訳ない気分になっちまう。生意気女にもこのメイドの2割くらい良識があれば、もつとまともになれるだろうに……でも、そうなりやアタシの“口喧嘩”相手がいなくなっちまうか。

「それより、そろそろ保護者テントに戻らねえとな。相澤の妹が拗ねちまう」

「あらあら、ずいぶんと気に入られたようですね」

「ああ。アタシって一人っ子だしこんな性格だから、あんま女の友達なんていねえし、甘えられることだって無えから、かえって嬉しいんだ……って、誰にも言うなよ！」

いかん！ついペラペラと本音をさらしちまった！！メイドは「大丈夫ですよ！」なんて言うてるが、昔っから“人の口に戸は立てられない”って諺もあるくらいだし、油断ならねえ……。

「……それに、私も孤児でしたから……獅子神さんの気持ちは、よくわかるつもりです」

「あ、悪い！なんか変な事を言わせたみてえだったな……」

「お氣になさらず。私には、とても大切な妹がいますから……幸せなのです！」

そう言いきつたメイドには、嘘や虚勢なんてものが一切混じっていないと感じさせる、とても柔らかで見ていたアタシまでをも幸せにしてくれるような笑顔が……。

「美雪の姉として、ユキと出会い、凜様と出会い、ユキのお友達の方と出会い、そして獅子神さんと出会い……私には多くのご学友・お友達が出来ました。失礼ながら、私は獅子神さんも“お友達”だ

「思っています」

再びメイドの口から紡ぎ出された言葉は、アタシの目頭を熱くさせるには十分な内容で……だからアタシも……

「アタシも……友達だっと思ってる！相澤だっ、相澤の友達だっ、凍だっ、美雪のことだっ、みんな友達！当然、リリナ……さん、も……」

照れくさくて、口から出てくる言葉も尻すぼみになっちまったけど、これがアタシの本音。だから……照れくせえけど――

「だから……アタシも……幸せ……」

「あ、ちょ、ちよつと!？」

わりい……ちつとばかり、目から鼻水が垂れてきやがった……。おろおろしてるのはよくわかってるけど、今はただひたすらに泣かせてくれねえかな？

なあ、“剣灘さん”……アンタの居ない世界って虚しいだけだと思っただけど、今はとても大切な世界になっちまったよ……

93：最終競技【応援団演舞】の前で……（前書き）

体育祭編に入って引っ張りすぎになってますね……すみません、
もうちょい引っ張らせてください。

93：最終競技【応援団演舞】の前で……

「最後まで接戦だなあ……………」

と、健一の言う通り、【応援団演舞・マスゲーム】を残して青団が総合で256点と暫定トップながら、逆転を狙う形となっている紫団が2点差、そして未だ虎視眈々と優勝を狙っている黄団が4点差で3位と、まさに“三つ巴”。

とはいえ…………だ。4位緑団がトップとの差32点、5位の白団が48点差で、こちらはまだまだ“優勝”を狙える位置に着いている。というのも、最終競技【応援団演舞・マスゲーム】の配点は50点と全体を通して1番高く、しかも総取り。だから4位、5位にも優勝の可能性は充分にあるので、早い話が“三つ巴”じゃなくて“五つ巴”なのだ。まあ“五つ巴”という言葉があるかどうかは知らんが…………。

そして現在、各応援団“団長”が、競技の順番を決めるための“くじ引き”に出ているため、俺たち紫団の応援団員は、ステージの裏に出来た空間^{スペース}に暗幕を張り、その中で待機しているのだが、その理由は、まだ自分達、応援団の“格好”を人目に晒さないようにするためである。

「…………おまたせ」

「おう、どうだった？」

応援団長“河南秋斗”がくじ引きを終えて帰ってきた…………んだが、妙に浮かない顔というか表情が暗いんだが…………

「俺は今日ほど“くじ運”が悪いと思ったことは無い……………」

「も、もしかして初っ端かにゃ!？」

「い、いや……トリだ……“大トリ”になった……」

“大トリ”ってのはつまり――

「一ちゃん（一番）最後ってことじゃなかっ!？」

「マジか!？まじか河南?？」

お化粧バツチリで真っ赤な簪かんざしが黒髪によく似合っている如月、未だ顔面ミイラ状態の健一が驚愕の声を上げる。……ってか健一は息苦しくないんだろうか？

「責任重大だにゃ!」

「……緊張……する……」

まあ体育祭最後の競技を締めくくるのが俺たち紫団の“応援演舞”ってわけだから、結城や湊のように、緊張しないってわけじゃない……

「本当にすまん……!！」

と、平謝りの河南。だけど、誰も責めるような奴なんていない。

それどころか――

「いいんじゃないか?かえって闘志が湧いてくる!」

「僕も相澤くんと同じだね」

「最後の締めくくりで、なおかつ逆転優勝!……なんてドラマを巻き起こせるチャンスじゃんか!」

俺、大峰（相撲・男）、斉藤さん（剣道・女子）は、闘志メラメ

ラ状態で、やる気も充分である。

「そう言ってもらえると、こっちも助かる……」

「あんま浮かねえ顔すんなって！ 応援団長様がそんなんじゃ、優勝なんか狙えねえよ！！」

河南に掛ける言葉は、けして気休めなんかじゃない。俺たちは本気で優勝を狙うために頑張ってきたのだ……それなのに応援団長がシケた面^{つら}してちゃ、全体の士気も下がってしまう。ここまで来たんだ……“正々堂々・勇猛果敢”な青团には引けをとらず、“頭脳プレー・策略家”な黄団とも互角に渡りあえていること事態が不思議なくらいけど、それでも俺たちはここまで頑張ってきた……。なら、最後まで――

「堂々としてろよ！ 俺たちは負けない……絶対に負けない！ そうだろ！！」

大きな目標を掲げ、自分たちを信じるしかないんだから。

「……そうだな。悪い、俺としたことが」

「気にすんなって！」

「どちらかといえば、相澤のほうが応援団長みたいだよ！」

「ホント、いつちよ前にカツコつけちゃって！」

「まったく、由希はおいしいとこばっか持っていくんだよなあ！」

「……（こくり）」

「いやいや、それでこそユキだ！ そんなユキだからこそ、私は惚れているのだ！！」

やいのやいのと言いながら、場は一気に和やかなムードに変わる。適度な緊張感も漂っちゃんいるけど、それが逆に心地よい……。さり

げない美雪さんの告白も、かつてはあれだけ耳障りに聞こえていたけど、今はそう思わなくなったし、何より嬉し……嬉し……うれ……あ？……あれ？今、美雪さんの声が明らかに聞こえたよな？でもここは青団^{スタンド}応援席裏で、なおかつ暗幕まで張ってあるから美雪さんが居るわけ……居る……わ……け——

「あ、綾館先輩にや！」

「あれ、どうしたんですか？こんな狭いところまで来て」

「うむ、ユキの彼女たるもの、彼氏を温かく送り出すのが務めではないかと思つてな！」

な、な、な——

「な、なんで青団の美雪さんがしれつと紫団に紛れこんでるんですかつ——」

「む？いかんか？」

「い、いかんもなにも、青団でしょ？！ここは敵地^{アウエー}ですよ！つてかさり気後ろの刺繍を覗き込もうとしないでっ——」

「ユキはけちだな！少しくらい良いじゃないか！」

「ダメつたらダメです——」

あ、あぶねえ！ついつい何時ものペースに乘せられるところだった……それにしても神出鬼没なところはホントに変わんねえ……つて、結城も如月も普通にもてなしてんじゃねえよ——

94：体育祭でも変わらない（前書き）

前話の付けたしなので、文章もものすごく短いです。

94：体育祭でも変わらない

普段の生活（学校の昼休みとか家でのんびりしてる時）なら、美雪さんの得意能力である“神出鬼没”に対して、さしたる驚きもしなかっただろう……が、この状況では話も少し違ってくる。なんせ今は“体育祭”の真っ只中であり、美雪さんは現在トップを走る青団で、俺たちの紫団とは優勝を争う敵対団のメンバーである。

まして今、俺の着ている応援団服（特注学ラン）の背面に施された刺繍を見せるわけにはぜえええつつつたい、いけないのだ！！

「むう、ユキは相変わらずのケチだ！どケチだな！！」

「なんと言われても、絶対にみせらんねえ！……って、誰がどケチだ！！」

俺と美雪さん、両者がギヤーギヤー言い合いながらも、なんとなく「こんなやり取りも久しぶりだな」なんて思っている俺は、体育祭最後の競技【応援団演舞】に参加するというのに、ずいぶんトリックスできてるなあ。

それより、なんで「相変わらずのケチ」だなんて言われにやならんのだ！？むしろ美雪さんたち綾館姉妹のこれまでの不法侵入・滞在・襲撃に関して、なんやかんやと寛大な処置（無罪放免）を下してきた俺は、むしろ心が広いんだぜ！なんて思っている時点で、ずいぶんと狭量な気もするけど……。

「むう、仕方ない……」

ようやく美雪さんも諦めてくれたらしい。依然として背後を暗幕・鉄筋でガードした状態の俺も、強張らせた体の緊張を解いた。

「それにしても、どうやってこのスタンドの裏に入ってきたんですか？ここは一応“紫団関係者以外の立ち入り禁止”になってるんですが」

「む？だから入れたんじゃないか！」

「だからどうやって……」

それよりも美雪さんがなぜ堂々と応援団席裏の控え室に入れたのか、今更ながらに不思議に思った俺がその疑問を口にして……嫌な予感がした。

「だから「応援副団長の相澤由希の彼女だ」と言ったのだ。そしてさすがに「どうぞ」と快く案内してくれたたぞ！」

だああああ！！やっぱりか！

95：健一はやっぱり健一（バカ）である

着々と、時間は過ぎていく……。

かつて、これほどまでに俺に想いを寄せてくれていた女性はいたのだろうか……？

頭が良くて、誰からも好かれていて……それでいて、俺の前ではちよつと変態チックな言動も多いけど……それでも、真っ直ぐに偽りの無い真実の気持ちを持って、俺に接してくる一つ年上の女の子。絶対的な自信を持って、俺を愛してくれる事に「妥協は無い！」と高らかに宣言し、今ではすっかり、我が家に居ることが当たり前前の環境にも思っているその“先輩”に対し、俺はただ与えられてばかりで……

そんな“先輩”に対して、俺は何を与えてきたのだろうか？

その人と出会って、俺の……いや、俺自身が“変わった”のかもしれない……。昔は面倒くさいことが嫌でたまらなかったのに、今では誰かのために……そして、俺を思ってくれている“その人”に対して、自分が何を出来るかを考えてみたり……

そうして気付いた、本当の気持ち……騒がしくて、煩わしくて、姉妹一緒になって我が家を急襲したり、無茶なことばかり言うてくるのに、なぜだか憎めない……。

一緒に居ると本当に楽しくて、今じゃすっかり家族の一員になっ

ている“先輩”だけど、言わなくちゃいけない言葉がある……。

もう、出番は間近だ……。

↓
↓
↓

団席裏の暗幕を外し、各々が最終確認している中で、美雪さんは「ユキも忙しそうだから、私も自分の団席に戻って応援しているよ」と一声掛けて、戻って行った。そんな美雪さんの後ろ姿を目で追いながら、自分も与えられた役割の確認をする。

各団の演舞が終了するたびに、自分達に与えられた時間が刻々と少なくなり、プレッシャーもどんどん大きくなっていく……。

「いよいよか……」

「き、緊張するなあ！」

応援団の演舞は、独特の緊張感がある。団長を務める河南は平然としているが、健一^{バカ}は、完全に場の雰囲気^{バカ}に飲まれかかっている。まあ気持ちは非常にわからんでもないが――

「（健一、ちょっと来い！）」

小声で健一を呼び、とりあえず落ち着かせることに。なに、こっ
ちには“嘘”という名の“秘密兵器”がある。しかも、健一^{バカ}限定の。

「（健一、大丈夫か！？）」

「（うう、き、緊張するう……ミスったらどうしよう！）」

「（大丈夫だ！健一、忘れたのか？完璧に踊れたら……）」

と、俺は団服に忍ばせた“写真”をチラッと見せる。

「（こ、これは！）」

「（そうだ“例の写真”だ）」

「（由希、俺ががんばるぜ！！）」

“例の写真”というのを覚えているだろうか？それは夏休みに皆
で綾館姉妹の別荘に行ったときに偶然に写されたという、混浴風呂
での女性陣の“あられもないお姿”が写されたというR指定並みの
秘蔵写真のことで、これを引き合いに演舞でミスばかりする健一を
奮起させたという代物だ。

当然、現物（写真）をチラッと見せたことが緊張している健一に
はプラスに作用されたようで、誰よりもやる気は充分。「ミスなん
て絶対しないぜ！」と、下心全開のスマイルを浮かべた健一に、俺
は心の中で「やっぱ健一^{バカ}だな」と言いながら

「頼むぜ！健一だけが頼りなんだ！」

と、社交辞令を口にしておいた。

そうそう、“例の写真”についてだが、前にも言ったようにそんなものなど“存在しない”。俺が団服の中から取り出したのは、別荘へ行った最終日の日に撮った集合写真で、しかも見せたのはその裏側。つまり“^{バカ}なにも映っていない”白い部分なのだ。

ホント、健一は使いようだな……。

96：閉会式後の……（前書き）

美雪視点↓ユキ視点↓美雪視点の順です。 や ごとに視点が変わります。

96：閉会式後の……

いよいよ……最後の演舞である。今年はこの団も、本当に頑張った……だからこそ、名残り惜しく感じてしまう……

「美雪、どうしました？」

「いや……なんでもない」

団席に座る私の隣で、リリナ姉さまが私の顔を心配そうに覗き込む。「なんでもない」と苦笑を混じらせる私に、姉さまは――

「美雪、今からユキが素敵に“サプライズ”をお見せしますよ！」

と、微笑んだ。

「サプライズ？」

「ええ。ユキの応援団服の背面を見れば、おのずとその意味も理解できます」

ニコニコと微笑む姉さまは、それだけ言っただけグラウンドの方へと顔を向け直す。私は姉さまの言葉の意味を理解できてはいないが、「応援団服の背面」という言葉が少し引かかる。そういえば、ユキの居る紫団^{スタンド}応援団席裏の様子を見に行ったとき、ユキは必死に私から背中^{スタンド}の“刺繍”を見られないようにしていたっけか。

そのときはあまり気にも留めてはいなかったが、姉さまの言うように、ユキの背中を見れば、その意味を理解できそうな気がしてきた。

我が青団は【応援団演舞】を残して暫定でトップに躍り出てはい

るものの、ユキの居る紫団・京都の居る黄団も、最終競技の結果発表の如何によつて“優勝”が決まるという接戦中の接戦である。既に演舞・マスゲームを終えた青团や、京都の居る黄団は、残る最後の紫団の結果を見るだけ……この時間は、とても長く感じてしまひそうだ。

それでは、体育祭最後の競技【応援団演舞・マスゲーム】で大トリを務める紫団応援団の発表です！

グラウンド内にアナウンスが響き渡る……そして、体育祭の最後を締める、紫団応援団が、ドン！ドン！と響く太鼓の音にあわせてグラウンドの中央へ……。その中に……。いた！ユキだ！！紫団の応援団席裏で見たときも、オールバックにした髪形とか部分的に染められた赤が良く似合っていると思つたが、こつやつて突き抜けんばかりの快晴の空の下で見ても、やはり良く似合っている！それよりも、ユキの背中だっけ？えつと、何々――

“澤落つる 美しき雪 愛でながら 心を写す 一度の舞”
ひとたび

「……姉さま」

「おそらくユキなりの“返歌”というものでしょう」

“返歌”か……。要するに、今まで私がユキにたくさんの“愛の告白”をしてきた。その答えが、この短歌となつてゐるものだろう……。

まあ短歌としては、誉められるような文章ではないのかもしれないが――

「……いかな名句と呼ばれる短歌であっても、私の心にはユキの背負う短歌が一番だ！」

「では、ユキの“一度の舞”を、しっかりと目に焼き付けましょう」
「うむ！」

↓
↓
↓
↓

「紫獅奮迅！」

『おう！！』

ダン！ダダン！！ダ、ダンドンドン！！！！……

紫団応援団長の、たしか河南だったか？の声でスタートした応援
団演舞・マスゲームは、湊みなとというなぜかリリナ姉さまのことが大好
きな女の子が“太鼓役”という、一見ミスマッチな組み合わせだが、
その華奢な体躯に似合わぬ豪快な音がグラウンドに響き渡り、演舞
も一系乱れず素晴らしい。マスゲームこそ設置された団席の関係上
よく見えないが、きっと完璧に仕上がっているのだろう……。

「紫龍咆哮！」

『おおっ！！』

………

「紫電招来！！」

『おおおっ！！！！！！』

.....

「^{しまい}終舞.....」

『桜扇鏡花！！！！！！』

.....

約5分ほどの演舞の中で、私は今日1日を、どれほど長く.....どれほど短く感じたのだろうか.....。皆、声を出さなかった、いや、出せなかったといったほうが正しいのかもしれない.....。それほどまでに紫団の応援演舞は素晴らしい仕上がりで、最初の拍手が起くるまで、まるで水を打ったようにシーンと静まり返ったグラウンド.....。

『ありがとうございます！』

紫団応援団が終わりの言葉を口にしたとき、ようやく割れんばかりの拍手と歓声が響き渡った。

颯爽とグラウンドから退場する紫団応援団員の中で、私の姿を見つけたユキは照れくさそうに小さく手を振り、私は――

「最高だったぞ！！」

と、声を大にして手を振った。

↓
↓
↓

体育祭全ての競技が終わり、グラウンドに整列していく生徒達……。副会長の立場である私は、生徒会長の京都や他の生徒会役員と同様に、教員席横の“生徒会席”のある場所で、体育祭を彩った選手達の晴れ晴れとした表情を目にしていた。

「皆さん、お疲れ様でした！これより成績を発表いたします！」

校長先生の声がマイクを通してグラウンドに響く……。

「今年度、応援団演舞ならびに総合優勝は……」

一同が固唾を呑んで、次の言葉を待つ……ある者はじっと目をつぶり、またある者は手を合わせて祈るように。

そして――

「……紫団、おめでとう！！」

一瞬の間を置いて、紫団の選手は「わあっ！！」と歓喜の声を上げた……。度重なる接戦に次ぐ接戦を制したのは、ユキたちの居る

紫団だった。

私や桜花のいる青団は2位と逆転負け、京都擁する黄団も3位と大健闘。自団が優勝できなかったというのは悔しい気持ちもある。だが、今は不思議と気分が良い……。それはきつと、自分達が一丸となつて頑張つたからなのだろう……。

段上から降りた校長は、今年度優勝の紫団代表の河南くんが優勝旗を手渡し、応援団演舞でも見事1位を獲つたので、同じく応援団の副団長を務めたユキは、大きなトロフィーを手渡される。

一度河南くんとユキは顔を見合わせた後で、両方が全団の選手に体を向けなおし、優勝旗・トロフィーを高々と掲げ上げた。

拍手が起こる中、私は心の中で「おめでとう」と叫び、そして皆と同様に拍手を送った。

閉会式も終わり、私の高校最後の体育祭も終わりを迎えた。はずだったのだが……

「では、これより最後のイベントを行いたいと思います！」

突如、段上に設置されたマイクを持ってテンション高く宣言した京都。い、一体なんだ！？

「では、紫団応援副団長の相澤由希くん、段上へどうぞー！！」

は？え、ゆ、ユキい！？！？

それは、応援団演舞をやり遂げた直後のことで、河南の言葉に――
瞬めまいがした……

「相澤、ちよつとこつちに来い！」

「ん？どした？」

河南に呼ばれた俺がついていった先には、生徒会長の長東京都先輩と、剣道部副将を務める井芹桜花先輩の姿が。

「やつほ！いやあ相澤くん、美雪に気持ちは伝えたの？」

「気持ち？え、ええっ！？ちよ、なんで先輩が??」

「え？河南くんに聞いたから？」

「私もそつだよ」

ちよ、ちよい待ち！？既に俺の情報が漏えい状態！つか――

「河南いつ!!」

「まあ落ち着け」

情報漏えい者である河南の胸倉をガシツと掴み、そりゃもう凜の

般若顔にも負けんばかりの表情と苛立ちを浮かべる俺に、河南はやれやれといった表情。平然としている姿が、余計に苛立たしい。

「てめえ！あれだけ「美雪さんに告白する」っていうのは内緒だったただろうが！！」

「はれ？そうなの？」

「へえ、やっと美雪に告白する決心がついたんだ！」

「……は？」

な、なんでそんな意外そうな顔してる――

「私はただ「美雪と相澤くんっていつ付き合うの？」って聞いただけだよ」

「私もそうだよ」

「だから俺は「何のことですか？」としか答えてない……要するに、生徒会長と井芹先輩に“カマかけられた”んだよ」

は、謀られた！！

「それより、手を離してくれ……いい加減、息もしづらい……」

「あ？あ、ああ！すまん！！」

まるで俺が存在しない“例の写真”のことで河南に胸倉を掴まれていた時と、全く同じ状況である。それに、自分が墓穴を掘ったようなもんだし、今更「違います」とも言えねえ……

「いやあ結構結構！それよりさ、いつ告白するの？」

「私らがお膳立てしてあげよっか？？」

「い、いや……それは……」

「もう逃げられないよ」

有無を言わせぬ不敵な笑みを浮かべた京都会長と井芹先輩は、ガシツと俺の両肩を掴んで離さない……こういう場合は意地でも逃げたいのだが、河南も不敵に眉を吊り上げ、俺の退路を阻むように立ちふさがっている。

「悪いな……多少強引だが、“きっかけ”は作ってやったぞ」

そこにはもう“拒否”という選択肢は残されていなかった――

段上に上ったのは、間違いなくユキの姿である。演舞中はオールバックにしていた髪が梳か^とれてはいるものの、格好は演舞のときと全く同じである。それにしても……緊張してないか？

「え、え〜つと……」

普段の気だるげな感じはナリを潜め、何かに追い詰められたような表情が隠せないユキの姿……対する京都はニコニコからニヤニヤ

と笑みが少し変わったような……

「では、早速“イベント”の方へ移りたいと思いまゝす！皆様、拍手……！」

司会と化した京都に促され、生徒や教師からも拍手が。なっ！？み、みんな知っているのか？というよりも、知らないのは私だけ？リリナ姉さまも目が合った瞬間にウィンクを投げてきたり、ヤンキー女も、訳知り顔で私のほうを見ている。

そして――

「綾館美雪さん！」

「は、はひ！？」

マイクを手にし、私の名を呼ぶユキの声に思わず素っ頓狂な声を出す……テントからユキのほうへ顔を向けると、京都がちよいちよいと私を手招く。いわれるがままに私もユキ・京都のいる段上前へと足を向けたのだが、それにしても一体、何をする気だ？？

「では相澤くん、お願いしまゝす……！」

最終話：才色兼備な変態さんと俺（前書き）

長々と続いたこの作品も、ようやく完結を迎えることが出来ました。視点はユキですが、終盤の から美雪視点になります。

最終話：才色兼備な変態さんと俺

体育祭から1ヶ月あまりが過ぎ、3年生は本格的な就職・受験勉強に勤しむようになった。ついぞあれだけ「今年の体育祭は気合入れてくぞおっ!!」なんてはしゃいでいたのに、すっかり元の授業風景に戻っちまって、倦怠感かどうかは知らないが、授業中に居眠りする奴も以前より増えた。

全てが元に戻っちまって、あれだけの“バカ騒ぎ”も、今じゃすっかり過去の“思い出”になっちまっている……。

“今だからはっきり言える……俺は、美雪さんが大好きですっ!!”

体育祭閉会式後の“イベント”と称し、生徒・教師・保護者が見守る中で、俺はマイクを通して自分の気持ちを盛大にぶちまけた。そりゃもう“なるようになれ!”って感じで。

河南や京都会長、それに桜花先輩に騙される(ハメられる)形で、なかばヤケクソ気味の告白で、相對していた美雪さんの返事は、「当然だ!ユキは私のものなんだからな!」という承諾でも「すまない……」という拒否の反応でもなく――

“……ずいぶんと待たせやがって……馬鹿者……!!”

と、少しの怒りと嗚咽……そして、自惚れだと思えるくらいにたくさんの愛情を感じさせる、力強い“抱擁”だった……。

その2日後（前日は休み）から俺は学校内じやすつかり“有名人”と化してしまい、面識のない他の後輩・同輩・先輩からも声をかけられたり、告白の際に美雪さんから抱きつかれたときの写真が“校内新聞”の号外として掲示板にでかでかと張り出されたり。俺自体はあんまし気にもしていなかったのだが、湊が「……読んで……」と貰ってきた校内新聞の文章の指差す先には「さすがは私の息子だわ！（相澤奈々子氏）」と、なぜか我が母が新聞部のインタビューに勝手に応じていたことを知らされた（恥）。

その後も京都会長や桜花先輩からからかわれたり、教師陣からも「恋愛は大いに結構！だが、あんま羽目外すんじゃないぞ」と苦笑交じりの“お言葉”をいただいたわけなのだが、【現国】担当の沢木真穂先生（通称：真穂ちゃん）が「やる時はちゃんとゴム着けるのよ！」と、あまりに突飛な発言をしたために、彼女無し（ロンリ）の男連中が妙に反応し、国語の授業が一時中断となったこともあった。無自覚って怖い……

季節もすっかり晩秋に入り、朝方は吐く息も白くなる……学校の木々は紅葉からさらに色褪せ、冷たい冬の到来を待つばかりとなったのだが……。

あれから1度も、美雪さんは我が家に来なくなった……。学校で会うことは多々あっても、会話らしい会話は一度として無い。あれだけ盛大な告白をぶちかましたというのに、今は前よりもずっと……美雪さんとの距離が遠くなっているような気がした……。

互いに連絡を交換していなかったことが、ここで仇になるなんて

そんな矢先の事だった。

どごおおおん！！！！！！！

「グウウウツドモ！ニンぐユキイイイイイ！！！！！」
「ギヤアアア！ツツ！？？！！！！」

朝食を済ませ、食器を洗って一息ついている土曜日の朝……既に投函されているであろう新聞を取りに玄関の扉を開こうとした瞬間、呼び鈴と呼ぶには桁違いな爆音と、家の外側からは“引き戸”となつていないはずのドアが俺の顔面に直撃！当然、顔面を強打した俺はもんどり打って地面に突っ伏したのだが……

「ユキイイイツ！逢いたかった！逢いたかった！逢いたかった！！！！！！」

俺のへそ辺りに馬乗りになった麗人が、俺の意思とは関係なしに熱ううい“ベーゼ（くちづけ）”をしようと顔を近づけている。そりやもう恋人関係だからキスくらいしてもおかしくないのかもしれない。

ただ――

「玄関ぶっ壊してんじゃねええつつつ！！！！！！」

半壊した玄関を見れば、そんな雰囲気ムードにやなれねえよ！！！！！！

「むう！１ヶ月だぞっ！１ヶ月も私はユキとイチャイチャ出来なかつたんだぞー！」

「それより先ずはドアをどうにかしろおおおっっ！！！！！」

↓
↓
↓

たった１ヶ月……されど１ヶ月と、久々に我が家に顔を見せた美雪さんのテンションはハンパなく高かった。というのも――

「見ろっ！これで何も気にすることなくユキとラブラブイチャイチャできるぞっ！！！」

と、鼻息荒く俺に突き出した紙にはつきりと書かれた【合格】の通知……。

「私ら３年が体育祭終了後、本格的に受験勉強に取り掛かることはわかっていただろ？だから私はこの１ヶ月間、ユキに会えない……ラブラブできない苦痛に耐えながら、ようやく手にした“嶺桜大学”の推薦合格通知！！これで全ての障害は取り除かれたのだっ！！！」

なるほど……この１ヶ月、変に素っ気ない態度だったのはそのせいか。それにしても……

「近い近い近い！しかも妙に暑苦しい！！！」

「何を言う！晴れて恋人同士となったのに、暑苦しいはないだろう

！それに、1ヶ月も禁欲してきたのだぞ！！“ユキエキス”を充電しておかないとっ！」

禁欲って……聞くのが怖えし、何その“液体”的なもの！？気持ち悪っ！！！！

「まあまあユキ、美雪もこの日のために一生懸命頑張ったのですから！」

「リリナさん何時から居たの！？ってかソレ、俺のパンツじゃんかつ！！」

「何い！姉さま、その“ブツ”を私に！！」

「へ？既に洗濯済みですけど……」

うおおいつ！！どんだけ人ん家の家事漁りに慣れてんだよりリリナさん！！美雪さんも俺の“パンツ”に反応してんじゃねえつつ！！！！

「むう、既に洗濯済みなのか……」

「なんでガツカリ！？変態度が格段に増してるっ！！」

「む？好きな男の前では普通、人とは変態になるものだぞ！」

「ならねえよ！」

ああ、ツツコミが追いつかねえ……こんなとき、俺にとって唯一の良心である獅子神さんが居てくれたらなあ――

「呼んだか？」

「「何い！！」」↑俺&美雪さん

「あら、お久しぶりですわね獅子神さん。“その節”はお世話になりましたわ！」

「あんま大きな声で言うんじゃねえよ……つか、この状況を見りゃ

わかる」

完全に呆れかえった表情が隠せない獅子神さん。なんでも半壊した我が家のドア（そういやすっかり忘れてた）の先で、俺と美雪さん&リリナさんのやり取りが丸見えになってたんだと。

「一体何の用だヤンキー女！」

「ああ？別にテメエなんぞに用なんかねえよ！！」

「なんだと！」

「やんのか？あぁっ！！」

なんでこの二人は、顔を合わせりや喧嘩すんだるか？冷戦状態（つか既に手が出る）の状況を打破するには、やっぱり“アイツ”しかない――

「凜、ヘルプミー！！」

とりあえず“お姉さま大好き”娘の我がマイ・シスター凜に、仲裁を頼もう！普段は“助け舟”なんて絶対にしないだろう凜だが、その大好きな“お姉さま”同士が（口）喧嘩をしているとあっては、さすがに“何か”してくれる……はず。

「呼んだ？」

「おう！とりあえずあの二人を止めてくれって、なんで湊が居るんだぁっ！？？？」

「……え？」

凜、お前、自分の部屋に居たよな！？なのになんで“寡黙百合っ娘”の湊まで？？この短時間の間に我が家の人口密度が増してる！しかも気配も無く！！！！

「……ふふ……」

「その含み（笑い）が怖ええ！！」

湊……頼むから俺の目の黒いうちは、凜を“そっち”に引き込まないで！！

とまあ、なんやかんやとあつちでもこつちでも問題ばかりが発生している我が家で、今回ばかりは「ユキも困っていることですし、とりあえず落ち着きましょう！」と、リリナさんが“まとも”な助け舟を出してくれたので、獅子神さんも「まあ、別に喧嘩しにきたわけじゃねえし……」、美雪さんも「む、そうだったな」と、互いに身を引いた。んだが、凜や湊には全く無縁だったらしく、凜は純粹に、湊は……何を考えているかはわからんが、勝手に遊びに行った。

頼む湊……妹に“変な事”はするなよ……

んで、まあ美雪さんがリリナさんを引き連れて我が家を襲撃（未

だに玄関半壊)したのはなんとなく想像ができるから置いとくとして、獅子神さんが来訪した理由を訊ねてみた。

すると――

「あつ！そうだったすっかり忘れてた！今日から【栄大】がリニューアルするとかで、生鮮品が半端ねえ安さで売り出されるって“チラシ”が投函されてたんだよ！」

「何いいッ！！？？」

【栄大】つつうのは俺や獅子神さん、それに近所の奥様方が鼻屑にしている地域密着型の“スーパーマーケット”で、あの嶺桜高校生徒会長である長東京都先輩の親父さんが経営者でもある。元々、生鮮品の安さは他のスーパーと比較する必要も無いほど安いのだが、獅子神さんがわざわざ俺ん家に来てまで情報を知らせてくれるってことは、かなりの安さってことだろう……そーいや、まだ新聞とかチラシには目を通してなかったっけ。

えっと、あ、あつた！このチラシだ。なにになに………！！！！

「国産牛肩ロースが100グラム10円だとっ！？焼津産の真鰹がまがつお刺身ブロック300円均一！???レタス1玉18円っ???!!」

何この半端ない安さ！！こりゃもう……

「行くっきゃねえっしょ!!」

「そうこなくっちゃな！」

たとえば他の人間が「何がっついてんだよ」だの「んなもん1円5円の違いだろ？」などと言おうが関係ねえっ！！騒ぐんだよ“主夫の血”が！

「行くぜ美雪さん！」

「え？あ、ちよつ、ゆ、ユキ！??」

悪い美雪さん……今は恋人としての進展よりも、“目先の特価品”が大事なんだ！……！！

バタバタと慌しく家を出て行ったユキとヤンキー女を呆然と見送る形になってしまった私とリリナ姉さまだが……

「あらあら、私の可愛い妹よりも“食料品”のほうが大事ですか……」

「ユキらしくていいじゃないか。それに、ああいう性格も全てひっくるめて、私はユキが好きなんだからな！……まあ“食料品”に負けたことは少し、釈然としないが」

むう……せつかくユキとラブラブのイチヤイチャを期待して今日に来てみたのだが……。

「ユキの性格上、まだまだ“照れ”もあるようですな」

「ふふ、だが499回も断られ続けたことを考えれば、恋人としての進展の遅れなど気にもならん！」

「とか言っちゃって、ホントは“もしも”のために昨日買ったばかり

りの勝負下着を履いてきたんでしょう？」

「むう……姉さま、少し意地悪になったのではないか？」

「うふ、可愛い妹を心配しているのですよ。それよりも——」

と、リリナ姉さまは下唇に人差し指を当てて、ちよっぴり困ったような、私が見ても可愛らしい仕草をやったあとで

「とりあえずユキを追いかけてみましょうか！」

「む？あ、そうだった！ユキめ、私という可愛い恋人をほったらかしとはどういうことだあっ！！」

いかん、すっかり忘れていたぞ！まったく……関係は変化しても、日常にはまだ些細といえる変化など起きてはいない。相変わらず、ユキを追いつけ回す日々はまだまだ続きそうだ。

だが——

「待ていユキイっ！！【恋人】の私を置いていくなああああ！！！！」

虚勢でも嘘でもなく、私はユキの【恋人】だ。だからもう少し、こんな日常でもいいんじゃないかって思う。進展など、互いの意思に任せればいい。

なんせ私はユキに499回フラれているから、忍耐強さも伊達じゃない！

けれどな、ユキ——

「待たんかユキイイイイツツ！！！！！」

少しくらい、私のことも優先してくれよ？いくら忍耐強い私だつて、“女の子”なんだからな！！

“才色兼備な変態さんと俺”

END

最終話：才色兼備な変態さんと俺（後書き）

長々だらだらと4月から開始したこの作品も、約半年ちよつとの年月を経て、ようやく完結を迎えることが出来ました。

初のコメディ系連載小説を執筆する中で、きっかけとなったのは、この作品の前身でもある短編「才色兼備な変態さんは好きですか？」で頂いたユーザ様からの「連載にしてみたらどうか？」という感想でした。

無知な私は無謀にも「よし！じゃあ連載する！！」と、調子に乗ってこの作品の執筆活動を始めたのですが、掲載するにつれて、コメディ作品の難しさを痛感！同時に、行き当たりばったりな執筆活動ばかりをしていたがために、煮詰まる文章……何度も削除しようと考えました。

どうにも作品として完結の糸口がつかめないまま、私はとうとう削除を決意し、会社から家に帰って、いざ！……という矢先、ユーザトップに“感想通知”の文字が……

「毎回楽しく読ませて貰っています！」

執筆を開始し、初めて頂いた感想に書かれていた言葉に、私は胸が熱くなるのを感じました。

同時に、こんな稚拙な作品でも楽しみにしてくれているユーザ様がいたことに驚きと申し訳なさを感じ、下手なら下手なりにやっていくしかないと思い返し、現在に至ります。

あの感想がなければ、この作品も存在していなかったといっても過言じゃありませんし、何よりこうして完結を迎えることが出来たのも、そんな感想を頂いたから迎えることが出来たのでしょうか。

篤く感謝申し上げます！

そしてもう一つ、この作品をここまで導いてくれたのが、「小説家になるう」や「みてみん」にて幅広い活動をなさっている【北野鉄露】さんというユーザ様です。

もともとは北野様の作品「やっぱ海でしょ！」にて感想を送ったのがきっかけでしたが、これがもて、懇意にさせていただいております。

中でも、この作品の主要キャラとなる“綾館姉妹”を「みてみん」で生き生きとしたイラストに生まれ変わらせていただいたり、宣伝なさってくれたり、本当に世話になりっぱなしで、感謝しても足りないほどでございます。

こうして完結を迎えたことが恩返しになるとは思っておりませんが、イラストでの生き生きとした綾館姉妹の万分の一でも反映できていればいいなあと思っている次第でございます。

こうしてお世話になったユーザ様や、駄文ながらも沢山（？）の読み手の方々に支えられ、無事に完結できたこと、本当に感謝しております。

まだまだ拙い表現・文章力が乏しい私、矢枝真稀ですが、これからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4172s/>

才色兼備な変態さんと俺

2011年10月24日02時31分発行